

馬洗場 B 遺跡

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 123 集



2004

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 123 集

馬洗場 B 遺跡発掘調査報告書

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

うま あら い ば

馬洗場 B 遺跡

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第123集

平成 16 年

財団法人 山形県埋蔵文化財センター





馬洗場 B 遺跡平安時代全景（ラジコンヘリより） 北から



馬洗場 B 遺跡古墳時代全景（ラジコンヘリより） 北東から



馬洗場 B 遺跡古墳時代空撮 上北東



SG763 木組み遺構空撮 上南東



四方転びの箱（内面）と破鏡（内行花文鏡）



ST1209 床面遺物出土状況 東から



SG763 木組み遺構 南東から



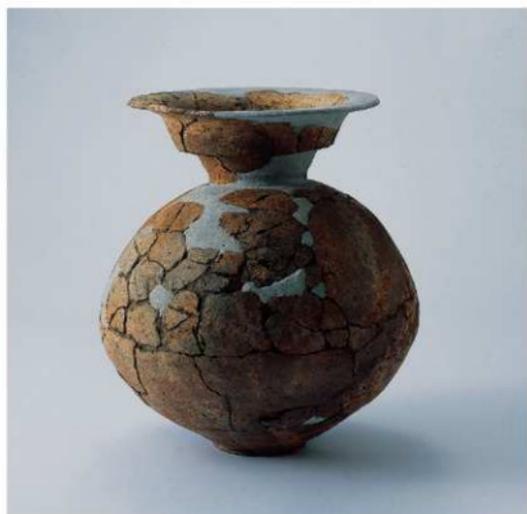
ST1209 大型壘出土状況 南から



ST1209 小型壘群出土状況 東から



赤彩された大型複合口縁壺 右 101 (SG763) 左 58 (ST1209)



大型二重口縁壺 (ST1209)



ST1209 出土遺物



ST1216 出土遺物



ST1203 出土朱精製土器 (46)



SG763 出土赤彩された蓋口壺 (102)



破鏡（内行花文鏡）



穿孔部と研磨状況拡大



破断面研磨状況



高床建物梯子 365



切断された弓 上 369 下 370



建築部材 393



建築部材 393

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、馬洗場B遺跡の調査成果をまとめたものです。

馬洗場B遺跡は、山形県の県庁所在地である山形市の北西部の田園地帯に所在します。山形市は四方を奥羽山脈・白鷹丘陵に囲まれた盆地となっています。遺跡は、樹水で有名な蔵王連峰から流下する馬見ヶ崎川により形成された扇状地の扇端部から、市西部を北流する須川に延びる自然堤防上に位置します。

この度、東北中央自動車道上山東根間山形JCTの工事に伴い、工事に先立って馬洗場B遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、古墳時代前期初頭頃の竪穴住居跡群や河川跡、平安時代の掘立柱建物跡や溝跡、中世の柱穴など多数の遺構が確認されました。竪穴住居跡のいくつかは焼失家屋と考えられます。住居跡の可能性のある地点から、内行花文鏡の破鏡が出土しています。日本海側最北の破鏡となるものです。また、河川跡からは、多くの土器とともに建築部材や木製品が出土しました。中でも、四方転びの箱は東日本で初めて確認されました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及・学術研究・教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成16年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 木村 宰

例 言

本書は、東北中央自動車道上山東根間山形ジャンクション工事に係る「馬洗場B遺跡」の発掘調査報告書である。

既刊の年報、調査説明資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。

調査は日本道路公団東北支社山形工事事務所の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

出土遺物、調査記録類については、報告書作成終了後すみやかに山形県教育委員会に移管する。

調査要項

遺 跡 名	馬洗場B遺跡 ^{うまらいば いせき}
遺 跡 番 号	平成2年新規登録
所 在 地	山形県山形市大字中野字馬洗場
事業委託者	日本道路公団東北支社山形工事事務所
調 査 主 体	財団法人山形県埋蔵文化財センター
	理 事 長 木場精耕 (平成11・12年度)
	理 事 長 木村 宰 (平成13・14年度)

第2次調査

受 託 期 間	平成11年4月1日～平成12年3月31日
現 地 調 査	平成11年4月21日～平成11年8月25日
調 査 担 当 者	調査第四課長 名和達朗 (日本道路公団関連事業担当)
	調 査 研 究 員 高橋 敏 (調査主任)
	調 査 研 究 員 黒沼昭夫
	調 査 員 渋谷純子

平成13年度整理作業

整 理 期 間	平成13年4月1日～平成14年3月31日
整 理 担 当 者	調査第三課長 佐藤正俊
	主任調査研究員 齊藤主税
	調 査 研 究 員 高橋 敏

平成14年度整理作業

整 理 期 間	平成14年4月1日～平成15年3月31日
整 理 担 当 者	調査第三課長 阿部明彦
	主任調査研究員 齊藤主税
	調 査 研 究 員 高橋 敏

調査指導 山形県教育庁社会教育課文化財保護室

調査協力 山形県土木部高速道路整備推進室、山形県山形建設事務所高速道路用地対策課、東南村山教育事務所、山形市教育委員会、山形市都市開発部都市計画課、最上川中流土地改良区

凡 例

1 本書の作成、遺物写真撮影、執筆は高橋 敏が当たり、遺物写真撮影及び遺物観察表の一部は黒沼昭夫が担当した。

2 各グリッドに対し平面直角座標系第X系(日本測地系)により座標地を与え、基準点一覧表としてまとめた。高さは海拔高で表す。また、方位は座標北を表す。

3 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

S B…掘立柱建物跡	S E…井戸跡	S K…土坑	S P…杜穴
S T…竪穴住居跡	S D…溝	S G…河川	S X…性格不明遺構
E P…道構内ピット	E K…道構内土坑	E L…道構内カマド	P…土器
S…礎	W…木・木製品	R P…登録土器	R M…登録金属製品
R W…登録木製品	R Q…登録石製品		

4 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書の番号として踏襲した。

5 遺物観察表中の()内数値は、図上復元による推定値を示している。

6 遺物実測図・拓影図は、同じスケールで採録し、スケール及び縮尺値を示した。拓本は原則的に右側に内側、左側に外側を配置したが、例外も一部にある。

7 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表とも共通のものとした。

8 土層断面図等の色調の記載は、1996年農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に拠った。

9 発掘調査及び本書を作成するにあたり、下記の方々からご協力、ご助言をいただいた。ここに記して感謝申し上げます。

赤塚次郎氏・新井悟氏・今尾文昭氏・今津節男氏・岩崎卓也氏・植田文雄氏・牛尾茂氏・北野博司氏・小林三郎氏・高橋徹氏・竹田純子氏・田嶋明人氏・辻秀人氏・寺沢薫氏・樋口隆康氏・平尾良光氏・細川欣也氏・松村一良氏・山口宏二氏

10 委託業務は下記のとおりである。

基準点測量委託業務 株式会社菅野測量設計事務所

遺構写真測量委託業務 株式会社バスコ

木製品保存処理 財団法人元興寺文化財研究所 株式会社吉田生物研究所

金属製品保存処理 財団法人元興寺文化財研究所

理化学分析委託業務 株式会社バリノ・サーヴェイ

11 破鏡について、東京国立文化財研究所(当時)平尾良光氏に産地同定等の分析を依頼した。

目次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の概要	1
II 遺跡の立地と環境	
1 遺跡の地理的環境	5
2 遺跡の歴史的環境	7
III 遺跡の概要	
1 基本層序	9
2 遺構と遺物の分布	9
IV 遺構	
1 古墳時代	12
2 奈良・平安時代	46
V 出土した遺物	
1 古墳時代	81
2 奈良・平安時代	170
VI 考察	
1 馬洗場 B 遺跡から出土した内行花文鏡片の 自然科学的研究 平尾良光他	252
2 鏡片分布から見た古墳出現期の動態	258
VII まとめ	275
報告書抄録	巻末 付編
1 馬洗場 B 遺跡の自然科学的分析	1
2 樹種同定表	13

表

表 1 基準点対応一覧表 (1)	3	表 3 遺物観察表	210 ~
表 2 基準点対応一覧表 (2)	4	表 4 鏡片集成表	264 ~

図版

第 1 図 調査概要図	2	第 7 図 遺構実測図 S T 956・957	20
第 2 図 グリッド配置図	3	第 8 図 遺構実測図 S T 956・957	21
第 3 図 地形分類図	6	第 9 図 遺構実測図 S T 956・957	22
第 4 図 遺跡位置図	8	第 10 図 遺構実測図 S T 956・957	23
第 5 図 基本層序	10	第 11 図 遺構実測図 S T 1201	24
第 6 図 古墳時代遺構配置図	11	第 12 図 遺構実測図 S T 1202	25

第13回	遺構実測図 S T 1203	26	第36回	遺構実測図井戸跡 S E 568 等	57
第14回	遺構実測図 S T 1204・1205・1206・1214	27	第37回	遺構実測図井戸跡 S E 1115 等	58
第15回	遺構実測図 S T 1204・1205・1206・1214	28	第38回	遺構実測図井戸跡 S E 702 等	59
第16回	遺構実測図 S T 1207	29	第39回	遺構実測図 S K 1155 等	60
第17回	遺構実測図 S T 1209	30	第40回	遺構実測図井戸跡 S E 1015 等	61
第18回	遺構実測図 S T 1209	31	第41回	遺構実測図土坑 S K 691 等	62
第19回	遺構実測図 S T 1210	32	第42回	遺構実測図溝跡 S D 1035 等	63
第20回	遺構実測図 S T 1211	33	第43回	遺構実測図溝跡 S D 556 他	64
第21回	遺構実測図 S T 1212	34	第44回	遺構実測図溝跡 S D 507 他	65
第22回	遺構実測図 S T 1213	35	第45回	遺構実測図溝跡 S D 365 他	66
第23回	遺構実測図 S T 1215	36	第46回	遺構実測図溝跡 S D 186 他	67
第24回	遺構実測図 S T 1216	37	第47回	遺構実測図溝跡 S D 944 他	68
第25回	遺構実測図 S T 1216	38	第48回	遺構実測図溝跡 S D 861 他	69
第26回	遺構実測図 S T 1217	39	第49回	遺構実測図溝跡 S D 784 他	70
第27回	遺構実測図 S T 1218	40	第50回	遺構実測図溝跡 S D 1154 他	71
第28回	遺構実測図本組み遺構	41	第51回	遺構実測図溝跡 S D 439 他	72
第29回	遺構実測図本組み遺構	42	第52回	遺構実測図ビット S P 918 他	73
第30回	遺構実測図 S G 763	43・44	第53回	遺構実測図 S X 768 他	74
第31回	遺構実測図破鏡、ミナア土器	45	第54回	遺構実測図溝跡 S D 736 他	75
第32回	奈良・平安時代遺構配置図	47・48	第55回	遺構実測図溝跡 S D 736 他	76
第33回	遺構実測図 S B 1142	54	第56回	遺構実測図河川跡 S G 754 他	77・78
第34回	遺構実測図 S B 1143	55	第57回	遺構実測図河川跡 S G 754 他	79・80
第35回	遺構実測図 S B 1144	56			

古墳時代の遺物

第58回	遺物実測図 (1) 土師器	90	第74回	遺物実測図 (17) 土師器	106
第59回	遺物実測図 (2) 土師器	91	第75回	遺物実測図 (18) 土師器	107
第60回	遺物実測図 (3) 土師器	92	第76回	遺物実測図 (19) 土師器	108
第61回	遺物実測図 (4) 土師器	93	第77回	遺物実測図 (20) 土師器	109
第62回	遺物実測図 (5) 土師器	94	第78回	遺物実測図 (21) 土師器	110
第63回	遺物実測図 (6) 土師器	95	第79回	遺物実測図 (22) 土師器	111
第64回	遺物実測図 (7) 土師器	96	第80回	遺物実測図 (23) 土師器	112
第65回	遺物実測図 (8) 土師器	97	第81回	遺物実測図 (24) 土師器	113
第66回	遺物実測図 (9) 土師器	98	第82回	遺物実測図 (25) 土師器	114
第67回	遺物実測図 (10) 土師器	99	第83回	遺物実測図 (26) 土師器	115
第68回	遺物実測図 (11) 土師器	100	第84回	遺物実測図 (27) 土師器	116
第69回	遺物実測図 (12) 土師器	101	第85回	遺物実測図 (28) 土師器	117
第70回	遺物実測図 (13) 土師器	102	第86回	遺物実測図 (29) 土師器	118
第71回	遺物実測図 (14) 土師器	103	第87回	遺物実測図 (30) 土師器	119
第72回	遺物実測図 (15) 土師器	104	第88回	遺物実測図 (31) 土師器	120
第73回	遺物実測図 (16) 土師器	105	第89回	遺物実測図 (32) 土師器	121

第90回	遺物実測図 (33) 土師器	122	第113回	遺物実測図 (56) 木製品	147
第91回	遺物実測図 (34) 土師器	123	第114回	遺物実測図 (57) 木製品	148
第92回	遺物実測図 (35) 土師器	124	第115回	遺物実測図 (58) 柱他	149
第93回	遺物実測図 (36) 土師器	125	第116回	遺物実測図 (59) 木製品	150
第94回	遺物実測図 (37) 破鏡	126	第117回	遺物実測図 (60) 木製品	151
第95回	遺物実測図 (38) 四方転びの箱	127	第118回	遺物実測図 (61) 木製品	152
第96回	遺物実測図 (39) 梯子	128	第119回	遺物実測図 (62) 木製品	153
第97回	遺物実測図 (40) 壱杆他	129	第120回	遺物実測図 (63) 木製品	154
第98回	遺物実測図 (41) 弓	130	第121回	遺物実測図 (64) 木製品	155
第99回	遺物実測図 (42) こも石他	131	第122回	遺物実測図 (65) 枕他	156
第100回	遺物実測図 (43) 柄他	132	第123回	遺物実測図 (66) 木製品	157
第101回	遺物実測図 (44) 枕	133	第124回	遺物実測図 (67) 木製品	158
第102回	遺物実測図 (45) 枕他	134	第125回	遺物実測図 (68) 木製品	159
第103回	遺物実測図 (46) 枕他	135・136	第126回	遺物実測図 (69) 木製品	160
第104回	遺物実測図 (47) 板材	137・138	第127回	遺物実測図 (70) 木製品	161
第105回	遺物実測図 (48) 箱他	139	第128回	遺物実測図 (71) 板材	162
第106回	遺物実測図 (49) 建築部材	140	第129回	遺物実測図 (72) 木製品	163
第107回	遺物実測図 (50) 柱他	141	第130回	遺物実測図 (73) 田下駄他	164
第108回	遺物実測図 (51) 木製品	142	第131回	遺物実測図 (74) 木製品	165
第109回	遺物実測図 (52) 木製品	143	第132回	遺物実測図 (75) 木製品	166
第110回	遺物実測図 (53) 木製品	144	第133回	遺物実測図 (76) 木製品	167
第111回	遺物実測図 (54) 木製品	145	第134回	遺物実測図 (77) 木製品他	168
第112回	遺物実測図 (55) 木製品	146	第135回	遺物実測図 (78) 石製品	169

平安時代他の遺物

第136回	遺物実測図 (79) 須恵器他	174	第152回	遺物実測図 (95) 須恵器他	190
第137回	遺物実測図 (80) 土師器	175	第153回	遺物実測図 (96) 土師器	191
第138回	遺物実測図 (81) 土師器他	176	第154回	遺物実測図 (97) 土師器	192
第139回	遺物実測図 (82) 土師器他	177	第155回	遺物実測図 (98) 土師器	193
第140回	遺物実測図 (83) 土師器他	178	第156回	遺物実測図 (99) 土師器	194
第141回	遺物実測図 (84) 土師器	179	第157回	遺物実測図 (100) 須恵器	195
第142回	遺物実測図 (85) 土師器他	180	第158回	遺物実測図 (101) 須恵器	196
第143回	遺物実測図 (86) 須恵器	181	第159回	遺物実測図 (102) 須恵器	197
第144回	遺物実測図 (87) 土師器他	182	第160回	遺物実測図 (103) 須恵器他	198
第145回	遺物実測図 (88) 土師器他	183	第161回	遺物実測図 (104) 須恵器他	199
第146回	遺物実測図 (89) 土師器	184	第162回	遺物実測図 (105) 土師器	200
第147回	遺物実測図 (90) 土師器	185	第163回	遺物実測図 (106) 須恵器他	201
第148回	遺物実測図 (91) 土師器他	186	第164回	遺物実測図 (107) 須恵器	202
第149回	遺物実測図 (92) 須恵器	187	第165回	遺物実測図 (108) 陶磁器	203
第150回	遺物実測図 (93) 須恵器	188	第166回	遺物実測図 (109) 陶磁器他	204
第151回	遺物実測図 (94) 須恵器	189	第167回	遺物実測図 (110) 石製品	205

第168図 遺物実測図(111) 石製品……………206

第170図 遺物実測図(113) 石製品他……………208

第169図 遺物実測図(112) 石製品……………207

第171図 遺物実測図(114) 石製品……………209

写真図版

巻頭写真1 馬洗場B遺跡空中写真

巻頭写真7 S T 1209 出土遺物

巻頭写真2 馬洗場B遺跡空中写真

巻頭写真8 S T 1209、1216 出土遺物

巻頭写真3 古墳時代遺構他、木組み遺構

巻頭写真9 朱精製土器、朱彩土器

巻頭写真4 四方転びの箱、破鏡

巻頭写真10 破鏡(内行花文鏡)

巻頭写真5 S T 1209、木組み遺構

巻頭写真11 梯子、弓

巻頭写真6 S T 1209 遺物出土状況

巻頭写真12 建築部材他

写真図版1 馬洗場B遺跡遠景

写真図版31 古墳時代遺物

写真図版2 調査風景

写真図版32 古墳時代遺物

写真図版3 破鏡出土状況他

写真図版33 古墳時代遺物

写真図版4 古墳時代遺構

写真図版34 古墳時代遺物

写真図版5 壑穴住居

写真図版35 古墳時代遺物

写真図版6 壑穴住居

写真図版36 古墳時代遺物

写真図版7 朱精製土器出土状況

写真図版37 古墳時代遺物

写真図版8 壑穴住居跡

写真図版38 古墳時代遺物

写真図版9 壑穴住居跡

写真図版39 古墳時代遺物

写真図版10 壑穴住居

写真図版40 古墳時代遺物

写真図版11 S T 1209

写真図版41 古墳時代遺物

写真図版12 S T 1209

写真図版42 古墳時代遺物

写真図版13 S T 1209

写真図版43 古墳時代遺物

写真図版14 S G 763

写真図版44 古墳時代遺物

写真図版15 S G 763

写真図版45 古墳時代遺物

写真図版16 S G 763

写真図版46 古墳時代遺物

写真図版17 S G 763

写真図版47 古墳時代遺物

写真図版18 溝跡

写真図版48 古墳時代遺物

写真図版19 溝跡他

写真図版49 古墳時代遺物

写真図版20 柱穴

写真図版50 古墳時代遺物

写真図版21 柱穴、井戸跡

写真図版51 古墳時代遺物

写真図版22 井戸跡

写真図版52 古墳時代遺物

写真図版23 井戸跡

写真図版53 古墳時代遺物

写真図版24 井戸跡、溝跡

写真図版54 古墳時代遺物

写真図版25 溝跡

写真図版55 古墳時代遺物

写真図版26 古墳時代遺物

写真図版56 古墳時代遺物

写真図版27 古墳時代遺物

写真図版57 古墳時代遺物

写真図版28 古墳時代遺物

写真図版58 古墳時代遺物

写真図版29 古墳時代遺物

写真図版59 平安時代遺物

写真図版30 古墳時代遺物

写真図版60 平安時代遺物

写真図版 61 平安時代遺

写真図版 62 平安時代遺物

写真図版 63 平安時代遺物

写真図版 64 平安時代遺物

写真図版 65 平安時代遺物

写真図版 66 平安時代遺物

写真図版 67 平安時代遺物

写真図版 68 平安時代遺物

写真図版 69 平安時代遺物

写真図版 70 馬術

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

平成2年度に県土木事業の上山～東根間都市計画道路整備事業が計画立案され、その後国幹審より高速道路整備路線計画が打ち出され平成5年度には施行命令が出された。平成8年度から本格的に事業が開始された。

馬洗場B遺跡は、平成2年に上記計画に伴う上山・山形・天童・東根地区一帯の基礎調査が実施され、遺跡周辺の自然堤防等で表面踏査が行われている。その際、須恵器や土師器（赤焼土器）が採取され、平安時代の遺跡として新規登録された。

山形市西部地区において、東北中央自動車道相馬・尾花沢線（上山東根間）の建設工事が策定され、遺跡の一部を含む区域が既存の東北横断道酒田線との交差点（仮称山形JCT）予定地とされた。それを受けて、平成10年度に山形県教育委員会が馬洗場B遺跡の詳細分布調査を実施した。その結果、遺物及び柱穴・溝などの遺構が検出された。馬洗場B遺跡の範囲は、東西62m、南北100mの6200㎡と推定された（県教委2000）。その結果を基に、県教育委員会と日本道路公団による調整を経て、財団法人山形県埋蔵文化財センターが日本道路公団東北支社から委託を受けて、平成10年度から調査が行われた。第1次調査は予備調査として実施され、9ヶ所にトレンチを設定し調査を行った。調査面積は、200㎡である（山形理文1999）。南側の水田部分は遺構・遺物ともに確認されなかったことから除外され、4200㎡が遺跡範囲とされた。そのデータに基づき、平成11年度に第2次調査が実施された。

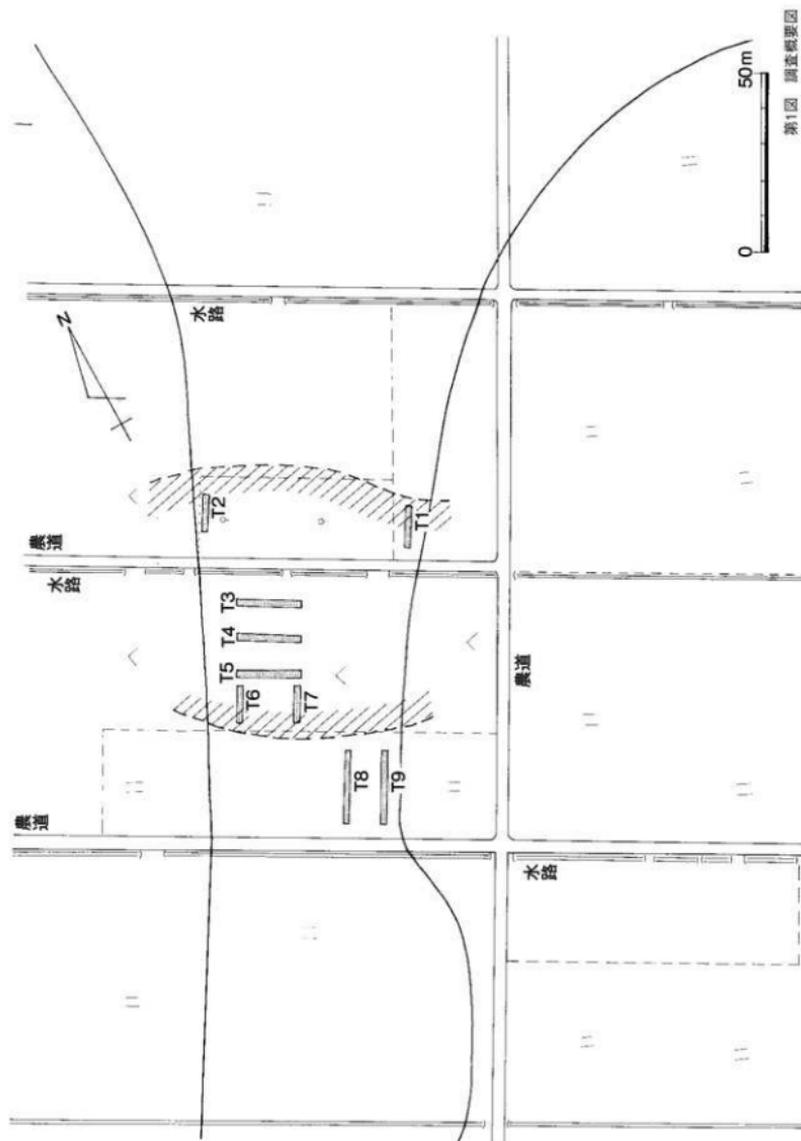
2 調査の概要

現地における調査は、平成10年度に第1次調査、翌平成11年度に第2次調査を実施した。調査は、仮称山形JCT下部工事工程との調整を計りながら実施された。

第2次調査の開始にあたり、馬洗場B遺跡の調査区内に調査用方眼（グリッド：G）を設定した。グリッドは、道路センターラインを便宜的に基準とし、5×5mを単位とした。X軸は北西から南東へ、Y軸は南西から北東へ、アラビア数字による番号を割り当てている。それぞれのグリッドに対し、国土座標平面直角座標系による数値を求めている（表1・2）。調査区は農道により2分されているため、農道の北東側をA区、南西側をB区と呼称した。

本調査である第2次調査は、重機による表土除去作業から始まり、面整理・遺構の検出作業・遺構精査・記録作業の工程に進めたが、適宜複合して各作業を行っている。14G以东については、協議により下部工事用道路として先行引渡しを6月4日に行った。また、現地において調査成果を広く県民に周知するため調査説明会を平成11年7月2日に実施した。同日午前中に説明会に先立ち内行花文鏡の破鏡が出土したことについて、記者発表も併せて行っている。

さらに、B区において古墳時代前期の遺物が検出されることから、グリッド軸線に沿って縦横にパイロットトレンチを入れたところ、遺物と炭化物の面的な広がり確認された。これに





馬洗場三遺跡 地区割シ杭設置図



第2図 グリッド配置図

座標リスト

測点	X座標	Y座標	測点	X座標	Y座標	測点	X座標	Y座標
4 - 2 4	-187689.270	-45212.986	6 - 1 5	-187733.166	-45227.065	7 - 2 1	-187709.791	-45207.607
4 - 2 5	-187684.954	-45210.463	6 - 1 6	-187728.849	-45224.541	7 - 2 2	-187705.474	-45205.083
4 - 2 6	-187680.627	-45207.939	6 - 1 7	-187724.533	-45222.018	7 - 2 3	-187701.158	-45202.560
4 - 2 7	-187676.321	-45205.416	6 - 1 8	-187720.216	-45219.494	7 - 2 4	-187696.841	-45200.036
4 - 2 8	-187672.004	-45202.892	6 - 1 9	-187715.900	-45216.971	7 - 2 5	-187692.525	-45197.513
4 - 2 9	-187667.688	-45200.369	6 - 2 0	-187711.583	-45214.447	7 - 2 6	-187688.208	-45194.989
5 - 1 5	-187730.643	-45231.381	6 - 2 1	-187707.267	-45211.924	7 - 2 7	-187683.892	-45192.466
5 - 1 6	-187726.326	-45228.857	6 - 2 2	-187702.950	-45209.400	7 - 2 8	-187679.575	-45189.942
5 - 1 7	-187722.010	-45226.334	6 - 2 3	-187698.634	-45206.877	7 - 2 9	-187675.259	-45187.419
5 - 1 8	-187717.693	-45223.810	6 - 2 4	-187694.317	-45204.353	8 - 1 5	-187738.213	-45218.432
5 - 1 9	-187713.377	-45221.287	6 - 2 5	-187690.001	-45201.830	8 - 1 6	-187733.896	-45215.908
5 - 2 0	-187709.060	-45218.763	6 - 2 6	-187685.684	-45199.306	8 - 1 7	-187729.580	-45213.385
5 - 2 1	-187704.744	-45216.240	6 - 2 7	-187681.368	-45196.783	8 - 1 8	-187725.263	-45210.861
5 - 2 2	-187700.427	-45213.716	6 - 2 8	-187677.051	-45194.259	8 - 1 9	-187720.947	-45208.338
5 - 2 3	-187696.111	-45211.193	6 - 2 9	-187672.735	-45191.736	8 - 2 0	-187716.630	-45205.814
5 - 2 4	-187691.794	-45208.669	7 - 1 5	-187735.690	-45222.748	8 - 2 1	-187712.314	-45203.291
5 - 2 5	-187687.478	-45206.146	7 - 1 6	-187731.373	-45220.224	8 - 2 2	-187707.997	-45200.767
5 - 2 6	-187683.161	-45203.622	7 - 1 7	-187727.057	-45217.701	8 - 2 3	-187703.681	-45198.244
5 - 2 7	-187678.845	-45201.099	7 - 1 8	-187722.740	-45215.177	8 - 2 4	-187699.364	-45195.720
5 - 2 8	-187674.528	-45198.575	7 - 1 9	-187718.424	-45212.654	8 - 2 5	-187695.048	-45193.197
5 - 2 9	-187670.212	-45196.052	7 - 2 0	-187714.107	-45210.130	8 - 2 6	-187690.731	-45190.673

表1 基準点对応表(1)

1 調査の経緯

座標リスト

測点	X座標	Y座標	測点	X座標	Y座標	測点	X座標	Y座標
8 - 2 7	-187686.415	-45188.150	1 1 - 2 2	-187715.567	-45187.818	1 4 - 2 0	-187731.771	-45179.915
8 - 2 8	-187682.098	-45185.626	1 1 - 2 3	-187711.251	-45185.295	1 4 - 2 1	-187727.455	-45177.392
8 - 2 9	-187677.782	-45183.103	1 1 - 2 4	-187706.934	-45182.771	1 4 - 2 2	-187723.138	-45174.868
9 - 1 5	-187740.737	-45214.115	1 1 - 2 5	-187702.618	-45180.248	1 4 - 2 3	-187718.822	-45172.345
9 - 1 6	-187736.420	-45211.591	1 1 - 2 6	-187698.301	-45177.724	1 4 - 2 4	-187714.505	-45169.821
9 - 1 7	-187732.104	-45209.068	1 1 - 2 7	-187693.985	-45175.201	1 4 - 2 5	-187710.189	-45167.298
9 - 1 8	-187727.787	-45206.544	1 1 - 2 8	-187689.668	-45172.677	1 4 - 2 6	-187705.872	-45164.774
9 - 1 9	-187723.471	-45204.021	1 2 - 1 5	-187748.307	-45201.166	1 4 - 2 7	-187701.556	-45162.251
9 - 2 0	-187719.153	-45201.497	1 2 - 1 6	-187743.990	-45198.642	1 4 - 2 8	-187697.239	-45159.727
9 - 2 1	-187714.838	-45198.974	1 2 - 1 7	-187739.674	-45196.119	1 5 - 1 5	-187755.877	-45188.217
9 - 2 2	-187710.521	-45196.450	1 2 - 1 8	-187735.357	-45193.595	1 5 - 1 6	-187751.560	-45185.693
9 - 2 3	-187706.205	-45193.927	1 2 - 1 9	-187731.041	-45191.072	1 5 - 1 7	-187747.244	-45183.170
9 - 2 4	-187701.888	-45191.403	1 2 - 2 0	-187726.724	-45188.548	1 5 - 1 8	-187742.927	-45180.646
9 - 2 5	-187697.572	-45188.880	1 2 - 2 1	-187722.408	-45186.025	1 5 - 1 9	-187738.611	-45178.123
9 - 2 6	-187693.255	-45186.356	1 2 - 2 2	-187718.091	-45183.501	1 5 - 2 0	-187734.294	-45175.599
9 - 2 7	-187688.939	-45183.833	1 2 - 2 3	-187713.775	-45180.978	1 5 - 2 1	-187729.978	-45173.076
9 - 2 8	-187684.622	-45181.309	1 2 - 2 4	-187709.458	-45178.454	1 5 - 2 2	-187725.661	-45170.552
9 - 2 9	-187680.306	-45178.786	1 2 - 2 5	-187705.142	-45175.931	1 5 - 2 3	-187721.345	-45168.029
1 0 - 1 5	-187743.260	-45209.799	1 2 - 2 6	-187700.825	-45173.407	1 5 - 2 4	-187717.028	-45165.505
1 0 - 1 6	-187738.943	-45207.275	1 2 - 2 7	-187696.509	-45170.884	1 5 - 2 5	-187712.712	-45162.982
1 0 - 1 7	-187734.627	-45204.752	1 2 - 2 8	-187692.192	-45168.360	1 5 - 2 6	-187708.395	-45160.458
1 0 - 1 8	-187730.311	-45202.229	1 3 - 1 5	-187750.830	-45196.850	1 5 - 2 7	-187704.079	-45157.935
1 0 - 1 9	-187725.994	-45199.705	1 3 - 1 6	-187746.513	-45194.326	1 5 - 2 8	-187699.762	-45155.411
1 0 - 2 0	-187721.678	-45197.182	1 3 - 1 7	-187742.197	-45191.803	1 6 - 2 3	-187723.869	-45163.712
1 0 - 2 1	-187717.361	-45194.658	1 3 - 1 8	-187737.880	-45189.279	1 6 - 2 4	-187719.552	-45161.188
1 0 - 2 2	-187713.045	-45192.135	1 3 - 1 9	-187733.564	-45186.756	1 6 - 2 5	-187715.236	-45158.665
1 0 - 2 3	-187708.728	-45189.611	1 3 - 2 0	-187729.247	-45184.232	1 6 - 2 6	-187710.919	-45156.141
1 0 - 2 4	-187704.412	-45187.088	1 3 - 2 1	-187724.931	-45181.709	1 6 - 2 7	-187706.603	-45153.618
1 0 - 2 5	-187700.095	-45184.564	1 3 - 2 2	-187720.614	-45179.185			
1 0 - 2 6	-187695.779	-45182.041	1 3 - 2 3	-187716.298	-45176.662			
1 0 - 2 7	-187691.462	-45179.517	1 3 - 2 4	-187711.981	-45174.138			
1 0 - 2 8	-187687.146	-45176.994	1 3 - 2 5	-187707.665	-45171.615			
1 0 - 2 9	-187682.829	-45174.470	1 3 - 2 6	-187703.348	-45169.091			
1 1 - 1 5	-187745.783	-45205.483	1 3 - 2 7	-187699.032	-45166.568			
1 1 - 1 6	-187741.466	-45202.959	1 3 - 2 8	-187694.715	-45164.044			
1 1 - 1 7	-187737.150	-45200.436	1 4 - 1 5	-187753.354	-45192.533			
1 1 - 1 8	-187732.833	-45197.912	1 4 - 1 6	-187749.037	-45190.009			
1 1 - 1 9	-187728.517	-45195.389	1 4 - 1 7	-187744.721	-45187.486			
1 1 - 2 0	-187724.200	-45192.865	1 4 - 1 8	-187740.404	-45184.962			
1 1 - 2 1	-187719.884	-45190.342	1 4 - 1 9	-187736.088	-45182.439			

表2 基準点对応表 (2)

より、古墳時代前期の竪穴住居跡が密度濃く分布することが予想されたため、日本道路公団山形工事事務所をはじめ関係公所と協議を重ね、平成 11 年 8 月 25 日までの現地調査の延長が認められた。

整理作業は、平成 11 年から平成 14 年度まで、遺物の整理を先行して行い、次いで記録類の整理について実施した。なお、平成 12 年度については、木製品の保存処理に関する作業を主として実施している。

遺物整理作業は、基礎整理（洗浄・ネーミング）・復元・抽出・実測・トレース・写真撮影などを実施した。遺構内出土の遺物については比較的小片でも実測を心がけたが、河川跡等出土の遺物については、抽出したものののみ実測している。木製品は、人為的な調整が施されているもの及び木組み遺構構成材を中心に実測した。実測した遺物の大半は報告書に掲載しているが、類例が多いものについては一部割愛している。

写真や遺構実測図などの記録類については、写真整理・遺構抽出・トレースの順に進めた。抽出は時期ごとに大別し、建物・井戸跡・溝跡を中心に進めた。竪穴住居跡は確認できたものすべてを掲載したが、掘立柱建物跡については確認できたものは 3 棟に留まり、多くの柱穴については建物を構成するにはいたらなかった。

II 遺跡の立地と環境

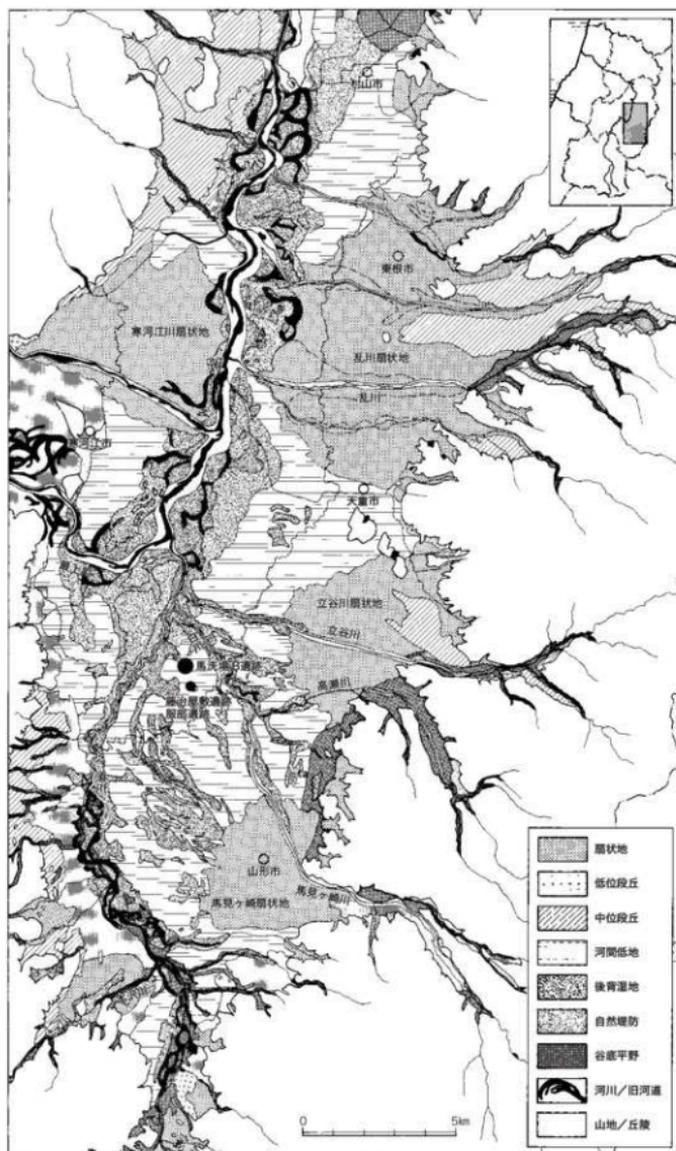
1 遺跡の地理的環境

馬洗場 B 遺跡は、山形市中心市街の北方、豊かな田園地帯が広がる山形市大字中野に所在する。山形盆地のほぼ中央に位置し、北東には馬見ヶ崎川（白川）が、西には須川が北流し、さらに北には立谷川が西流している。これらの河川は、いずれも奥羽山脈から流れ出て大きな扇状地を形成している。山形市は、それらのひとつ馬見ヶ崎川扇状地に発達した都市である。馬見ヶ崎川扇状地には放射状に旧河道が認められ、それに沿うように連続する自然堤防や断続的に並ぶ自然堤防が確認される。それらの中で、南北に断続的に並ぶ自然堤防の一つに馬洗場 B 遺跡が位置している。南に隣接して馬洗場 A 遺跡が存在するが、本来は同じ自然堤防として連なっていたと推測される。遺跡の地目は畑地となっており、標高は 96 m を測る。自然堤防以外の部分は、氾濫原あるいは後背湿地となっており、グライ化した土壌が広がっている。従来までは、遺跡が分布しないと考えられてきたが、近年の調査で、弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡が確認されはじめています。

連続する自然堤防

馬洗場 B 遺跡の北およそ 2 km で須川は馬見ヶ崎川（白川）と合流している。また、その北側で立谷川と合流する。これら河川を合わせた須川は、馬洗場 B 遺跡の北方約 4 km で最上川と合流している。このように、馬洗場 B 遺跡周辺は、古代交通の主要手段の一つであった水上交通の要となる地点に立地している。まさに、古代のジャンクションとも言うべき地点に、高速道路の交差点（ジャンクション）が計画されたのである。

水上交通の要



第3図 地形分類図

2 遺跡の歴史的環境

山形盆地の集落遺跡の変遷については小林圭一の指摘がある。それによると縄文時代後期から晩期にかけて集落が小規模化し、扇状地前縁部付近の低地部まで集落の中心が移行したことが予想されている。近年では、県立中央病院及び保健医療大学の建設に伴い発掘調査が実施された、下柳A遺跡や北柳1遺跡などがある。馬洗場B遺跡の南東2kmに所在する境田A・C・C'・D遺跡からは、大洞式土器の各形式が出土している。

一転して弥生時代に入ると遺跡数は少なくなる。低湿地のグライ化した土壌に、遺構が埋没していることにより確認されていない可能性も考えられる。しかし、馬洗場B遺跡の周辺には弥生時代中期以降の漆山遺跡や七浦遺跡、江俣遺跡などの遺跡が点在している。江俣遺跡からは、石包丁や底部糊圧痕の土器が出土し、稲作普及を推定することができる。近年でも、弥生時代中期の木棺墓5基などが確認された河原田遺跡や、弥生時代後期の住居跡が確認された向河原遺跡などがある。

古墳時代前期では、馬洗場B遺跡の南2kmに多くの遺物を伴う焼失家屋などが確認された今塚遺跡が所在する。また、馬洗場B遺跡の南0.5kmには、河川跡から多くの土器とともにおびただしい木製品が出土した服部・藤治遺跡がある。木製品の中には、東海系の農耕具なども含まれ、琴や四方転びの箱も出土している。この河川跡は、馬洗場B遺跡の河川跡と検出状況が類似しており、何らかの関連があると推測される。また、馬洗場B遺跡の北方0.5kmには、古墳時代中期の集落遺跡である渋江遺跡、向河原遺跡が所在する。さらに北方の天童市には高橋南遺跡や石銅を出土した板橋遺跡群などの古墳時代前期の集落遺跡が連なっており、いずれも東北中央自動車道の工事に伴い発掘調査された。これらの遺跡は、それぞれ土器に違いが見られ、あたかもモザイクのように多様な出自をもつ集団が居住していた可能性がある。

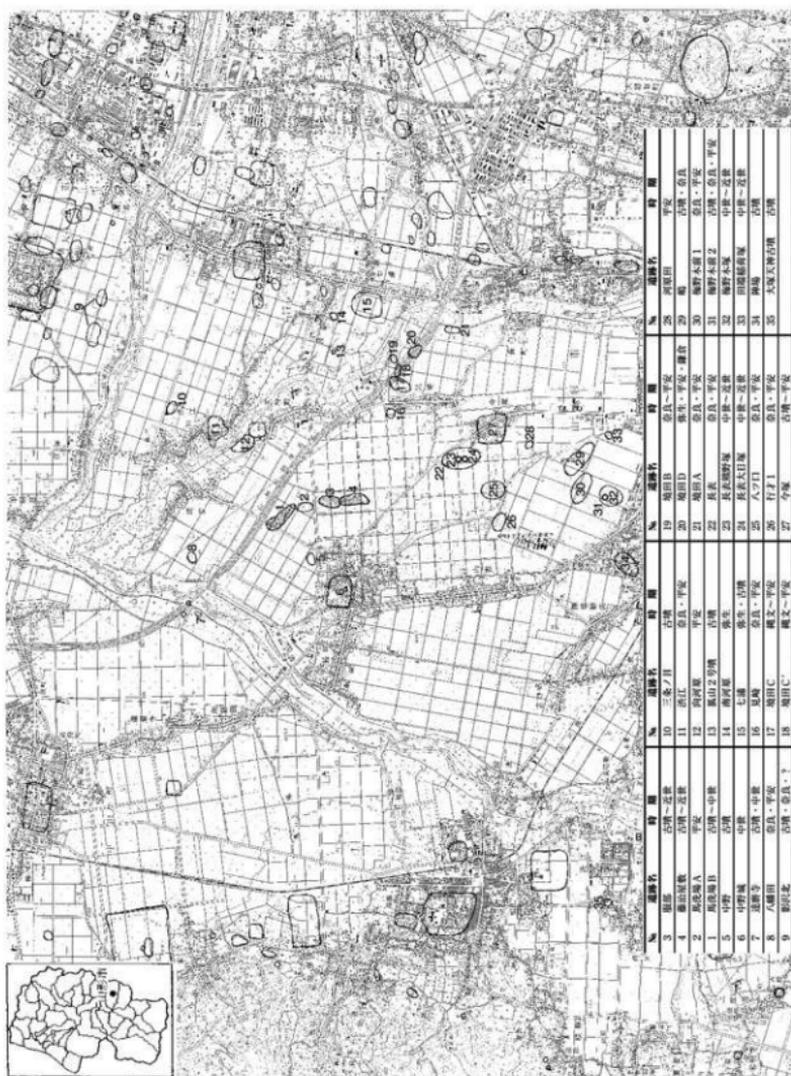
奈良・平安時代では、前述した今塚遺跡から「仁寿三年」と記載された郡符木簡や「一等書生・・・」「調所」など多くの墨書土器が出土している。植松晩彦は役所の機能を併置した官人の居宅の可能性を指摘している。また、馬洗場B遺跡の北、馬見ヶ崎川、立谷川と須川が合流する地点には達磨寺遺跡がある。ここからは、大型の掘立柱建物群や倉庫が規則的に配置され、隣接してバレススタイルの井戸跡が付属する状況が確認されている。風字硯も出土し、隣接する川前2遺跡とともに水運に関連した官衙の可能性も選択肢の一つであろう。

馬洗場B遺跡の所在する中野地区の中心部には、最上氏三代満直の子満基が居城したという中野城がある。周辺には、的場・馬場など城に由来する小字名が残り、馬洗場という小字名も馬の調練をした武士たちが、馬の汗を洗い流した場所という伝承に由来するといわれる。前述した達磨寺遺跡でも、方形区画や鍛冶に関連すると考えられる遺構なども確認されている。

この地域は、各時代を通して陸上のみならず水上交通の結節点として主要な位置を占めていたことが推測される。今回、高速道路のジャンクション建設に伴い発掘調査が実施されたこと²⁾も、何かしら縁を感じさせる。

稲作普及

東海系の農耕具
四方転びの箱水上交通の
結節点



第4図 遺跡位置図

III 遺跡の概要

1 基本層序

今回の調査では、馬洗場 B 遺跡の範囲のうちほぼ東端部に相当する、山形 JC 本体部分を発掘調査した。遺跡全域が後背湿地の微高地（自然堤防）となっており、ほ場整備後も畑地及び果樹園として利用されている。このため、調査区一帯は、耕作により削平を受けている。

調査区は、農道により二分され、横断道酒田線側を A 区、反対側を B 区と呼称した。

基本層序は、A 区・B 区両調査区の東壁に、それぞれ 1ヶ所設定した。

A 区東壁基本層序は、調査前は水田であった地点にあたる。I 層は、黒褐色砂質シルトで耕作土で、II 層は床土となっている。これらの下層はグライ化しており、III 層は黄灰色細砂、IV 層は灰色微砂を呈し、河川活動等による水性堆積と判断される。特に、IV 層中には水性植物の茎や根が腐食したと考えられるものが極めて多く含まれている。

水性堆積

B 区東壁基本層序は、調査前は畑地であった地点にあたり、A 区基本層序とは様相を異にしている。I 層は、よく耕されたにぶい黄褐色シルトを呈する耕作土で、30cm 程を測る。II 層は、畑地の基盤層と思われる。III 層はやや薄い黒褐色シルトで、IV 層が奈良・平安時代の遺構確認面となる。IV 層以下は A 区方向へ下がっており、微高地（自然堤防）という地形を良く示している。V ないし VI 層が古墳時代前期の遺構確認面と推定される。

2 遺構と遺物の分布

遺構は、A 区・B 区ともに集中の度合いこそ異なるものの、調査区の全域に分布している。しかし、水田となっていた A 区の緑道部分では、遺構はほとんど確認できなかった。

A 区では、柱穴が主な遺構である。多くの柱穴は概して小規模なもので、一見してまともに欠ける状況で検出されている。このため、建物跡として検討することは困難であった。稲属時期は中世から近世と考えられる。また、B 区から続いていると推定される河川（溝）跡の周辺からは井戸跡が多く検出されている。さらに、直交する可能性のある溝跡や円形に廻ると考えられる溝跡も検出されている。これらの多くは中世以降の稲属と考えられるが、B 区から続いている河川（溝）跡や一部の土坑は奈良・平安時代の所産である。

井戸跡

B 区では、A 区とは異なり比較的直線を呈する溝跡が多く検出されている。中世期に属すると判断される溝跡も存在するが、多くは奈良・平安時代と考えられる。B 区南側で赤褐色の小風化礫が、幅 2 m ほどの帯状で大きく弧を描いている状況が観察された。この風化礫は 10 cm ほどの堆積であったため小河川と判断していたが、後のトレンチ調査で古墳時代前期初頭の大きな河川跡であることが判明した。これら遺構のおよそ 20 cm 下層に、古墳時代前期初頭と考えられる堅穴住居跡が、多くが切り合いながら検出されている。

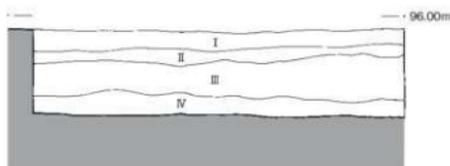
直線を呈する溝

大きな河川跡

遺物は、一部の堅穴住居跡や河川跡から集中して出土している。特に住居跡一括出土土器群は、当該時期の土器組成を検討するうえで多くの情報をもたらすものとなろう。

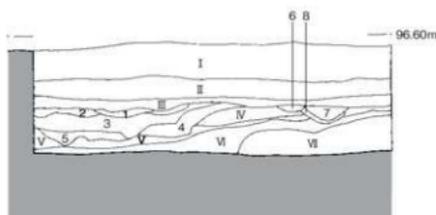
住居跡一括出土

III 遺跡の概要



A区東壁基本層序

- I 25Y3/1 黒褐色砂質シルト(やや粘る)
- II 25Y4/1 黄灰色粘土(細砂多く含む)
- III 25Y5/1 黄灰色細砂
- IV 5Y4/1 灰色微砂(やや粘る)



東側壁

- I 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト(小砂礫が少量混じる。耕作土)
- II 10YR4/4 褐色シルト(小砂礫と小炭化物粒が少量混じる。しまっている)
- III 10YR3/2 黒褐色シルト(25Y6/4にぶい黄色砂質シルトの小ブロックが5%混じる)
- IV 25Y5/3 黄褐色シルト(10YR3/3暗褐色シルトの小ブロックが30%混じる)
- V 25Y5/2 暗灰黄色粘質シルト(10YR3/2黒褐色シルトが斑に混じる。粘る)
- VI 25Y4/1 黄灰色シルト(炭化物小粒が少量混じる)
- VII 25Y5/2 暗灰黄色砂質シルト
- 1 10YR3/2 黒褐色シルト
- 2 10YR3/2 黒褐色シルト(10YR5/4にぶい黄褐色シルトが斑に混じる)
- 3 10YR3/3 暗褐色シルト(炭化物小粒が少量混じる)
- 4 10YR3/1 黒褐色シルト(25Y6/4にぶい黄色砂質シルトの小ブロックが15%混じる)
- 5 10YR3/2 黒褐色砂質シルト(10YR4/6褐色細砂の小ブロックが25%混じる)
- 6 10YR2/2 黒褐色シルト(25Y5/3黄褐色砂質シルトの小ブロックが3%混じる)
- 7 10YR5/3 黄褐色砂質シルト(10YR2/2黒褐色シルトが2すじ状に少量混じる)
- 8 10YR2/3 黒褐色シルト(25Y5/4黄褐色シルトの小ブロックが20%混じる)



第5図 基本層序

IV 遺構

1 古墳時代

古墳時代の遺構は、奈良・平安時代の遺構確認面の下層およそ20cmで検出している。調査当初は、これほどの堅穴住居跡の切り合いは想定していなかった。B区での調査中に、河川跡や柱穴など遺構の壁面から古墳時代の遺物や炭化物層が確認されたことから、下層に古墳時代の堅穴住居跡の存在が推定された。しかし、土壌が洪水などにより堆積された黄褐色シルト層が主体となっており、地山と遺構覆土の判別が困難であった。このため、やむを得ず、グリッド杭を結んだラインをベルトとして残し、その内側を人力により慎重に掘り下げていく方式をとった。このため、床面に到達して初めて堅穴住居跡と確認できたものが多く、断面観察が困難な堅穴住居跡も少なくない。河川跡についても、当初は平安時代以降のごく浅い小河川跡と推定していたが、雨上がりにタワー上から調査区を概観した際に、乾きの遅い部分がB区南半部を覆っており、小河川跡と重なり合いかなりの幅を持つことが確認された。このため、念のためにトレンチを入れたところおよそ90～120cm下層に古墳時代前期の遺物が検出され、大きな河川跡であることが確認された。

1) 堅穴住居

堅穴住居跡は、B区で19棟検出している。前述したように、水性堆積である黄褐色シルト層のため堅穴住居跡のプラン確定は困難を極めた。土質・土色・土の硬軟はほとんど区別付け難く、当初推定したプランを精査途中で変更を余儀なくされたことも少なくない。このため、遺物や炭化物の範囲・出土レベルを参考にしてプランや床面を推定していくという方法をとった。このような状態のために、柱穴・貯蔵穴、周溝などが検出できた堅穴住居跡は極めて少ない数に留まっている。

ST 956 (第7～第10図) B区7～8-20～21グリッドに位置する。ST 957に大半を切られ、さらに、平安時代の土坑に切られている。東側に突出する部分が検出されているが、何らかの遺構の可能性が考えられる。覆土は、7～10cmを測る。遺物は小破片で少量のみの出土で、図示できたものはない。

ST 957 (第7～第10図) B区7～8-20～21グリッドに位置する。ST 957を切る。並行する溝や柱穴に切られる。約5.6mを測る方形のプランと考えられる。確認面からの深さは2～10cmを測るが、東側が浅くなっている。遺構内からは、径35～45cmを測るピットが6基、長径120cm短径53cmを測る楕円形を呈する土坑が1基検出された。いずれも深さは3～10cmと浅い。周溝は確認されない。遺物はプランのほぼ全域から出土するが、特に北西の1/4程の範囲に集中している。多くの遺物は床面に押しつぶされたように張り付いた状態で検出された。また、7-21グリッド杭の南西50cmから長径25cmを測る長楕円形を呈する石が出土している。被熱のためか脆く取り上げた際バラバラになったが、支脚など地床がに

関連する遺物の可能性がある。隣接して、長径45cm 短径32cmを測るE L 1が存在する。断面観察の結果、炭・焼土がわずかに確認され、灰跡の可能性が考えられる。出土した土器には、甕、台付甕、小型鉢、高環などがみられる。甕の多くは、体部の中央に最大径を持つ球胴型を呈し、口縁部がくの字に外反するタイプが主体となっている。完形に復元された遺物も多く、10点図示している。S T 956・957は奈良・平安時代の遺構確認面で、土色変化が確認できた竪穴住居跡である。

S T 1201 (第11図) B区12～13-19～20グリッドに位置する。長軸4.55m短軸4.47mを測り、ほぼ正方形のプランと考えられる。覆土の判別が面的には困難を極め、グリッド杭を結ぶベルトを残し掘り下げた。炭化物・焼土、遺物が確認されたレベルを竪穴住居跡の床面とし、ベルトの断面観察により範囲を推定した。床面でのプラン確認のため、壁の立ち上がりや確認面からの深さは遺構からは覗えないが、ベルトでの観察では深さ13～16cmを測り、壁面はやや斜めに立ち上がる。プランの北半中央に炭化物・焼土の集中する部分があり、遺物はその範囲を中心に床面に張り付くような状態で検出された。炭化物・焼土範囲を精査後に3基のピットが確認された。しかし、竪穴住居跡の柱穴を構成するかは不明である。出土した土器には、甕、直口壺(増)、器台、小型鉢などがある。甕(34)は、完形に復元されたが、体部下半にはほぼ円形の穴が観察されている。人為的な打ち欠きの可能性がある。人為的な打ち欠きのある土器は、祭祀に関連するという考えもある。異型器台(35)とした遺物は、外面が被熱していることから器台としたが、大型の台付甕脚台部の転用品の可能性もある。S T 1201の下層に、後述する河川跡S G 763の延長部分が潜り込んでいる状況が観察されている。木組み遺構の精査中、断面観察のためS G 763を掘り進めたところ、S G 763の上層にS T 1201が位置することが判明した。木組み遺構埋没後、S T 1201竪穴住居跡が構築されたのである。しかし、遺物の年代観はやや降ると判断されるが大きな差はなく、埋没後比較的早い時期に構築されたと考えられる。

S T 1202 (第12図) B区10～12-20～21グリッドに位置する。長軸約7m以上短軸5.8mを測る長方形のプランと考えられる。北端部の一部をS G 753に切られる。S G 753の南壁面の精査中に、古墳時代前期の遺物が壁面中に水平方向に張り付く状況が確認されたことが検出の端緒となった。床面でのプラン確認のため、壁の立ち上がりや確認面からの深さは遺構からは覗えないが、ベルトでの観察では深さ8～20cmを測り、壁面はやや斜めに立ち上がる。遺物はプランの北半で床面に張り付くような状態で検出された。柱穴や周溝などは確認されない。出土した遺物には、甕や直口壺がある。直口壺(41)は大型で、内外面とも丁寧なヘラ磨きが施されており、胎土も精製されている。

S T 1203 (第13図) B区10～11-19～20グリッドに位置する。長軸3.8m短軸3mを測る、やや不整形のプランと考えられる。覆土の判別が面的には困難を極め、グリッド杭を結ぶベルトを残し掘り下げた。炭化物・焼土、遺物が確認されたレベルを竪穴住居跡の床面とし、ベルトの断面観察により範囲を推定した。床面でのプラン確認のため、壁の立ち上がりや確認面からの深さは遺構からは覗うことができない。ベルトでの詳細な観察の結果、古墳時代確認面からの深さ8～18cmを測り、壁面はやや斜めに立ち上がる状況が確認された。プランの東側に炭化物が分布する範囲が認められる。柱穴及び周溝は確認されない。出土した遺物は、高

灰 跡
くの字に外反

人為的な
打ち欠き

木組み遺構埋没
後に竪穴住居
跡 築

体部外面が被熱 坏脚部、小型鉢、甕などがある。小型鉢（46）は口縁部が欠損しており、体部外面が被熱して煤も付着している。胎土は精製され、内外面は丁寧なヘラ磨きが施されているが、外面は被熱のためか剥離が激しい。口縁部の破断面から内面には赤色顔料が付着している。人為的に塗布したことも考えられるが、破断面にも厚くこびりつくように付着していること、外面が被熱していることなどから、朱精製土器の可能性が高い。小型鉢（47）の内面にも極めて薄い朱と考えられる赤色顔料の痕跡が認められる。愛知県西上免遺跡でも、器種は異なるが、型例がみられる。このような遺物が出土したのはこれ1種のみであることから、ST 1203は一般の住居跡とは異なると考えられる。

朱精製土器

ST 1214 (第14・15図) B区9～10-19～20グリッドに位置する。長軸3.6m短軸2.96mを測る長方形のプランである。ST 1204、ST 1206に切られる。ST 1205との先後関係は不明である。奈良・平安時代確認面からテストトレンチを入れた際に、炭化物層が確認され、堅穴住居跡の存在が推定された。しかし、周囲は水性堆積の黄褐色シルトの土壌のため、覆土の確認が難しく、面的なプランの確認までは至らなかった。その後、グリッド杭を結ぶベルトを残し慎重に掘り下げた結果、炭化部材と炭化物が床面を覆っている状況が確認された。このことから、焼失住居と判断される。さらに、周辺から3棟の堅穴住居跡が検出されたが、平面的には先後関係が確定できず、当初はST 1214が他の住居跡を切ると判断した。その後、ベルトの詳細な検討の結果、ST 1214が古く、次いでST 1204、ST 1206と新しくなることが判明した。柱穴及び周溝は検出されなかった。遺物の出土量も少量に留まっている。検出した炭化材が多いため、上部構造を復元することは出来なかった。出土した遺物は、甕などがあり、直口壺口縁部や底部、壺体部、甕口縁部片など図示した。

焼失住居

ST 1204 (第14・15図) B区9～10-19～20グリッドに位置する。長軸5.06m短軸4.1mを測る不整長方形のプランと考えられる。ST 1214・ST 1205を切り、ST 1206に切られる。柱穴及び周溝は検出されなかった。ベルトによる確認では、確認面からの深さは、約18cmを測り、壁が斜めに立ち上がる。出土した遺物は、壺体部破片など少量に留まる。

ST 1205 (第14・15図) B区9～10-20グリッドに位置する。長軸3.22m短軸2.43mを測る、やや小ぶりな不整長方形のプランと考えられる。ST 1204に切られる。柱穴及び周溝は検出されなかった。出土した遺物は、壺体部破片など少量に留まる。甕口縁部や壺体部など3点図示した。

ST 1206 (第14・15図) B区9～10-19グリッドに位置する。長軸3.8mを測るが短軸は確認できなかった。長方形のプランと考えられる。ST 1214・ST 1204を切る。ST 1214・ST 1204の床面検出作業などにより、北端部をはじめかなり削平され全容は不明である。ベルトによる確認では、床面から壁面が緩やかに立ち上がる。台付き壺台部1点図示した。

ST 1207 (第16図) B区9～10-19グリッドに位置する。長軸4.1m短軸3.4mを測るが、北東コーナー部は確認できなかった。不整長方形のプランと考えられる。ST 1206に切られる可能性があるが判然としない。覆土の判別が面的には困難を極め、グリッド杭を結ぶベルトを残し掘り下げた。炭化物・焼土、遺物が確認されたレベルを堅穴住居跡の床面とし、ベルトの断面観察により範囲を推定した。柱穴及び周溝は検出されなかった。西壁中央付近の床面に、炭化物が多く確認された。ベルトによる確認では、確認面からの深さは、11cm～18cmを測り、

壁が緩やかに斜めに立ち上がる。出土した遺物は、壺・甕などで、3点を図示した。南西コーナーの壁際から出土した小型壺は、体部形状が東海系のヒサゴ壺にやや似る。

東海系のヒサゴ壺

ST 1209 (第17・18図) B区8～9-19～20グリッドに位置する。平安時代確認面で柱穴を精査中に、壁面に炭化物が層状に分布するのが確認されたことが検出の契機となった。また、SG 763 河川跡の立ち上がりを確認するためにテストトレンチを入れた際、壁の立ち上がりと共に炭化物・小型壺が出土した。しかし、周囲は他の住居跡と同様に水性堆積の黄褐色シルトの土壌のため、覆土の確認が難しく、面的なプランの確認までは至らなかった。そのため、グリッド杭を結ぶベルトを残し慎重に掘り下げた結果、多くの土器がまとめて出土し、さらに炭化物材と炭化物が床面を覆っている状況が確認された。このことから、ST 1214と同じように焼失住居と判断される。炭化物の分布範囲と土器出土範囲を基にプランを確定した。長軸

焼失住居

5.95 m 短軸 4.4 m を測る不整長方形のプランである。ベルトによる確認では、確認面からの深さは、20cm～23cmを測り、壁が緩やかに斜めに立ち上がる。周溝は確認されないが、土坑やピットが数基検出された。主柱穴となりうるかは判然としない。E P 1は南東に位置し長径60cm 短径50cm、床面からの深さは8cmを測る。上層には粒状の炭化物が密集している。当初は炭化米と判断していた。出土状況から、E P 1は貯蔵穴の可能性も考えられる。サンプルを採取しAMS法による年代測定を含めた分析を委託したところ炭化米ではなく、アサ種実と

アサ種実
油採取の栽培種

同定された。詳細は付録に譲るが、油採取のための栽培種の可能性がある。E L 3は北東部に位置し長径110cm 短径80cm、床面からの深さは3～5cmを測る。覆土は炭化物を多く含む黒色土で、焼土がブロック状に混じる。壺体部を鍋に転用した土器(57)が付近から出土していることもあり、地床炉の可能性もある。E P 4・E P 5は直径50cm、床面からの深さは10cmを測る。出土した遺物は、大型壺・小型壺・高坏・台付き甕など極めて多量で、多くはほぼ完全に復元できた。本遺跡で検出した堅穴住居跡中最多の出土である。27点を図示した。多様な口縁部を持つ大型壺群や小型壺群のセットが特筆される。大型二重口縁壺(67)は、福島県男壇古墳出土の底部穿孔二重口縁壺に似る。また、複合口縁を持つ大型壺(58)は外面ヘラ磨きで赤彩が施されている。同形でおそらく同一工人の手になる壺がSG 763から出土して

地床炉

同一工人

小型壺群

いる。小型壺群は西壁中央付近からまとめて出土している。体部の形状・調整・サイズはほぼ同じであるが、二重口縁や内湾気味に立ち上がるものなど口縁部はすべて異なる。特に66は、肩部に8～9条1単位の櫛播波状文が施されている。高坏(73)は被熱のためか表面は痛みが見られるが丁寧な調整が施されており、棒状柱突で屈折脚形状を呈する。出土状況から流れ込みではないと考えられる。これら出土土器の組成は、煮沸形態や坏や碗などの仕器が少なく、変化に富む口縁部を有する大小の壺が主体となっている。これらのことからST 1209は祭祀あるいは、政治的な中心などの特殊な用途の建物の可能性も考えられる。

ST 1210 (第19図) B区8～9-20～21グリッドに位置する。長軸3.75 m 短軸2.8 m を測る長方形のプランである。南にST 1209が存在する。覆土の判別が面的には困難を極め、グリッド杭を結ぶベルトを残し掘り下げた。炭化物・焼土、遺物が確認されたレベルを堅穴住居跡の床面とし、ベルトの断面観察により範囲を推定した。床面でのプラン確認のため、壁の立ち上がりや確認面からの深さは遺構からは覗うことができない。ベルトによる確認では、確認面からの深さは、11cm～23cmを測り、壁が緩やかに斜めに立ち上がる。周溝は確認され

ない。南壁より炭化物が分布する範囲が確認された。出土した遺物は、甕体部破片など少量に留まる。壺体部片を1点図示した。

S T 1211 (第20図) B区8-9-22~23グリッドに位置する。長軸5.24m短軸4.5mを測る不整長方形のプランである。他の竪穴住居跡と同様に、覆土の判別が面的には困難を極め、グリッド杭を結ぶベルトを残し掘り下げた。ベルトの断面観察により範囲を推定した。ベルトによる確認では、確認面からの深さは8cm~13cmを測り、壁が緩やかに斜めに立ち上がる。柱穴・周溝は確認されない。いくつかの奈良・平安時代の柱穴に切られる。出土遺物は少量の出土に留まるが、二重口縁壺の口縁部片(23)1点図示した。

S T 1212 (第21図) B区7-8-21~22グリッドに位置する。長軸5.45m短軸4.35mを測る長方形のプランである。S T 956・S T 957に切られる。S T 956・S T 957の床面精査後に、グリッド杭を結ぶベルトを残し掘り下げた。床面と考えられる、やや硬化し極度に炭化物粒が分布する範囲及びベルトの断面観察により範囲を推定した。ベルトによる確認では、確認面からの深さは1cm~6cmを測り、壁がかなり緩やかに斜めに立ち上がる可能性がある。柱穴・周溝は確認されない。出土した遺物は、壺・甕口縁部破片など少量に留まる。壺口縁部を2点図示した。24は小振りな折り返し口縁壺口縁部、25は口縁部が外傾する直口壺口縁部と考えられる。

S T 1213 (第22図) B区6-20~21グリッドに位置する。長軸4.17m短軸3.1mを測る不整長方形のプランである。いくつかの奈良・平安時代のピットに切られる。グリッド杭に沿ってパイロットトレンチを入れた際に遺物が出土し、断面観察からそれらが水平に分布する状況が確認されたことにより、竪穴住居跡の存在が推定された。しかし、覆土の判別が面的には困難を極め、グリッド杭を結ぶベルトを残し掘り下げた。遺物が出土し細かな炭化物粒が僅かに分布する範囲及びベルトの断面観察により範囲を推定した。ベルトによる確認では、確認面からの深さは15cmを測る。床面の中央やや東よりに、直径1.8mほどの炭化物が分布する範囲が確認される。柱穴及び周溝は確認されない。遺物はさほど多くはないが、竪穴住居跡のほぼ全域で床面に張り付くように確認される。器種には壺・甕などがあり、4点図示した。小型短頸壺(29)は、外面が丁寧にヘラ磨きされ、底部は丸底状を呈する。

S T 1215 (第23図) B区9-10-18~19グリッドに位置する。長軸4m短軸3.23mを測る長方形のプランである。17グリッド以南のS G 763河岸部分を重機により掘り下げようとした際、最初の掘り下げで完形の甕が出土し周囲に微細な炭化物粒が分布することから、竪穴住居跡の存在が考えられた。このため人力により、グリッド杭を結ぶベルトを残し掘り下げ、微細な炭化物粒が分布する範囲を遺構覆土と判断しプランを確定した。その後ベルトを再設定し精査を進めた。覆土はぶい黄褐色砂質シルトを基調とするが、地山との判別は困難を極める。2層下部(床面直上)から多量の炭化物が検出される。敷物に由来する可能性も考えられるが、炭化材も確認されることから焼失住居の可能性もある。古墳時代確認面からの深さは、12~20cmを測り、壁がほぼ垂直に立ち上がる。柱穴及び周溝は確認されない。床面の中央西よりと北壁よりに、炭化物が多く分布する範囲がある。遺物は多くないが、完形の甕(30)など2点図示した。完形の甕(30)は、中央付近の床面直上から横位で出土している。出土時、内部は空洞であった。

ST 1216 (第24・25図) B区6～7-21～22グリッドに位置する。長軸6.7m短軸5.55mを測る不整長方形のプランである。ST 956・ST 957・ST 1218に切られる。ST 956・ST 957の床面精査後に、既存の土層観察用ベルトを残し面的に掘り下げた。その結果、遺物が床面に張り付くように出土し、微細な炭化物粒が分布する範囲が確認され、堅穴住居跡のプランと推定した。ベルトでの観察では、古墳時代確認面からの深さは約15cmを測る。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がる。周溝及び柱穴は確認されない。遺物は、西壁周辺と南東コーナー部、北東コーナー部と中央部で床面に張り付くように出土している。出土した遺物はST 1209に次いで多く、甕・壺・小型壺・器台・高環・直口壺などがある。多くは完形あるいは半完形に復元され、17点図示した。赤彩された大振りの直口壺(90)・高環(87)が注目される。いずれも内外面ともに剥離が見られるが、内外面とも丁寧なヘラ磨きが施され、赤彩される。なかでも高環(87)は棒状柱実の屈折脚を持ち、環部・脚部内面はハケ目調整され、環部内面はさらに丁寧なヘラ磨きが施されている。環部欠損している同種の高環(88)と、脚部の内面調整がやや異なる高環(89)も見られるが、赤彩の痕跡は表面の痛みが激しく確認できない。これら内外面の剥離は被熱に由来する可能性も考えられるが、現時点では判然としない。完形にはならなかったが、大型の壺も見られる。小型壺(81・85)は、体部の形状・調整・サイズはほぼ同じであるが、短い口縁部が緩く開くものや外反気味に立ち上がるものと口縁部はすべて異なる。ST 1209出土小型壺セットと体部形状・調整・法量は同じものである。81は体部がST 1209で出土しており、ST 1216で出土した口縁部と接合している。赤彩された高環(87)と直口壺(90)や小型壺が近接して出土することなどから一般な住居ではなく、ST 1209と同様に特殊な用途が考えられる。

赤 彩

棒状柱実の屈折脚

赤彩された高環

ST 1217 (第26図) B区5～6-22～23グリッドに位置する。長軸4.2m短軸4.2mを測る不整形のプランである。破鏡出土地点周辺について、丁寧に遺構確認を継続したが覆土の判別が面的には困難を極め、グリッド杭を結ぶベルトを残し面的に掘り下げた。ベルト付近から遺物が出土し、細かな炭化物粒が僅かに分布する範囲及びベルトの断面観察により範囲を推定した。ベルトでの観察では、古墳時代確認面からの深さは約15cmを測る。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がる。周溝及び柱穴は確認されない。遺物は、北壁中央付近と床面中央付近に分布する。体部球形の壺や甕、赤彩の小型壺など8点図示した。体部球形の壺(97)は内外面ともハケ目調整で、外面がさらに丁寧なヘラ磨きが施される。

ST 1218 (第27図) B区5～6-21～22グリッドに位置する。長軸3.85m短軸3.75mを測る不整形のプランである。ST 1216を切り、ST 1217に切られる。遺物はほとんど出土しない。古墳時代確認面からの深さは、10～20cmを測り、中央付近がやや窪んでいる。

2) 木組み遺構 (第28・29図)

木組み遺構は、SG 763の土器が集中する河岸の立ち上がりを追いつながら精査していた際に丸太材と杭を検出したことが契機となった。当初は単なる流木と判断していたが、調査終了近くになり周辺を重点的に精査したところ、多くの丸太材と杭が規則的に配置され組み合わせられていることが判明した。丸太材列は、少なくとも3列確認されている。特に、西側の丸太材は2～3mを測る枝打ちや一部面取りされた部材が一列に並んでいる。これらの丸太材は、下

丸太材と杭

3列の木材列

流側（西）で斜めに打ち込まれた直径 20 cm ほどの杭（383 など）で支えられる構造のようである。また、これら丸太材に接して、10～15 cm の杭が垂直に打ち込まれ固定されている。上層の部材を取り上げると、さらに下層にも丸太材を主とした木組みが存在することが判明した。下層の西側丸太材列は、上層の西側丸太材列の直下に位置し、上層下層の二重構造となっている。下層西側丸太材は、南側で Y 字を呈する杭にしっかりと固定され、Y 字の杭はあたかも橋脚のような状況であった。また、下層東側には板材が丸太材に沿って何列か打ち込まれているのが確認される。これら板材列は水流のコントロールを図ったとも考えられる。木組み遺構の機能としては、断定する根拠に欠けるが井堰、あるいは橋などが考えられよう。

3) S G 763 (第 30 図)

B 区南半を占める河川跡である。当初は浅い平安時代の小河川と考えていた。しかし、冒頭で述べたように兩上りにタワー上から調査区を概観した際、乾きの遅い部分が B 区南半部を覆っており、小河川跡と重複することが確認された。念のためにトレンチを入れたところおよそ 120 cm 下層に古墳時代前期の遺物が検出され、大きな河川跡であることが確認された。工期および調査区の都合により、対岸まで精査することができず、河幅など詳細は、残念ながら不明である。最上層は薄く赤茶けた風化礫が主体で、遺物を含まない。その直下から南小泉式の高坏が出土しているが、流れ込みと判断される。その下層 100 cm 余りは砂質シルトが主体となる無遺物層で、小型重機を使用して掘り下げが可能であった。その後、人力により慎重に精査したところ、ほぼ全域から多くの遺物の出土を見た。遺物は概ね堅穴住居跡に面した斜面から河底にかけて多く分布し、住居跡から離れた地点からの出土はほとんど見られない。このことから、遺物は堅穴住居跡に居住した人々により投棄されたと推測される。また、土器の出土位置は 6～7ヶ所のまとまりが窺える。

月影形甕（能登
甕）
東海系のヒサゴ
甕

出土した遺物は、壺・甕・高坏・直口壺・小形壺・器台・鉢・木製品など多様である。月影形甕（能登甕）に類似するものや東海系の高坏、近江系の受け口縁甕に類似するものや東海系のヒサゴ甕も存在する。また、布留系の影響を受けたような一群も散見される。甕は被熱し煤に覆われ、内面にコゲが付着するものが多くみられた。コゲについては一部サンプリングし、AMS 法による年代測定を含めた分析を依頼している。詳細は付編に譲るが、約 1710～1720 年前の測定結果を得ている。また、赤彩された土器群が一定量存在し、多くは完形に復元できることから祭祀に使用されたと推測される。また、体部の打ち欠きによる穿孔や底部穿孔の土器が見られ、これらも祭祀に使用された可能性がある。木製品は木組み遺構の構築材の他に、柱や梯子、板材などの建築部材がある。農工具が極めて少ないのも特徴で、さらに人為的に切断された弓や四方転びの箱など特殊な遺物がある。これらについても、多くは祭祀に関連するものの可能性があると思われる。

A N S 法
1710～1720
年 前

赤彩や穿孔

四方転びの箱

4) 破鏡出土地点 (第 31 図)

破 鏡

破鏡 (362) は、6-23 グリッドで出土した。土師器片が分布しやや暗い土色の地点を丁寧に取り進められた際に出土した。周辺からも土師器小片が近似するレベルで出土している。隣接する S D 1024 底面下からも土師器小壺が 2 点出土し、そのうちの一つには赤色の土塊が充填

赤色の土塊

されていた。具体的な根拠に乏しいが、竪穴住居跡など何らかの遺構が存在し、その未確認遺構から破鏡が出土したと推定した。S D 1024 直下の小壺出土地点付近も、その未確認遺構に関連することも考えられる。竪穴住居跡とすれば、S T 1216・S T 1217 に切られる。弥生時代後期から古墳時代前記初頭にかけて大分や近畿で散見されるように、住居跡など集落内に破鏡が廃棄される状況が考えられる。

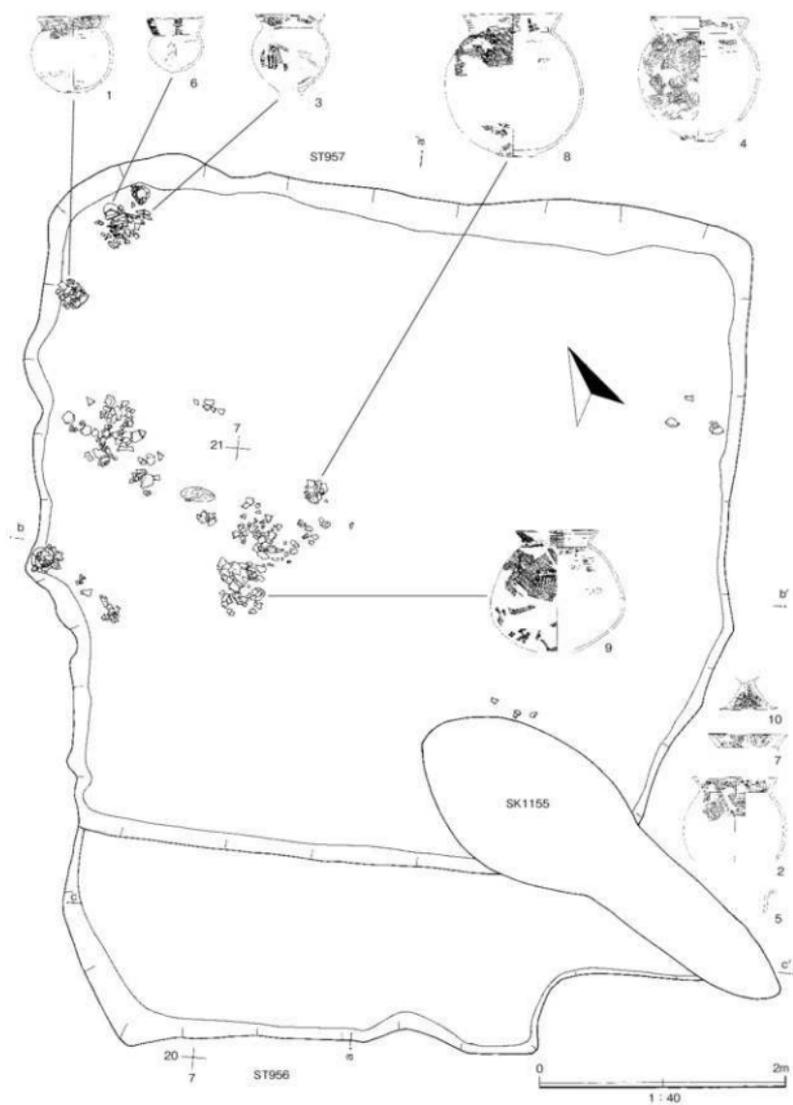
集落内に廃棄

5) ミニチュア土器出土地点

平安時代確認面での遺構検出中に10-20グリッドでミニチュア土器がまとまって出土した。周囲では土色変化は認められず、遺構は確認されなかった。しかし、その後の検討で出土地点はS T 1201 住居跡のほぼ中央直上であることが判明した。床面からは浮いた状態であるので、埋設途中の竪穴住居跡内において何らかの祭祀行為が行われた可能性がある。ミニチュア土器群は、祭祀が終了した後に、まとめて集められた様に、伏せた状態で検出されている。遺物は、折り返し口縁の広口壺を模した土器群で、外面には指頭圧痕、口縁内面にはハケ目調整が施される。胎土は、ST1209 出土の小型壺群と類似している。4点図示したが、破片からはさらに1-2点の存在が考えられる。

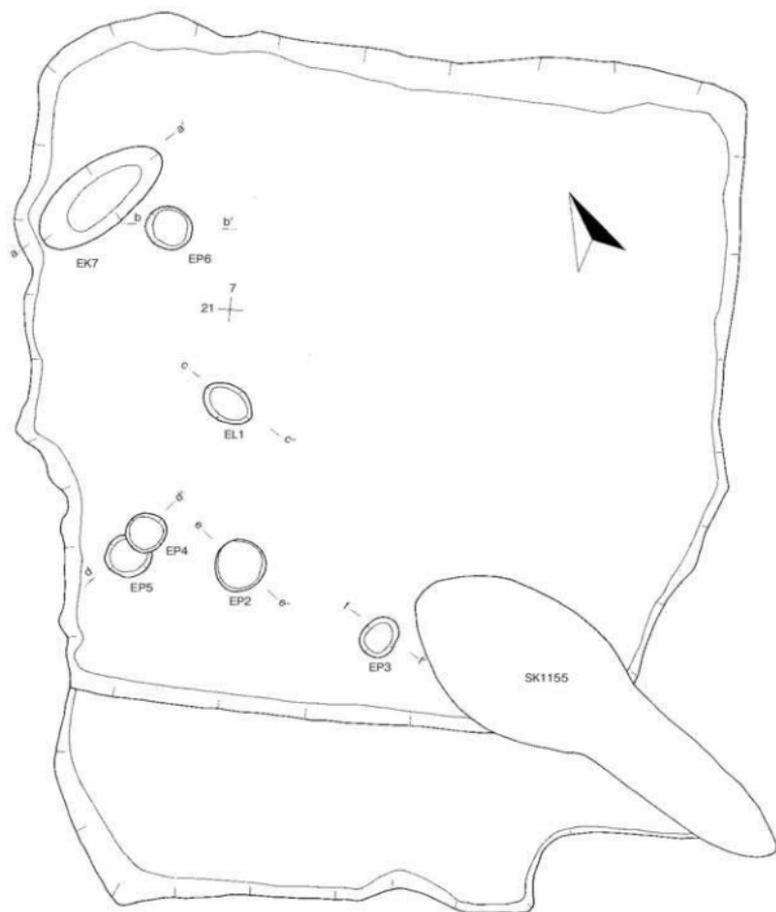
ミニチュア土器

祭祀行為



第7図 遺構実測図ST956・957

ST957

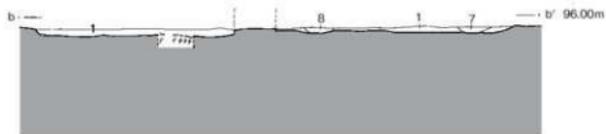


ST956

0 1 40 2m

第8図 遺構実測図ST956・957

ST956・ST957

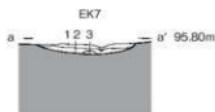


ST956・ST957

- 1 10YR2/2 黒褐色シルト(10YR4/2灰黄褐色砂質シルトが壤に混じる、土師器片含む)
- 2 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト(10YR3/2黒褐色シルトの小ブロックが3%混じる)
- 3 10YR2/2 黒褐色シルト(2.5Y4/3オリーブ褐色砂質シルトが10%混じる、少しサラサラする)
- 4 10YR4/2 灰黄褐色シルト
- 5 10YR3/2 黒褐色シルト(10YR4/2灰黄褐色砂質シルトが壤に混じる)
- 6 10YR2/2 黒褐色シルト(ややサラサラする)
- 7 10YR3/1 黒褐色シルト
- 8 7と同様

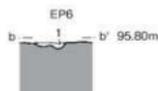


第9図 遺構実測図ST956・957



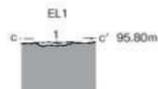
ST957-EK7

- 1 10YR2/2 黒褐色シルト(10YR4/4褐色シルトが混じる)
- 2 10YR4/1 褐灰色シルト(10YR4/4褐色シルトが混じる)
- 3 10YR3/3 暗褐色シルト(10YR4/4褐色シルトが混じる)



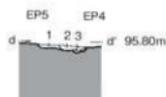
ST957-EP6

- 1 10YR4/2 灰黄褐色シルト(10YR4/4褐色シルトと10YR3/2黒褐色シルトが混じる)



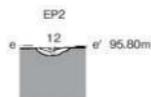
ST957-EL1

- 1 10YR3/2 黒褐色シルト(炭、焼土がわずかに混じる)



ST957-EP5・EP4

- 1 10YR3/2 黒褐色シルト(10YR4/4褐色シルトがわずかに混じる)
- 2 10YR3/1 黒褐色シルト(10YR4/4褐色シルトがわずかに混じる)
- 3 10YR4/2 灰黄褐色シルト(10YR4/4褐色シルトがわずかに混じる)



ST957-EP2

- 1 10YR3/2 黒褐色シルト(焼土が混じる)
- 2 10YR3/1 黒褐色シルト

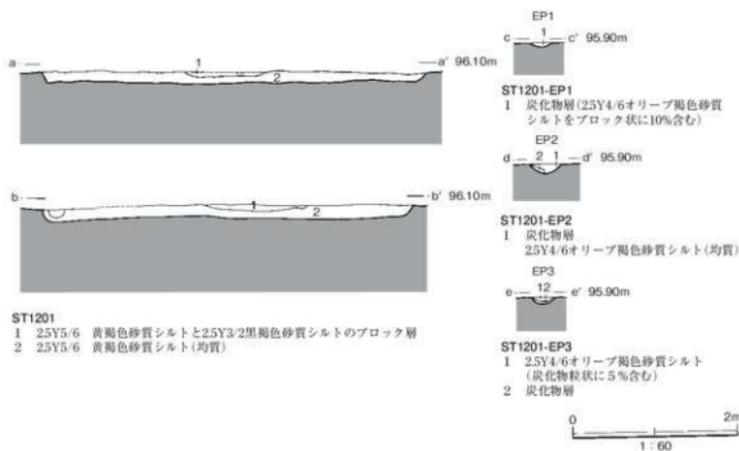
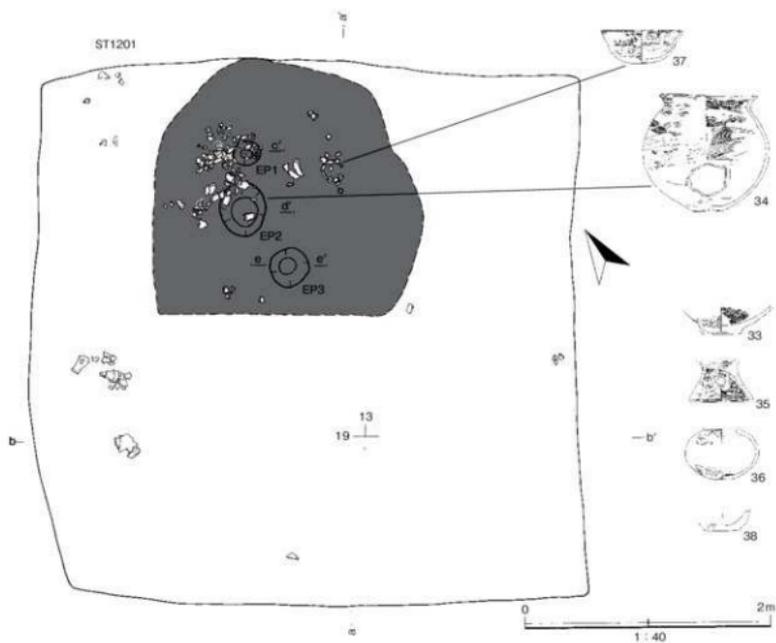


ST957-EP3

- 1 10YR4/2 灰黄褐色シルト(10YR4/4褐色シルトのブロックが5%混じる)



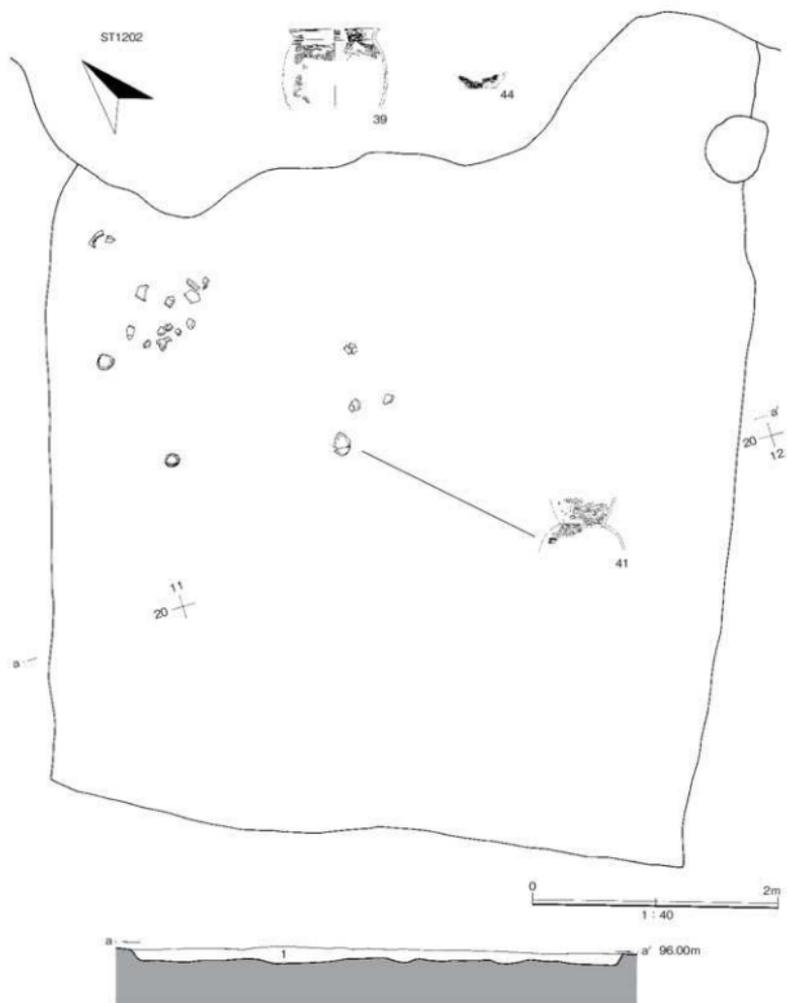
第10図 遺構実測図ST956・957



ST1201

- 1 25Y5/6 黄褐色砂質シルトと25Y3/2黒褐色砂質シルトのブロック層
2 25Y5/6 黄褐色砂質シルト(均質)

第11図 遺構実測図ST1201

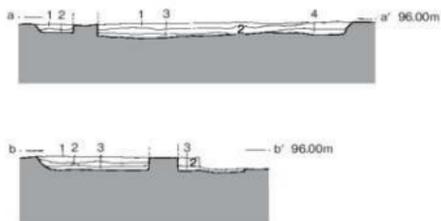
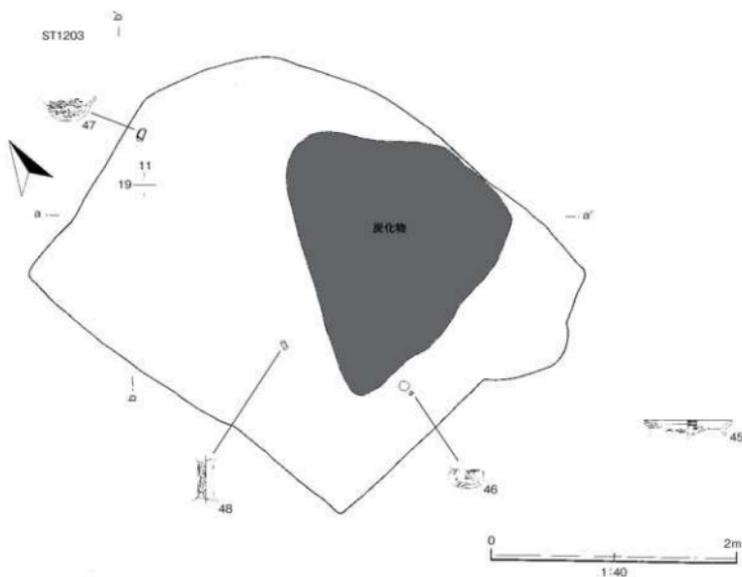


ST1202

1 2.5Y5.6 黄褐色砂質シルト(2.5Y3.2黒褐色砂質シルトを底状に5%含む)



第12図 遺構実測図ST1202

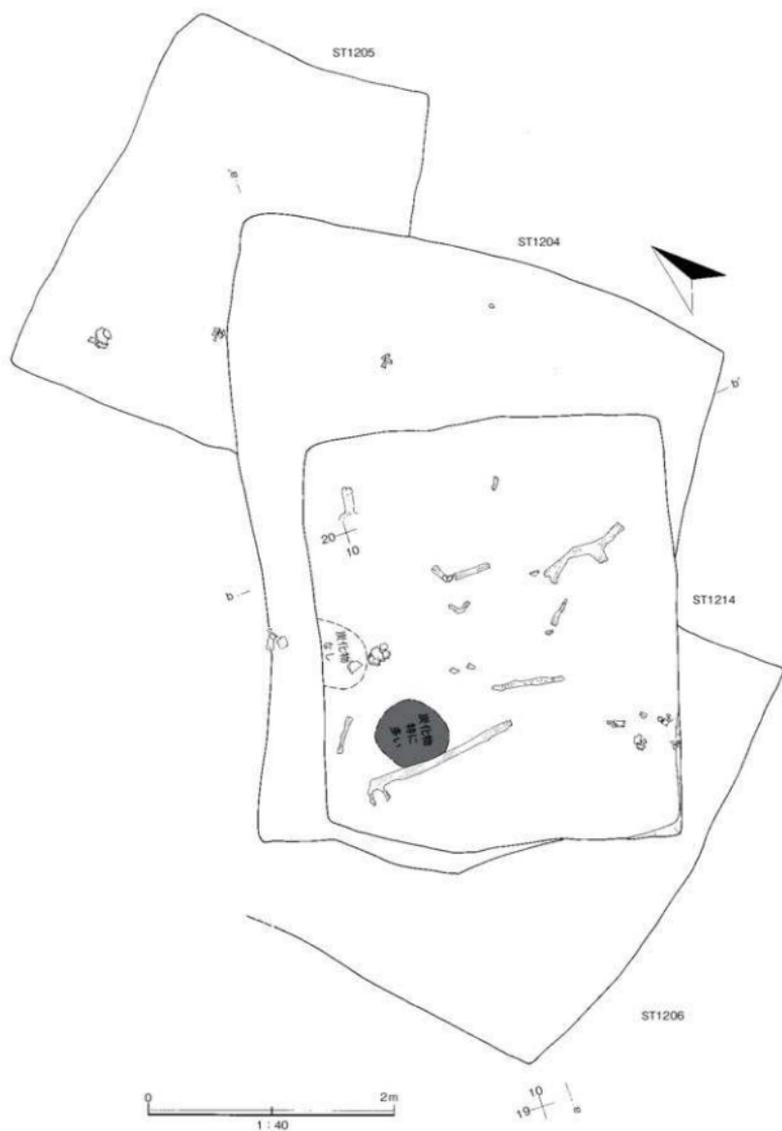


ST1203

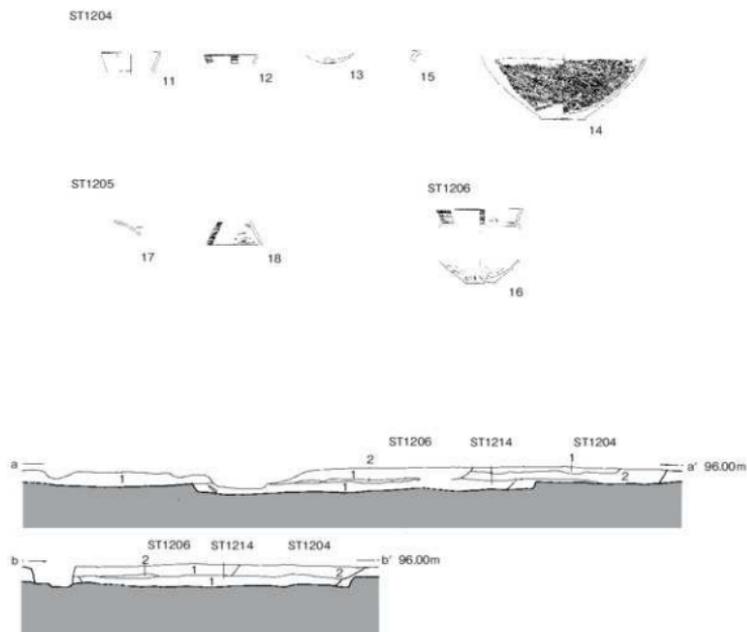
- 1 25Y4/6 オリーブ褐色砂質シルトと2.5Y2/1黒褐色砂質シルトのブロック層
- 2 25Y4/6 オリーブ褐色砂質シルト(ほぼ均質)
- 3 25Y4/6 オリーブ褐色砂質シルト(炭化物を粒状に3%含む)
- 4 2.5Y5/6 黄褐色砂質シルト(地山)



第13図 遺構実測図ST1203



第14図 遺構実測図ST1204・1205・1206・1214



ST1206

- 1 2.5Y5/6 黄褐色砂質シルト(2.5Y3/2黒褐色シルトをブロック状に10%含む)
- 2 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト(2.5Y5/6黄褐色砂質シルトを小粒状に10%含む、鼈床)

ST1204

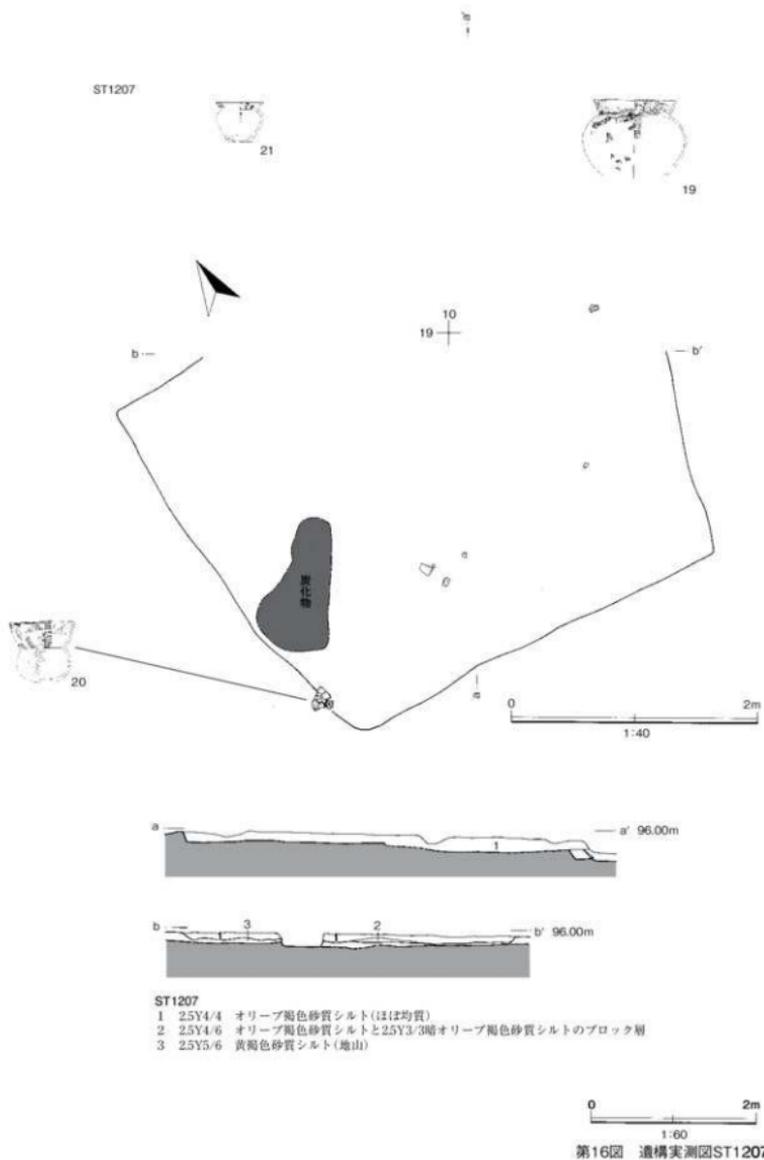
- 1 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質シルト(2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルトをブロック状に10%含む、覆土)
- 2 2.5Y4/6 オリーブ褐色砂質シルト(ほぼ均質)

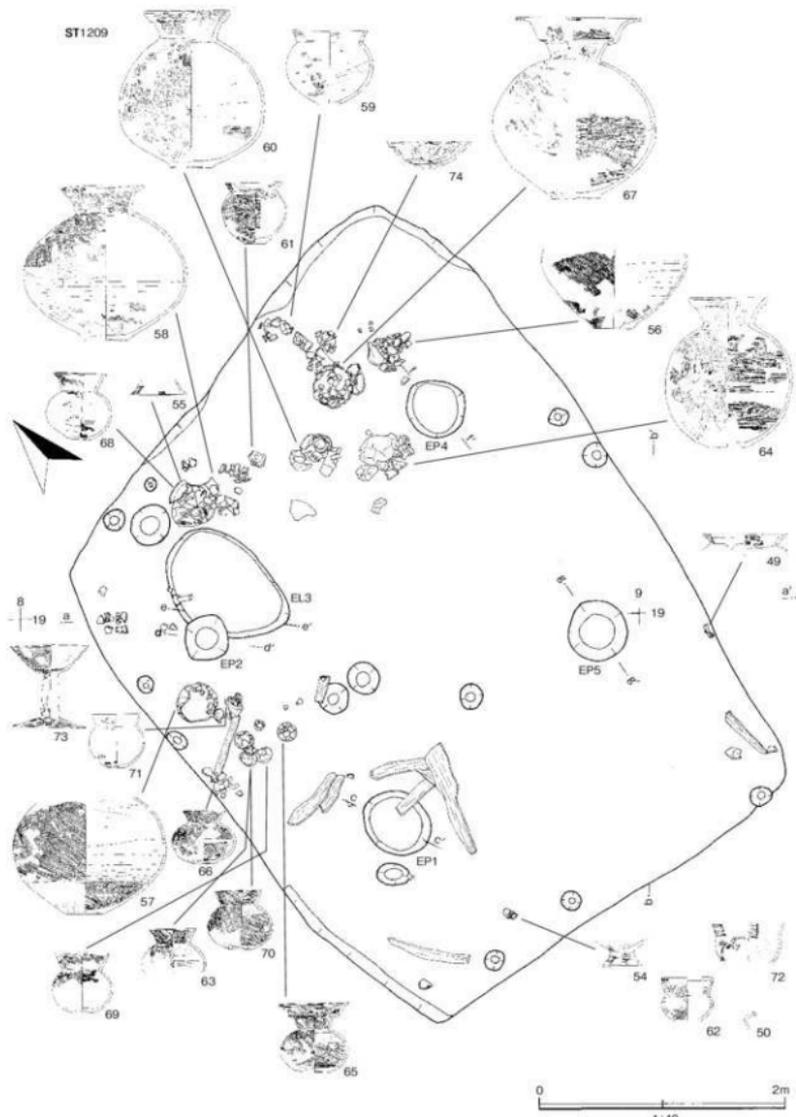
ST1214

- 1 2.5Y4/6 オリーブ褐色砂質シルト(炭化物を小粒状に5%含む)



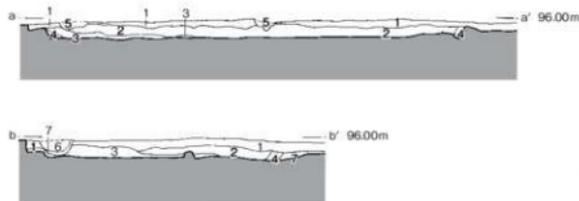
第15図 遺構実測図ST1204・1205・1206・1214





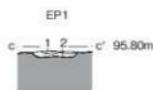
第17図 遺構実測図ST1209

ST1209



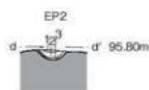
ST1209 東西ベルト・南北ベルト

- 1 25Y4/6 オリーブ褐色砂質シルト(25Y2/1黒色シルトをブロック状に20%含む、堆積層)
- 2 25Y4/4 オリーブ褐色砂質シルト(炭化物を含む)
- 3 25Y4/4 オリーブ褐色砂質シルト(炭化物を粒状に3%含む、25Y3/3暗オリーブ褐色シルトをブロック状に20%含む)
- 4 25Y4/4 オリーブ褐色砂質シルトと25Y4/6オリーブ褐色砂質シルトのブロック層(埋積の崩落土)
- 5 25Y3/1 黒褐色シルト(しまりなし・カクラン)
- 6 25Y3/1 黒褐色シルト(カクラン)
- 7 25Y4/6 オリーブ褐色砂質シルト(地山)



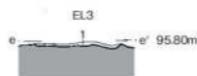
ST1209-EP1

- 1 炭化米
- 2 25Y4/6 オリーブ褐色砂質シルト(しまりなし、若干炭化物を粒状に含む)



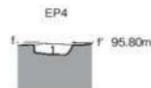
ST1209-EP2

- 1 25Y5/4 黄褐色シルト(炭化物を粒状に10%含む、埋積土)
- 2 25Y2/1 黒色炭化物層(焼土を含む)
- 3 25Y4/6 オリーブ褐色砂質シルト(しまりなし、若干炭化物を粒状に含む)



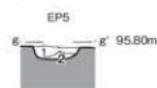
ST1209-EL3

- 1 25Y2/1 黒色炭化物層(焼土をブロック状に含む)



ST1209-EP4

- 1 25Y4/6 オリーブ褐色砂質シルト(しまりなし、若干炭化物を粒状に含む)

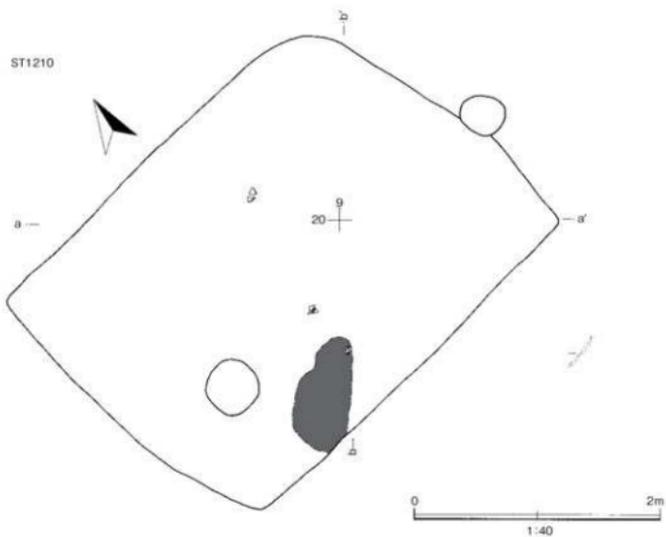


ST1209-EP5

- 1 EP2の注記の1層に同じ(若干粘質を帯びる)
- 2 25Y4/6 オリーブ褐色砂質シルト(しまりなし、若干炭化物を粒状に含む)



第18図 遺構実測図ST1209

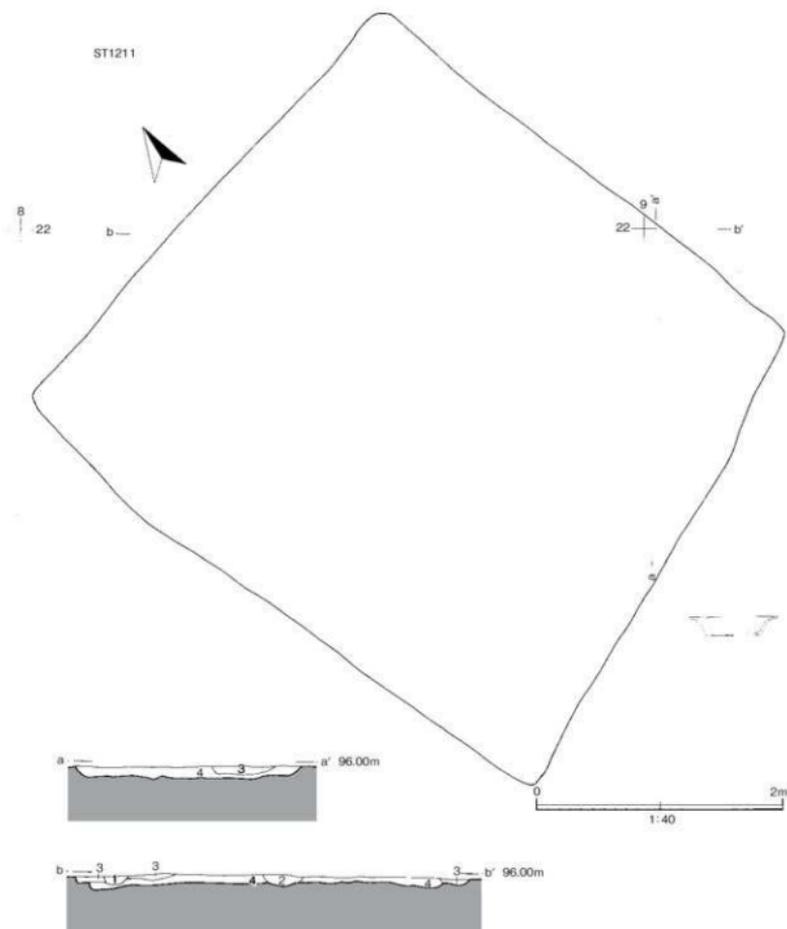


ST1210

- 1 2.5V4/6 オリーブ褐色砂質シルト(砂利含む)
- 2 2.5V4/2 暗灰黄色シルト(均質)



第19図 遺構実測図ST1210

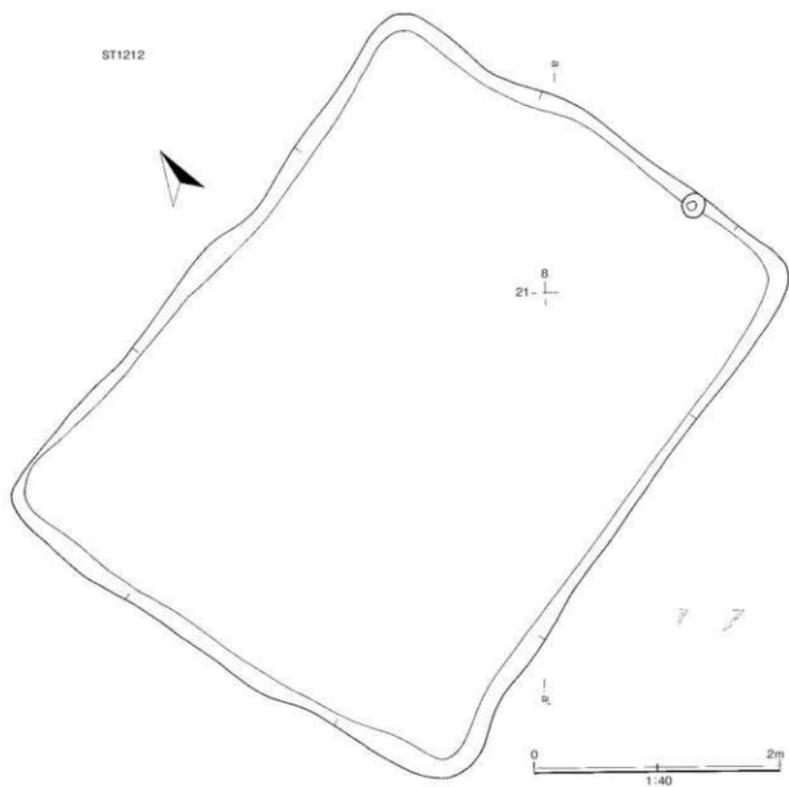


ST1211

- 1 25Y3/2 黒褐色シルト(25Y4/4オリーブ褐色砂質シルトを斑状に含む, 奈良, 平安ビッド)
- 2 25Y3/3 暗オリーブ褐色シルト(25Y3/1黒褐色シルトを斑状に含む奈良, 平安ビッド)
- 3 25Y5/4 黄褐色砂質シルトと25Y3/3暗オリーブ褐色砂質シルトのブロック層, 自然堆積
- 4 25Y4/4 オリーブ褐色砂質シルト(25Y3/2黒褐色シルトを粒状に5%程含む, 若干炭化物を含む)



第20回 遺構実測図ST1211

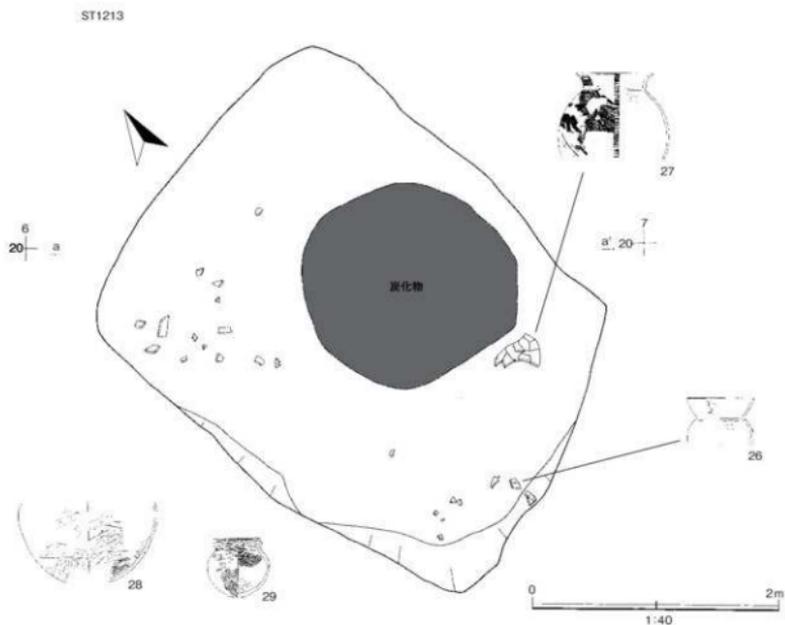


ST1212 セクション

1 25Y4/3 に近い黄褐色シルト(炭化物粒極少量混じる)



第21図 遺構実測図ST1212

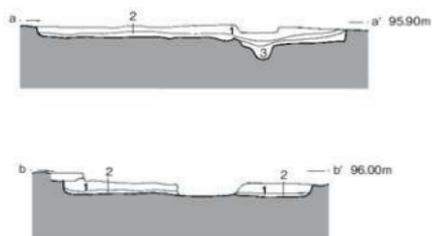
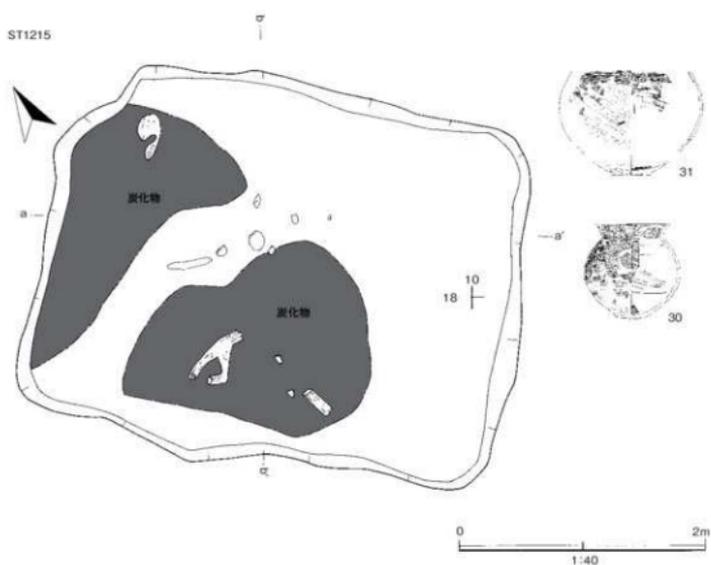


ST1213

- 1 25Y3/2 黒褐色シルト(25Y4/3オリブ褐色砂質シルトを小粒状に5%含む、炭化物を含む)
- 2 25Y5/4 黄褐色砂質シルト(25Y3/3暗オリブ褐色砂質シルトのブロック状、自然堆積)
- 3 25Y3/3 暗オリブ褐色シルト(25Y4/3オリブ褐色シルトをブロック状に含む、ST壁崩落土)
- 4 25Y5/4 黄褐色砂質シルト(25Y4/6オリブ褐色砂質シルトを小粒状に含む、炭化物を若干含む)ST覆土

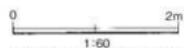


第22図 遺構実測図ST1213

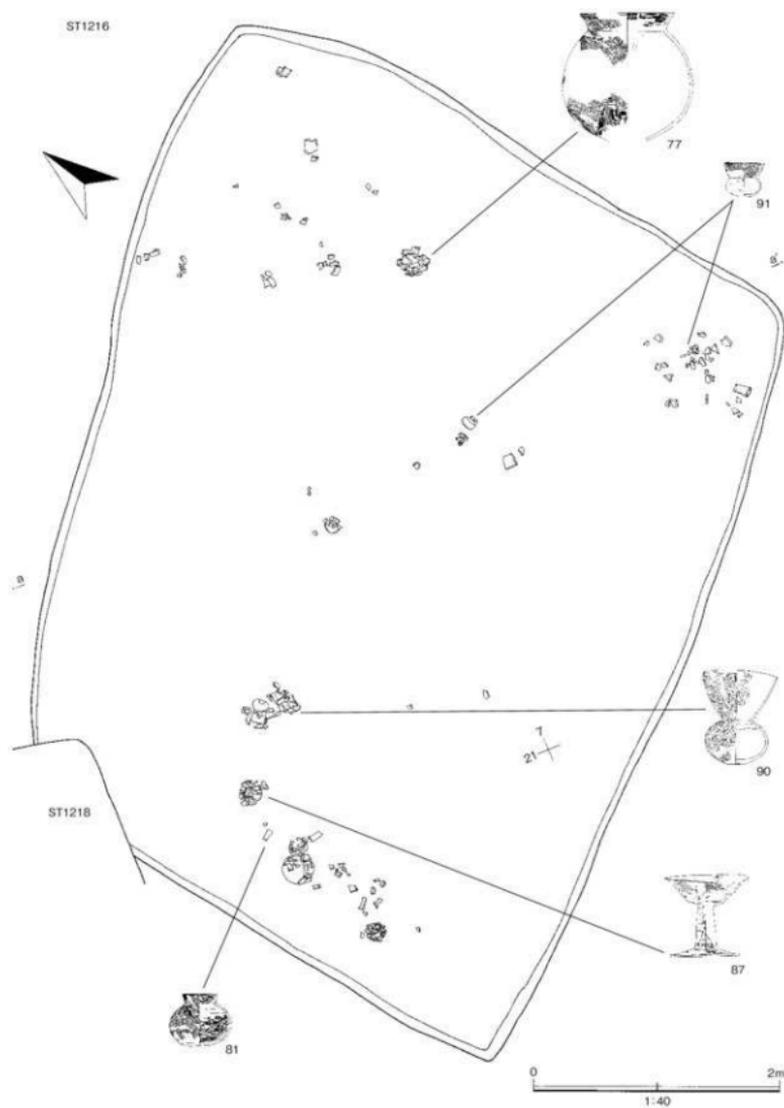


ST1215

- 1 HOYR5/ におい黄褐色砂質シルト(地山に比べて砂質、土色の違いはない)
- 2 HOYR5/ におい黄褐色砂質シルト(若干黒みがかるが、1層との土色、土質の違いはない、敷物にする炭化物が、この層には炭化物が多量に含まれる、床面直上)
- 3 HOYR5/ におい黄褐色砂質シルト(1層にはほぼ同じ、地山より砂質がかる、区別はほとんど不可能)
- 1 HOYR5/ におい黄褐色シルト(黒褐色シルト小ブロックが埋に30%混じる、平安面)

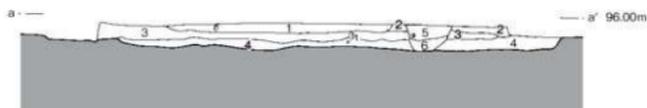
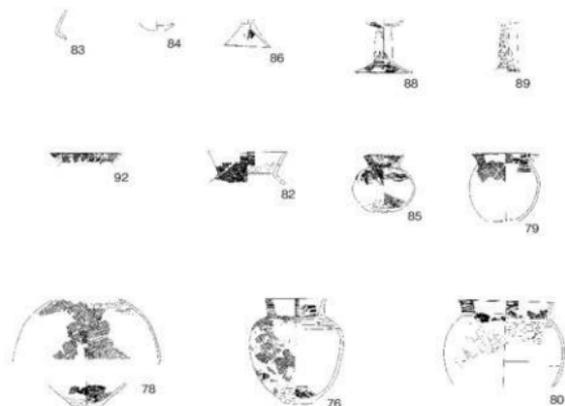


第23図 遺構実測図ST1215



第24図 遺構実測図ST1216

ST1216

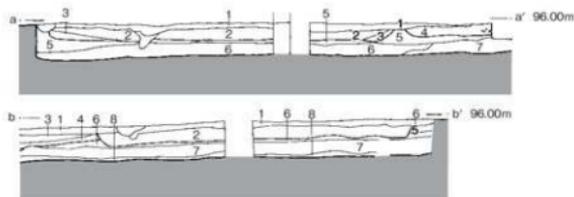
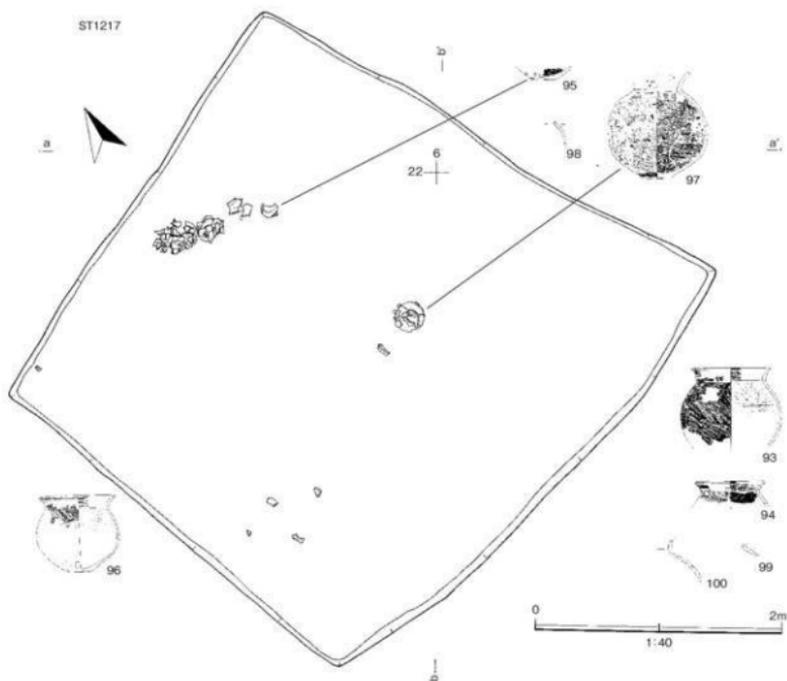


ST1216

- 1 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルト(2.5Y3/1黒褐色シルト、2.5Y4/6オリーブ褐色シルトをブロック状に含む、
下層に炭化物層あり、ST1216の上面のST)
- 2 2.5Y5/3 黄褐色砂質シルトと2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質シルトのブロック層(自然堆積)
- 3 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト(しまりが無い、鉄分含む)
- 4 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト(しまりが無い、鉄分含む、若干炭化物含む)
- 5 2.5Y3/1 黒褐色シルト(5Y4/1灰色シルトをブロック状に含む、炭化物を含む、土器片含む)
- 6 5Y3/2 オリーブ黒色シルト(2.5Y4/6オリーブ褐色シルトをブロック状に含む)



第25図 遺構実測図ST1216

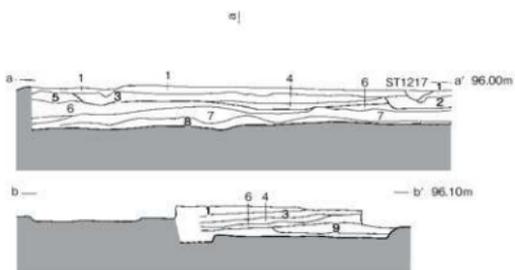
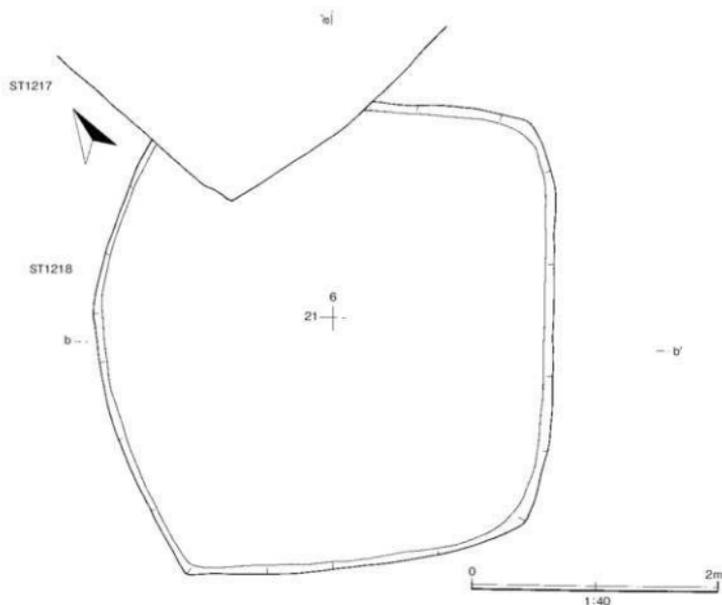


ST1217

- 1 25Y5/4 黄褐色砂質シルトと25Y3/3暗オリーブ褐色砂質シルトのブロック層(自然堆積)
- 2 25Y5/4 黄褐色砂質シルト(鉄分含む、炭化物を若干含む、ST1217復土)
- 3 25Y5/4 黄褐色砂質シルト(25Y4/4オリーブ褐色砂質シルトを底状に含む、増面崩落土か)
- 4 25Y4/3 オリーブ褐色砂質シルト(25Y3/1黒褐色シルト、25Y4/6オリーブ褐色シルトをブロック状に含む、ST1216上面のSTか)
- 5 ST1217 南北ベルト注記の6層
- 6 ST1217 南北ベルト注記の7層
- 7 25Y4/6 オリーブ褐色砂質シルト(鉄分含む、しまりなし)



第26図 遺構実測図ST1217



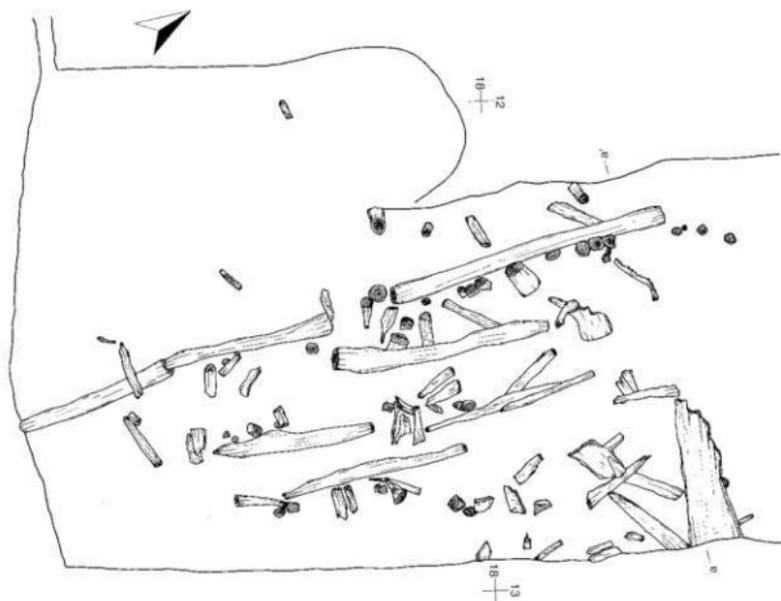
ST1218・ST1217

- 1 25Y3/3 黄褐色砂質シルトと25Y3/3暗オリーブ褐色砂質シルトのブロック層(自然堆積)
- 2 25Y5/4 黄褐色砂質シルト(鉄分含む、炭化物を若干含む、ST覆土)
- 3 25Y4/2 暗灰黄色砂質シルト(25Y3/2黒褐色シルトを塊状に含む、鉄分含む、ST覆土)
- 4 25Y4/2 暗灰黄色砂質シルト(25Y3/2黒褐色シルトを塊状に含む、鉄分含む、若干炭化物含む、3層よりしまりがある)
- 5 25Y5/3 黄褐色砂質シルト(ほぼ均質、自然堆積)
- 6 25Y4/3 オリーブ褐色砂質シルト(しまりがない、鉄分含む)
- 7 25Y4/1 黄灰色粘質シルト(ほぼ均質、鉄分含む、自然堆積層)
- 8 25Y4/2 暗灰黄色砂質シルト(しまりがない、ほぼ均質、鉄分含む、自然堆積層)
- 9 25Y4/3 オリーブ褐色シルト(しまりがない、鉄分含む、若干炭化物含む、ST1216覆土)

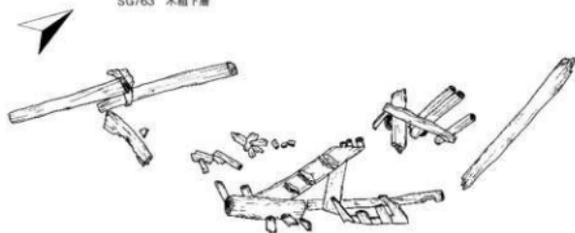


第27図 遺構実測図ST1218

SG763 木組

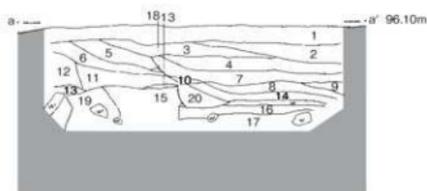


SG763 木組下層

10
130 2m
1:50

第28図 遺構実測図木組遺構

SG763 木組



SG763

- 1 25Y5/3 黄褐色シルト(25Y4/2暗灰黄色シルトの小ブロックが10%混じる)
- 2 25Y4/3 オリーブ褐色シルト
- 3 25Y5/2 暗灰黄色シルト
- 4 25Y4/1 黄褐色微砂
- 5 25Y5/4 黄褐色微砂
- 6 25Y5/2 暗灰黄色シルト
- 7 25Y4/1 黄褐色微砂シルト(やや粘る.25Y6/4にぶい黄色シルトの小ブロックが適に混じる)
- 8 25Y3/1 黒褐色シルト(5Y5/3灰オリーブ色シルトが適に混じる)
- 9 5Y4/1 灰色シルトと5Y5/3灰オリーブ色と25Y5/3黄褐色シルトが適に混じる
- 10 25Y4/1 黄褐色シルト(25Y5/4黄褐色シルトが適に混じる)
- 11 10YR3/1 黒褐色シルト(25Y5/2暗灰黄色シルトブロックが5%混じる)
- 12 10YR4/4 褐色細砂
- 13 25Y4/3 オリーブ褐色細砂
- 14 5Y4/1 灰色シルトと5Y5/2灰オリーブ色シルトと.25Y5/2暗灰黄色微砂が適に混じる
- 15 25Y2/1 黒色粘土
- 16 25Y3/1 黒褐色粘土(25Y4/4オリーブ褐色粗砂がベルト状に入る)
- 17 5Y5/2 灰オリーブ色細砂(粗砂がブロック状に入る)
- 18 10YR1/1 黒色シルト
- 19 5Y4/1 灰色シルト(5Y4/2灰オリーブ色微砂が適に混じる)
- 20 25Y2/1 黒色粘土に14の小ブロックが少量混じる



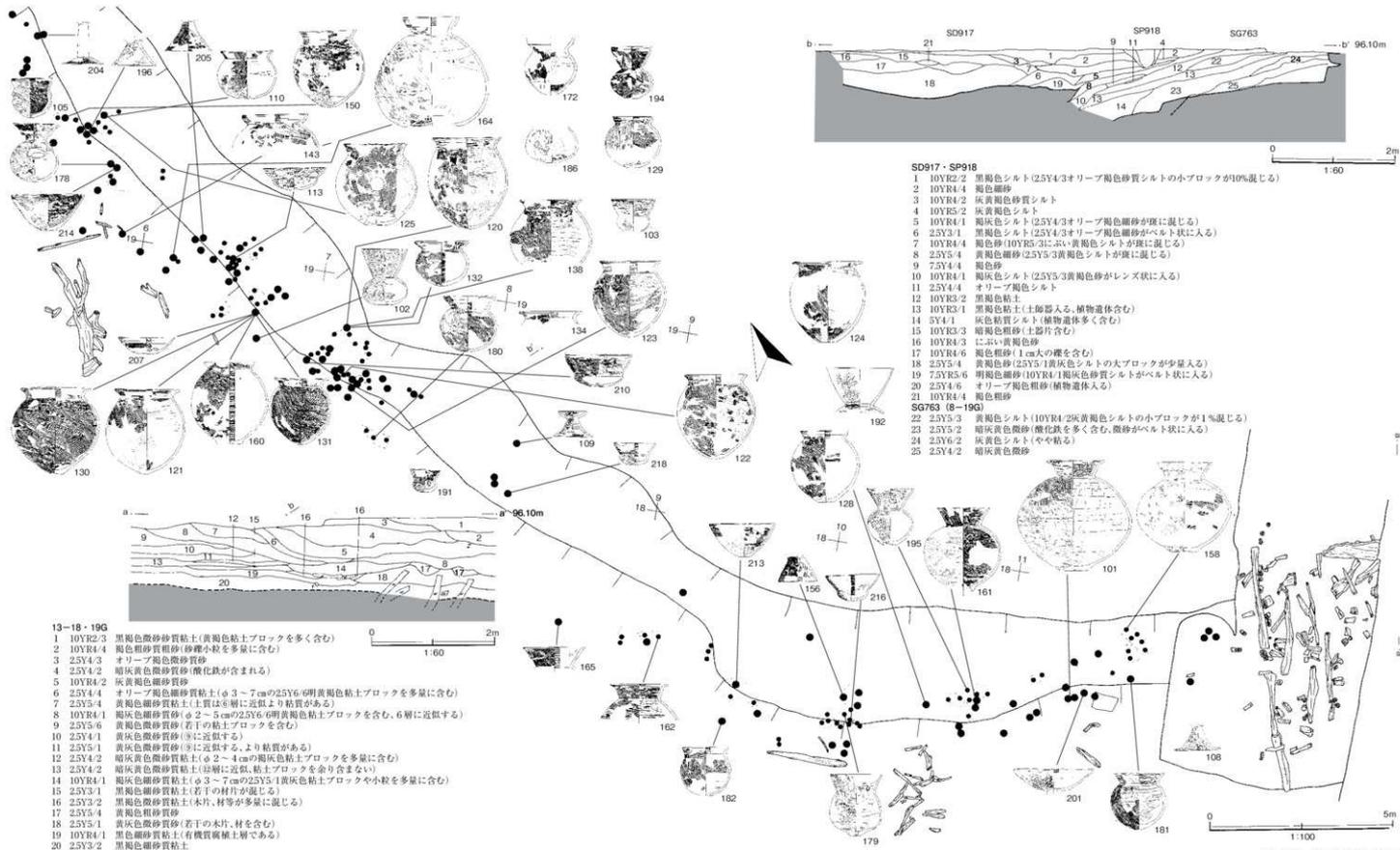
117



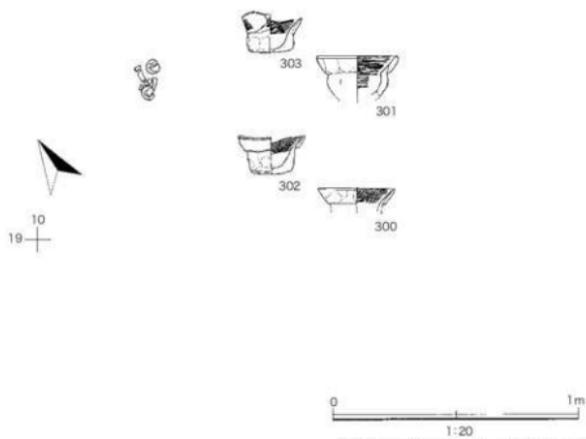
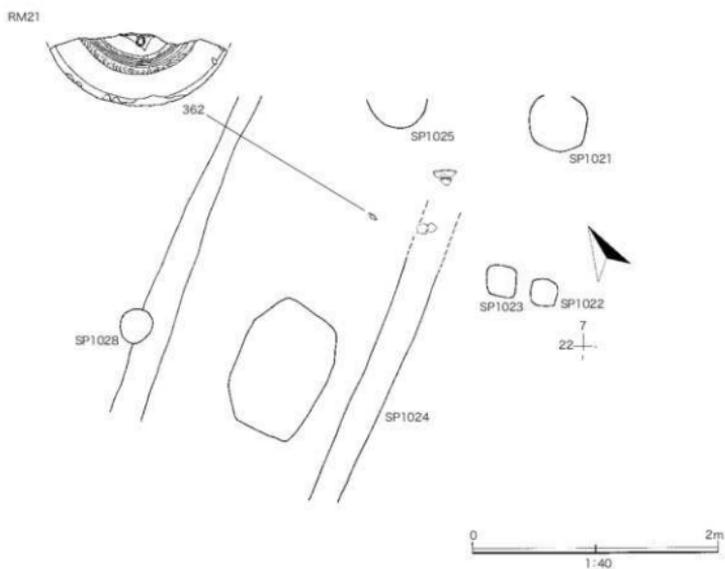
118



119



第30図 遺構実測図SG763



第31図 破鏡、ミニチュア土器出土地点

2 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺構は、調査区のはほぼ全域で確認される。区画溝と思われる直交する溝や多くの遺物が出土した河川跡、並行する幅の狭い溝群などが縦横に走るのが、真っ先に確認された。ピットも全域で観察されるが、A区における分布密度は非常に濃いのが、やや小振りな傾向が見受けられる。一方B区で検出されるピットは、アタリ痕跡が明瞭に観察されるものやや大振りなピットが多い傾向がある。時期差をあらわす可能性もある。掘立柱建物跡はB区で3棟検出しているが、ピットが多く検出されているA区では建物を構成することはできなかった。井戸跡の分布域は21～27グリッドの間に集中しており、それ以外にはほとんど分布しない。また、素掘りがほとんどで井戸枠や井戸眼などの構築材が見られないのも特徴である。また、円形に廻ると考えられる溝が検出されている。また、馬歯が検出された土坑や土器埋設土坑の可能性のある遺構も存在する

1) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は3棟確認された。いずれも、B区から検出されている。4-6-19～23グリッドで集中して検出された。平安時代の遺物が多く出土したSG 754・SG 699、SD 733とはほぼ平行する状況が看取される。

SB 1142 (第33図) B区5-6-22～23グリッドで検出された。梁行4.5m、桁行8.1m以上を測る2×3間以上の南北棟である。北側が水路と農道に切られるため、全容は不明である。主軸方位はN-22°-Wを測る。柱間距離はその心々間で、桁行がほぼ2.7m等間、梁行が2.4m等間である。柱穴掘方は不整形を呈し、直径52～80cmを測る。確認面からの深さは、33～67cmを測る。柱穴から遺物は出土していない。

南に庇

SB 1143 (第34図) B区4-5-21～22グリッドで検出された。梁行3.6m、桁行2.1m以上を測る2×1間以上の南北棟である。0.9m南に庇が付く。桁行が調査区外へ伸びるため全容は不明である。主軸方位はN-38°-Wを測る。柱間距離はその心々間で、桁行がほぼ2.1m、梁行が1.8m等間である。柱穴掘方は不整形を呈し、直径48～60cmを測る。確認面からの深さは、16～30cmを測る。柱穴から遺物は出土していない。

SB 1144 (第35図) B区5-20～21グリッドで検出された。SE 1093を切る。梁行3m、桁行3.5m測る2×2間の南北棟である。主軸方位はN-20.5°-Wを測る。柱間距離はその心々間で、桁行が1.4m、2m、梁行がほぼ1.5m等間である。柱穴掘方は不整形を呈し、直径40～80cmを測る。確認面からの深さは、10～40cmを測る。柱穴から遺物は出土していない。

2) 井戸跡

井戸跡は13基検出された。5-11-20～27グリッドに偏在する傾向が看取される。また、B区で検出された3棟の掘立柱建物跡の周辺に分布している。すべての井戸跡で木組みや石組みなどの構築材は確認されていない。

SE 568 (第36図) A区6-27グリッドで検出した。掘方は、長径1.74m、短径1.48mを



第32図 奈良平安時代遺構配置図

測る不整形円形を呈する。確認面からの深さは1.07 mを測る。木組みや石組みなどの内部構造は確認されなかった。素掘りの可能性が高い。湧水により下層部はオーバーハングし、袋状となっている。底部から、曲物(898)1点が出土している。

SE 1145 (第36図) A区7-24グリッドで検出した。掘方は、長径1.08 m、短径1.02 mを測るほぼ円形の小振りな井戸跡である。確認面からの深さは0.80 mを測る。木組みや石組みなどの内部構造は確認されなかった。素掘りの可能性が高い。

SE 1151 (第36図) A区6-7-24グリッドで検出した。SD 649を切る。掘方は、長径0.92 m、短径0.90 mを測るほぼ円形の小振りな井戸跡である。確認面からの深さは0.88 mを測る。木組みや石組みなどの内部構造は確認されなかった。素掘りの可能性が高い。

SE 1115 (第37図) B区8-23グリッドで検出した。掘方は、長径1 m、短径0.82 mを測る不整形円形の井戸跡である。確認面からの深さは1 m以上を測るが、記録作業の途中で断面が崩落し詳細は不明である。木組みや石組みなどの内部構造は確認されておらず、素掘りの可能性が高い。

SE 1141 (第37図) B区11-22グリッドで検出した。SD 754の完掘後に底面で土色変化を確認し、精査を行い井戸跡と確定した。掘方は、長径1.8 m、短径1.36 mを測る不整形円形の井戸跡である。SD 754との先後関係については、SE 1141埋没後にSD 754が構築されたと推定している。確認面からの深さは1 mを測る。木組みや石組みなどの内部構造は確認されておらず、素掘りの可能性が高い。

SE 1147 (第37図) B区9-23グリッドで検出した。SD 754の完掘後に底面で土色変化を確認し、精査を行い壁が垂直に立ち上がることなどから井戸跡と推定した。掘方は、長径1.14 m、短径0.68 mを測る略長方形の井戸跡である。SD 754との先後関係については、SE 1141埋没後にSD 754が構築されたと推定している。確認面からの深さは0.9 mを測る。木組みや石組みなどの内部構造は確認されておらず、素掘りの可能性が高い。

SE 702 (第38図) A区5-25グリッドで検出した。SG 699に接している。掘方は、直径0.70 mを測るほぼ円形の小振りな井戸跡である。半截後、断面実測中に崩落したため詳細は不明である。確認面からの深さは0.90 mを測る。木組みや石組みなどの内部構造は確認されなかった。

SE 608 (第38図) A区6-26グリッドで検出した。掘方は、長径1.4 m、短径1.12 mを測る不整形円形の井戸跡である。断面実測中に下層が崩落したため詳細は不明である。確認面からの深さは1.1 m以上と推定される。木組みや石組みなどの内部構造は確認されなかった。

SE 706 (第38図) A区5-25-26グリッドで検出した。掘方は、長径1.14 m、短径0.97 mを測る不整形円形の井戸跡である。この井戸跡も断面実測中に下層が崩落したため詳細は不明である。確認面からの深さは0.9 m以上と推定される。木組みや石組みなどの内部構造は確認されなかった。

SE 1093 (第39図) B区5-20グリッドで検出した。SB 1144 EB 1094に切られる。掘方は、長径2.44 m、短径1.7 mを測る不整形円形の大型の井戸跡である。当初は土坑と判断したが、中層以下が垂直に下がることから井戸跡とした。断面実測中に下層が崩落したため詳細は不明である。確認面からの深さは1.1 m以上と推定される。木組みや石組みなどの内部構造は確認

されなかった。

SE 1015 (第40図) B区7-23グリッドで検出した。SP 1014に切られる。掘方は、長さ1.92 m、短径1.66 mを測る不整楕円形の井戸跡である。2層から土師器小片が出土している。断面実測中に下層が崩落したため詳細は不明である。確認面からの深さは1.1 m以上と推定される。木組みや石組みなどの内部構造は確認されなかった。

SE 870 (第40図) B区10-21グリッドで検出した。SD 869などの並行する溝群を切る。掘方は、長さ2.1 m、短径1.96 mを測る不整円形の井戸跡である。掘方中位の19層から土師器小片が出土している。断面実測中に下層が崩落したため詳細は不明である。確認面からの深さは1.2 m以上と推定される。木組みや石組みなどの内部構造は確認されなかった。

SE 662 (第41図) A区6-27グリッドで検出した。SD 366を切る。掘方は、長さ1.35 m、短径1.23 mを測る不整楕円形の井戸跡である。覆土が崩落しやすくエレベーションのみの記録に留まった。確認面からの深さは1.2 mである。

3) 土坑

土坑は、概ね5-11-20-27グリッドに偏在する傾向がみられる。しかし、井戸跡ほど集中することはなく、散在する印象である。多くは浅い土坑で、遺物が多く出土するものも存在する。主な土坑について概要を述べる。

SK 1155 (第39図) B区8-21グリッドに位置する。ST 956・ST 957を切る。長軸3.65 m、短軸1.16 mを測る、長楕円形の土坑である。当初は、ST 956・ST 957いずれかの竈と推定したが、焼土や軸構築材などが検出されず単独の土坑と判断した。確認面からの深さは10-15 cmと浅い。覆土は黒褐色シルトを基調とし、土器片を含む。遺物は覆土中及び底面から出土し、内面黒色処理の高台付坏 (499) など4点図示した。

SK 691 (第41図) A区6-25グリッドに位置する。長軸1.2 m、短軸0.92 mを測る、不整楕円形の土坑である。確認面からの深さは15 cm内外を測り浅い。覆土は黒褐色シルトを基調とし、土器片を含む。遺物は覆土中2層上面及び底面から出土した。出土遺物は、須恵器坏 (507)・土師器高台付坏 (506) など5点を図示した。

SK 1117 (第41図) B区15-22グリッドに位置する。暗渠に北東部分を切られ、南西部分は攪乱が入る。さらに、南東部分は調査区外へ延びることから全容は不明である。長軸2.2 m以上、短軸1.9 m以上を測る、不整形の土坑である。当初は竪穴住居跡の可能性も考慮に入れた。確認面からの深さは16-20 cm内外を測りやや浅い。覆土は黒褐色シルトを基調とする。遺物は底面から出土した。出土遺物は、須恵器高台付坏 (809)・須恵器坏 (807) など4点を図示した。土器には煤が付着しており、近隣に特殊な用途の遺構が存在していた可能性もある。

土器に煤が付着

SK 556 (第43図) A区4-5-29グリッドに位置する。SD 560 (SD 558) を切る。長軸5.3 m、溝状部幅0.37 m、球状部径1 mを測る、不整形の土坑 (溝状) である。当初は変形の溝と判断した。確認面からの深さは10 cm内外を測り浅い。覆土は黒褐色シルトを基調とする。底面から馬歯 (図版70) が出土した。雨乞いなどの祭祀に関連する遺構の可能性もある。土器を伴わなかったので埴師時期は不明であるが、SD 560は古墳時代土師器の細片を含んでいる。

馬歯出土
雨乞いなどの祭祀

S X 293 (第51図) A区10-25-26グリッドに位置する。円形に廻ると考えられるSD 439を切る。長軸2m、短軸1.6mを測る、不整形の土坑である。確認面からの深さは10cm内外を測り浅い。覆土は黒褐色シルトを基調とする。覆土中及び底面から遺物が出土した。須恵器高台付坏(508)1点図示した。

S X 768・767・765 (第53図) B区13-18グリッドに位置する。SD 753に切られる。長軸1.63m、短軸1.3m以上を測る、不整楕円形の土坑である。確認面からの深さは32cm内外を測る。覆土はにぶい黄褐色シルトを基調とする。平安時代の遺構確認中に遺物の出土をみて慎重に掘り下げたが、明確なプランは示せなかった。確認面及び覆土中から遺物が出土した。遺物は古墳時代前期の甕などであり、未確認の古墳時代前期の土坑あるいは堅穴住居跡の可能性もある。土師器甕(255)など3点図示した。

古墳時代前期か

S K 417 (第43図) A区9-26グリッドに位置する。長軸1.16m、短軸0.6mを測る、不整形の土坑である。確認面からの深さは20cm内外を測る。覆土は暗褐色シルトを基調とし、下層に黒褐色シルトがベルト状に入る。

S K 585 (第45図) A区5-6-27グリッドに位置する。長軸1.46m、短軸0.97mを測る、不整楕円形の土坑である。SD 580に切られる。確認面からの深さは23cm内外を測る。覆土は黒褐色シルトを基調とする。底部付近から土師器小甕(264)が出土している。古墳時代の可能性も考えられる。

S K 725 (第56図) A区5-25グリッドに位置する。SD 699に切られる。当初は逆にSD 699を切るかと判断したが、断面や検出時の写真(図版24右上)の詳細な観察によりSDに切られると断定した。長軸1.8m、短軸1.2mを測る、不整形の土坑である。掘方の中央に直径36cmほどを測る赤褐色のリング状のものが確認できた。断面観察の結果土師器壺と判断されたが、粘土化しており底部片と推定される断片のみ出土した。確認面からの深さは60cmを測る。掘方覆土は黄褐色シルトを基調とする。土師器内覆土は黒褐色シルトを基調とし、底部付近に黒色粘土と暗褐色粘質シルトが薄く堆積していた。これをサンプリングし理化学分析を委託した。詳細は付編に譲るが、リンの割合が高い傾向にあった。土師器壺の時期など不明であるが、奈良・平安時代遺物が大量に出土したSD 699より古い土器埋納遺構(墓坑?)の可能性も考えられる。

赤褐色のリング

リン濃度が高い

土器埋納遺構

4) 溝跡

溝跡は、調査区のほぼ全域で確認される。直線的に伸びる溝跡や2条の溝跡が平行して伸びるもの、直交する溝跡、円形に廻るものなど多様な様相を見せる。以下、主要な溝跡について概要を述べる。

S D 1035・S D 1029 他 (第42図) B区5～8-19～23グリッドに位置する。ほぼ並行する溝跡群で、便宜的にS D 861を境に2分したものの北側に位置する一群である。9条を数え、ほぼ真っ直ぐに並行して伸びている。各溝跡の間隔はほぼ2m等間であるが、S D 1008とS D 994間のみ約3.8mあり、何らかの区画とも考えられる。主軸方位はN-47°-Eを測る。S T 956・S T 957を切り、S K 1155やピットに切られる。S D 1024以外に遺物は出土していない。S D 1024から出土した遺物は、古墳時代前期と考えられる土師器小壺で出土レベルは溝跡底面より若干下層にあたる。未確認の遺構覆土中に含まれていた可能性がある。

S D 865・S D 867 他 (第42図) B区8～11-19～22グリッドに位置する。ほぼ並行する溝跡群で、便宜的にS D 861を境に2分したものの南側に位置する一群である。7条を数え、ほぼ並行して伸びるが、各溝は微妙に弧を描く。各溝跡の間隔はほぼ1.8m等間である。S D 865・867・869・875とS D 876・878は、方向がやや異なっている。主軸方位は前者がN-46°-Eを測り、後者はN-55.5°-Eを測る。S E 870やピットに切られる。

S D 560 (S D 558) (第43図) A区4～6-28～29グリッドに位置する。馬歯が出土したS D 556に切られる。ほぼ直線を呈する溝で、確認面からの深さは10cmと浅い。古墳時代土師器小片を含む。

S D 484 (第44図) A区7～8-25～27グリッドに位置する。ほぼ直線から7-26～27グリッドで長方形に廻るS D 507を切る。緩やかに90度に曲がる溝で、幅24～80cm、確認面からの深さは18cmを測る。何らかの区画溝あるいは雨落ち溝の可能性も考えられる。

区画溝か

S D 121 (第46図) A区9～11-25～29グリッドに位置する。S D 186を切る。直線を呈する溝で、幅40cm内外、確認面からの深さは14cmと浅い。主軸方位はN-54°-Eを測る。B区で検出されたS D 121と直交する可能性のあるS D 753とともに、何らかの区画を示すことも考えられる。

S D 884 (第47図) B区8～9-20～21グリッドに位置する。S D 867、S P 945に切られる。円形に廻る溝で、北東側が2mほど空く。外径は約5mを測る。幅80cm内外、確認面からの深さは15cmと浅い。覆土は黒褐色シルトを基調とし、焼土の小ブロックが少量混じる。円形周溝溝あるいは小規模な古墳の可能性もあるが、現時点では遺構の性格は不明である。

古墳の可能性

S D 861 (第48図) B区6～10-19～23グリッドに位置する。S G 754を切る。直線に延びる溝で、S D 1146と直角に交わるが先後関係は不明である。幅2m内外、確認面からの深さは40cmを測る、規模の大きい溝である。主軸方位はN-64°-Eを測る。覆土は黒褐色シルトを基調とし、土師器片を少量含んでいる。S D 736とも直交する可能性があり、何らかの区画溝とも考えられるが、遺構の性格は不明としておく。

S D 1146 (第48図) B区6-19グリッドに位置する。直線に延びる溝で、S D 861と直角に交わるが先後関係は不明である。幅2.5から4m、確認面からの深さは20～27cmを測る、

規模の大きい溝である。主軸方位はN-25°-Wを測る。覆土は黒褐色シルトを基調とし、中層に灰黄褐色シルトがベルト状に入る。SD 861と一体となり何らかの区画溝とも考えられるが、遺構の性格は不明としておく。

SD 776・SD 793 (第49図) B区7～15-16～17グリッドに位置する。2条の溝が並行して延びる溝である。SD 762とSD 790に切られる。2条の溝の心々間は3.2～3.3mを測る。SD 776は幅40から60cm、確認面からの深さは14cmを測る。SD 793は幅0.8から1.2m、確認面からの深さは18cmを測る。主軸方位はN-38.5°-Wを測る。覆土は黒褐色シルトを基調とする。2条の溝は一体として何らかの区画溝あるいは道路跡とも考えられるが、現時点では遺構の性格は不明としておく。

道路跡か

SD 1・SD 1154 (SD 3) (第50図) A区10～14-24～29グリッドに位置する。A区の東端を区画するようにほぼ南北に、2条の溝が並行して延びる。2条の溝の心々間はおおよそ2mを測る。SD 1は幅0.4から1m、確認面からの深さは18cmを測る。SD 1154 (SD 3)は幅0.4から0.9m、確認面からの深さは10～13cmを測る。主軸方位はN-9°-Wを測る。覆土は黒褐色シルトを基調とする。2条の溝は一体として何らかの区画溝あるいは道路跡とも考えられるが、現時点では遺構の性格は不明としておく。

道路跡か

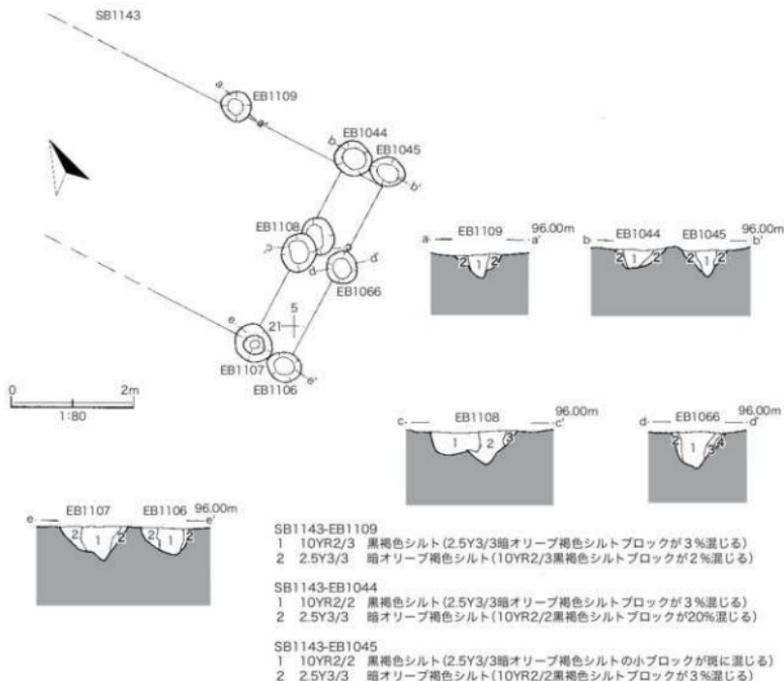
SD 439 (第51図) A区9～11-24～26グリッドに位置する。農道と農業用水路により精査できず全容は不明であるが、円形に廻ると考えられる溝である。外径は12.3m、内径は10mと推定された。SX 293に切られる。10-25グリッド付近で0.6mと狭くなっているが、他は1～1.94mを測る。確認面からの深さは20cmとやや浅い。覆土は黒褐色シルトを基調とし、中・下層に灰黄褐色砂質シルトがベルト状に入る。覆土中及び底面から多量の遺物が出土しているが、ほとんどが11-25グリッドに集中している。46点を図示した。遺物は土師器と須恵器で平安時代に帰属する。土師器は煮沸形態の甕が主体となり、須恵器では供膳形態の坏が主体となる。円形に廻ると考えられる遺構の形状から、奈良・平安時代に主体部が削平された古墳の可能性も考えられる。

古墳の可能性

SG 699・SD 756、SD 733・SD 624、SD 754 (第56・57図) A区28グリッドからB区19グリッドにかけて北西方向に流下している。SG 754を切る。当初はそれぞれ独立した遺構と判断していたが、調査が進展する中でSG 699とSD 756及びSD 733とSD 624は同一の規格により造成された可能性が高いと推定している。ほぼ並行する形状を呈することから、道路跡とすることもできるが、現時点では不明としておく。溝間の心々距離は概ね5.4～5.6mを測る。主軸方位はN-30°-Wを測る。遺物は、SG 754・SG 699の覆土及び底面から大量に出土している。遺構の全域からはほぼ平均して出土しており、201点図示した。種別では煮沸具の土師器甕や坏、高台付坏、貯蔵具の須恵器甕や長頸瓶、坏、高台付坏などがある。また、数は少ないながらも墨書土器も存在する。特筆される遺物は、5-24グリッドから出土した入子になった須恵器坏2点(662、663)、大型の鉢(779)、小壺(798)、双耳坏(668)、突帯付長頸瓶(683)などがある。中でも、仏飯具の鉄鉢型土器(523)は外面に丁寧なヘラ磨きが明瞭に残り、精巧な造りである。8世紀に廻る可能性がある。仏具及び宗教関連遺物と考えられるものが出土することから、本遺跡あるいは近隣に仏教施設が存在し、あるいは宗教関係者の居住などが推定される。

鉄鉢型土器

近隣に仏教施設



SB1143-EB1106

- 1 10YR2/3 黒褐色シルト(2.5Y4/3オリーブ褐色シルトブロックが15%混じる)
- 2 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト(10YR2/3黒褐色シルトブロックが7%混じる)

SB1143-EB1107

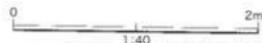
- 1 10YR2/2 黒褐色シルト(2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルトブロックが10%混じる)
- 2 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト(10YR2/3黒褐色シルトブロックが5%混じる)

SB1143-EB1108

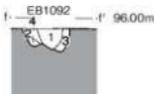
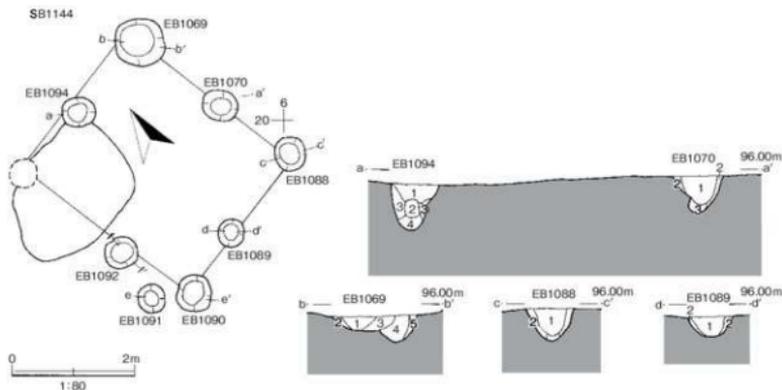
- 1 10YR2/3 黒褐色シルト(2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルトブロックが20%混じる。粉砂が混入)
- 2 10YR2/2 黒褐色シルト(2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルトブロックが25%混じる)
- 3 2.5Y3/2 黒褐色シルト(10YR2/2黒褐色シルトブロックが2%混じる)

SB1143-EB1066

- 1 10YR2/2 黒褐色シルト(2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルトブロックが10%混じる)
- 2 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト(10YR2/3黒褐色シルトブロックが5%混じる)
- 3 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト(10YR2/3黒褐色シルトブロックが10%混じる)
- 4 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト(10YR2/3黒褐色シルトブロックが3%混じる)



第34回 遺構実測図SB1143



SB1144-EB1094

- 1 10YR2/2 黒褐色シルト(2.5Y3/2暗褐色シルトブロックが3%混じる)
- 2 10YR2/2 黒褐色シルト(2.5Y3/2暗褐色シルトブロックが20%混じる)
- 3 10YR2/1 黒色シルト(10YR3/2黒褐色シルトブロックが3%混じる)
- 4 10YR2/2 黒褐色シルト

SB1144-EB1070

- 1 10YR2/2 黒褐色シルト(10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロックが15%混じる)
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト(10YR2/2黒褐色シルトブロックが5%混じる)
- 3 10YR2/2 黒褐色シルト(2.5Y4/2暗灰黄色シルトブロックが2%混じる)

SB1144-EB1069

- 1 10YR2/2 黒褐色シルト(2.5Y5/3黄褐色シルトブロックが10%混じる)
- 2 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト(10YR2/2黒褐色シルトブロックが2%混じる)
- 3 10YR2/2 黒褐色シルト(2.5Y5/3黄褐色シルトブロックが15%混じる)
- 4 10YR2/2 黒褐色シルト(2.5Y5/3黄褐色シルトブロックが25%混じる)
- 5 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト(10YR2/3黒褐色シルトブロックが1%混じる)

SB1144-EB1088

- 1 10YR2/3 黒褐色シルト(10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロックが25%混じる)
- 2 10YR3/4 暗褐色シルト(10YR2/3黒褐色シルトブロックが5%混じる)

SB1144-EB1089

- 1 10YR2/3 黒褐色シルト(2.5Y3/2黒褐色シルトブロックが30%混じる)
- 2 2.5Y3/3 黒褐色シルト(10YR3/1黒褐色シルトブロックが10%混じる)

SB1144-EB1091

- 1 10YR2/3 黒褐色シルト(10YR3/2暗褐色砂質シルトが度混じる)
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂(10YR3/3暗褐色砂質シルトの小ブロックが2%混じる)

SB1144-EB1090

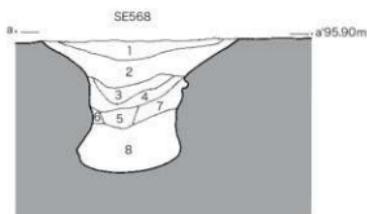
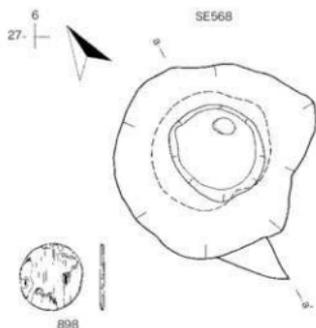
- 1 10YR2/2 黒褐色シルト(10YR4/2灰黄褐色シルトが2%混じる)
- 2 10YR2/2 黒褐色シルト(2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルトが40%混じる)
- 3 10YR3/3 暗褐色砂質シルト(10YR2/2黒褐色シルトが5%混じる)
- 4 10YR2/2 黒褐色シルト(10YR4/2灰黄褐色シルトが5%混じる)
- 5 10YR3/4 暗褐色砂質シルト(10YR2/2黒褐色シルトが2%混じる)

SB1144-EB1092

- 1 10YR2/2 黒褐色粘質シルト(10YR4/2灰黄褐色シルトの小ブロックが3%混じる)
- 2 10YR2/2 黒褐色粘質シルト(10YR4/2灰黄褐色シルトの小ブロックが15%混じる)
- 3 10YR2/2 黒褐色粘質シルト(10YR3/3暗褐色砂質シルトの小ブロックが15%混じる)
- 4 10YR2/1 黒色粘質シルト(10YR3/3褐色砂質シルトの小ブロックが10%混じる)



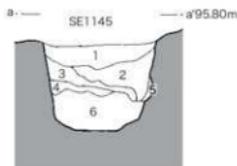
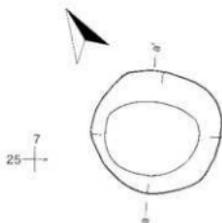
第35図 遺構実測図SB1144



SE568

- 1 10YR2/2 黒褐色シルト(炭化物大粒,土器片含む)
- 2 10YR2/3 黒褐色シルト(2.5Y5/2暗灰色砂質シルトのブロックと7.5YR4/6褐色シルトの小ブロックが5%混じる,炭化物細粒少量混じる)
- 3 10YR2/1 黒色粘質シルトに2.5Y5/6黄褐色砂質シルトの小ブロックが1%混じる
- 4 2.5Y2/1 黒色砂質粘土(炭化物が帯状に入る,土器片含む)
- 5 2.5Y3/1 黒褐色粘土
- 6 10YR4/1 褐色粘土(2.5Y5/3黄褐色砂質シルトブロックを含む)
- 7 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト(7.5YR3/4暗褐色砂質シルトがベルト状に入る)
- 8 5Y3/1 オリーブ黒色粘土

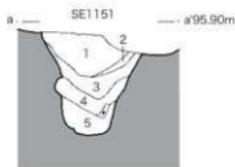
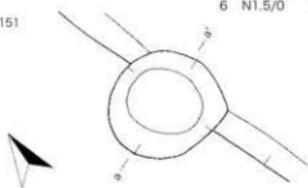
SE1145



SE1145

- 1 10YR2/2 黒褐色シルト(2.5Y5/4黄褐色シルトの小ブロックが1%混じる)
- 2 10YR3/1 黒褐色砂質シルト(2.5Y5/4黄褐色砂質シルトの小ブロックが1%混じる)
- 3 10YR2/1 黒色粘質シルト(2.5Y5/3黄褐色シルトの中ブロックが1%混じる,粘る)
- 4 2.5Y3/1 黒褐色砂質粘土
- 5 10YR2/1 黒色粘土
- 6 N1.5/0 黒色粘土

SE1151



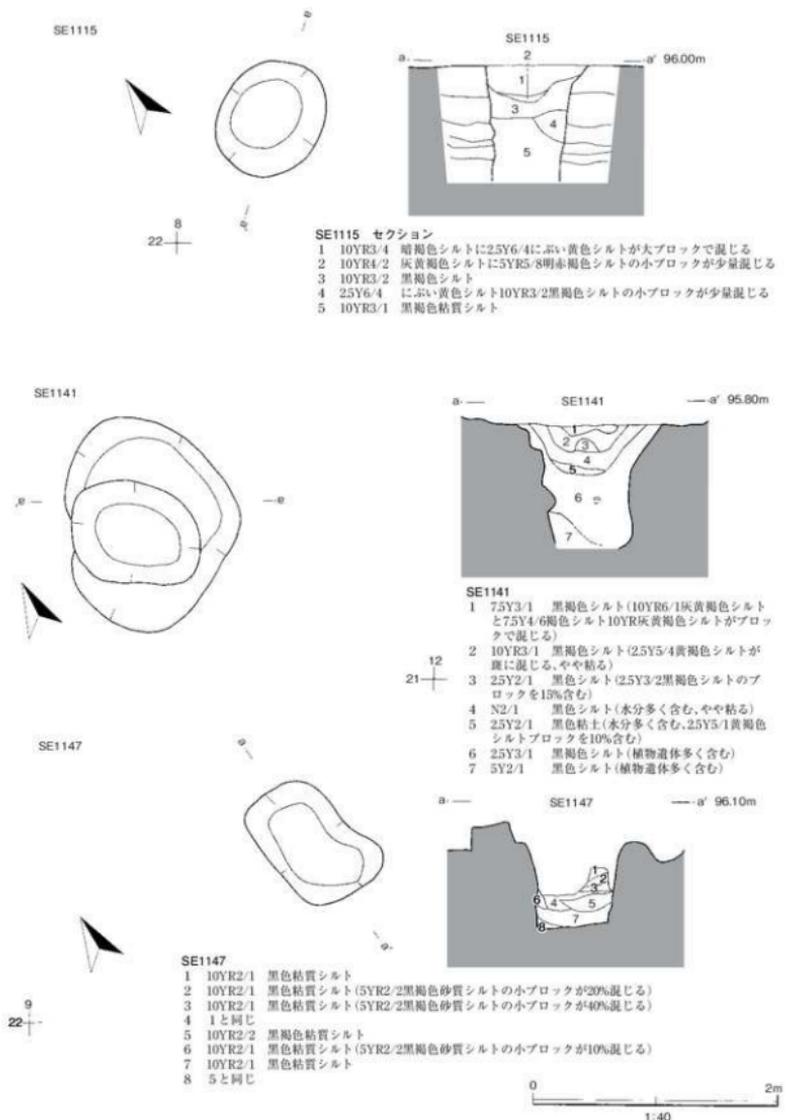
SE1151

- 1 10YR1.7/1 黒色シルト(2.5Y5/6黄褐色砂質シルトの極小ブロックが3%混じる)
- 2 10YR3/1 黒褐色シルト
- 3 10YR4/1 褐色シルト(2.5Y5/3黄褐色シルトの小ブロックが10%混じる)
- 4 2.5Y4/2 暗灰色粘土
- 5 2.5Y2/1 黒色粘土

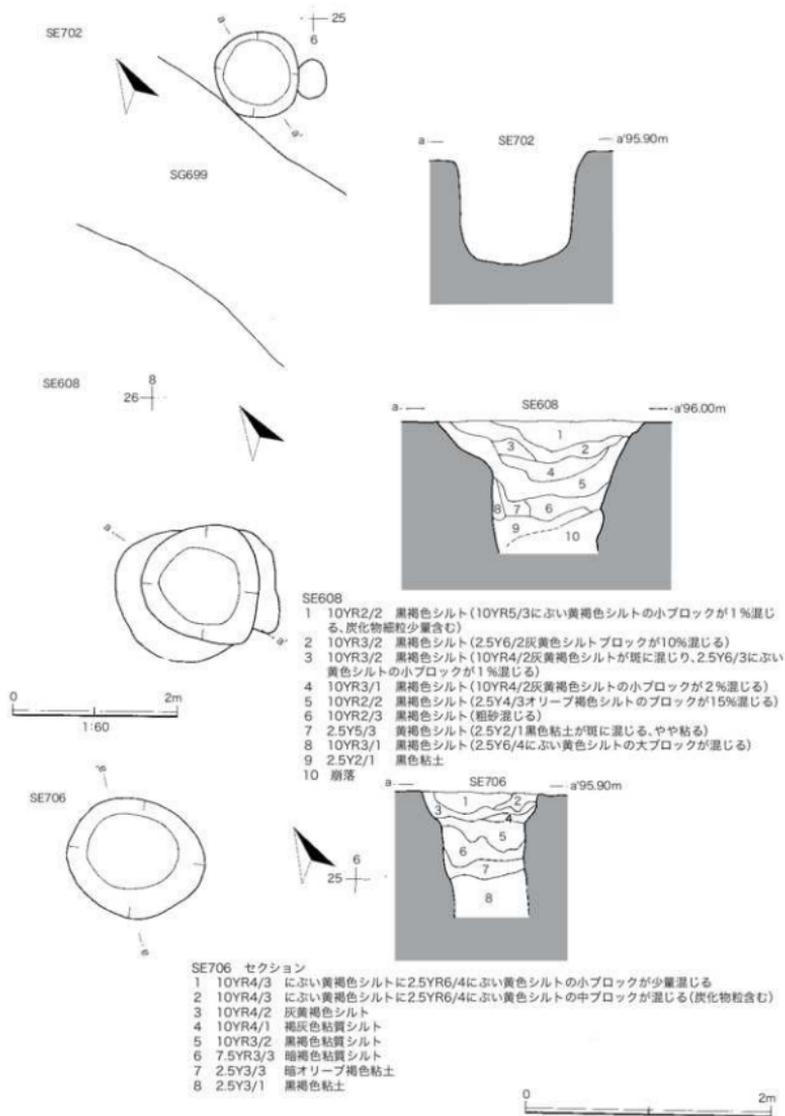


1:40

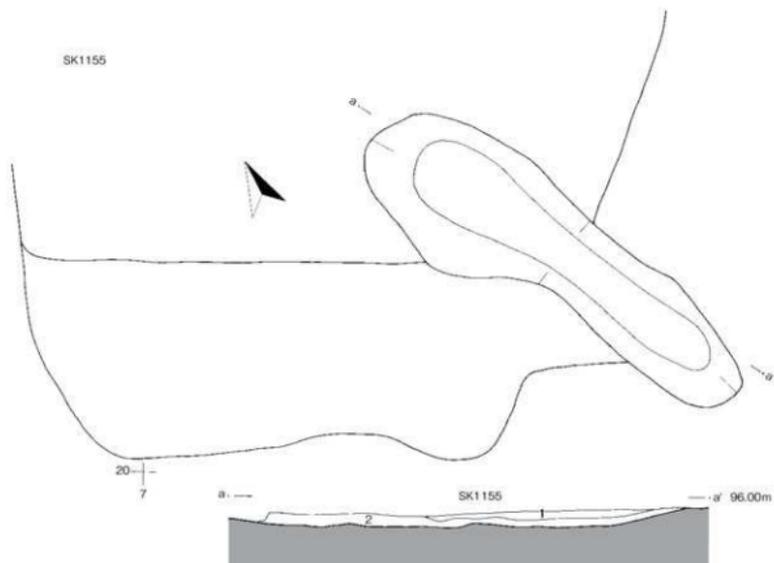
第36図 遺構実測図井戸跡SE568等



第37図 遺構実測図井戸跡SE1115等



第38図 遺構実測図并戸跡SE702等



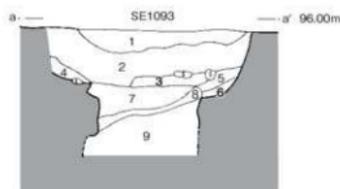
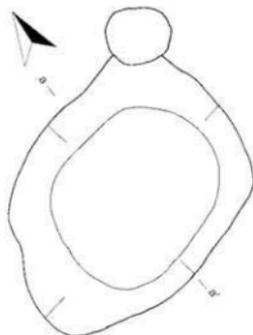
SK1155

- 1 10YR2/1 黒褐色シルト(10YR4/2灰黄褐色シルトの小ブロックが2%混じる、炭化物中粒、土器片含む)
- 2 10YR2/1 黒褐色シルト(10YR3/3黒褐色シルトの小ブロックが90%混じる、炭化物中粒、土器片を含む)

SE1093

5

20

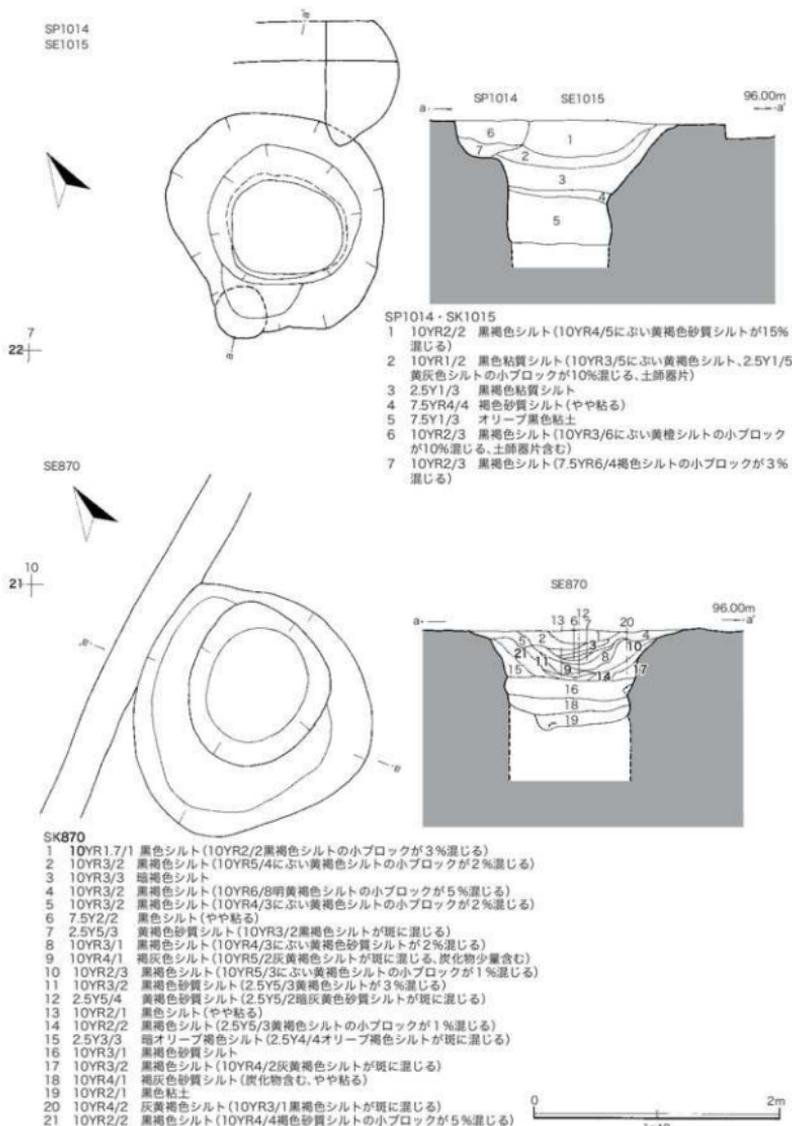


SE1093

- 1 10YR3/3 暗褐色シルト
- 2 10YR3/4 暗褐色シルト(2.5Y5/3黄褐色砂質シルトブロックが20%混じる、大粒少量含む)
- 3 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色細砂(10YR4/2灰黄褐色シルトブロックが90%混じる、大粒少量含む)
- 4 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト(木炭含む)
- 5 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質シルト(やや粘る)
- 6 2.5Y3/2 黒褐色シルト(やや粘る)
- 7 5Y3/1 オリーブ黒色細砂
- 8 2.5Y2/1 黒色粘土
- 9 7.5Y4/1 灰色細砂(粘る)

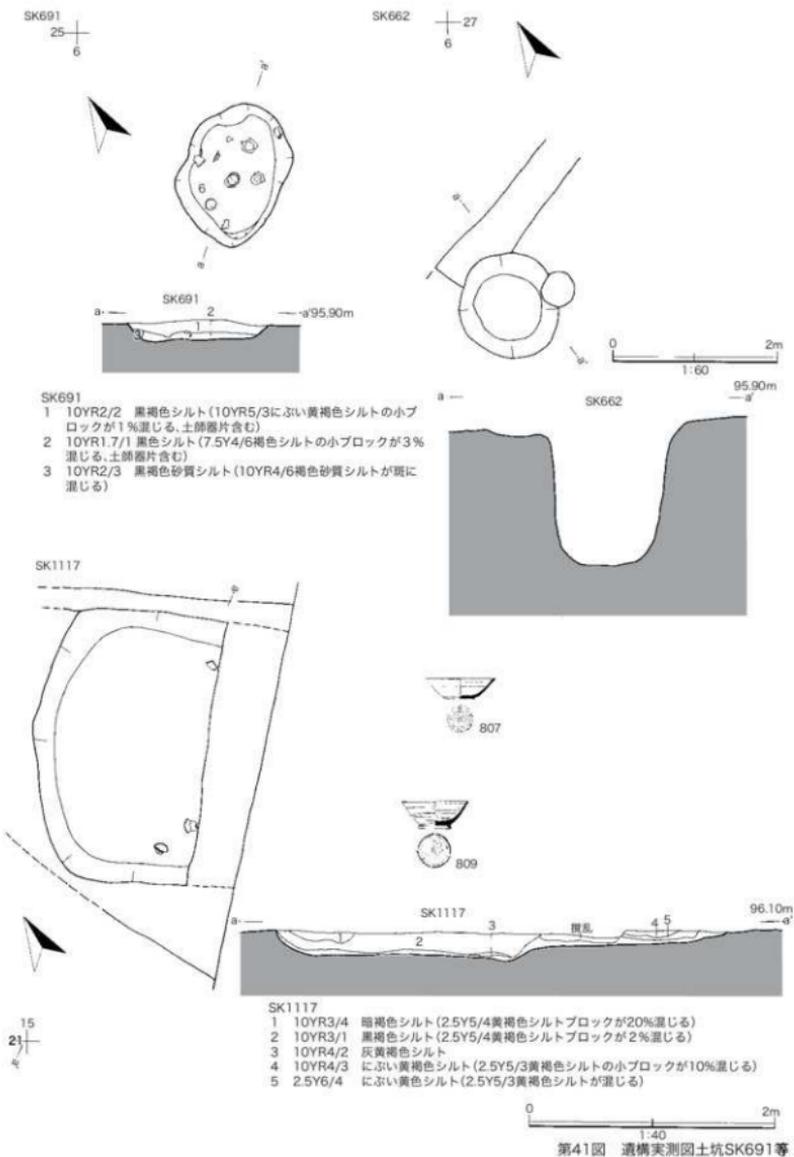


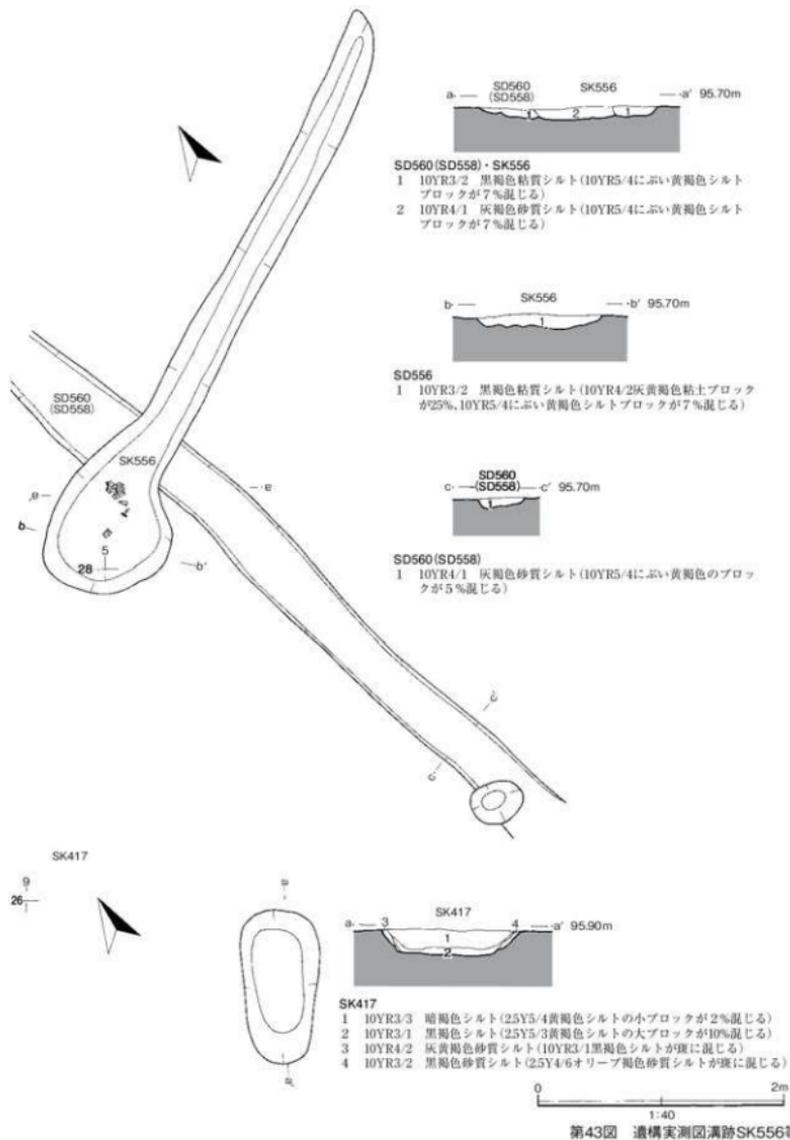
第39図 遺構実測図SK1155等

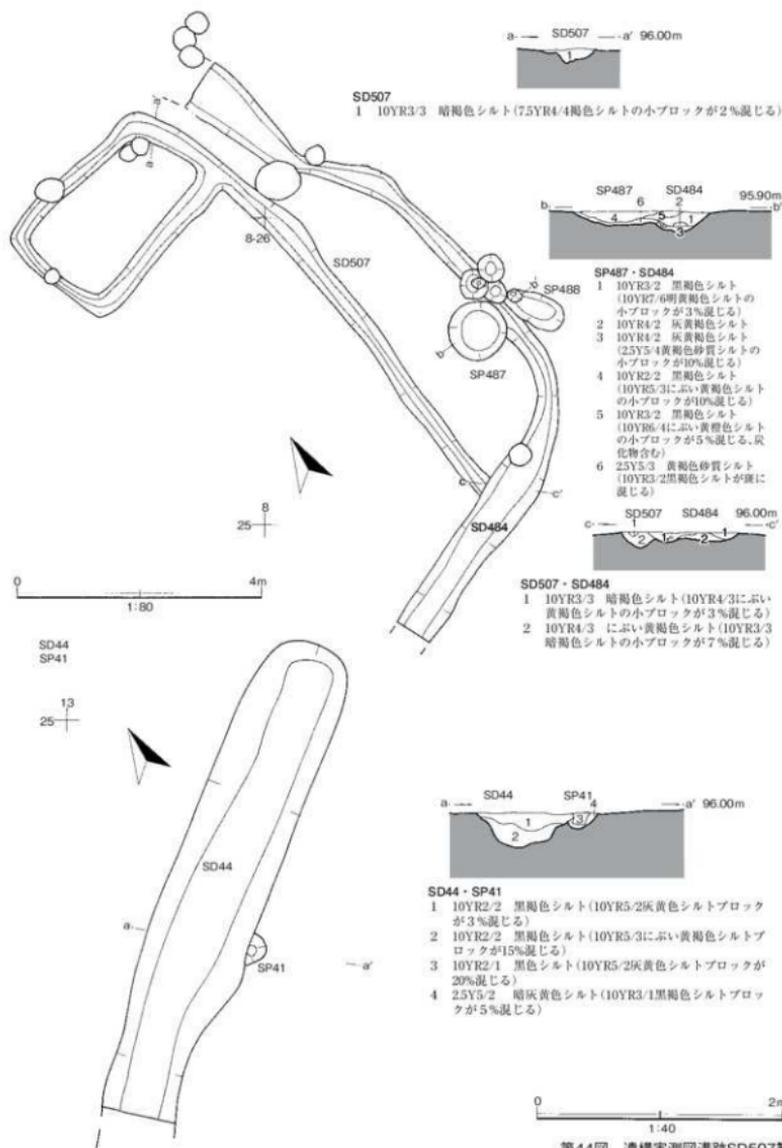


第40図 遺構実測図并戸跡SE1015等

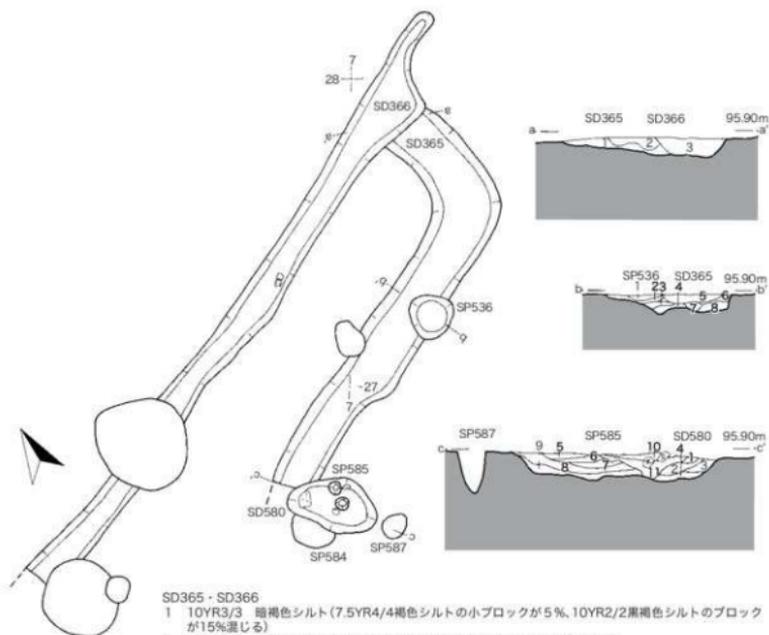
IV 遺構







第44図 遺構実測図溝跡SD507等



SD365 - SD366

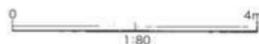
- 1 10YR3/3 暗褐色シルト(7.5YR4/4褐色シルトの小ブロックが5%、10YR2/2黒褐色シルトのブロックが15%混じる)
- 2 10YR2/2 黒褐色シルト(10YR3/3暗褐色シルトの小ブロックが2%混じる)
- 3 10YR2/2 黒褐色シルト(10YR3/3暗褐色シルトの小ブロックが1%、7.5YR4/4褐色シルトの小ブロックが1%混じる)

SP536 - SD365

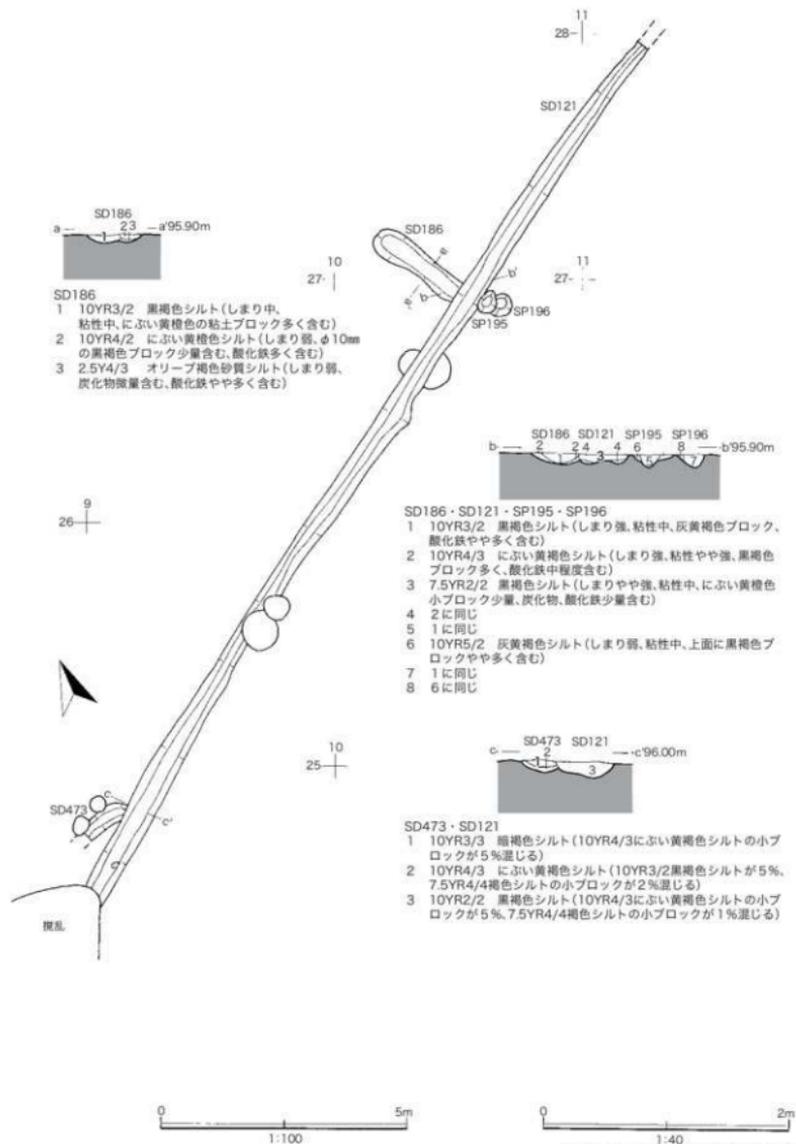
- 1 10YR2/1 黒色シルト(2.5Y4/2暗灰黄色シルトの小ブロックが3%混じる)
- 2 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト(10YR2/1黒色シルトの小ブロックが5%混じる)
- 3 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト(10YR2/2黒褐色シルトの小ブロックが2%混じる)
- 4 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト(10YR2/2黒褐色シルトの小ブロックが20%混じる)
- 5 10YR2/1 黒色シルト(2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルトの小ブロックが2%混じる)
- 6 10YR2/2 黒褐色シルト(2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルトの小ブロックが5%混じる)
- 7 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト(10YR2/2黒褐色シルトの小ブロックが15%混じる)
- 8 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト(10YR2/1黒色シルトの小ブロックが10%混じる)

SP585 - SD580

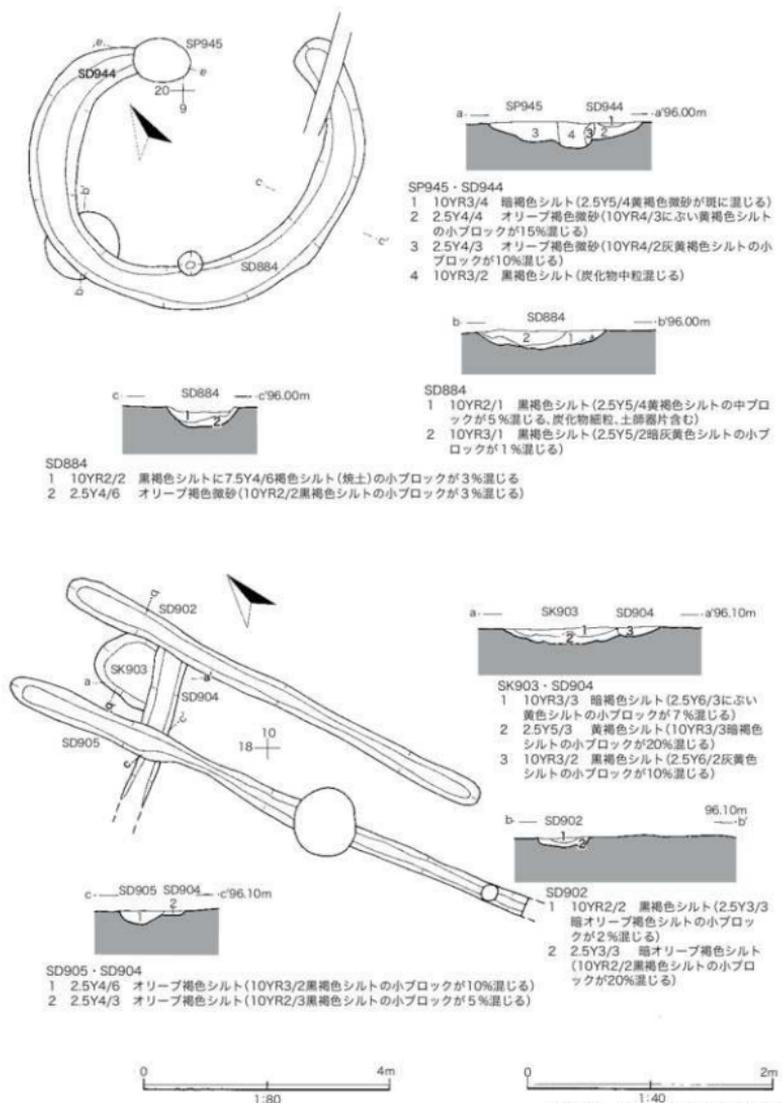
- 1 2.5Y4/4 オリーブ褐色細砂
- 2 10YR2/3 黒褐色シルト(10YR6/4にぶい黄褐色シルトの小ブロックが1%混じる)
- 3 10YR2/2 黒褐色シルト(2.5Y4/4オリーブ褐色微砂の小ブロックが1%混じる)
- 4 10YR2/2 黒褐色シルト(2.5Y6/3にぶい黄色シルトの中ブロックが30%混じる、粘る)
- 5 7.5YR2/2 黒褐色シルト
- 6 10YR3/2 黒褐色シルト(10YR6/4にぶい黄褐色シルトの小ブロックが5%混じる、炭化物粒混入)
- 7 10YR2/2 黒褐色シルト(2.5Y6/3にぶい黄色シルトの小ブロックが10%混じる)
- 8 7.5Y2/2 黒褐色シルト(2.5Y5/4黄褐色シルトが珪に混じる、土師器片含む)
- 9 10YR2/3 黒褐色シルト(2.5Y5/4黄褐色細砂の小ブロックが2%混じる)
- 10 10YR3/2 黒褐色シルト(N1 5/0黒色シルト(炭化物)が珪に混じる、土師器片含む)
- 11 10YR3/3 暗褐色シルト(10YR7/4にぶい黄褐色シルトの小ブロックが2%混じる、土師器片含む)



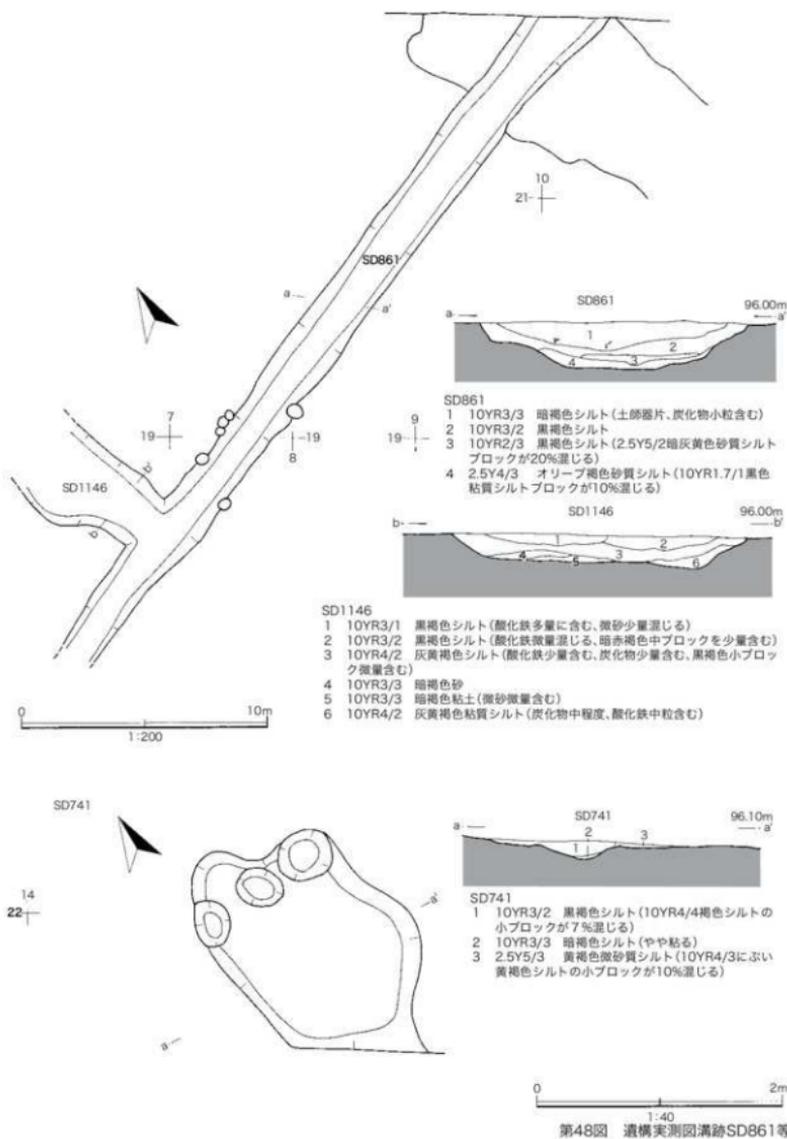
第45図 遺構実測回溝跡SD365等

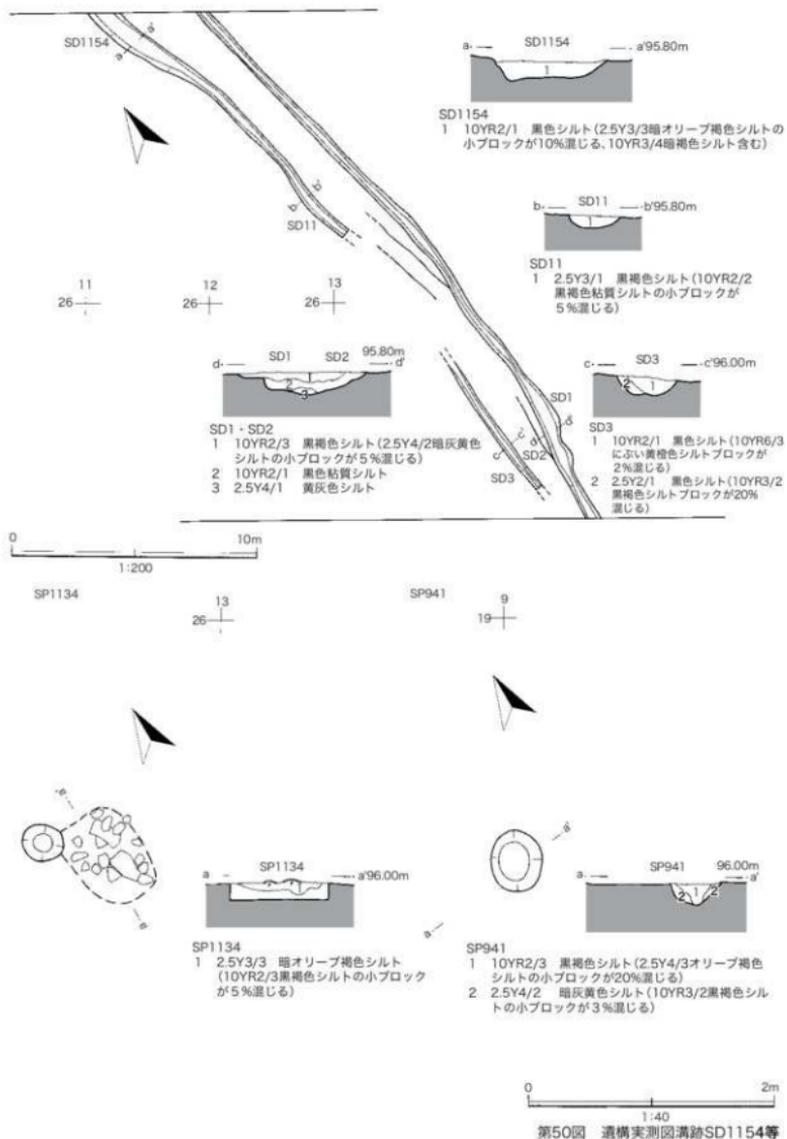


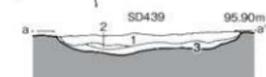
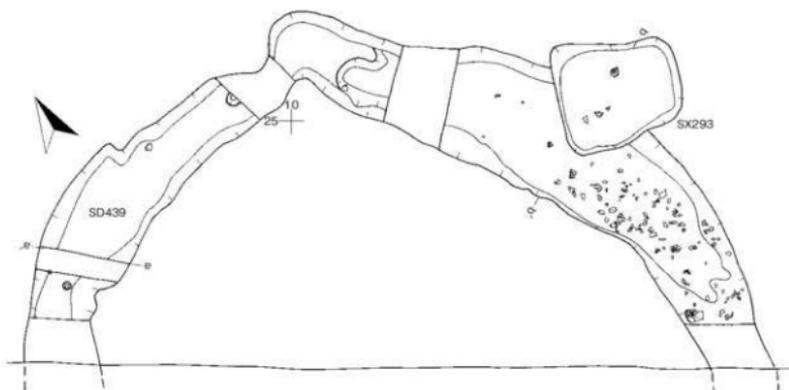
第46図 遺構実測図溝跡SD186等



第47図 遺構実測図溝跡SD884等







SD439

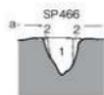
- 1 10YR2/2 黒褐色シルト(2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルトの小ブロックが3%混じる)
- 2 2.5Y4/1 灰褐色シルト(10YR2/2黒褐色シルトの小ブロックが40%混じる)
- 3 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト(10YR2/2黒褐色シルトの小ブロックが10%混じる)



SX293 - SD439

- 1 10YR2/2 黒褐色シルト(しまり強、粘性中、細かい土器片微量含む、炭化物少量含む)
- 2 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト(しまり中、黒褐色シルトブロック微量含む)
- 3 10YR3/3 暗褐色シルト(しまり強、風化確、炭化物やや多く含む、酸化鉄微量含む)
- 4 10YR4/2 黒褐色シルト(黒色粘土ブロック多く、褐色粘土ブロック少量含む、土器片含む)
- 5 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト(黒褐色粘土ブロック微量、風化確やや多く含む)
- 6 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト(風化確多い、大半が砂)

10
25-

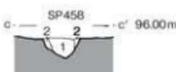
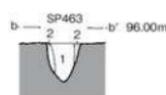


SP466

- 1 10YR2/1 黒色粘質シルト(2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルトの小ブロックが5%混じる)
- 2 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト(10YR2/2黒褐色シルトの小ブロックが3%混じる)

SP463

- 3 10YR2/1 黒色粘質シルト(2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルトの小ブロックが3%混じる)
- 4 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質シルト(10YR2/1黒色粘質シルトの小ブロックが2%混じる)

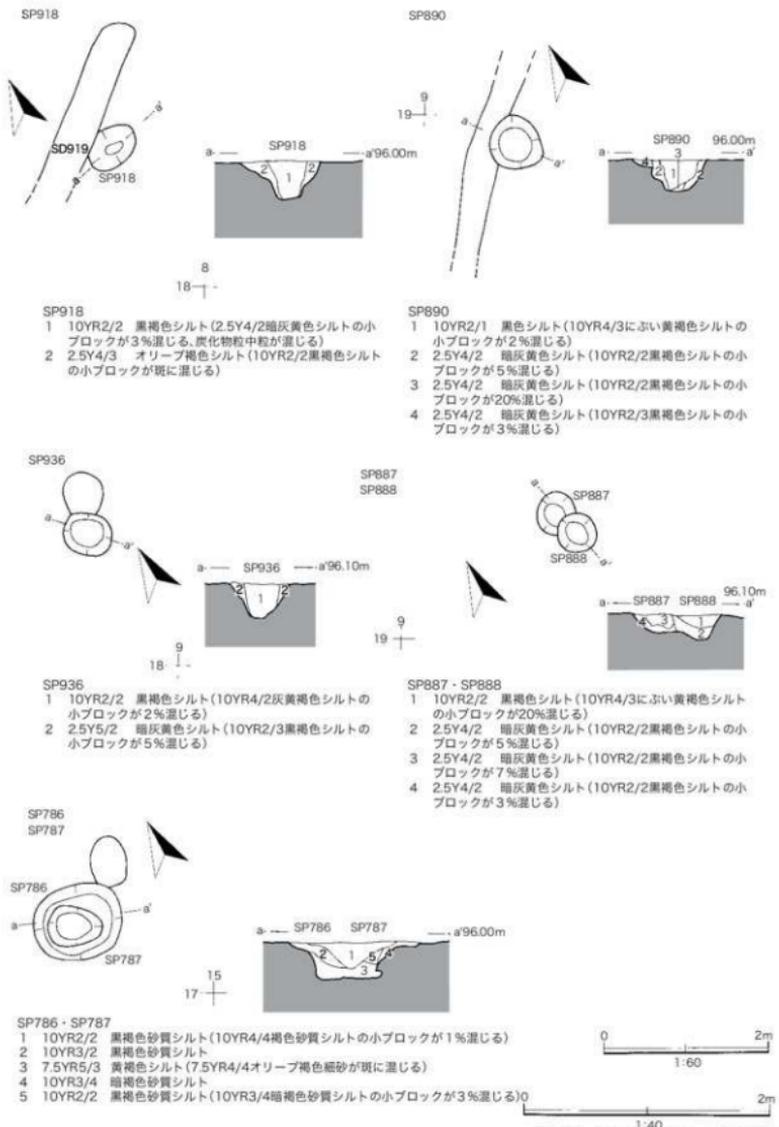


SP458

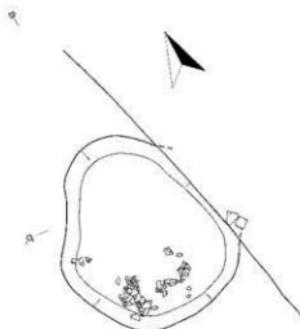
- 1 10YR2/2 黒褐色シルト(2.5Y3/1黒褐色シルトの小ブロックが5%混じる)
- 2 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト(10YR2/2黒褐色シルトの小ブロックが2%混じる)



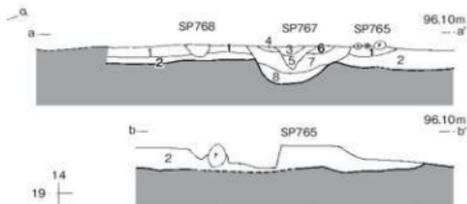
第51図 遺構実測図SD439等



第52図 遺構実測図ビットSP918等



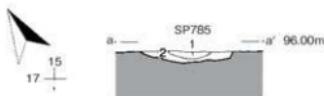
SP767-768-765



SP768・SP767・SP765

- 1 2.5Y4/3 オリーブ褐色微砂(10YR3/3暗褐色シルトが少量点状に混じる)
- 2 10YR4/2 灰黄褐色シルト(2.5Y5/4黄褐色微砂が埋に混じる)
- 3 10YR3/2 黒褐色シルト(炭化物がペレット状に入る)
- 4 3に2.5Y6/4にぶい黄色微砂が3%混じる
- 5 10YR3/2 黒褐色シルト(2.5Y5/3黄褐色砂質シルトが埋に混じる)
- 6 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト(炭化物がレンズ状に入る)
- 7 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト(炭化物小粒が極少量混じる)
- 8 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト

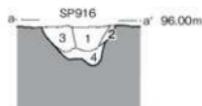
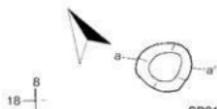
SP785



SP785

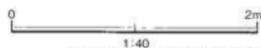
- 1 10YR3/2 黒褐色砂質シルト(2.5Y5/6黄褐色細砂の小ブロックが5%混じる)
- 2 10YR5/6 黄褐色細砂(10YR3/2黒褐色砂質シルトの小ブロックが3%混じる)

SP916

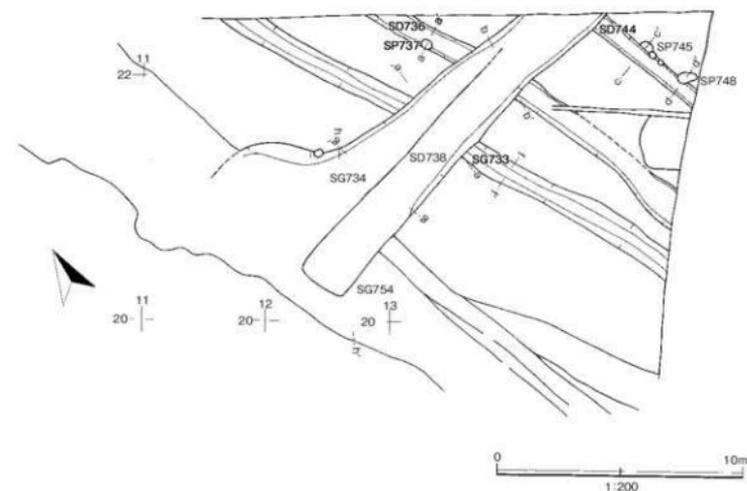


SP916

- 1 10YR2/2 黒褐色シルト(2.5Y4/2暗灰黄色シルトブロックが2%混じる)
- 2 10YR2/2 黒褐色シルト(2.5Y4/3オリーブ褐色シルトブロックが20%混じる)
- 3 10YR2/2 黒褐色シルト(2.5Y4/2暗灰黄色シルトブロックが15%混じる)
- 4 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト(10YR2/2黒褐色シルトブロックが30%混じる)



第53図 遺構実測図SX768等

**SP737・SD736**

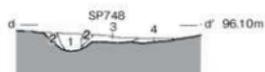
- 1 25Y5/3 黄褐色シルト(10YR4/3にぶい黄褐色シルトの小ブロックが10%混じる)
- 2 10YR4/1 褐灰色シルト(10YR5/2R黄褐色砂質シルトと7.5Y5/8明褐色シルトの小ブロックが壤に混じる)
- 3 10YR4/2 灰黄褐色シルト(10YR6/1褐灰色シルトと7.5YR5/8褐色シルトが壤に混じる)
- 4 10YR5/2 灰黄褐色シルト(10YR6/1褐灰色シルトが5%混じる)

**SG734**

- 1 10YR3/2 黒褐色シルト
- 2 10YR3/3 暗褐色シルト(やや粘る。2.5Y5/3黄褐色シルトブロックが15%混じる)
- 3 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト(2.5Y5/3黄褐色シルトが混じる)

**SD744・SP745**

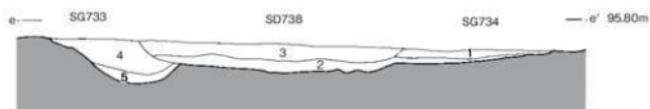
- 1 10YR3/2 黒褐色シルト(2.5Y4/3オリブ褐色砂質シルトの小ブロックが5%混じる)
- 2 10YR3/2 黒褐色シルト(2.5Y5/3黄褐色砂質シルトブロックが30%混じる)
- 3 2.5Y3/3 暗オリブ褐色シルト(10YR3/2黒褐色シルトブロックが3%混じる)
- 4 2.5Y3/2 黒褐色シルト

**SP748**

- 1 10YR2/2 黒褐色シルト(2.5Y5/3黄褐色シルトブロックが5%混じる)
- 2 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト(10YR3/2黒褐色シルトブロックが5%混じる)
- 3 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト(10YR3/2黒褐色シルトブロックが3%混じる)
- 4 2.5Y3/2 黒褐色シルト(10YR2/2黒褐色シルトブロックが15%混じる)

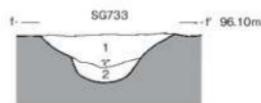


第54図 遺構実測図溝跡SD736等



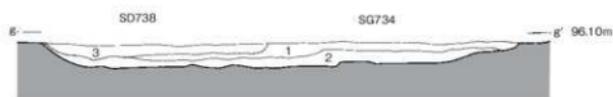
SG733・SD738・SG734

- 1 10YR3/3 暗褐色シルト
- 2 10YR3/3 暗褐色シルト(やや粘る, 2.5Y5/3黄褐色シルトブロックが5%混じる)
- 3 10YR3/2 黒褐色シルト
- 4 10YR2/2 黒褐色シルト(ややしまる)
- 5 10YR1.7/1 黒色シルト(やや粘る)



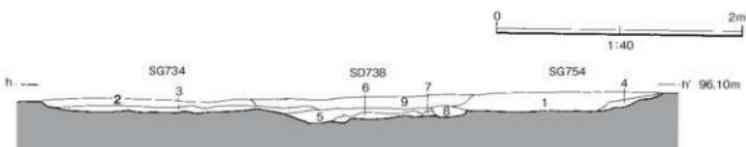
SG733

- 1 10YR2/2 黒褐色シルト(土師器片含む, ややしまる)
- 2 10YR1.7/1 黒色シルト(やや粘る)



SD738・SG734

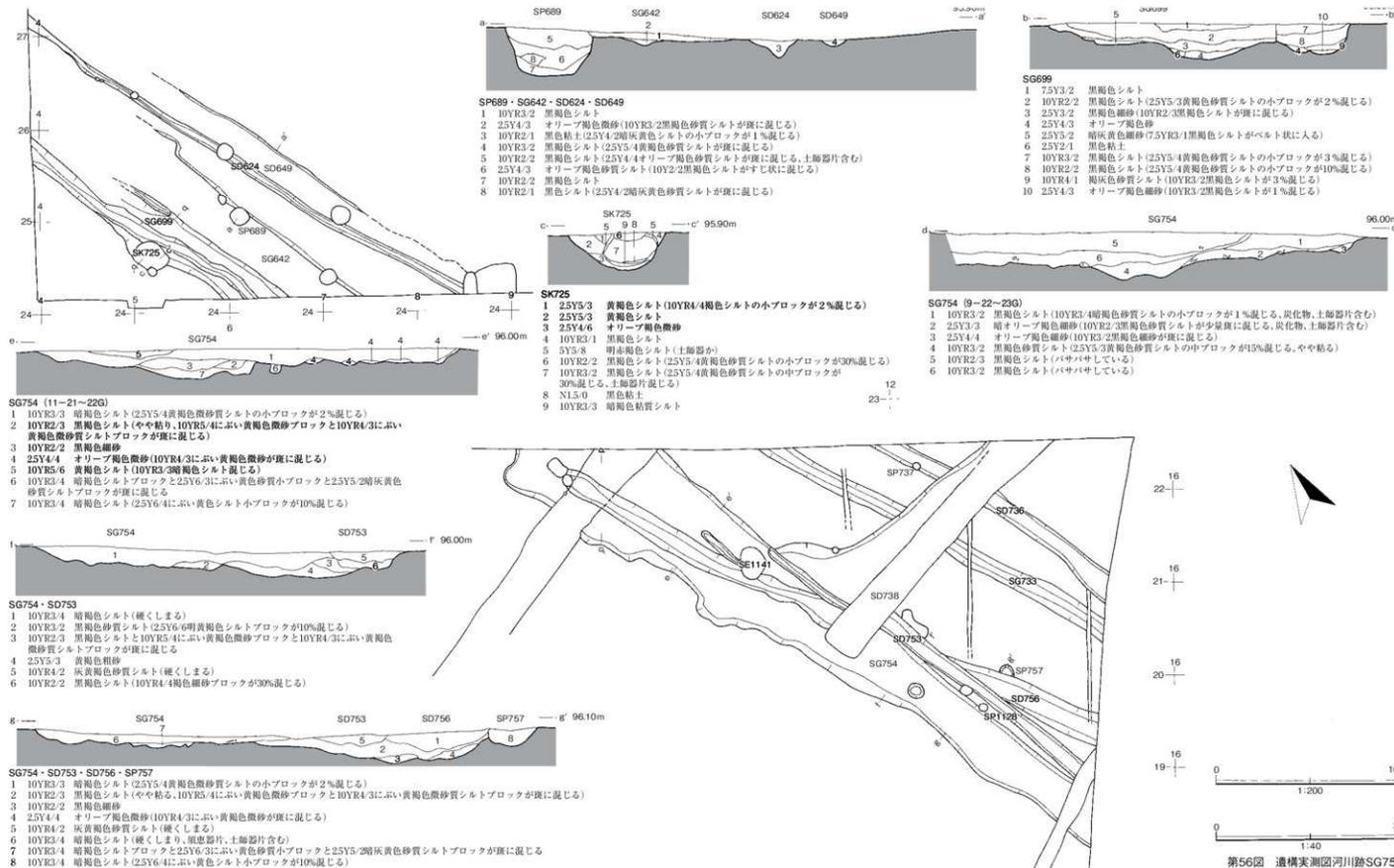
- 1 10YR3/3 暗褐色シルト
- 2 10YR3/3 暗褐色シルト(やや粘る, 2.5Y5/3黄褐色シルトブロックが95%混じる)
- 3 10YR3/2 黒褐色シルト



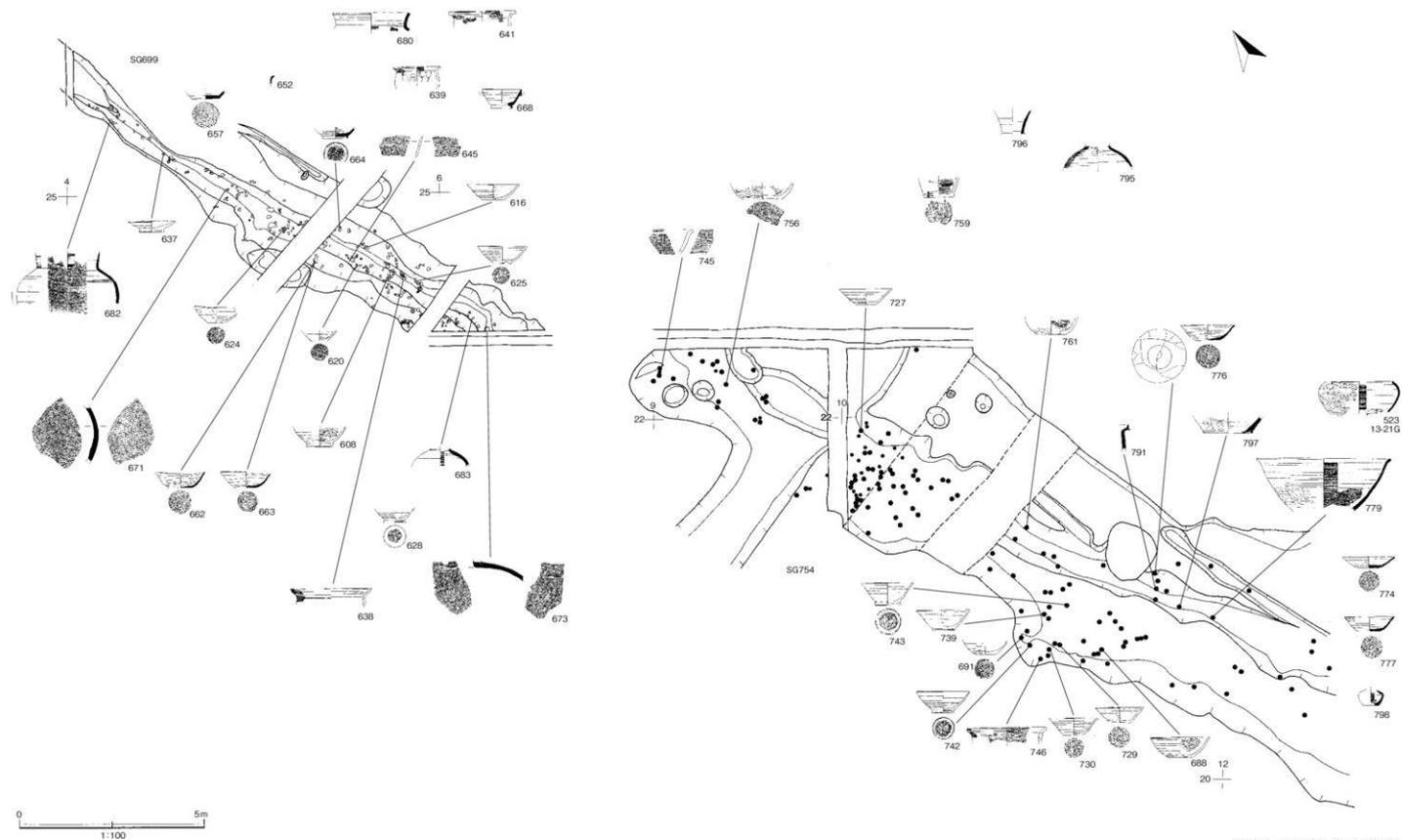
SG734・SD738・SG754

- 1 10YR3/2 黒褐色シルト(10YR3/4暗褐色砂質シルトの小ブロックが1%混じる, 炭化物, 土師器片含む)
- 2 10YR3/3 暗褐色シルト(やや粘る, 2.5Y5/3黄褐色シルトブロックが95%混じる)
- 3 10YR3/2 黒褐色シルト
- 4 10YR3/3 黒褐色シルトに2.5Y5/3黄褐色砂質シルトの小ブロックが15%混じる
- 5 10YR5/6 暗褐色シルト(10YR3/3暗褐色シルト混じる)
- 6 10YR3/4 暗褐色シルトブロックと2.5Y6/3にぶい黄色砂質小ブロックと, 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトブロックが裏に混じる
- 7 10YR3/4 暗褐色シルト(2.5Y6/4にぶい黄色シルト小ブロックが10%混じる)
- 8 10YR3/2 黒褐色粘土に2.5Y5/4黄褐色砂質シルトの小ブロックが3%混じる(土器片含む)
- 9 10YR3/3 暗褐色シルト

第55図 遺構実測回溝跡SD736等



第56図 遺構実測図河川跡SG754等



第57図 遺構実測図河川跡S0754等

V 出土した遺物

出土した遺物はコンテナにして70箱としたが、コンテナに納まりきらない木組み遺構構成材などの大型の木製品が多数存在しており、その実数はさらに増える。そのうち899点を図示した。出土遺物は、古墳時代前期から近世までのものが見られるが、主体となるのは、古墳時代前期と奈良・平安時代に帰属する遺物である。

899点を図示

遺物の分析については、器種分類を実施し、分類に基づいた遺構毎の組成を明らかにして、土器編年や各遺構の性格・年代観を検討すべきである。しかしながら本報告では、その次元まで到達することができず、暫定的に主要な遺構における遺物の概要を述べるに留まらざるを得なかった。近い将来、機会を得て別稿を用意したい。

1) 古墳時代

出土した遺物は土師器がほとんどで、他に木組み遺構構成材と柄やこも石（つちのこ）、箱などの多くの木製品がある。さらに特筆される遺物として、内行花文鏡の破鏡と四方転びの箱がある。破鏡は東北地方では初めての出土であり、日本最北の破鏡となる。また、四方転びの箱も東北地方で初めてとなる。南に近接する服部・藤治屋敷遺跡でも時期はやや降ると考えられるが、出土の報告がある。四方転びの箱は全国でも30例ほどの確認に留まっており、この地域で2点も出土していることは注目される。

内行花文鏡

日本最北の破鏡

四方転びの箱

土師器には、甕、壺、鉢、鉢、高坏、器台、小型丸底土器、ミニチュア土器がある。甕は、口縁部や頸部の形態により大別され、体部プロポーション・底部形状や器面調整などにより細分化することができる。さらに、法量の差により中・小に分けられる。壺は、単純口縁・折り返しや粘土紐貼付による複合口縁・二重口縁などの口縁部形態により大別され、体部プロポーション・底部形状や器面調整などにより細分化することができる。さらに、法量の差により大・中・小に分けることが可能である。鉢は、口縁部の有無により大別され、さらに体部・底部の形状及び器面調整技法により細分化することが可能である。法量の差により中・小に分けられる。また、鉢の中には底部に穿孔を有する一群（有孔鉢）や口縁部に段を有する一群（有段口縁鉢）が存在する。高坏は坏部の形状により大別することができる。これらには口縁部が直線的に伸びやや深い皿型を呈するもの（河内系?）・口縁部が直線的に伸び浅い碗状に立ち上がるもの（東海系?）があり、脚部の形状と器面調整により細分化される。また、河川跡最上層や平安時代遺構の一部から坏部が稜線（角度変換線）により口縁部と体部に分けられるもの（南小泉式）や口縁部が外反しながら伸びるものが出土している。器台は法量により大・小に大別され、さらに、受部と脚部の中央を小孔が貫通するものとししないものに別けられる。また、受部口縁部や脚部の形状及び器面調整により細分化することができる。小型丸底土器は、従来小型丸底壺と呼称される一群である。僅かな平底の底部を有するもの・小さなくぼみ底を有するものに大別され、体部・口縁部の形状及び器面調整などにより細分化することができる。胎土が精製される一群が存在する。ミニチュア土器は壺や高坏、甕などを模した実用品とは考えられない小

有孔鉢

小型丸底土器

ミニチュア土器

型の土製品で、本遺跡では二重口縁壺を模したものが出土している。

以下、主要な遺構の出土土器について概述する。

S T 956・S T 957

平安時代遺構確認面で見出された竪穴住居跡で、多くの柱穴、溝跡に切られる。床面を中心に多くの土師器が出土した。甕6点、壺2点、高坏1点、鉢1点の計10点図示している。3は口縁部が緩やかに外反する小型の甕で、脚台部は欠損しているものの残存する形状から台付甕と判断される。4は体部球形の甕で、口縁部がやや内弯気味に立ち上がり、しっかりした小型の底部が附属している。8は体部球形の甕で、口縁部がくの字に立ち上がる。底部の造りは粗雑であるがリング状を呈する。内面下半にコゲが付着している。6は小さい平底の底部を有し、体部外面は丁寧なヘラミガキが施される。小型の壺としたが、小型丸底土器の範疇に入る可能性がある。9はやや大型の壺で、体部下半に最大径を有する。底部は欠損しており不明であるが、小さい底部を有すると思われる。10はラッパ状に開く脚部を有する小型の高坏で、坏部は欠損しており不明である。

S T 1207

甕2点と壺1点を図示した。19は中型の甕で、体部上半に最大径を有する。21はやや粗製の小型甕で、口縁部形態は21と異なり口縁端部が窄まるタイプであるが、体部上半に最大径を有する。20は体部がやや下膨れ傾向で、口縁部が内弯気味に立ち上がる小型の壺である。形状から、東海地方などで多く出土するいわゆる「ヒサゴ壺」にやや類似する。

S T 1201

木組み遺構埋没後に構築されたと考えられる竪穴住居跡である。甕4点、直口壺1点、器台1点、鉢1点の計7点図示した。33は体部下半の出土であるが、リング状の底部を有する甕である。34は緩やかに外反する口縁部を有し、体部中央に最大径を有する甕である。体部外面はハケ目調整の後、ヘラケズリされる。内面下半には、コゲが付着する。体部下半に人為的打ち欠きによると考えられる直径7cmほどの穿孔が見られる。36は口縁部が欠損し、被熱のためかなり剝離しているものの外面赤彩の直口壺である。精製された胎土で、外面のヘラミガキ調整も丁寧である。35は大型の器台と考えられる。受部は欠損している。内外面ハケ目調整の後、外面はヘラミガキされる。受部に貫通孔があり、外面はかなり被熱している。37は精製された胎土の鉢で、丁寧なヘラミガキが施されている。底部はくはみ底である。

S T 1203

床面から出土した甕1点と壺1点、小型丸底土器1点、高坏1点を図示した。45の甕は口縁部のみ出土であるが、やや受け口状に内弯しながら立ち上がる。47は小壺としたが、口縁部が大きく開くことから鉢とすべきかもしれない。厚手の体部で内外面とも細かいヘラミガキ6が施される。底部は平底である。46は小さい平底の底部を有する小型丸底土器で、口縁部は欠損している。精製された胎土で内外面とも細かい丁寧なヘラミガキが施される。口縁部の破断面及び内面に赤色顔料が付着している。破断面に顔料が付着していることから転用と考えられる。外面は著しく被熱しており、赤塚次郎氏や高橋徹氏は朱精製土器の可能性を指摘している。赤塚氏によれば、北道手遺跡や三重県白浜遺跡などで朱精製土器が確認されており、3・4世紀前半にかけ集落内一墳墓で普遍的に朱を使用していたとのことである。河川跡や竪穴住

破断面に顔料付着

朱精製土器

居跡から出土する赤彩される土器の一群は、朱精製土器と密接に関連すると考えられる。また、不老不死など神仙思想に基づく可能性も合わせて指摘している。

神仙思想

S T 1209

焼失家屋の床面直上から多くの土器が出土した。遺物には大型壺、小型壺、甕、台付甕、高坏などがあり、27点図示した。大型壺には二重口縁壺と複合口縁壺の2タイプが存在する。67は二重口縁壺で、口縁部直径が26cmを測る。頸部は外反し、さらに外反する口縁部を貼り付けている。体部下半に最大径を有する。内外面とも丁寧なハケ目調整が施され、外面はさらにヘラミガキが施されている。外面は被熱しており、赤彩されるかは判然としない。福島県の男壇遺跡などの古墳で出土する底部穿孔された大型壺にやや類似する印象を持つが、本例には穿孔はない。58は口縁端部を外側に折り返し丁寧に面取りを施した複合口縁の大型壺で、ほぼ完形に復元された。体部下半に最大径を有し、小さい底部を有する。外面は丁寧なハケ目調整が施された後ヘラケズリされ、体部中位から下半にかけてヘラミガキが施されているが、かなり剥離している。内面は口縁部と底部付近がハケ目調整で、上半から中位は横位のヘラケズリである。外面と口縁部内面が赤彩されている。ベルト状に色濃く残存する部分が見られ、濃淡が付けられていた可能性がある。後述するS G 763で出土した101複合口縁大型壺と、法量・技法などが極めて類似することから同一工人によるものと考えられる。57は西壁中央付近で出土した。肩部から口縁部にかけて欠損しているが、体部下半に最大径を有する壺と考えられる。外面は丁寧なハケ目調整が施され、内面は底部にハケ目調整が、体部中央から上半にヘラケズリが施されている。底部はドーム形に窪んでいる。体部外面には煤が、内面にはコゲがやや斜位に付着している。このことから、口縁部などが欠損あるいは打ち欠けられた後、一定角度に傾けられ場などに転用されたと考えられる。63・65・66・69・70は57大型壺に隣接して西壁中央付近から出土した小型壺である。いずれの体部も体部中央に最大径を有し、丁寧なハケ目調整が施されるなど極めて類似するが、口縁部形態がそれぞれ大きく異なっている。底部は窪み底傾向である。なかでも66は、肩部に8条1単位の櫛波状文が廻る。当該時期での県内での類例は無く、信州など中部地方の影響を受けた可能性が考えられる。ミニチュア土器の範疇に含まれるかもしれない。これら小型壺の一群は一般的な什器とは考えられず、祭祀などに使用されたものと考えられる。62は内外面赤彩された小型壺で、口縁端部が内側にやや窄まる。73の高坏は棒状柱実屈折脚の高坏である。坏部底部が脚からはほぼ水平に延び、緩い稜線を残しながら口縁部が直線的に伸びる。坏部は被熱し剥離が激しいが、丁寧なハケ目調整の後内外面ともにヘラミガキされている。大阪府下田遺跡などに近似する例が見られ、河内地方の影響を受けた可能性が考えられる。74は口縁部が直線的に伸び浅い碗状に立ち上がる坏部を有するタイプで、東海地方の影響を受けたものと考えられる。

二重口縁壺

複合口縁壺

101と同一工人

小型壺

棒状柱実屈折脚

S T 1216

S T 956・957などに切られる壁穴住居跡で、壺・高坏・小型壺など17点を図示した。76は短めの口縁部が直立する壺である。体部上半に最大径を有する。胎土は精製されているが、体部は厚く野暮ったい印象である。77・80は口縁部が緩やかに外反して伸び、体部中央に最大径を有する球胴型の広口壺である。81・85はS T 1209でまとまって出土した小型壺と同種と考えられる。法量・器形・器面調整など共通する部分が多い。特に81はS T 1209で出土し

球胴型

再 利 用 　　た体部とST 1216で出土した口縁部が接合している。ST 1216廃絶直後にST 1209で再利用されたか、同時期に再利用されたと考えられる。87・88・89は棒状柱実屈折脚の高環であるが、脚柱部はやや中空気味である。中でも87はほぼ完形に復元でき、均整の取れた優美なプロポーションである。胎土は精製され、坏部・脚部ともに内外面は細かいハケ目調整の後、丁寧なヘラミガキが施され、赤彩されている。馬洗場B遺跡出土高環の祖形の可能性がある。90は口縁部がやや内弯気味に大きく開く直口壺である。体部と口縁部の比率は1:1、体部高と体部径の比は3:4となっている。胎土は精製され、焼成も堅緻である。口縁部内外面は丁寧な縦位のヘラミガキ、体部外面は斜位を中心とするヘラミガキが施され、内外面は赤彩される。86は器台で脚部が漏斗型に直線的に開く。受部と脚部の中央に小孔が貫通する。

SG 763

大きな河川跡 　　検出当初は平安時代の小河川と考えられていたが、検出面の120cm以上下層から古式土師器が出土したことから古墳時代初頭頃を中心とする大きな河川跡であることが判明した。遺物は、壺・甕・高環・直口壺・小型壺・器台・鉢・木製品など多様である。壺・器台・高環・鉢の一部には赤彩される一群が存在する。101は口縁端部を外側に折り返し丁寧に面取りを施した複合口縁の大型壺で、ほぼ完形に復元された。体部下半に最大径を有し、小さい窪底を有する。胎土は精製され、焼成も堅緻である。外面は丁寧なハケ目調整が施された後ヘラケズリされ、体部中位から下半にかけてヘラミガキが施されている。内面は口縁部と底部付近がハケ目調整で、上半から中位は横位のヘラケズリである。外面と口縁部内面が赤彩されている。ベルト状に色濃く残存する部分が見られ、濃淡が付けられていた可能性がある。前述したST 1209出土の58複合口縁大型壺と、法量・技法などが極めて類似することから同一工人によるものと考えられる。両者とも古相の印象を受ける。158も大型の複合口縁壺で口縁端部に粘土紐を貼り付け複合口縁を形成している。外面肩部から下にかけ煤が付着しており、煮沸などに利用された可能性がある。器面調整は被熱により剥離が見られ判然としないが、外面と口縁内面はヘラミガキが施される。101複合口縁壺にやや似るが、器厚も厚く成形技法も推定印象である。164は大型の複合口縁壺であるが、101などとはプロフィールが異なり、体部下半に最大径を有する。口縁端部に厚い粘土紐を貼り付けている。底部形状は欠損しているため不明である。外面はハケ目調整の後ヘラミガキが施され、内面はヘラケズリである。166は体部中央に最大径を有する球脚型の壺で、口縁部は欠損している。体部外面はハケ目調整、内面はヘラケズリの後、丁寧な細かいヘラミガキが施されている。ST 1217出土の壺に似るが、器厚も薄く内面の器面調整も異なる。102・103・104は赤彩された直口壺である。102は口縁部が直線的に伸びる直口壺で、体部と口縁部の比率は1:1、体部高と体部径の比は25:4となり、やや扁平な印象である。胎土は精製され、焼成も堅緻である。外面と口縁部内面は丁寧な縦位のヘラ磨き、口縁部内面端部は横位のヘラミガキが施され、内外面は赤彩される。均整のとれた極めて優美なプロポーションである。103は内外面とも横位のヘラ磨きが施され、口縁部やや上部に稜が見られる。器厚は薄い。104は頸部に細いヘラ状の工具による刺突文が廻っている。194・195も直口壺である。体部と口縁部の比率はおよそ3:2で、口縁部が小さくなっている。体部高と体部径の比は194がおよそ3:4で最大径が体部中央に、195が3.3:4で最大径が体部上半にある。器面調整は、194が内外面ハケ目であるのに対し、195は内外面とも細かい

同 一 工 人

ヘラミガキである。192・193は大型の直口壺である。105は底部穿孔の小型広口壺である。口縁部はやや内湾して立ち上がる。外面は横位のヘラミガキ、内面は細かいハケ目調整が施されている。体部下半に黒斑が見られる。穿孔は焼成後に穿たれている。113は口縁部に後のある有稜鉢である。底部は窪底で内外面とも細かいヘラミガキが施されている。さらに内外面とも赤彩されている。胎土も精製され、焼成も堅緻である。特徴的なのは、破断面に赤色顔料(朱?)が付着しており、被熱し煤が付着していることである。破損した後、朱精製土器として転用された可能性がある。207も有稜鉢であるが、胎土・器面調整など大きく異なり赤彩もされない。焼成は堅緻である。114・115は内外面赤彩の小型鉢である。胎土は精製されている。内外面ともハケ目調整が施される。208・209も小型鉢であるが、胎土・器面調整とも114・115とは異なる。108・109は器台である。胎土は精製され、内外面とも丁寧なヘラミガキが施される。いずれも受部と脚部の中央に小孔が貫通するが、108は脚部に穿孔がないタイプである。これらを含めSG 763からは、多くの赤彩された土器が出土している。赤彩(朱彩)土器による祭祀が馬洗場B遺跡あるいはSG 763で行われていたことを物語るものであろう。

他にも多様な土器が出土している。172・178は小振りな二重口縁壺である。中でも178は直立気味の頸部に緩やかに外反する口縁部が附属する。胎土は精製され、外面及び口縁部内面はハケ目調整の後ヘラミガキされている。体部やや上部には人為的打ち欠きと考えられる穿孔が見られる。186・179・312は体部下半に最大径を有する形状から東海系のヒサゴ壺に類似するものと考えられる。特に186は愛知県埋文センター赤塚次郎氏に実見を依頼した際に、東海系のひさご壺に近似すると指摘を受けた。さらに、324も完形ではないものの口縁部の形状や体部下半に最大径を有するプロフィールから東海系ひさご壺に類似するものと考えられる。また、191・218・215・217・216などは小型丸底土器の一群であるが、体部・底部・口縁部の形状や器面調整などにより細分化される。210は口縁部が内湾気味に伸びる、口径に比して器高が低い小型丸底鉢である。胎土は精製され、器厚は薄い。ST 1201出土の37にやや似る。213・214は有孔鉢である。口縁部がやや内湾気味に伸び漏斗状を呈する。底部には焼成前に穿孔された小孔が観察される。器面調整は内外面ともハケ目調整が主体で、ヘラケズリやヘラミガキが施されている。外面は強く被熱している。甌という指摘もあるが、被熱していることなどから炉などに逆位で設置して支脚として使用したと考えられる。

甕では130・131のいわゆる能登甕(月形式)が目される。体部内外面ともハケ目調整で、最大径が体部上半に位置する倒卵型のプロポーションを呈する。口縁部は、くの字に屈曲しながら外反し口縁端部は丁寧に面取りされている。底部は小さな平底である。体部外面の全面には煤が、内面にはコゲが付着している。田嶋明氏によれば、漆町福年の8段階に近似するということである。また、120・123、132・150・180・181・323などの底部丸底や擬尖底の一群が一定量存在する。180の口縁部は、緩くくの字に屈曲して伸びた後、端部がつまみ出される。ほとんどの個体に煤やコゲが付着していることから煮滷具として使用されていたと理解される。煤などの付着状況やコゲの付着状況からから炉などの形態や調理方法などが推測できる可能性がある。129と323の内面のコゲをサンプリングしてAMS法による年代測定を依頼している。詳細は付編に譲るが、いずれも3世紀末ごろの年代測定結果であった。143・236は口縁部が強く屈曲した後、上方に伸びる受口口縁の甕である。近江型の受口口縁甕に類似する

底 部 穿 孔

穿孔は焼成後

破断面に赤色顔料

赤彩土器による祭祀

人為的打ち欠き
ヒサゴ壺に類似

有 孔 鉢

能 登 甕

A N S 法

受 口 口 縁

と考えられる。128・129は口縁部形状に特徴がある。口縁部中央に稜が観察され、東海系のS字壺の口縁部に似る。128の器面調整は口縁部がナデ、肩部は縦位、体部上半に一条の横位、他は斜位のハケ目調整が施されており、S字壺の器面調整に類似しているが、脚台部は存在しない。前出の赤塚氏はS字壺とすることはできないが、影響を受けたと考えられるということであった。129はプロボーションや器面調整もS字壺とは異なっている。S字壺については、隣接する服部・藤治屋敷で出土しているということである。他には、体部穿孔の壺(125)や台付壺脚台部(156など)、口縁部が強く屈曲した後横に伸びる壺(124)などがある。

高環は堅穴住居跡出土の一群と同じタイプのものがある。202は坏部底部が脚からほぼ水平に延び、緩い後縁を残しながら口縁部が直線的に伸びる。丁寧なハケ目調整されている。204は同種の脚部である。大阪府下田遺跡などに近似する例が見られ、河内地方の影響を受けた可能性が考えられる。201は口縁部が直線的に伸び浅い碗状に立ち上がる坏部を有するタイプで、東海地方の影響を受けたものと考えられる。また、205は脚部が喇叭状に開く高環の脚部で、焼成は堅緻である。また、平安時代確認面で検出した狭いSG 763最上層(砂礫層)からは、いわゆる南小泉式の高環が出土している。器台には受部と脚部の中央の小孔が貫通するもの(196など)としないもの(198)が存在する。309は弥生土器の小片である。

10-20 グリッド

平安時代確認面で土色変化は認められなかったが、その後の検討でST 1201直上であることが判明した。300-303のミニチュア土器群がまとまって出土した。いずれも折り返し口縁の広口壺を模した土器群で、外面には指頭圧痕、口縁内面にはハケ目調整が施される。302・303の底部は平底である。301は体部が球胴型を呈するが、他は寸胴型を呈している。胎土には砂粒が少量含まれるが、焼成は堅緻である。他に小片があることから、さらに1-2点の存在が想定される。

6-23 グリッド 破鏡出土地点

破鏡(362)は土師器片が分布し、やや暗い土色の地点を遺構のプランを検出するため丁寧に掘り進めた際に出土した。周辺からも、土師器小片が近似するレベルで若干量出土している。隣接するSD 1024底面下からも土師器小壺が2点(239・240)出土し、そのうちの一つには赤色の土塊未確認遺構が充填されていた。具体的な根拠に乏しいが、堅穴住居跡など何らかの遺構が存在し、その未確認遺構から破鏡が出土したと推定した。SD 1024直下の小壺出土地点付近も、その未確認遺構に関連することも考えられる。堅穴住居跡とすれば、ST 1216・ST 1217に切られる。弥生時代後期から古墳時代前記初頭にかけて大分や近畿で散見されるように、住居跡など集落内に破鏡が廃棄される状況が考えられる。

内行花文鏡の破鏡で、1/3強遺存している。復元径は8.2cmを測る。鏡背には平縁・斜行する脚間文・3重の重圏文・直行する脚間文・内行花文が観察される。内行花文は六弧と考えられる。厚さは平縁部分で3mm、重圏文部分で1.3mmを測る。鈕及び鈕座は欠損しており不明である。銅質は良く、漆黒色を呈し輝きを保っている。本来雲雷文と()内にある渦文が退化し、3重の重圏文のみになっている。大分県教委の高橋徹氏の編年によれば、雲雷文内行花文鏡Ⅳ期に位置づけられよう。鏡片は破断面及び全体が研磨されている。弦轡のほぼ中央に約3mmの小孔が穿たれている。懸垂用と考えられ、シメトリーを意識したものと判断される。

河内地方の影響

ミニチュア土器群

赤色の土塊未確認遺構

集落内に廃棄内行花文鏡

全体が研磨小孔

小孔左側の破断面にはタガネ痕跡と考えられるギザギザが観察された。研磨により明瞭ではないものの、割れた鏡をタガネにより整形した可能性が考えられる。鏡片として輸入されたものが、集積地などで不要部分をカットするなどの整形を受け、各地に流通した状況を想起させる。これは前出高橋徹氏の説を補強するものと考えられる。

馬洗場B遺跡出土内行花文鏡の生産地については、仿製鏡とする見解が多く中国鏡とする見解は少ない。実見をしていただいた方々では、榎原考古学研究所樋口隆康氏・今尾文昭氏、早稲田大学車崎正彦氏、前出高橋徹氏が仿製鏡とする見解を示している。一方、明治大学小林三郎氏は銅質の良さと櫛南文の特徴から中国鏡の可能性を指摘している。今回、東京国立文化財研究所平尾良光氏に鉛同位体による産地同定を依頼した。結果については考察で詳述するが、朝鮮半島産の材料により製作されたとしている。多鈕細文鏡や細形銅剣など弥生時代中期の銅器が朝鮮半島産の材料で生産されているが、本例の鏡式は後漢鏡に類似している。ズレが生じてしまうが、近年西川寿勝氏が楽浪郡での銅鏡生産についての見解を発表しており、朝鮮半島(楽浪郡)で中国鏡の仿製鏡が生産され、日本海ルートにより山形にもたらされたとするのも単なる我田引水とはいえないであろう。

馬洗場B遺跡出土の内行花文鏡の破鏡は、楽浪郡で後漢鏡をモデルに生産され日本海を渡り北部九州あるいは近畿地方(河内)を経て山形にもたらされ、弥生時代後期末頃あるいは古墳時代前期初頭に集落内に廃棄されたと考えられることでもきよう。

木製品

S G 763から大量の木製品が出土している。加工痕があるものや器種が判明するものなどを中心に87点図示したが、その他にも取り上げた木組み遺構の構成材や木製品が多く存在するが図示し得なかった。

365は梯子である。完形で出土したが、取り上げの際3分割した。木組み遺構の上層部を取り上げた後、確認されている。流れて来て木組み遺構に漂着したか、構成材かは判然としない。加工痕が顕著である。366は堅柱である。片方は欠損している。手斧などによる面取り加工の痕跡がみられる。369・370は弓であるが、いずれも完形品ではない。両者とも刃物により切断されており、弓としての機能を成さない状態にした後S G 763に入れられている。祭祀あるいは呪術的な行為によるものの可能性がある。370の弓は極めて丁寧な面取り加工が施されている。371はこも石(つちのこ)である。むしろや編布などの縦糸の錘である。434は器種不明の木製品である。一部のみの遺存のため形状は判然としないが、両端に駒穴と考えられるものがみられる。脚状のものが差し込まれる可能性がある。435は田下駄と考えられるものである。1/2程の遺存と考えられるが、ほぼ中央に直径8mm程の穿孔が2個、3cm間隔で並ぶ。

木組み遺構の構成材では、383・386などの杭がある。383は木組み遺構を水圧から支えるように、頭部を川上に向けて斜位に打ち込まれていた。同様の杭は、木組み遺構に沿って並んでいたが、完形で掘り出せたのはこの個体のみであった。385と384はセットである。橋脚状に垂直に打ち込まれたY字形の385に、384が橋渡すように組み込まれていたものである。385は深くしっかりと打ち込まれていたため、やむを得ず切断している。384は丁寧に面取りされ、所々抉りを入れるなど加工されている。394は打ち込み式の柱と判断した。先端部は刃物により鋭角に加工され、頭部は脚状に加工されている。表面のかんりの部分が炭化しており、火災

タガネ痕跡
鏡片として輸入

鉛同位体
朝鮮半島産

楽浪郡

木組み遺構

呪術的な行為

田下駄

橋脚状

柱

にあったか、あるいは腐食防止のために表面を人為的に焦がしたのかもしれない。393 はやや厚手の板状部材である。両端部付近に、長方形の駒穴が観察される。何らかの建物の部材とも考えられる。木組み遺構の部材であれば、建物部材からの転用であろう。他には、388・429・447・433 などの板状木製品がある。388 は厚手で幅も広い。433 は幅が狭く長い板状で、中央付近の脇に人為的と考えられる方形の貫通孔がある。建物部材からの転用の可能性がある。391・392 は薄い板材である。391 の端部には切込みが入られている。欠損しているため全容は不明である。392 は直径 1 mm ほどの貫通孔が観察される。木釘など痕跡と考えられる。器種はいずれも不明であるが、箱などの可能性が考えられる。他の木製品では、372・375・377・446 などの棒状木製品がある。何らかの柄とすることもできる。断面形は楕円形を呈し、端部は刃物により細く整形されている。

四方転びの箱

363 の四方転びの箱は、S G 763 木組み遺構付近からの出土である。本来は 4 枚 1 組となるが、1 枚のみの出土であった。下部が欠損している。台形を呈する厚さ 4 mm のスギの柾目材である。極めて丁寧な調整で、表面は滑らかに仕上げられている。上端は 9 cm を測る。両斜辺は内側が面取りされており、一方の斜辺の上端から 1 cm の部分には、小さい挟りが入られている。外側となる面には、斜辺から 1 cm の所に罫引き線が左に 1 本、右に 2～3 本入れられている。この罫引き線に沿って、上端から 1 cm のところからおよそ 2 cm 間隔で、直径 3 mm ほどの小孔が穿たれている。さらに、上端から 3.7 cm のところから幅 4 cm ほどのアーチ状の挟りが観察されるが、本来は楕円形の穴であろうと考えている。桜櫛皮紐を小孔に通して 4 枚の台形の板を縦じま合わせたものと考えられる。上端から 1 cm の挟りは結び目の部分であろう。

四方転びの箱は、4 枚の台形の側板が組み合わさったときに、内側に傾斜する（転ぶ）ことから四方転びと呼び習わしている。通常、四角錐の上部を水平に切り取ったような形状をしている。全国的に出土例は少なく、10 遺跡 30 点余りに過ぎない。大阪府下田遺跡、三重県北脇池遺跡、滋賀県森浜遺跡・斗西遺跡・宮ノ前遺跡、奈良県布留遺跡・平城京下層、鳥取県青谷上寺地遺跡などが著名であり、近畿地方でほとんど出土している。四方転びの箱に関する研究も多くなく、上原真人氏が 1993 年に木工技術史から論及している。また、仁木昭夫氏は 1996 年に下田遺跡報告書中で、出土した四方転びの箱に関連して詳細な分析と集成を行っている。さらに、村上生氏も 1997 年に下田遺跡出土四方転びの箱に関連して論考を発表している。これら先学の論考の中で共通することは、四方転びの箱は指物で、規矩術（曲尺（サシガネ）・コンパス（ブンマワシ）などを用いて、建物などの構造部分の寸法や角度を立体幾何学的に求め、実体の上に割付・作図する技術）を用いているということである。また、朝鮮半島から技術が伝来したことを推定している。さらに、四方転びの箱は規矩術の初歩とされ、大工の棟梁が弟子に曲尺（サシガネ）の使用法（規矩術の腕試し）を習得させるために作らせたという。かつて多くの家庭にあった台形の踏み台は、新築記念に棟梁が弟子に腕試しとして作らせ、置き土産にしたとのことである。このことを裏付けるように、山形県職業能力開発協会の山口宏二氏によれば、現在も 2 級建築士の技能検定実技試験課題に四方転び（柱建て四方転び）が出題されているということであった。

馬洗場 B 遺跡出土の四方転びの箱は、完形ではないものの薄い板材を使用し、面取りや表面

の仕上げが極めて丁寧である。現在までに確認されている四方転びの箱の中でも、製材から仕上げまで極めて優れたものといえる。また、スギの柾目材を使用していること、罫引き線が引かれ、板樺皮紐により縦じわされることなど、技法的にも同じである。さらに、大阪府下田遺跡出土の四方転びの箱の縦じわの間隔は約2cmで、馬洗場B遺跡出土の四方転びの箱と同じであった。

本報告書作成中に、隣接する服部・藤治屋敷遺跡担当者から四方転びの箱が出土しているという情報が寄せられた。実見するとまさしく四方転びの箱であった。厚手で仕上げも雑であるが、やや小振りな四方転びの箱である。東北はもとより、東日本では山形市内のしかも隣接する2遺跡のみの確認である。

近畿地方にはほとんどが分布する四方転びの箱が、どういう経緯で2個体も山形に伝わったのであろうか。破鏡との関連があるのではないかと考えている。四方転びの箱と破鏡が同時に出土している遺跡は、滋賀県能登川町西遺跡と鳥取県青谷町青谷上寺地遺跡、さらに馬洗場B遺跡の3遺跡のみである。北部九州から瀬戸内海を経てもたらされた破鏡が、四方転びの箱とともに琵琶湖を経て日本海に出て、一方は西進し青谷上寺地遺跡へ到達し、もう一方は最上川を廻り馬洗場B遺跡へと伝えられたのであろうか。赤塚次郎氏が指摘するように、3世紀中頃の狗奴国との抗争に関連して大きな動きを見せた、伊勢湾岸社会のうねり（S字壺を中心とする第2次拡散期）が東北山形に波及したことも考えられる。当該時期の人の動きと土器・土器様式の動き・伝播に関して、何らかの示唆を与えてくれる可能性がある。

今回、縦じわの配置と中央部の穴および類例の実測図などを参考に、図上で復原を試みた。縦じわを下田遺跡例に倣い7個と推定し、罫引き線に沿い各2cm間隔で配置した。最後の縦じわと下辺との間隔を最初の縦じわと同じく罫引き線に沿って1cmとしている。さらに、中央の穴の下辺と下辺との間隔を、上端と上辺の間隔と同じ約3.7mとした。その結果、上辺と下辺との間隔が11.5cm、上辺9.1cm、下辺24.8cm、斜辺の長さが左14.3cm、右14cm、中央の楕円形の穴が長さ4cmに復原された。これを基に、元興寺文化財研究所に復原品の製作を依頼した。復原品は高さが8.5cm、下辺24.8cm、上辺9.1cmになる。板樺皮により縦じわられた四方転びの箱はしっかりと結合されており、強度も十分あるようである。

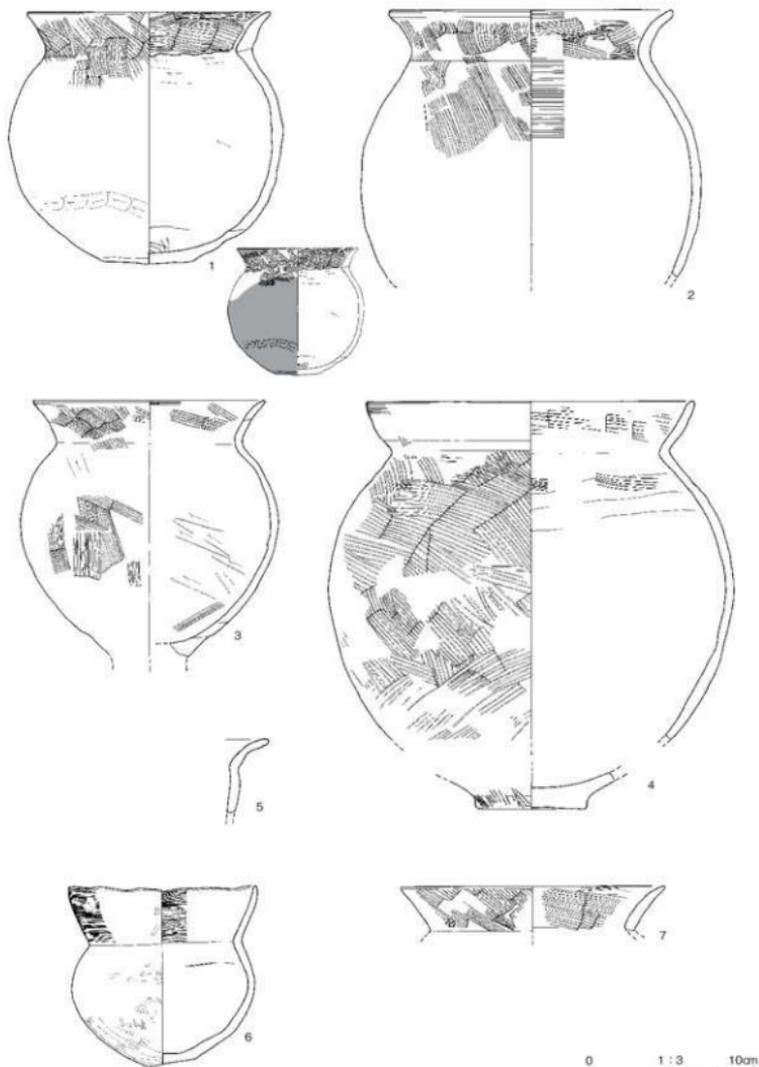
堅穴住居跡とS G 763 河川跡からの出土が主体となる。堅穴住居跡出土遺物には、さほど時期差はなく比較的短期間で建て替えが行われた可能性がある。また、S G 763 河川跡出土土器についても、間層が観察されず同一層位からの出土と判断されることから、同様に短期間に投棄されたと推測できる。また、同一製作者によると考えられる複合口縁壺の存在からも判断されるように、いくつかの堅穴住居とS G 763は同時期に存在していたことが理解できる。

板樺皮紐

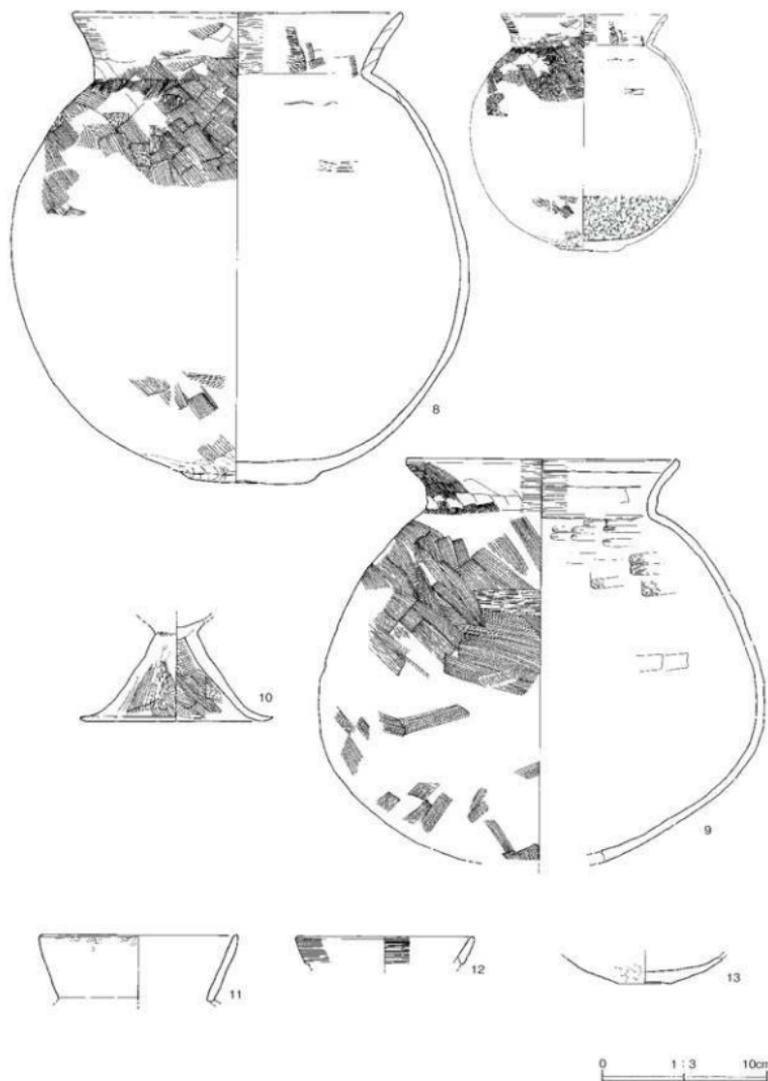
服部・藤治屋敷遺跡

3 遺 跡

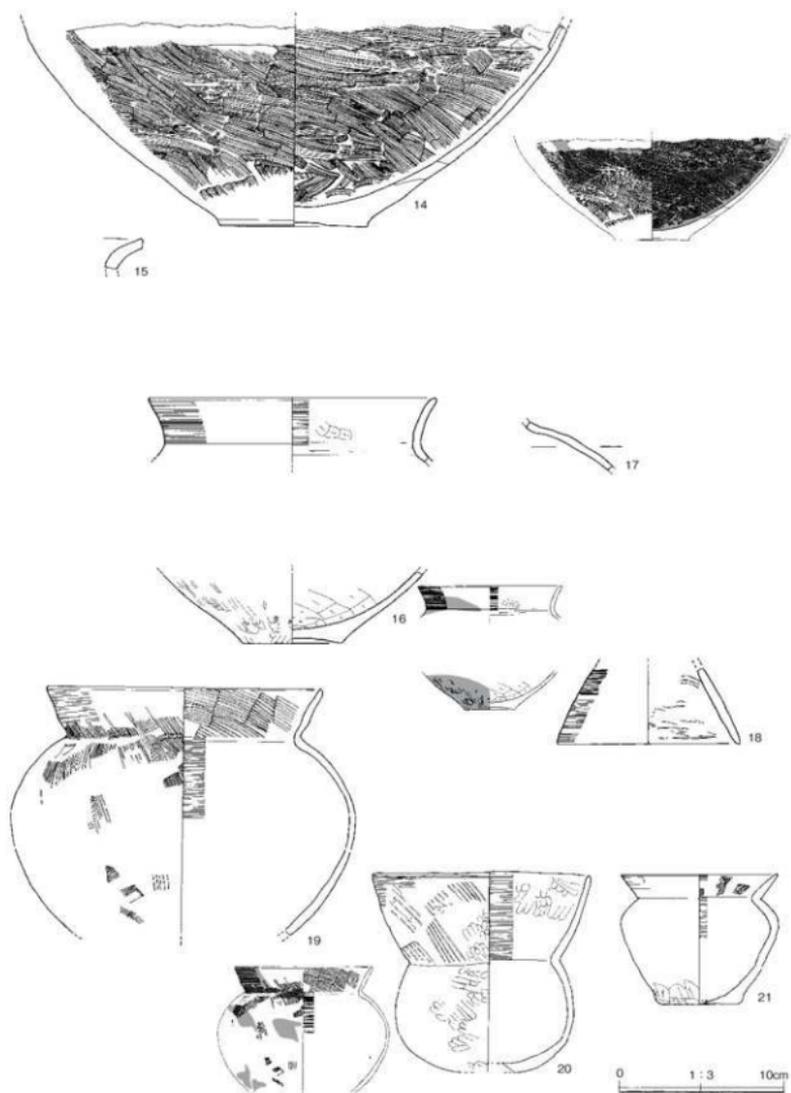
第2次拡散期



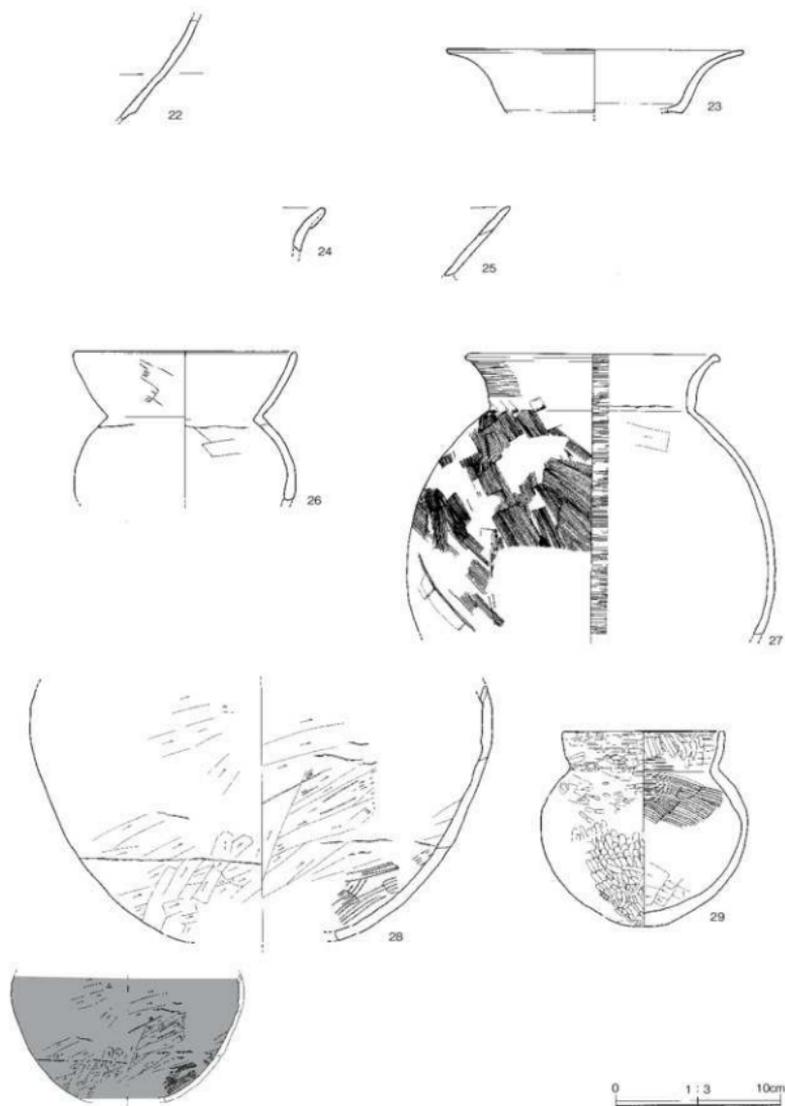
第58図 遺物実測図(1)



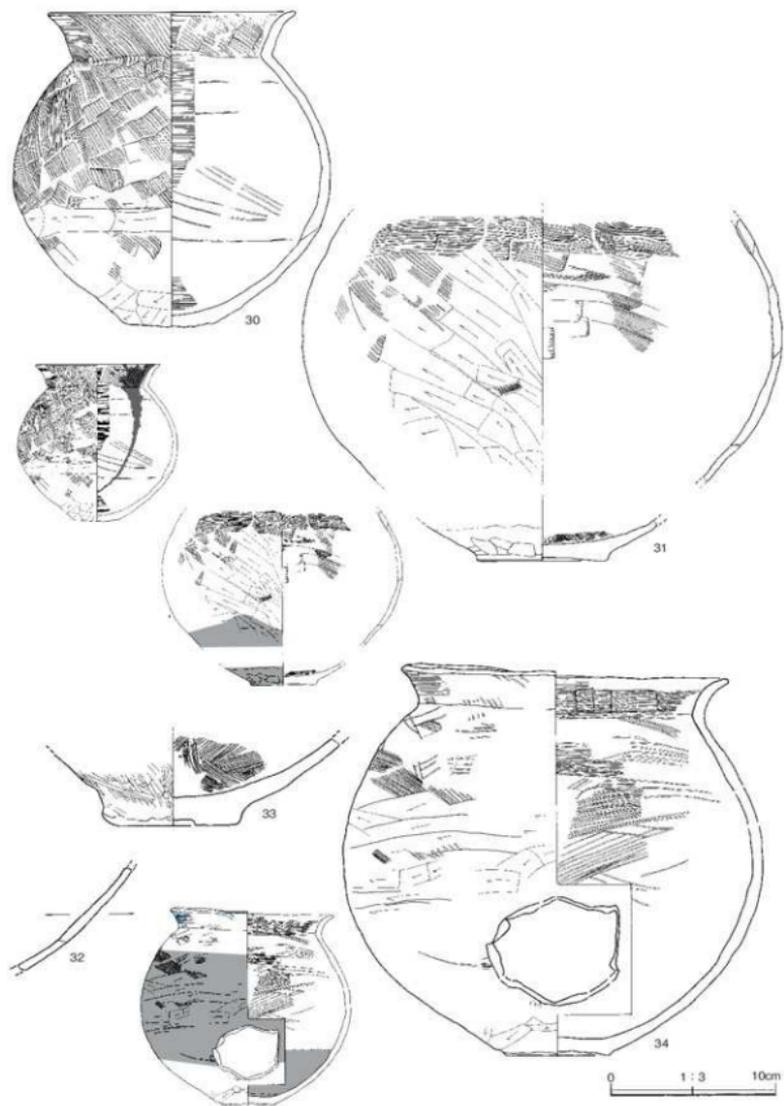
第59図 遺物実測図(2)



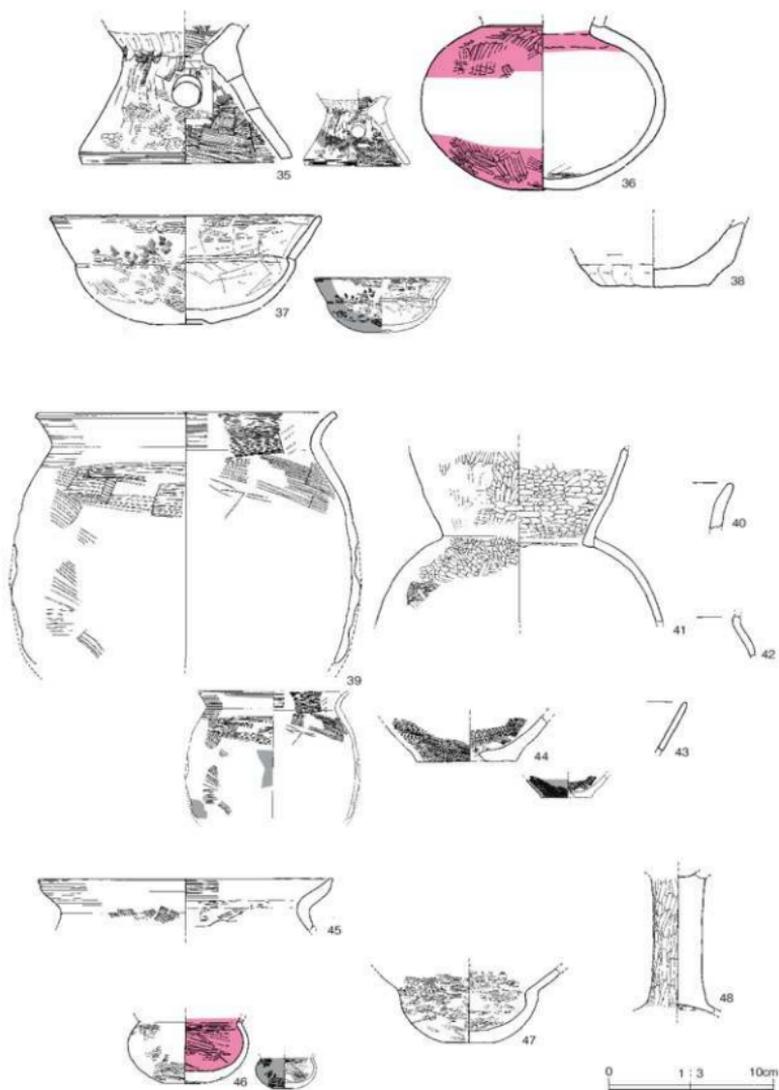
第60図 遺物実測図(3)



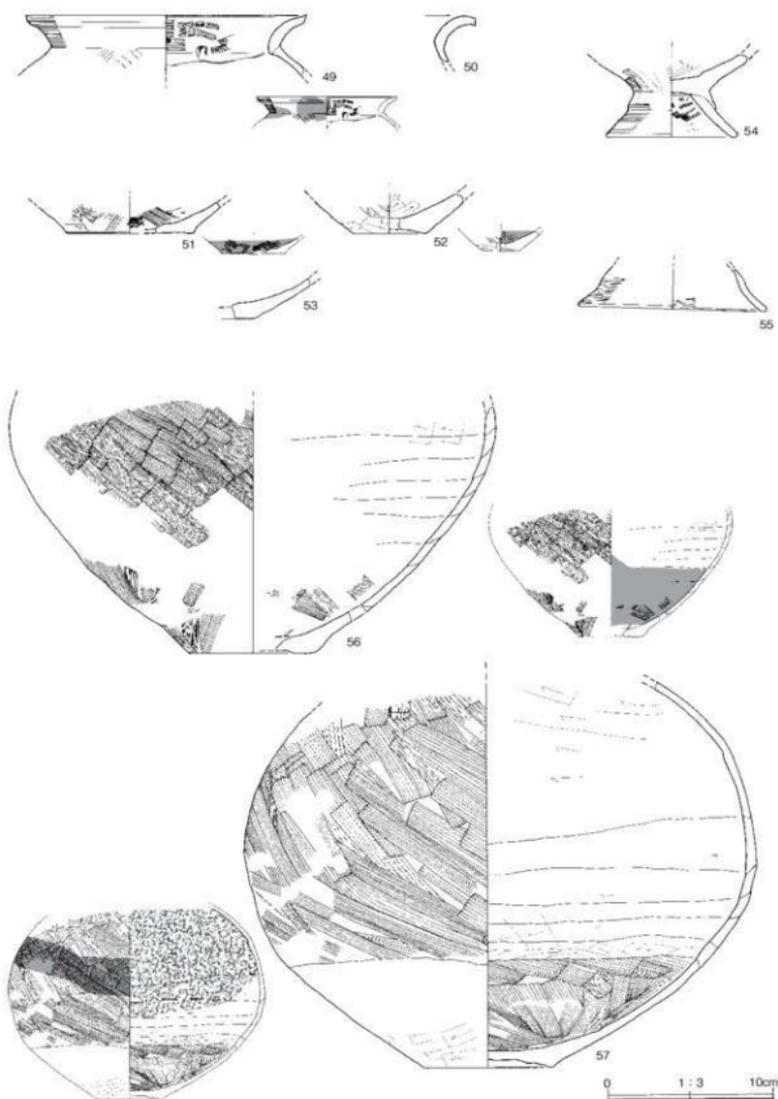
第61図 遺物実測図(4)



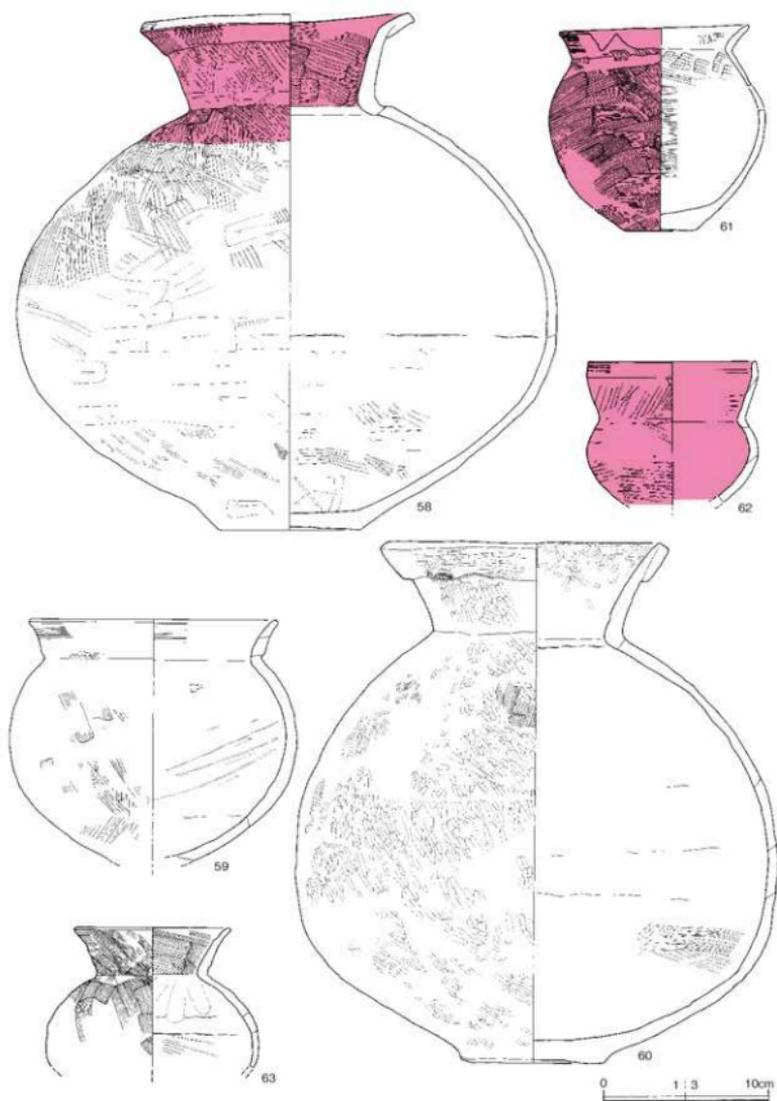
第62図 遺物実測図(5)



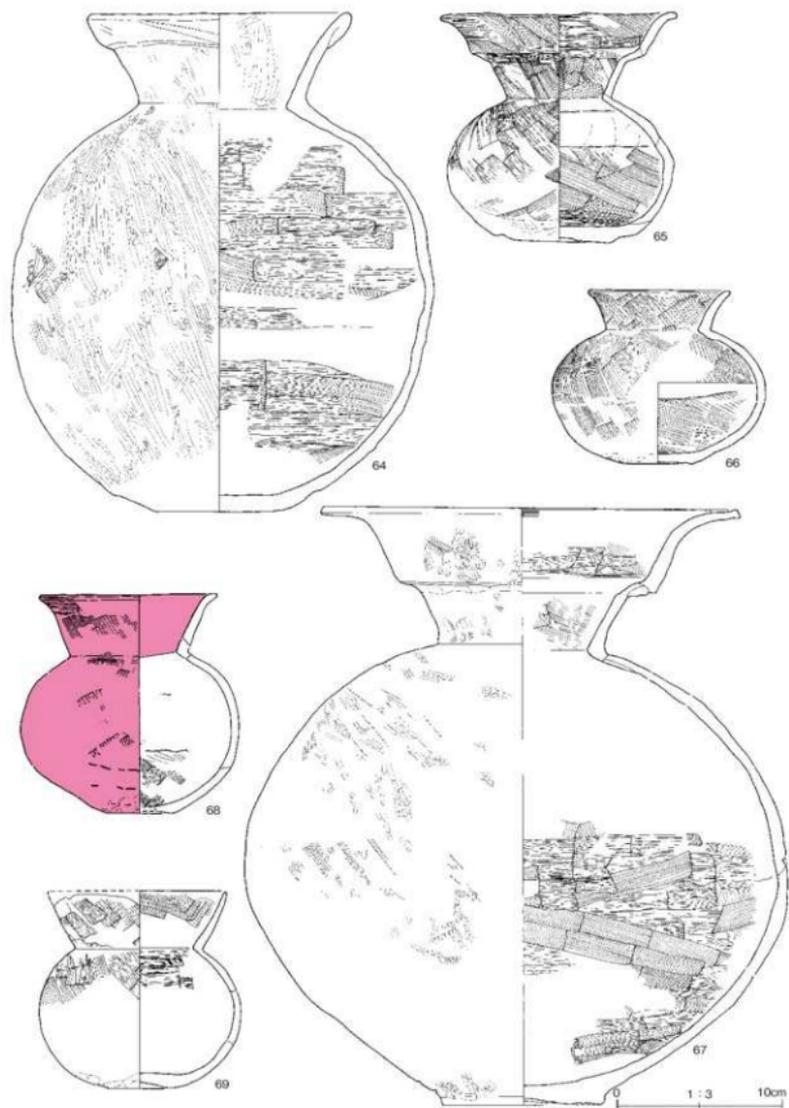
第63図 遺物実測図(6)



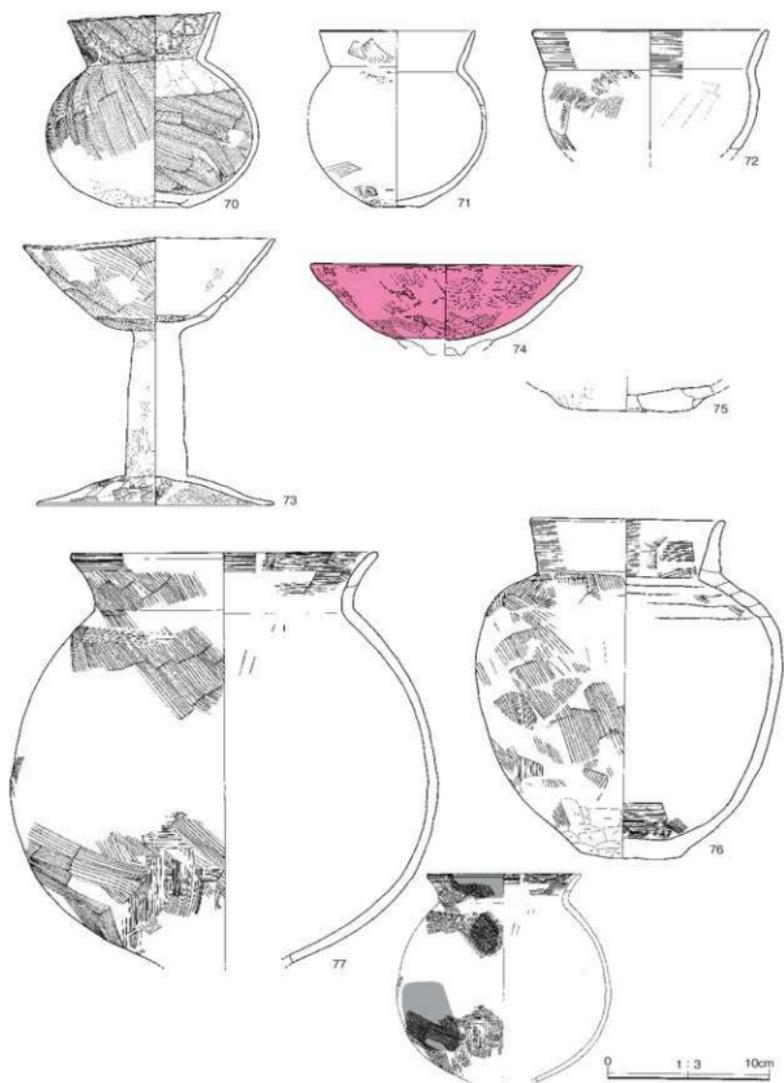
第64図 遺物実測図(7)



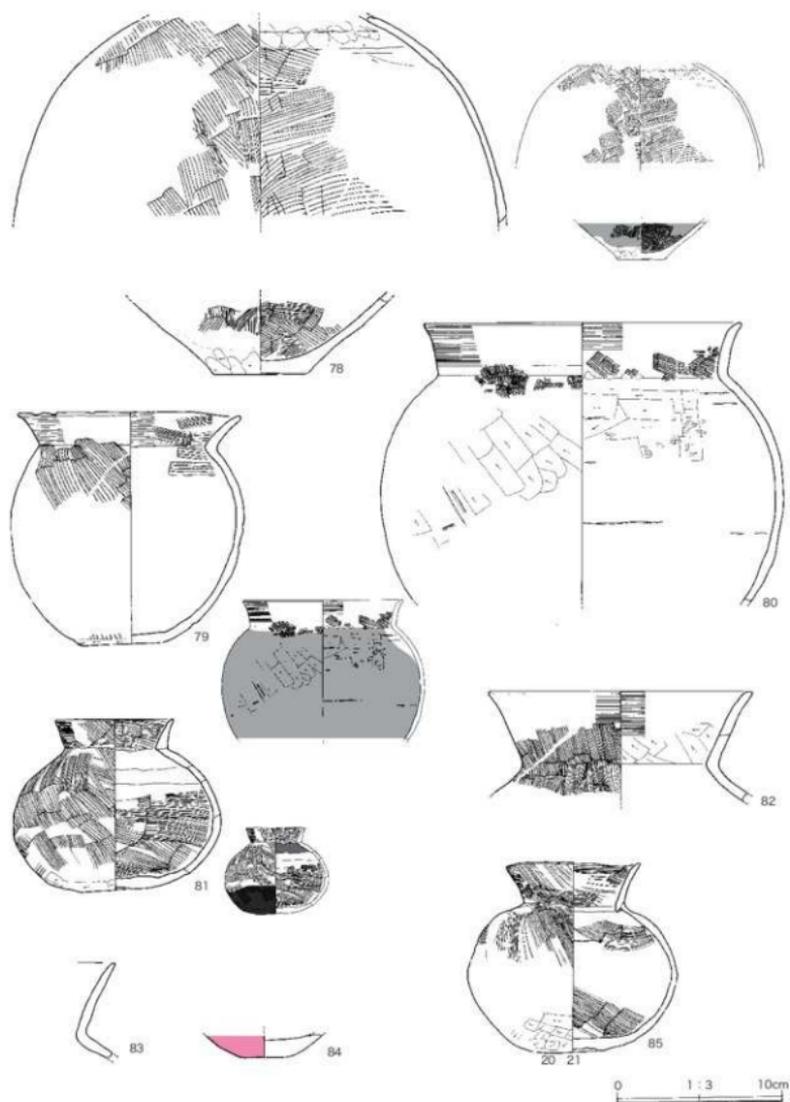
第65図 遺物実測図(8)



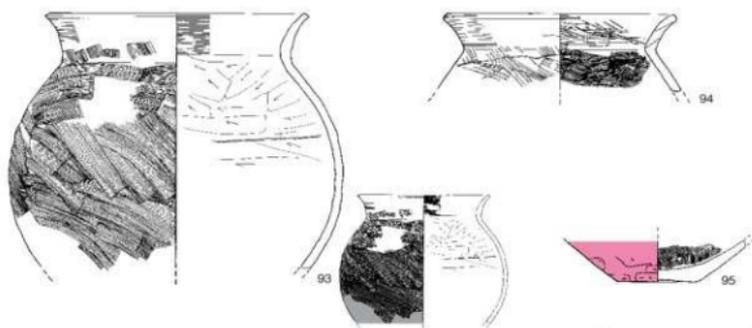
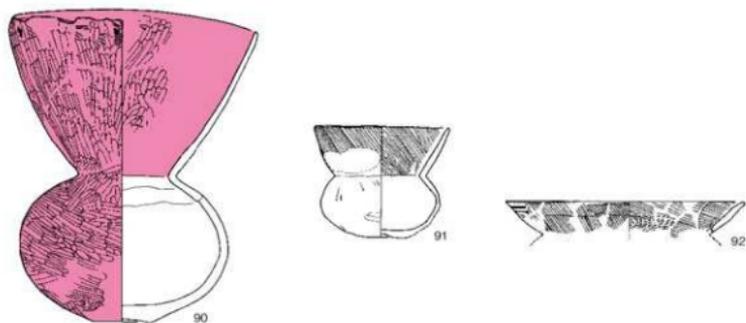
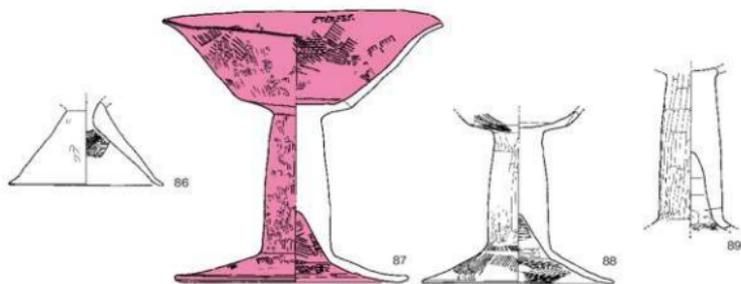
第66図 遺物実測図(9)



第67図 遺物実測図(10)

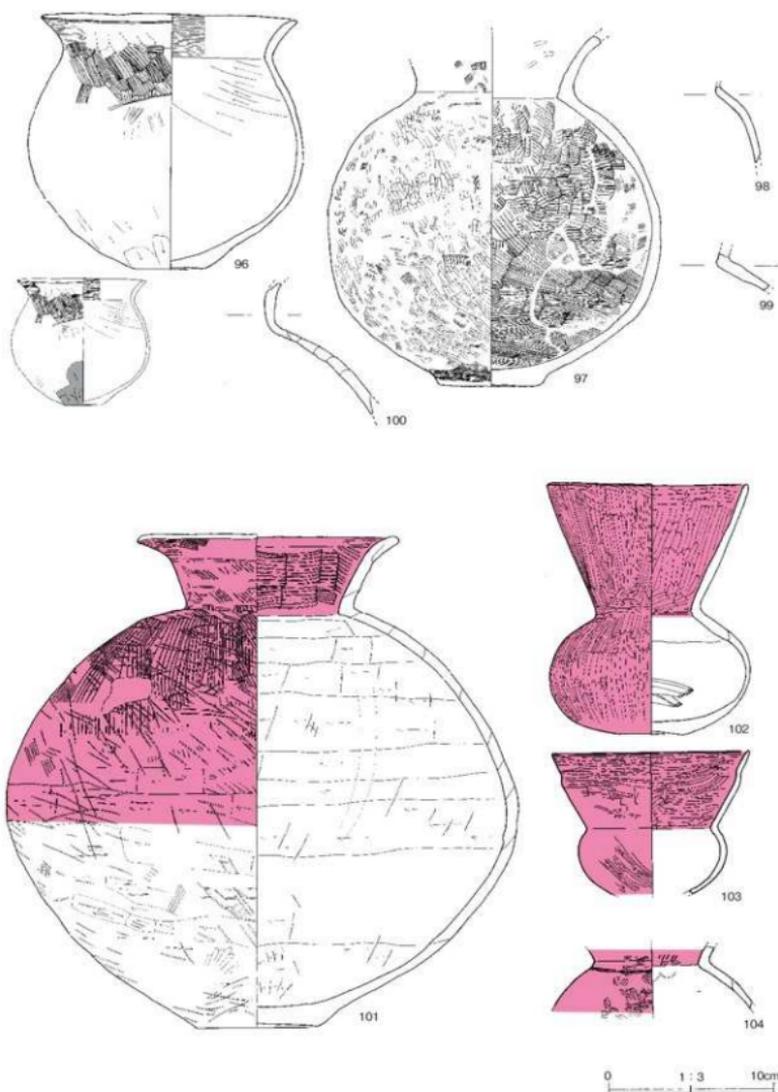


第68図 遺物実測図(11)

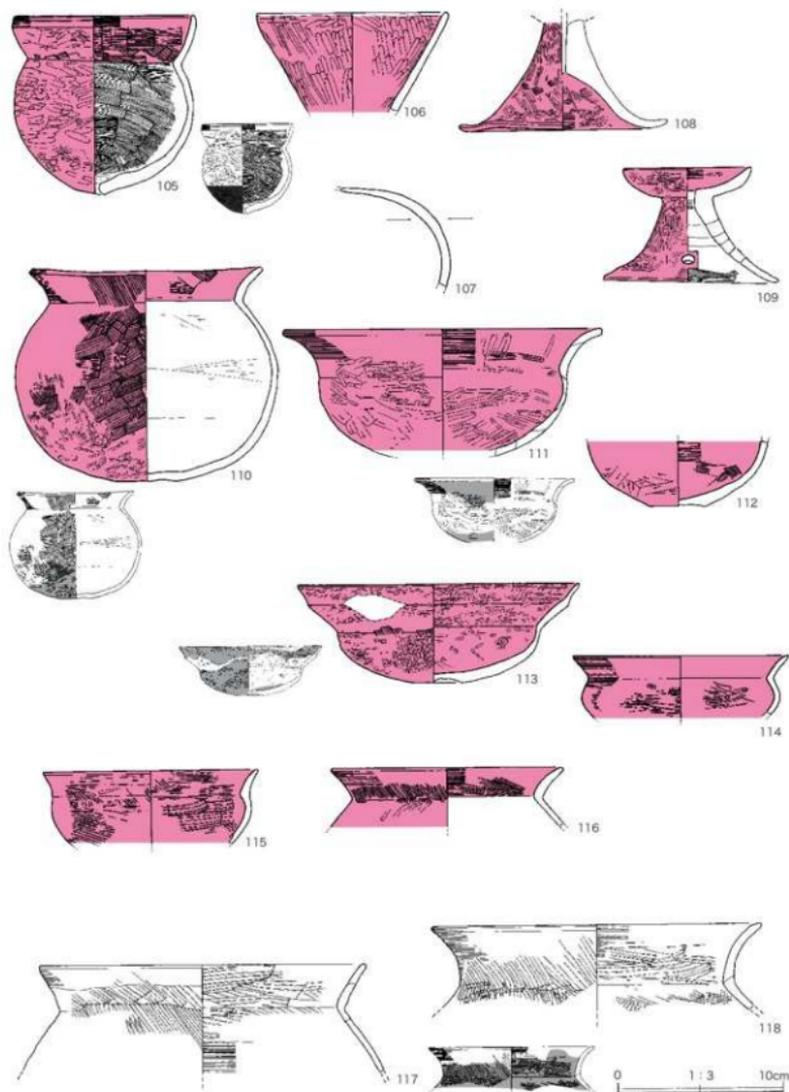


0 1:3 10cm

第69図 遺物実測図(12)



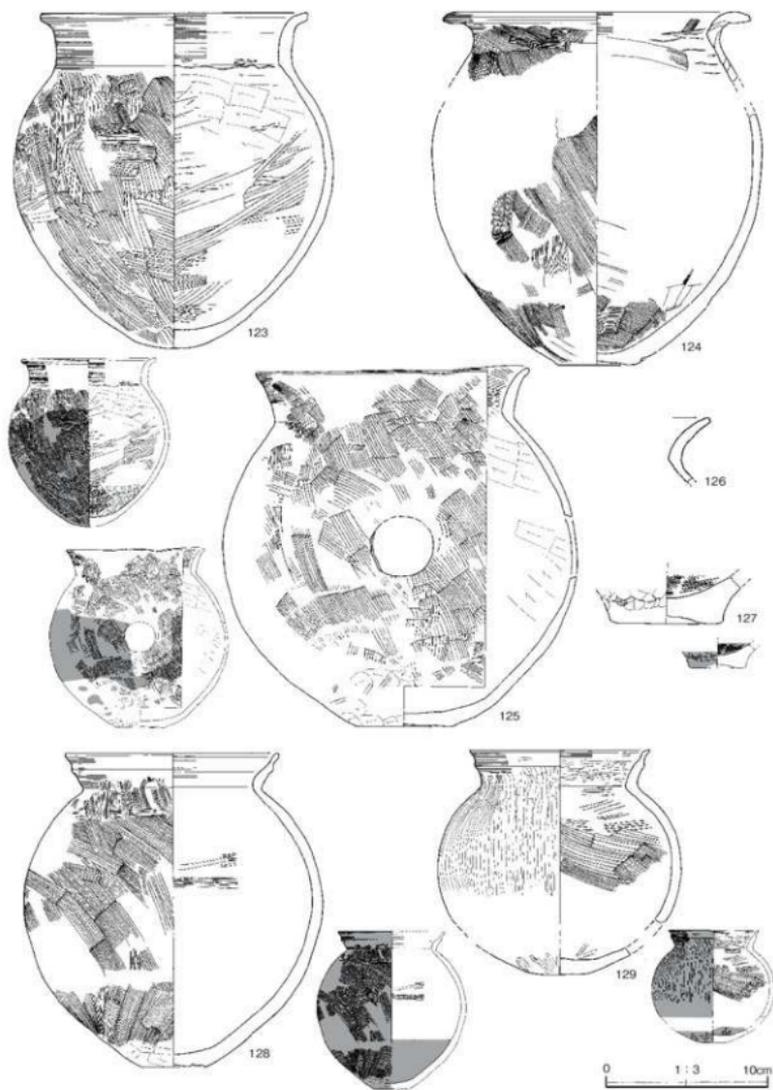
第70図 遺物実測図(13)



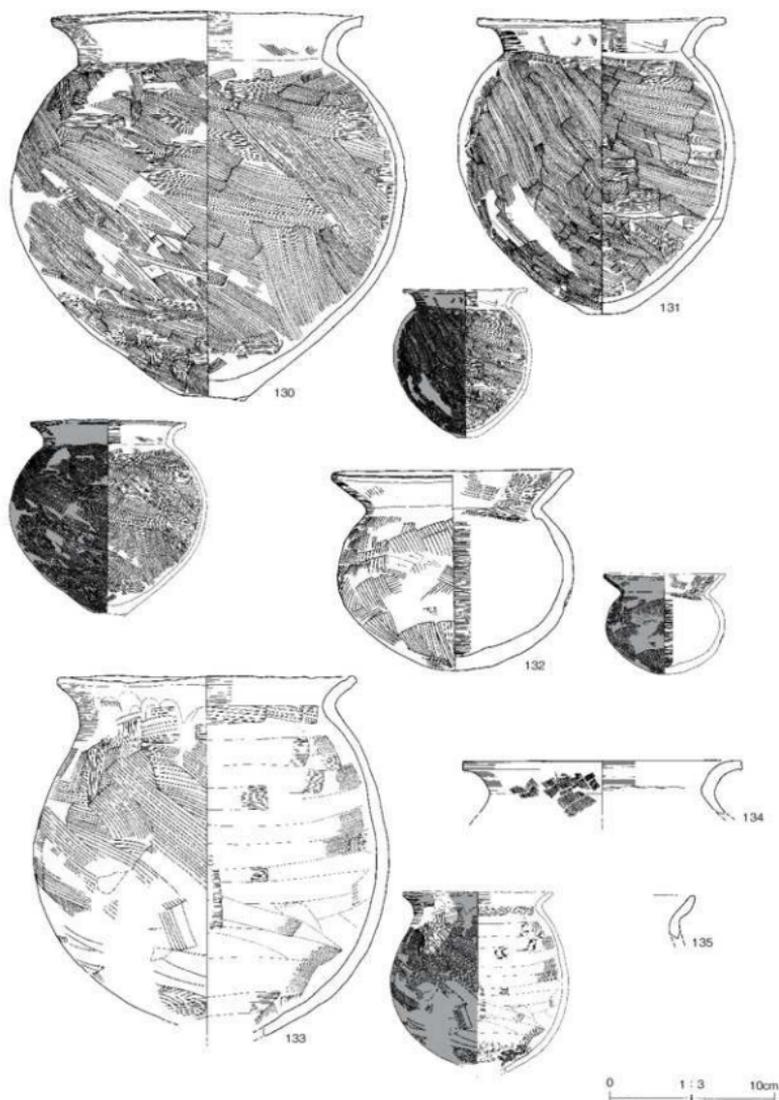
第71図 遺物実測図(14)



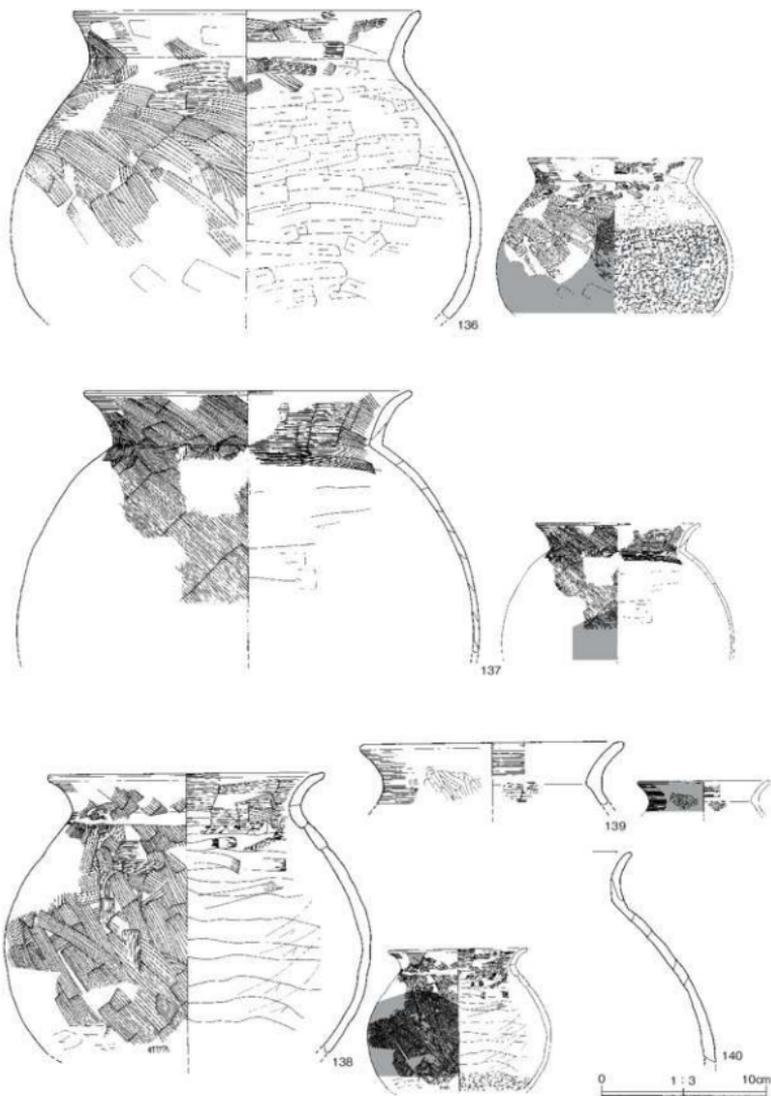
第72図 遺物実測図(15)



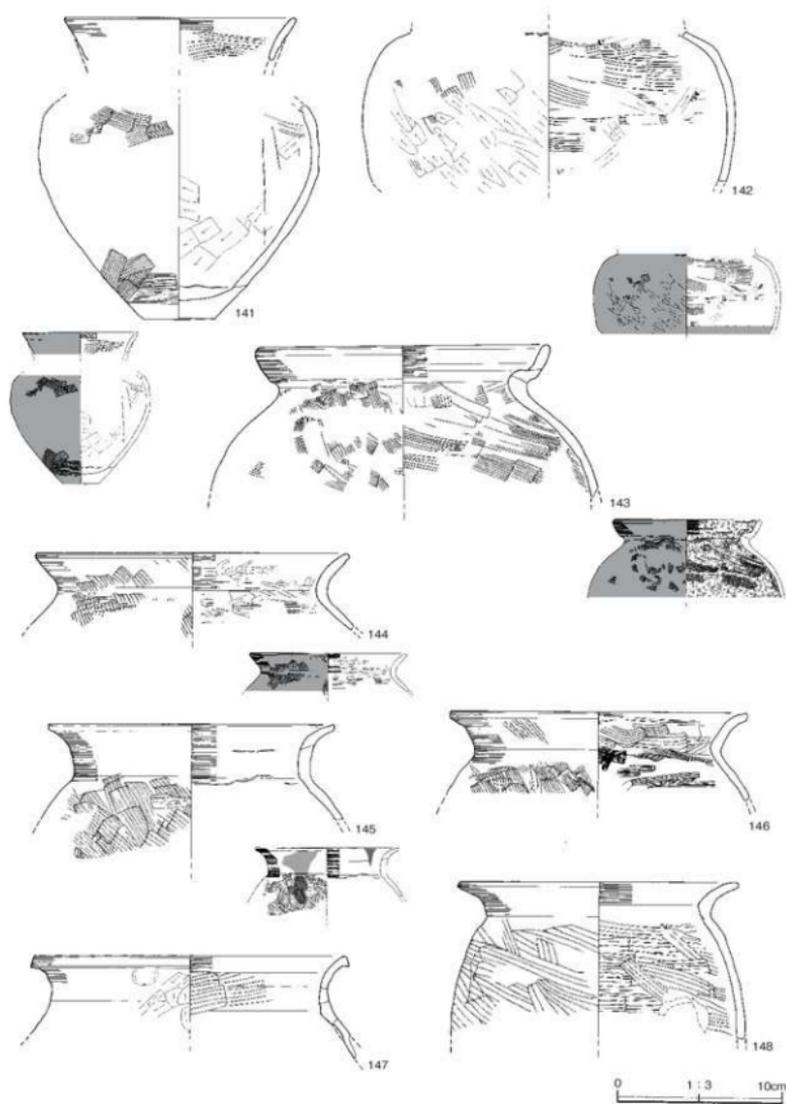
第73図 遺物実測図(16)



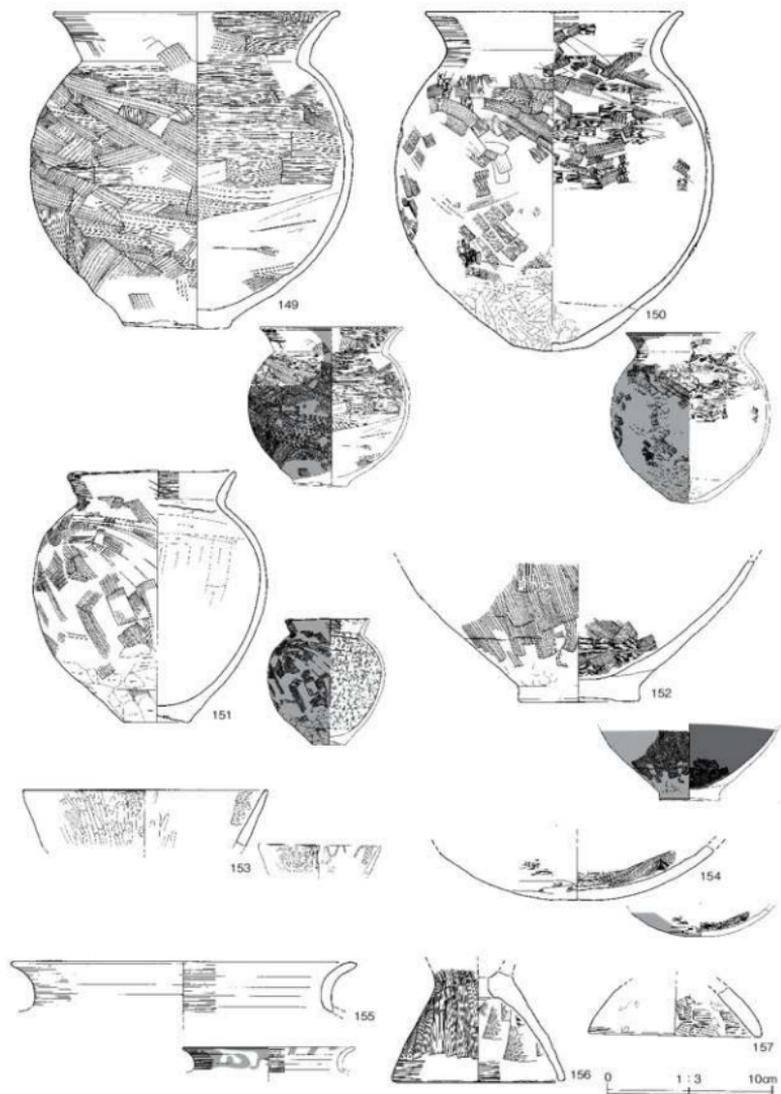
第74図 遺物実測図(17)



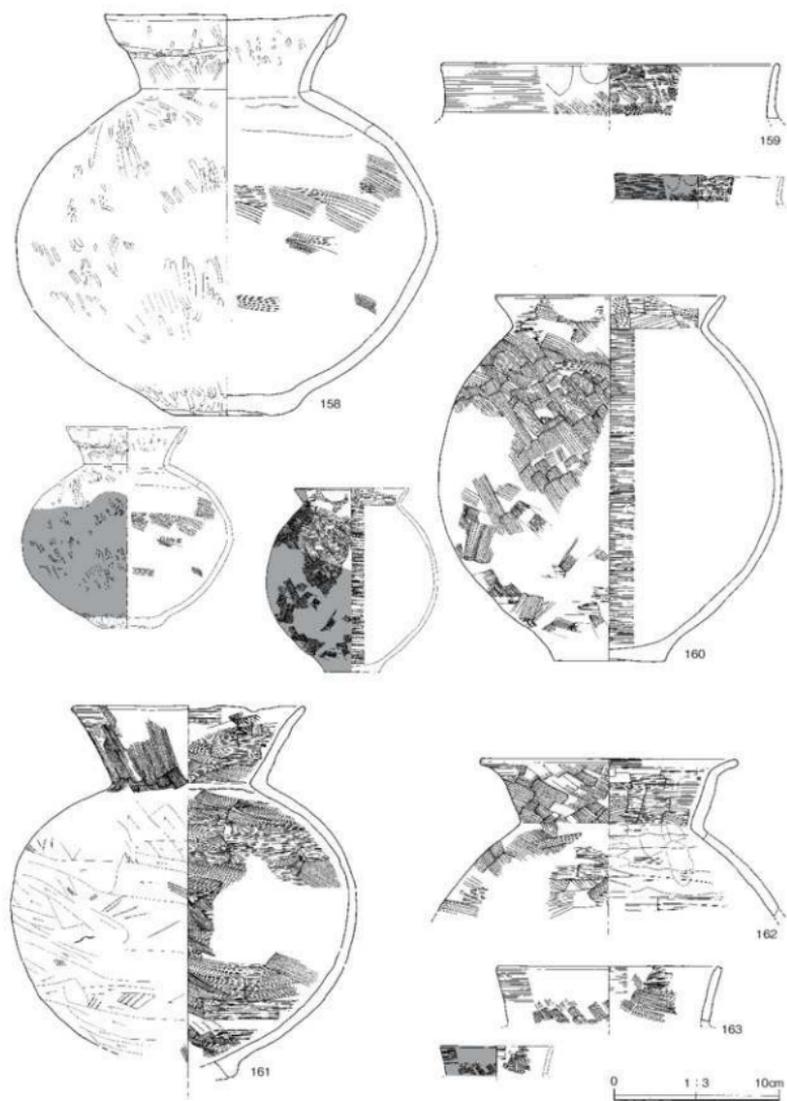
第75図 遺物実測図(18)



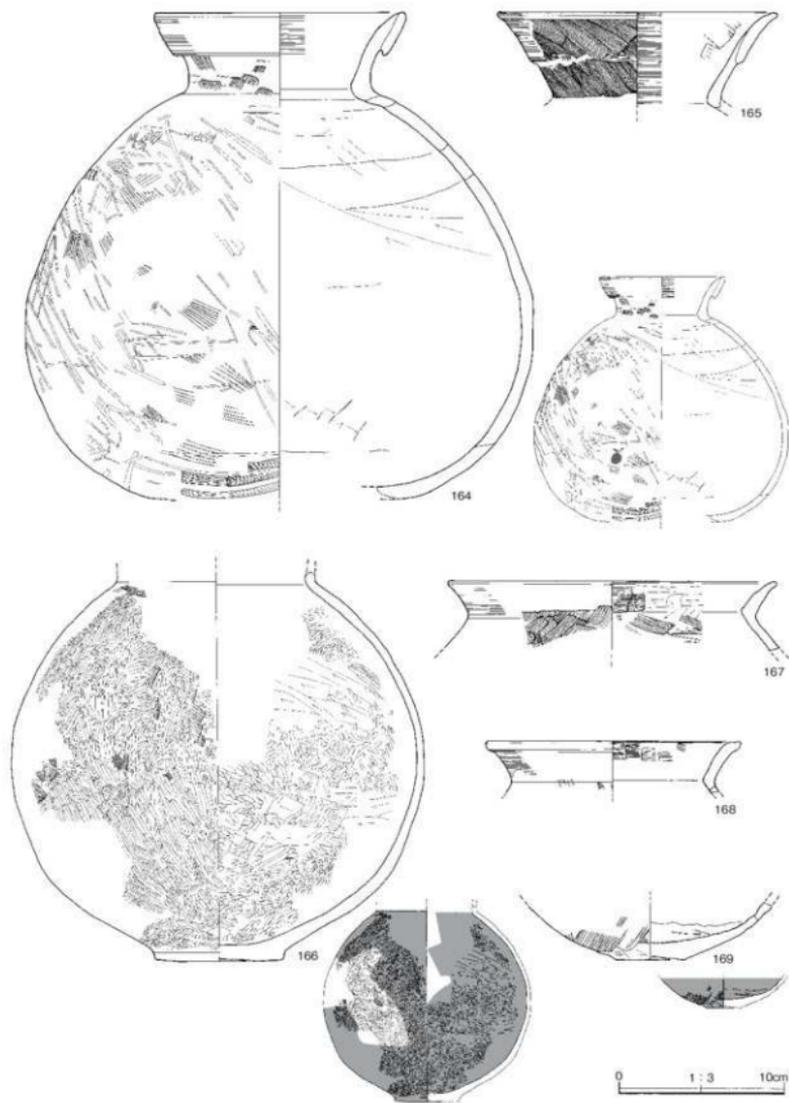
第76図 遺物実測図(19)



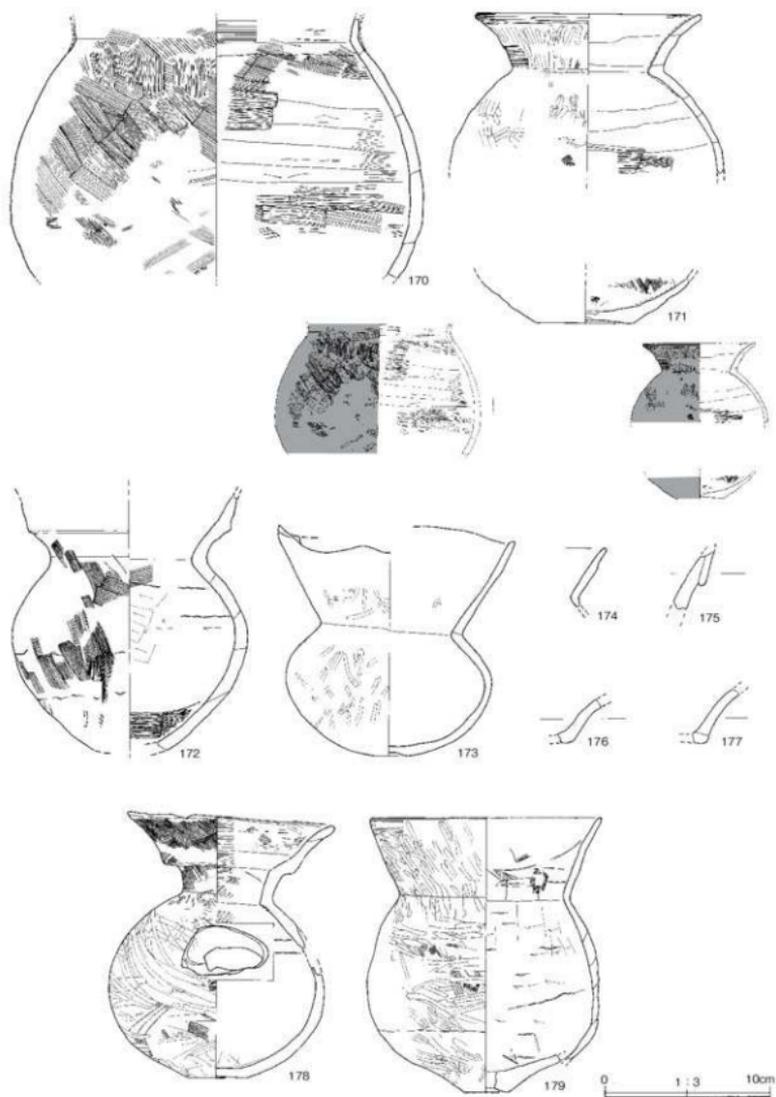
第77図 遺物実測図(20)



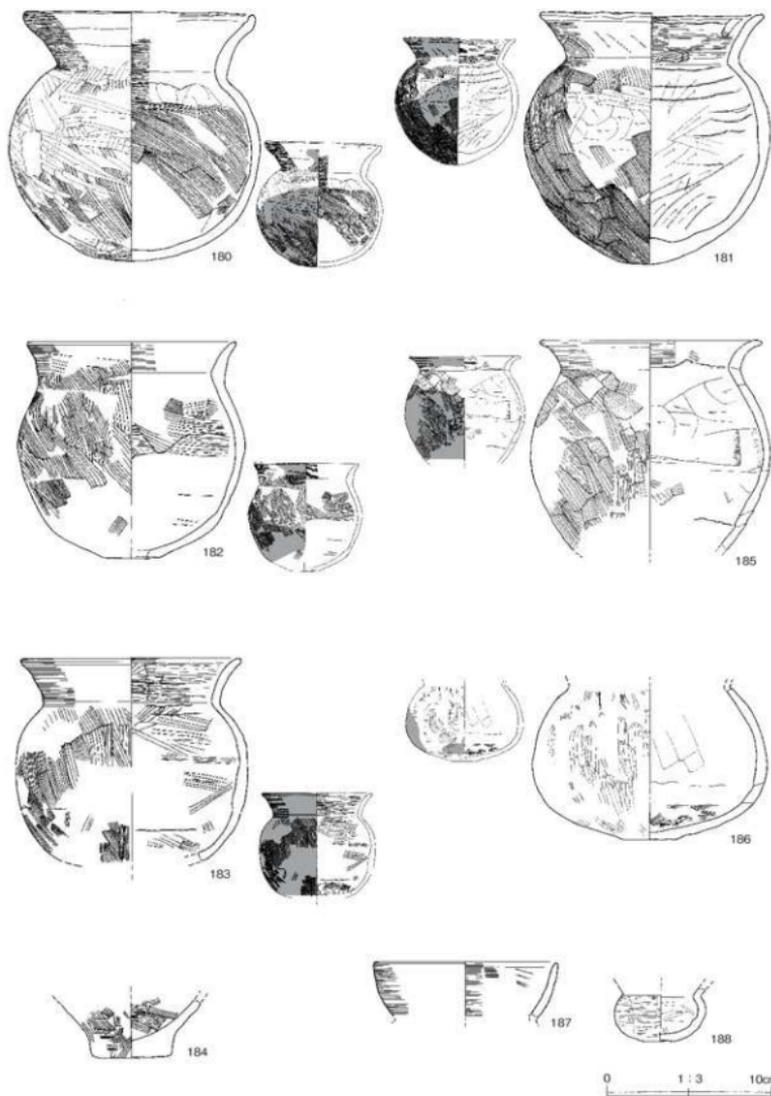
第78図 遺物実測図(21)



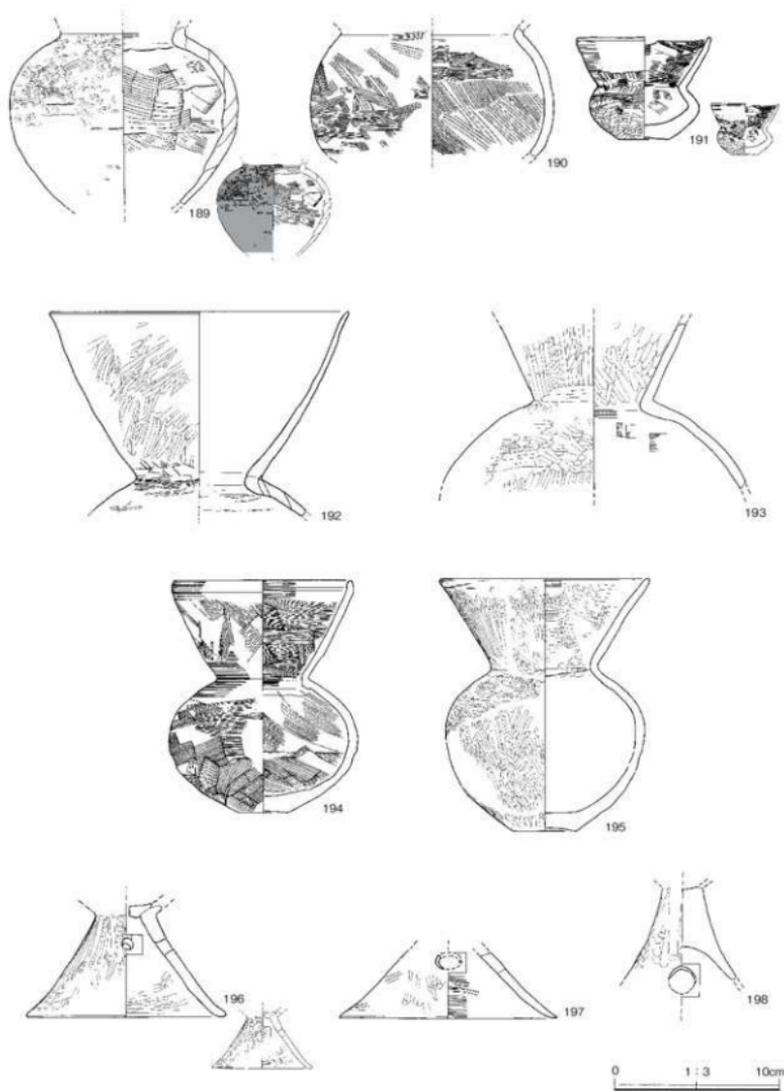
第79図 遺物実測図(22)



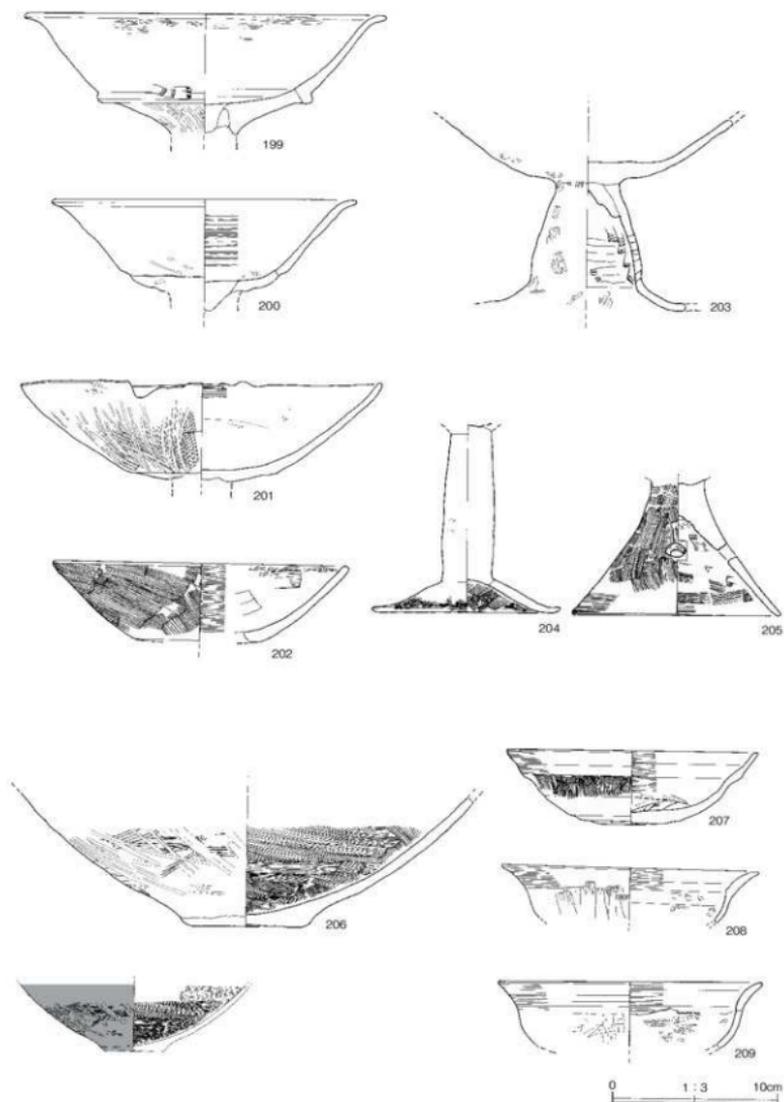
第80図 遺物実測図(23)



第81図 遺物実測図(24)

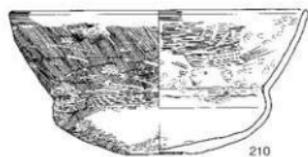


第82図 遺物実測図(25)

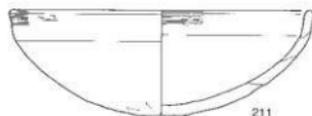


第83図 遺物実測図(26)

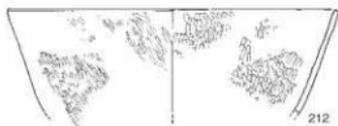
V 出土した遺物



210



211



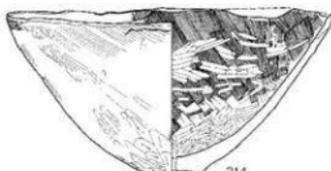
212



213



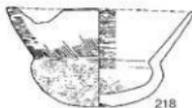
215



214



216



218



219



217



220



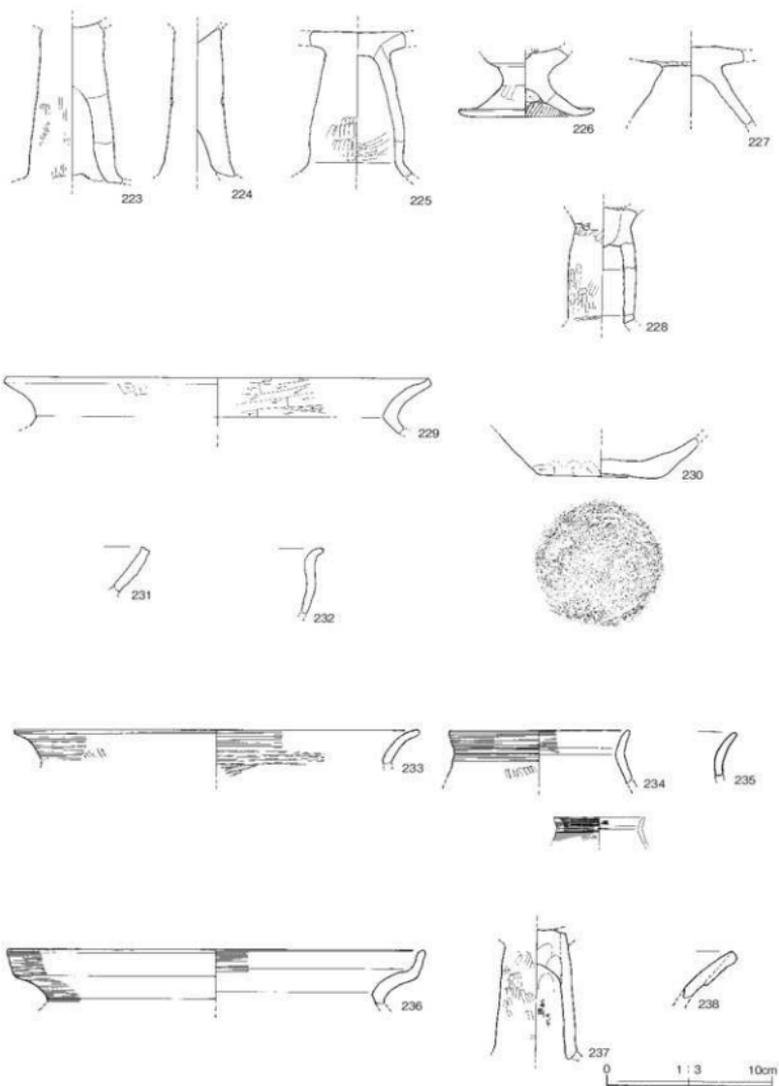
221



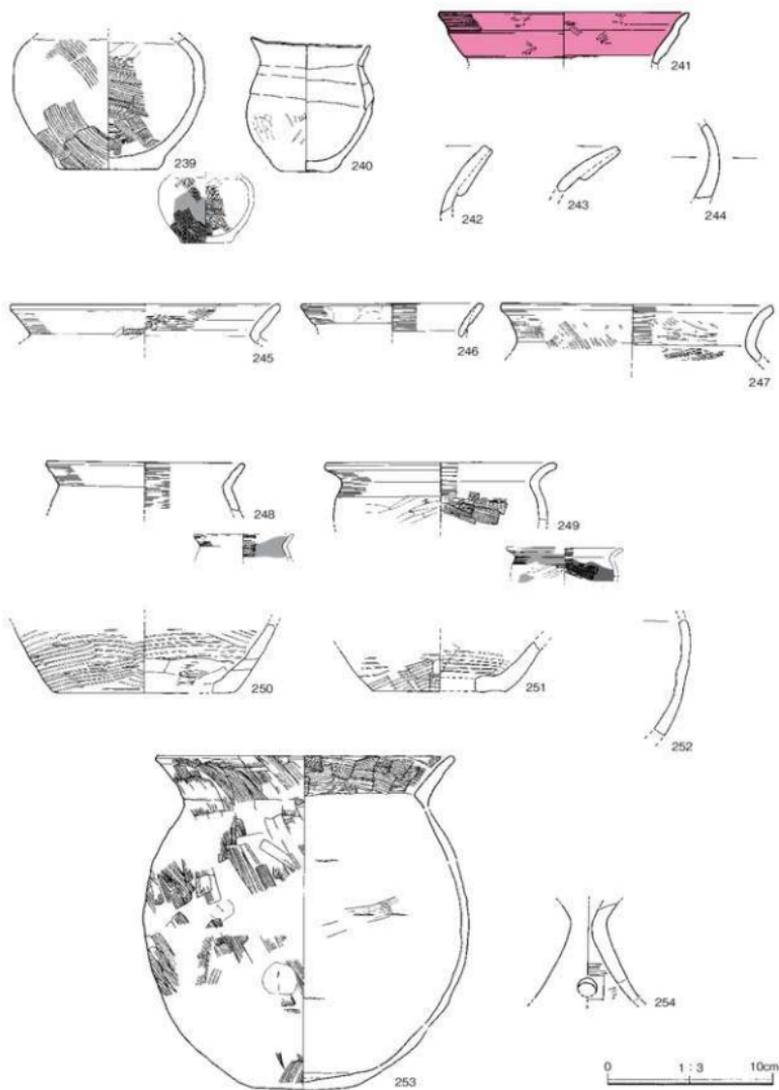
222

0 1:3 10cm

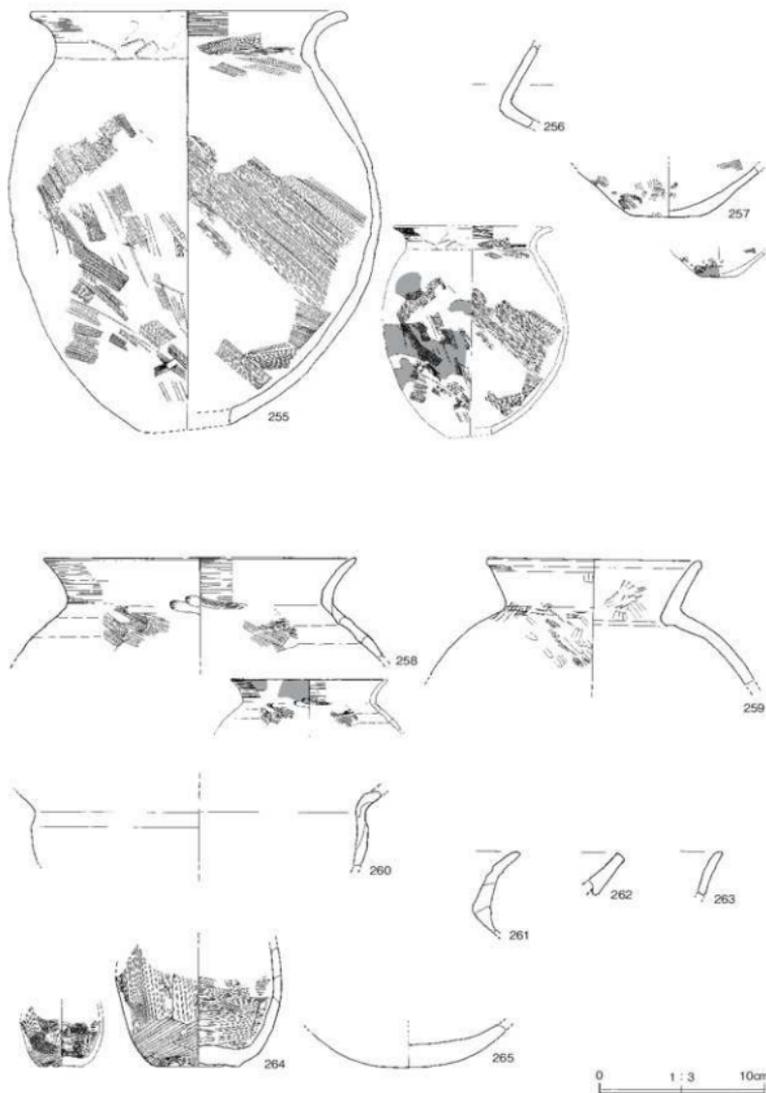
第84図 遺物実測図(27)



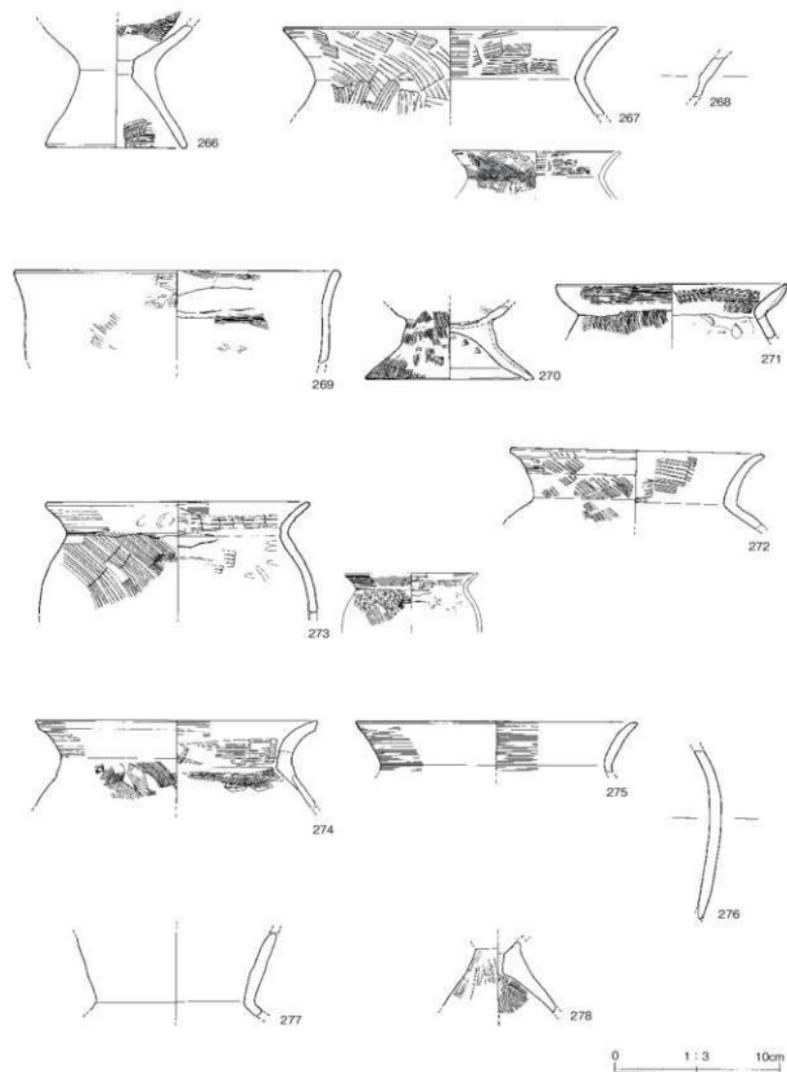
第85図 遺物実測図(28)



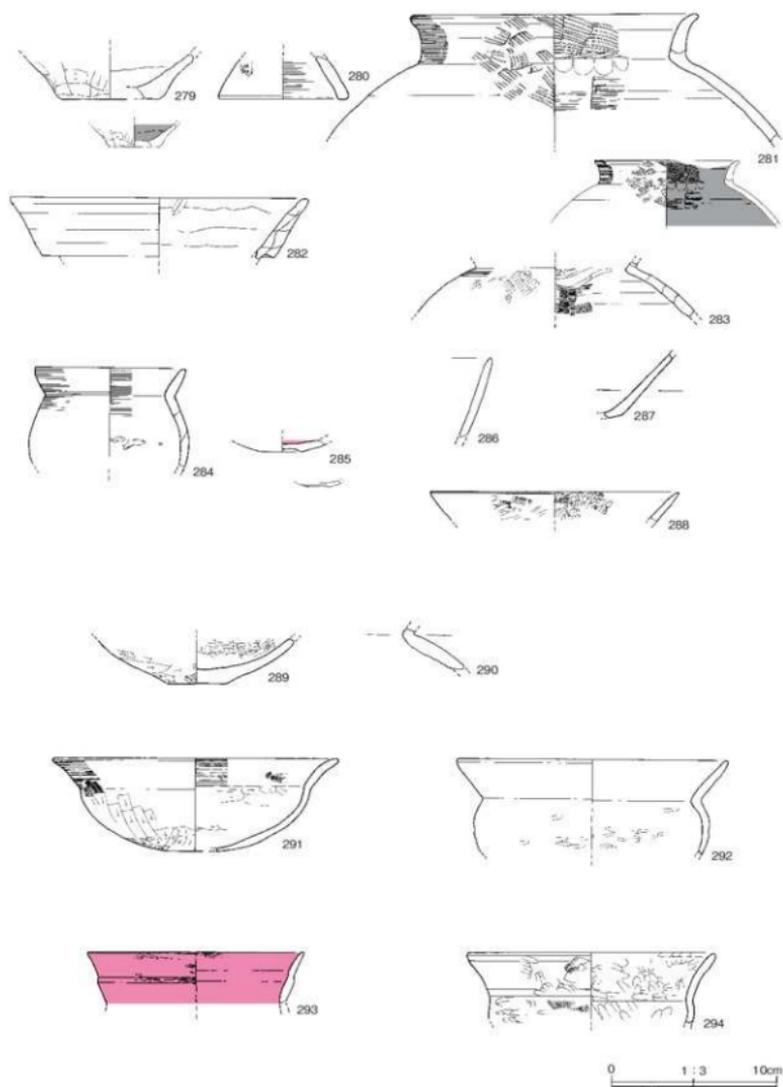
第86図 遺物実測図(29)



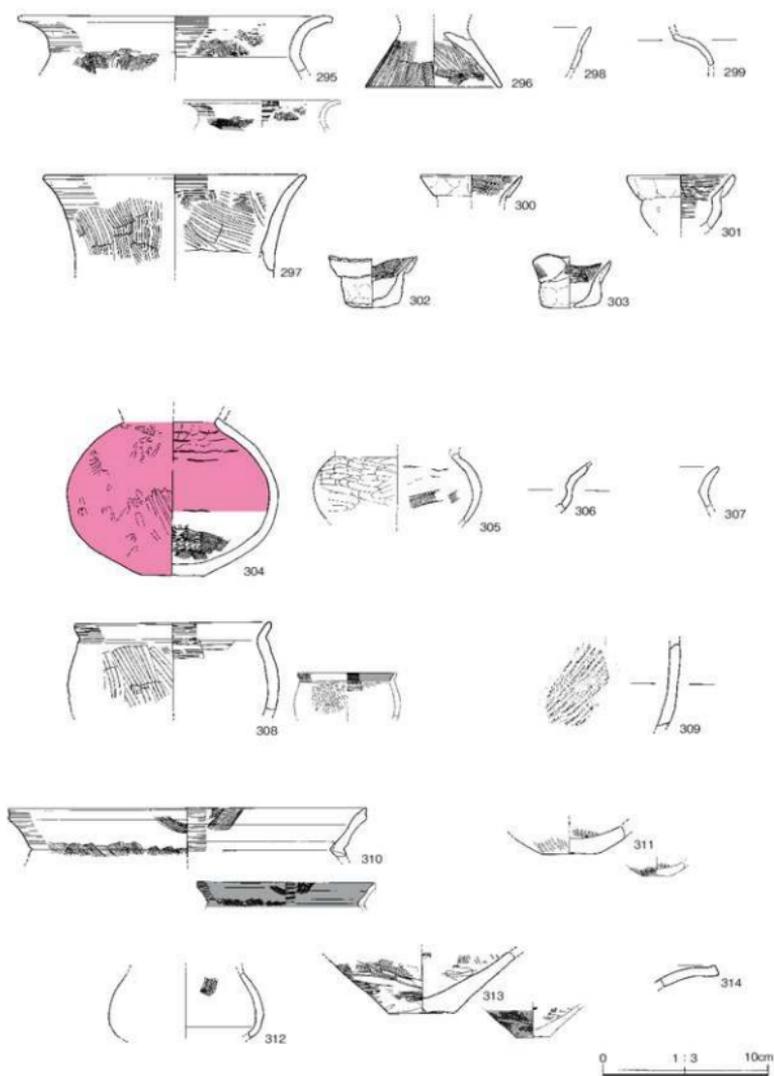
第87図 遺物実測図(30)



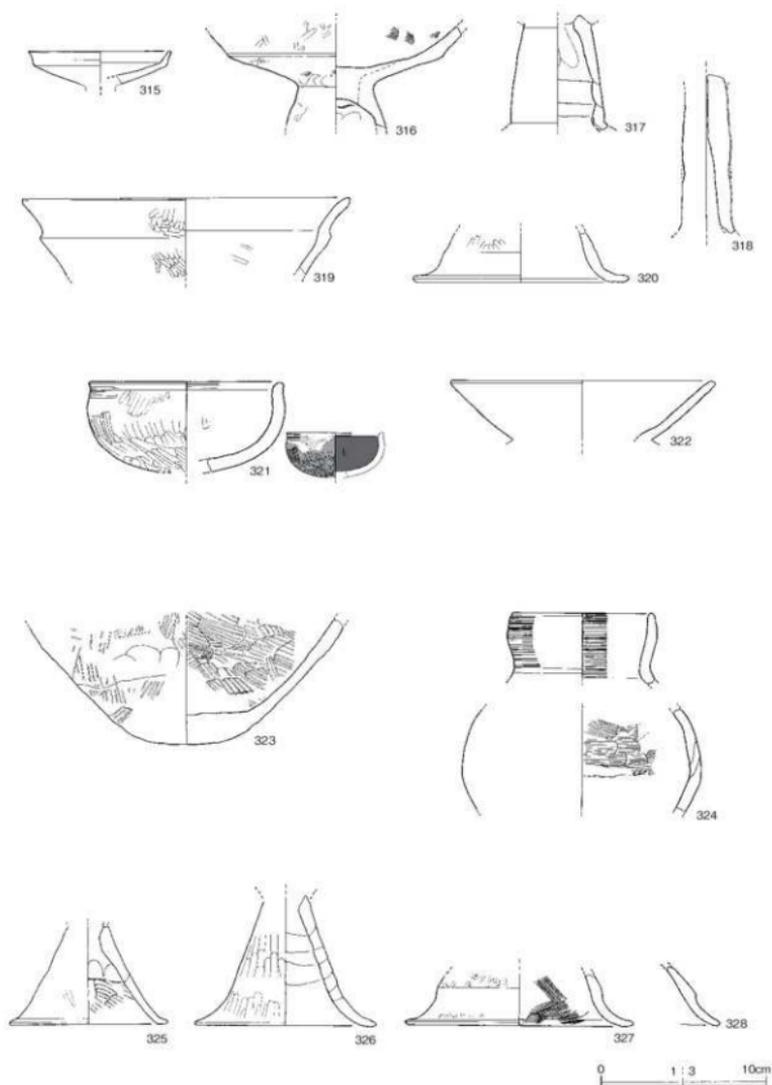
第88図 遺物実測図(31)



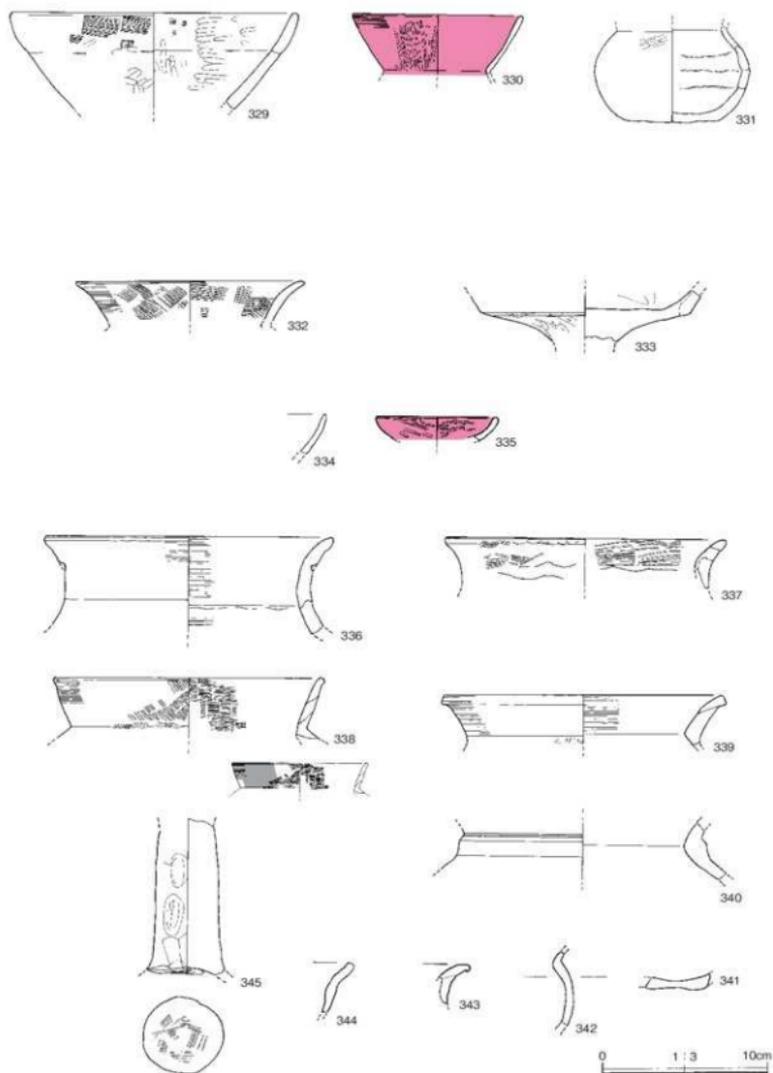
第89図 遺物実測図(32)



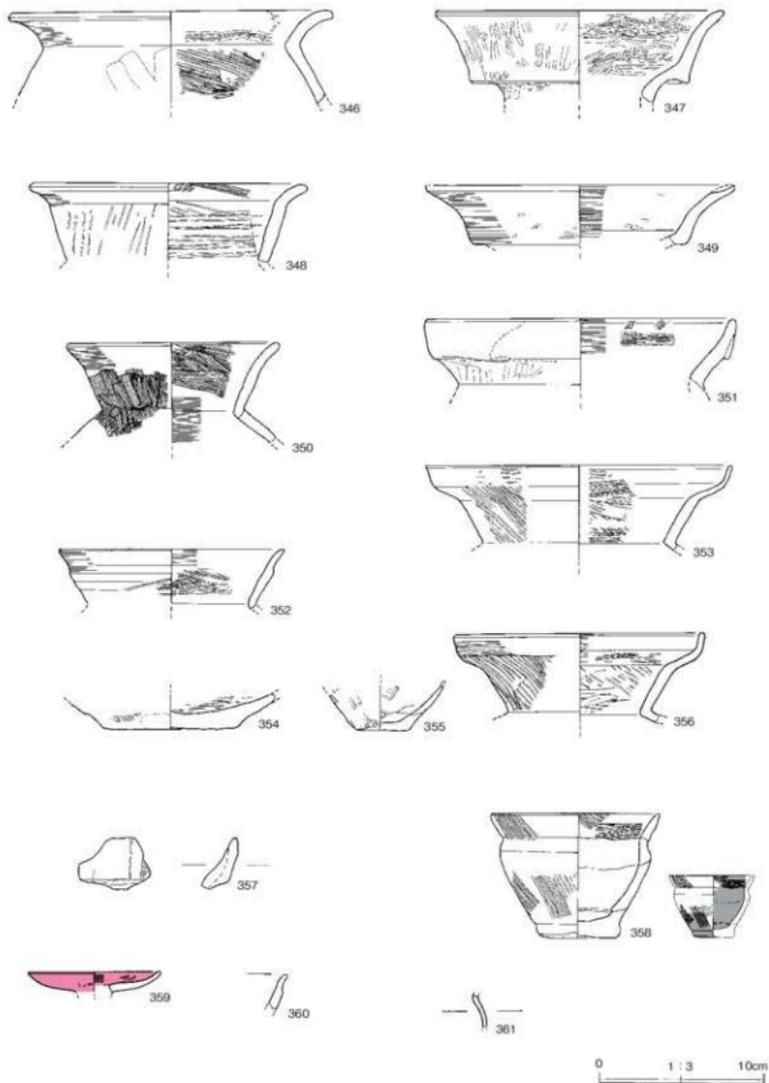
第90図 遺物実測図(33)



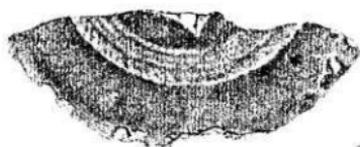
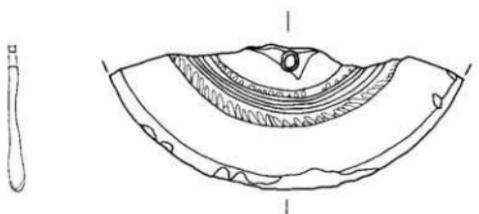
第91図 遺物実測図(34)



第92図 遺物実測図(35)



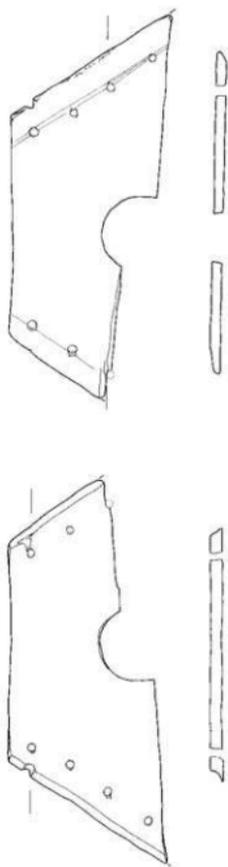
第93図 遺物実測図(36)



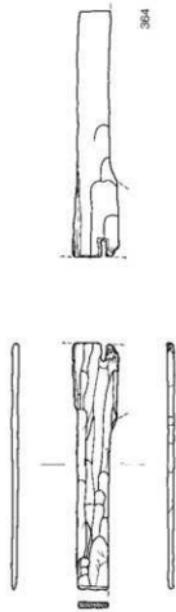
362



第94図 遺物実測図(37)



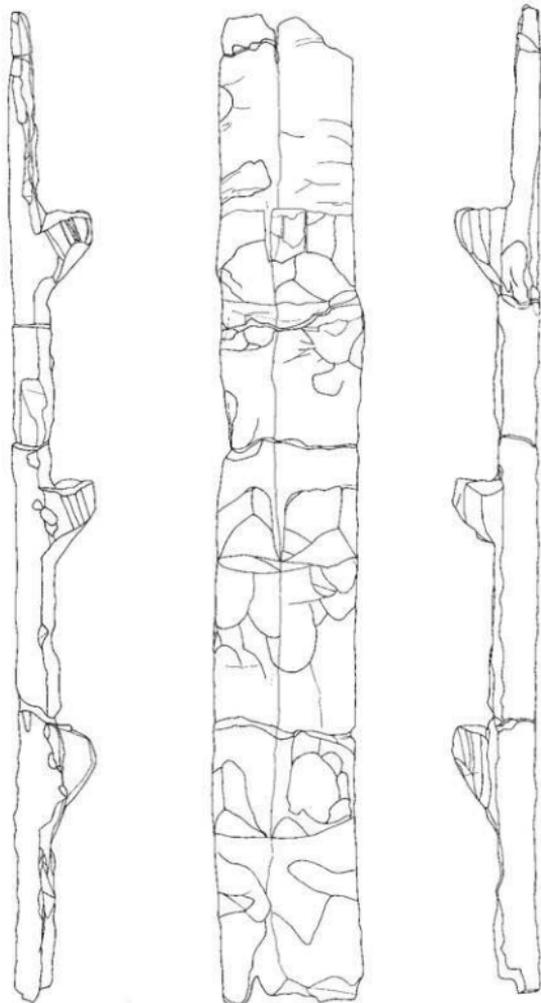
363



364



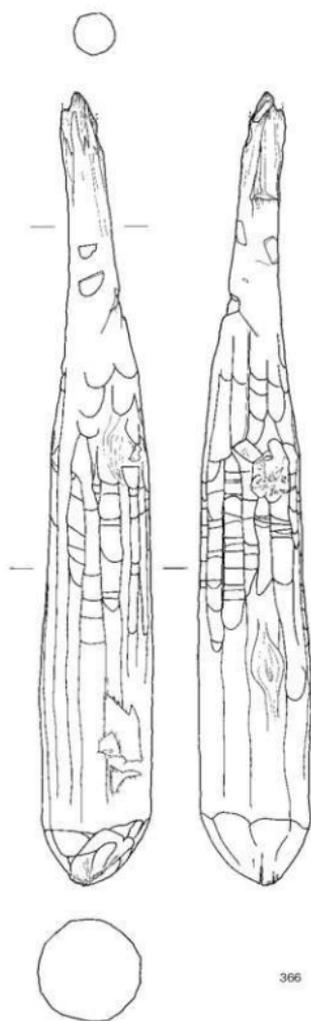
第95図 遺物実測図(36)



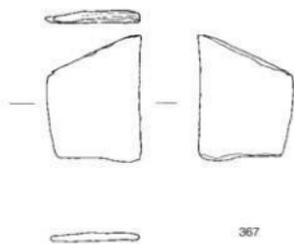
365

0 1:6 10cm

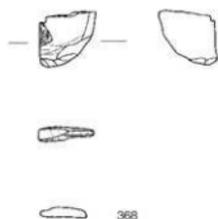
第96図 遺物実測図(39)



366



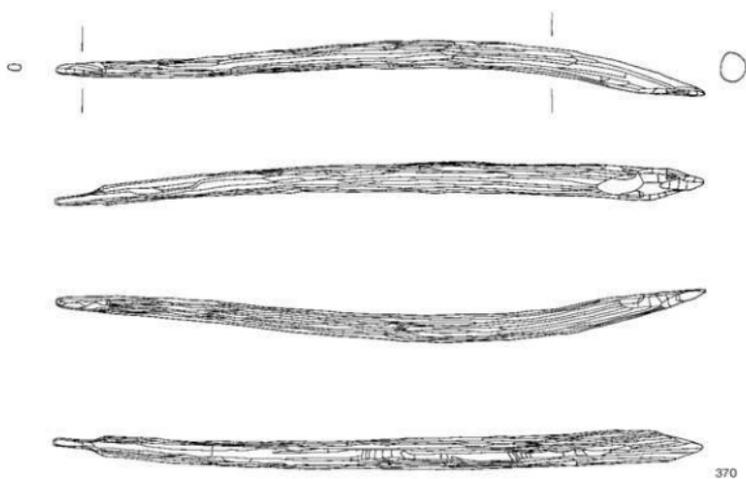
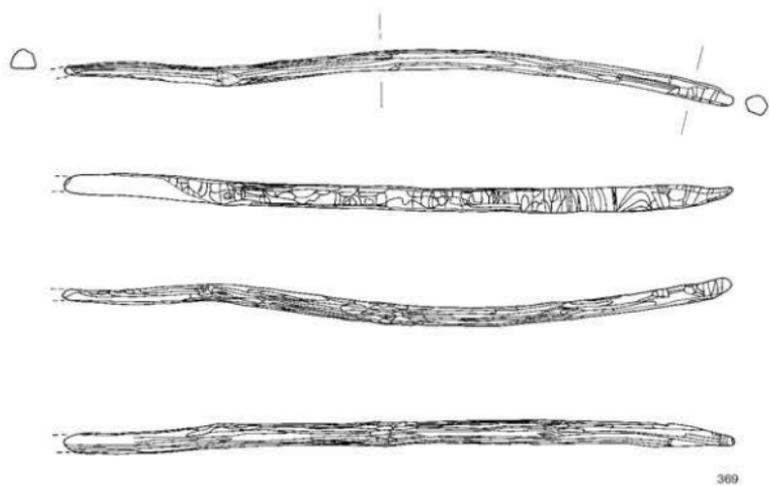
367



368

0 1:4 10cm

第97図 遺物実測図(40)

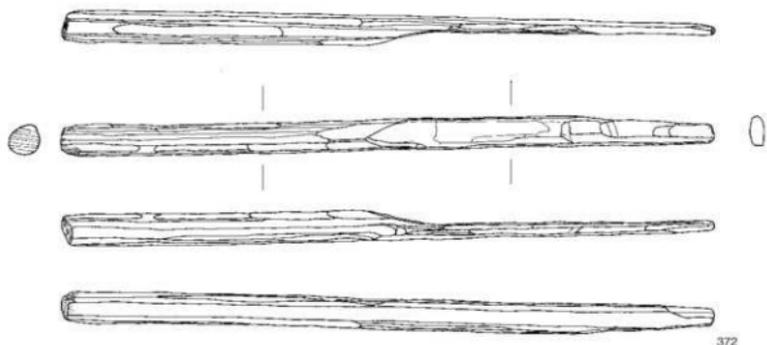
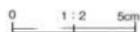


0 1:4 10cm

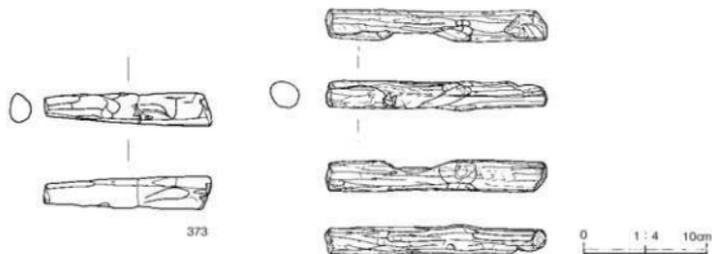
第98図 遺物実測図(41)



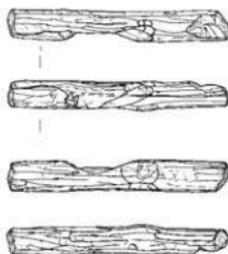
371



372



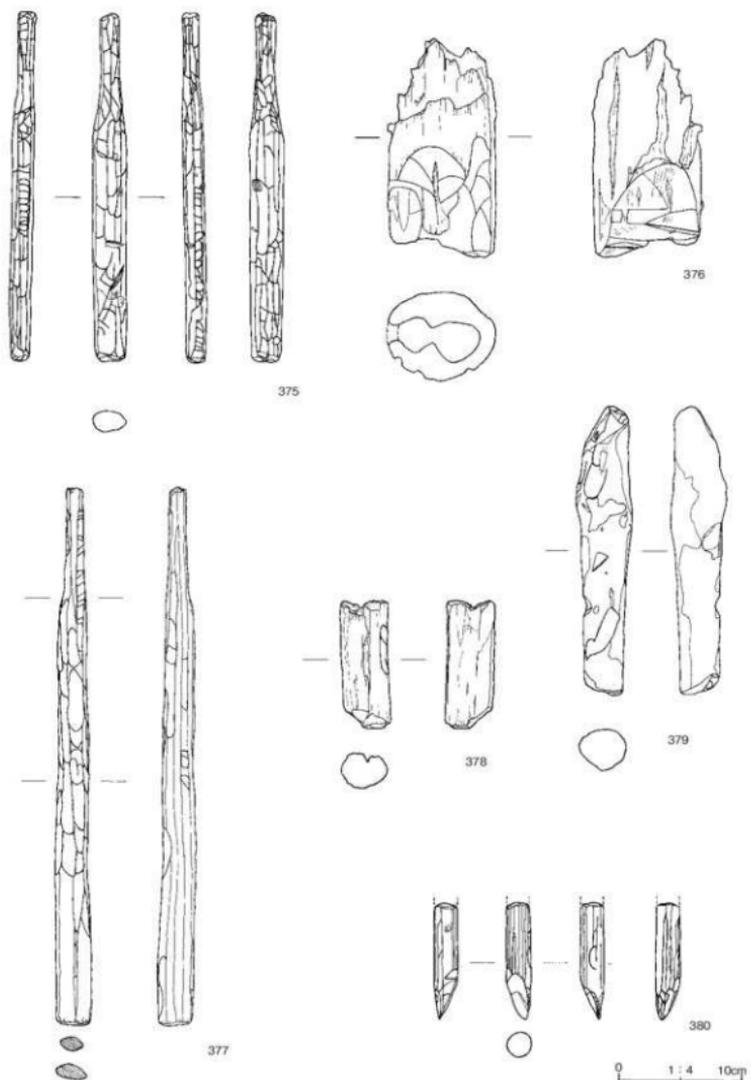
373



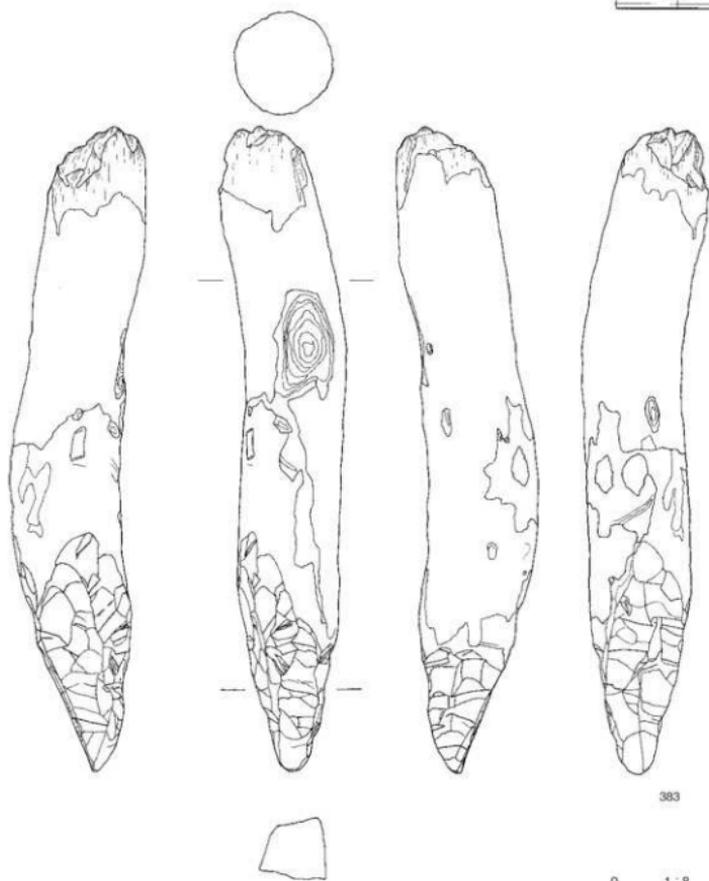
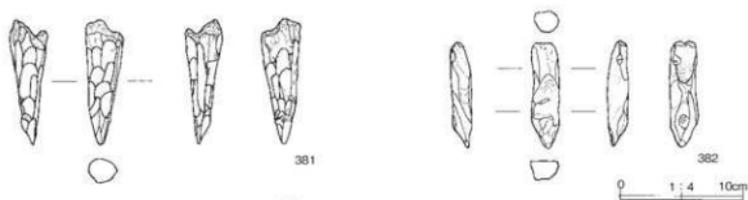
374



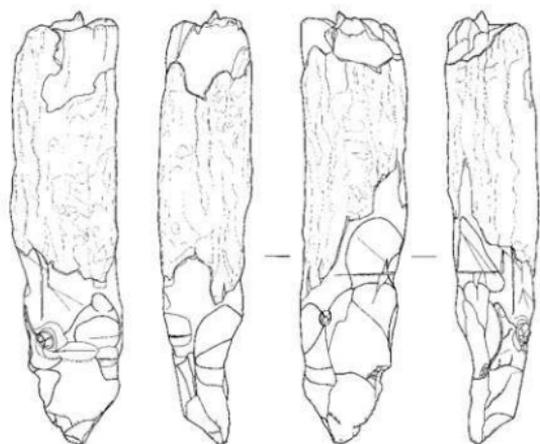
第99図 遺物実測図(42)



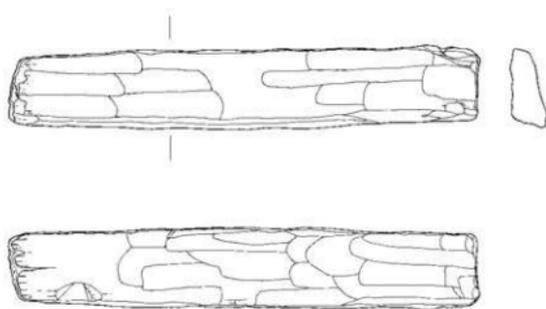
第100図 遺物実測図(43)



第101図 遺物実測図(44)



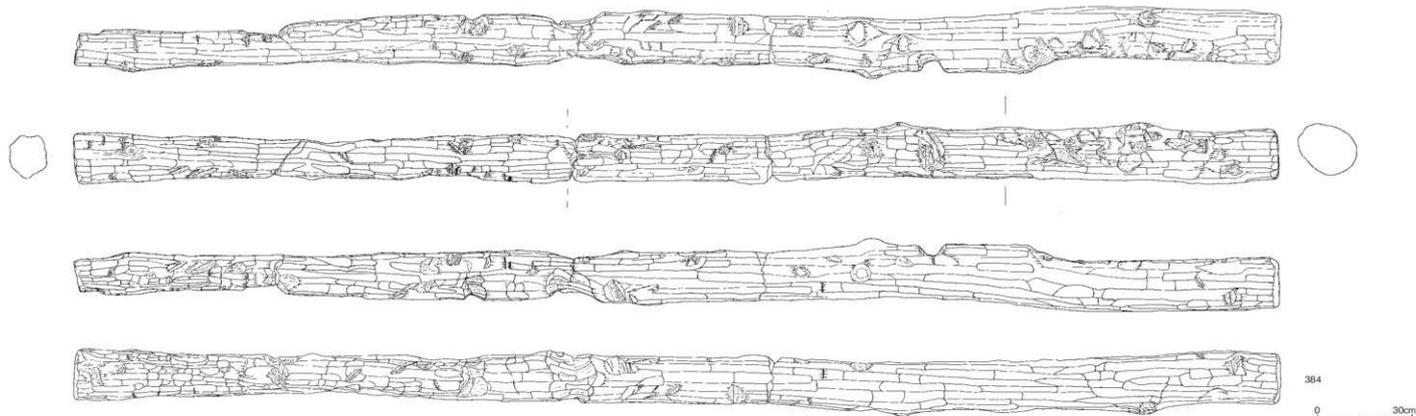
386



387

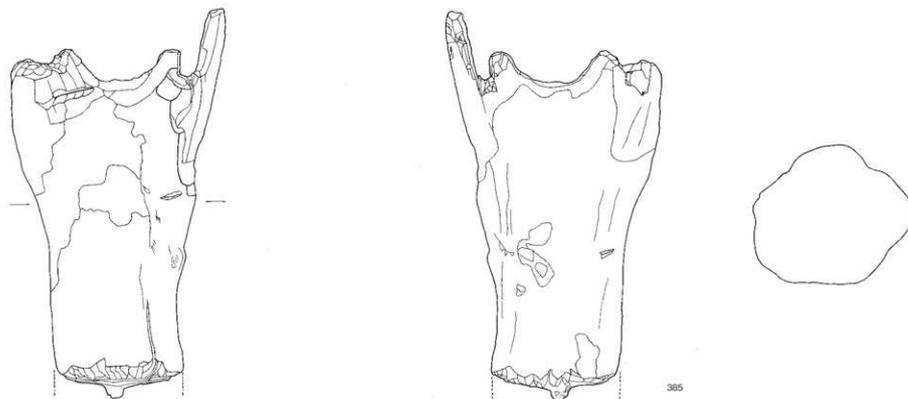


第102図 遺物実測図(46)



384

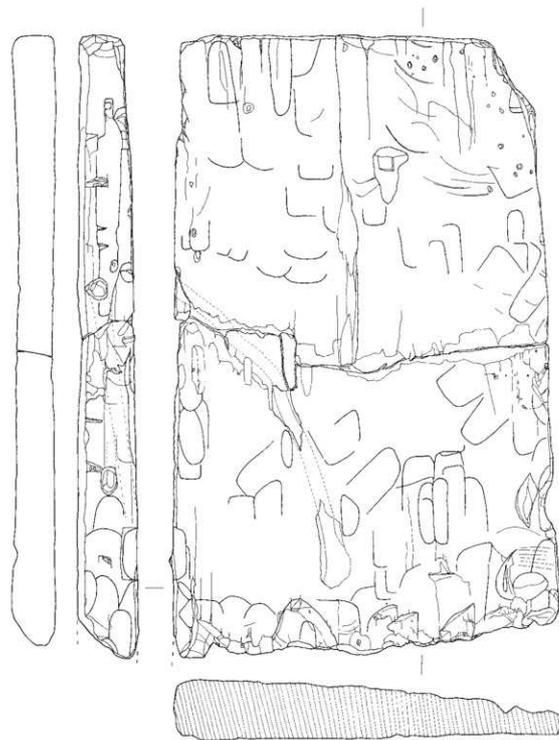
0 30cm
1:12



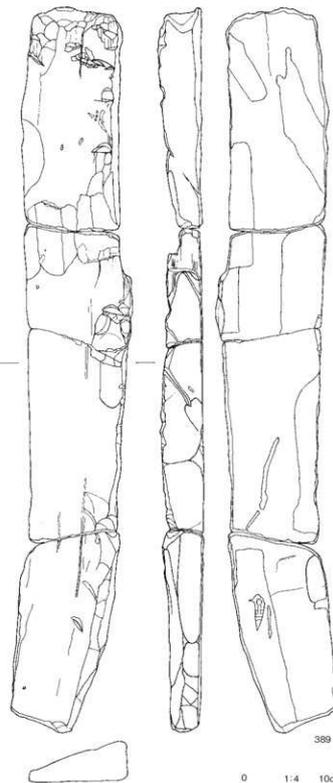
385

0 10 10cm
1:6

第103図 遺物実測図(45)



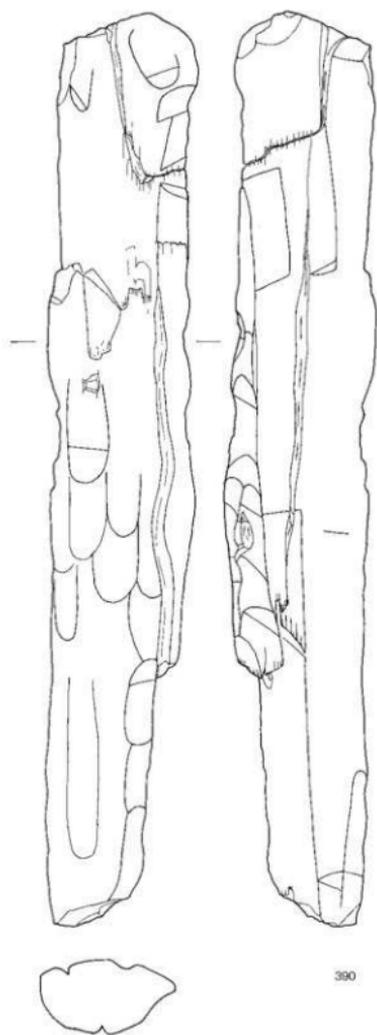
388



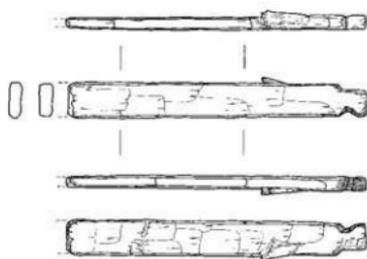
389

0 1:4 10cm

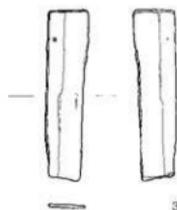
第104図 遺物実測図(47)



390



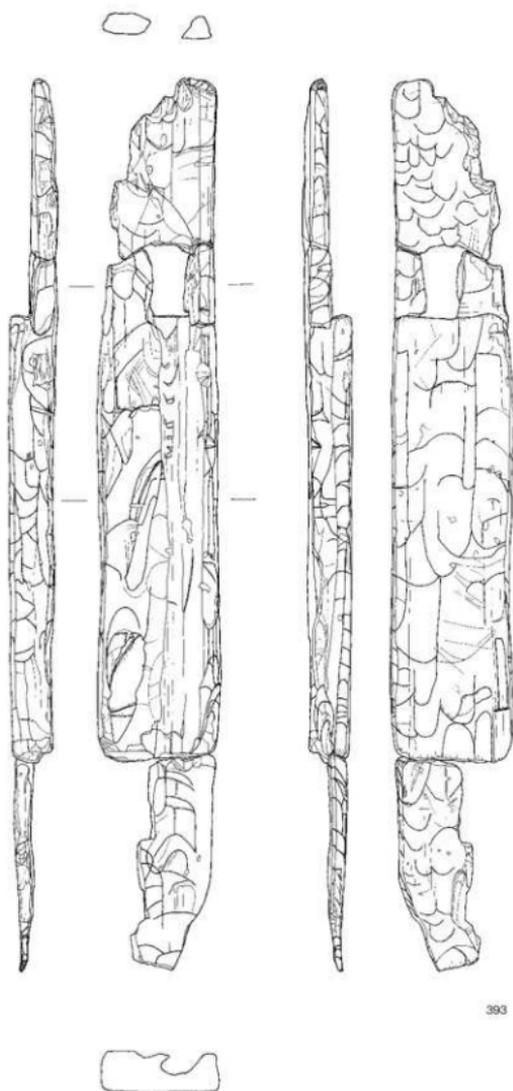
391



392

0 1:4 10cm

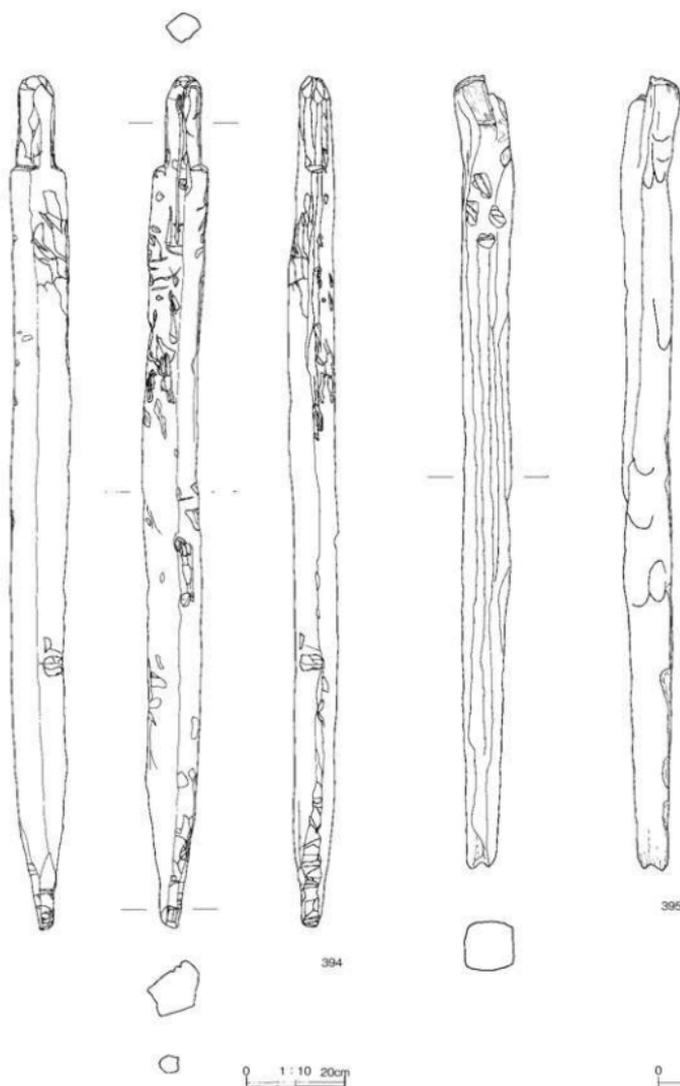
第105図 遺物実測図(48)



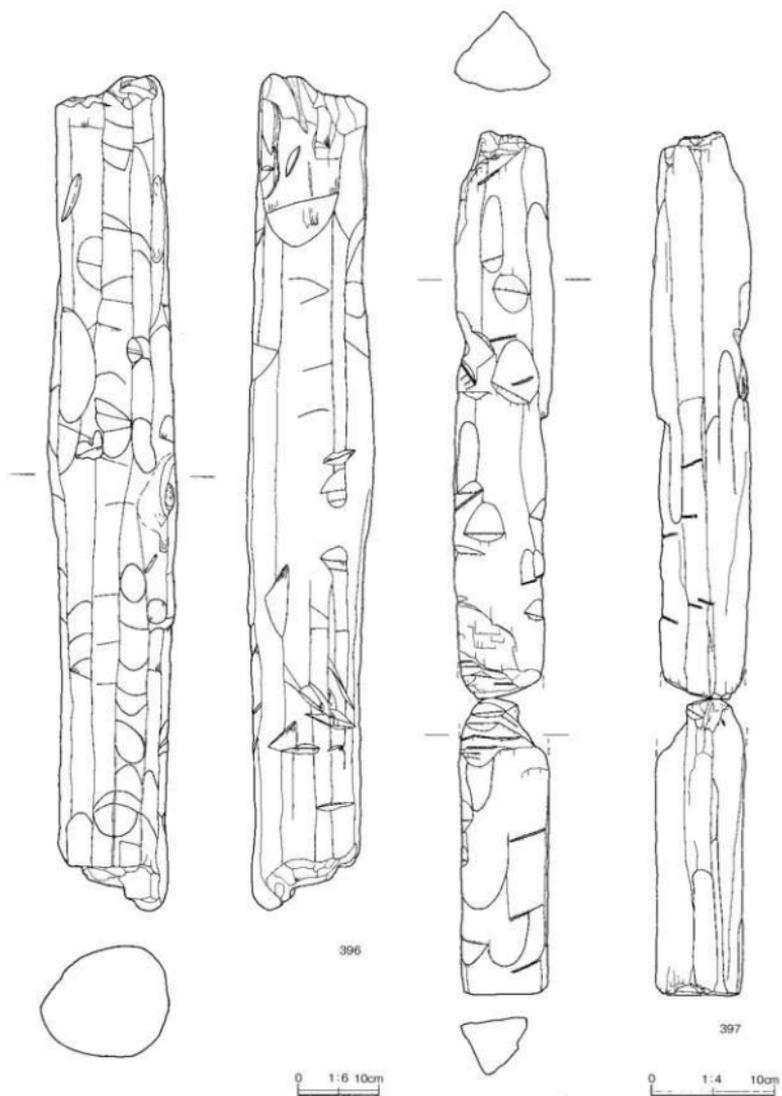
393

0 1:6 10cm

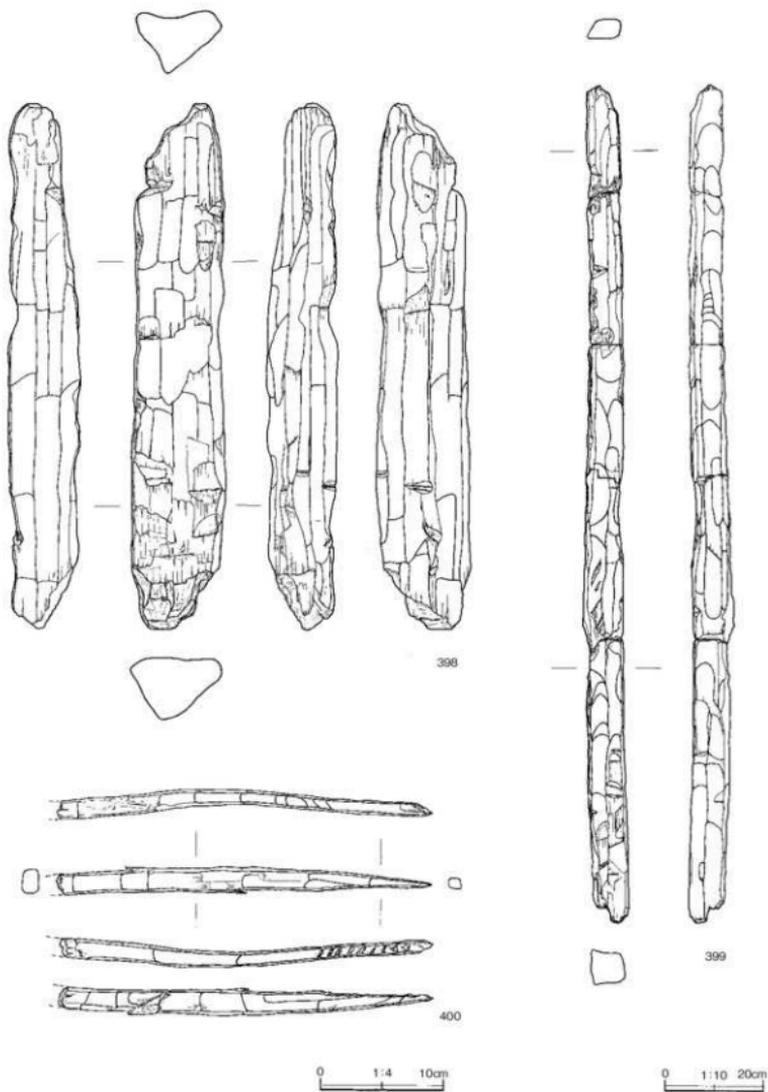
第106図 遺物実測図(49)



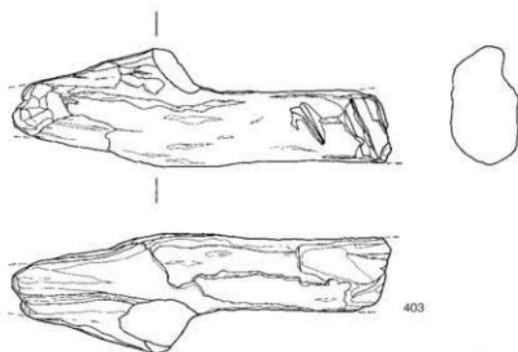
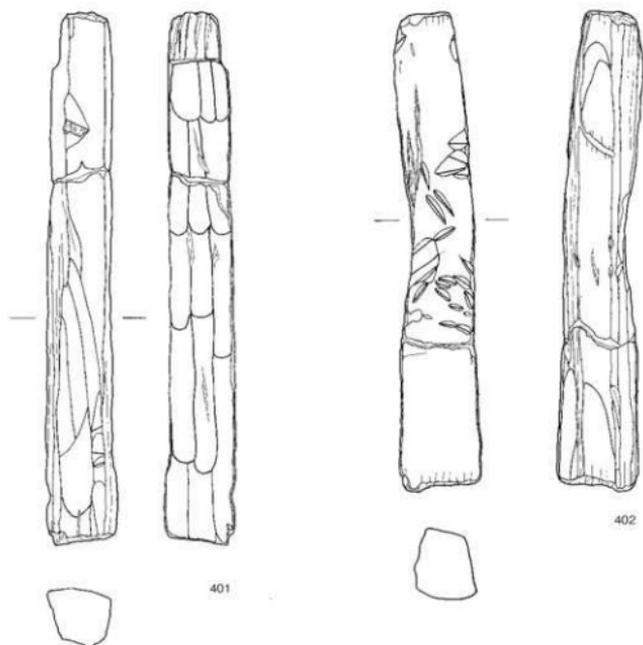
第107図 遺物実測図(50)



第108図 遺物実測図(51)

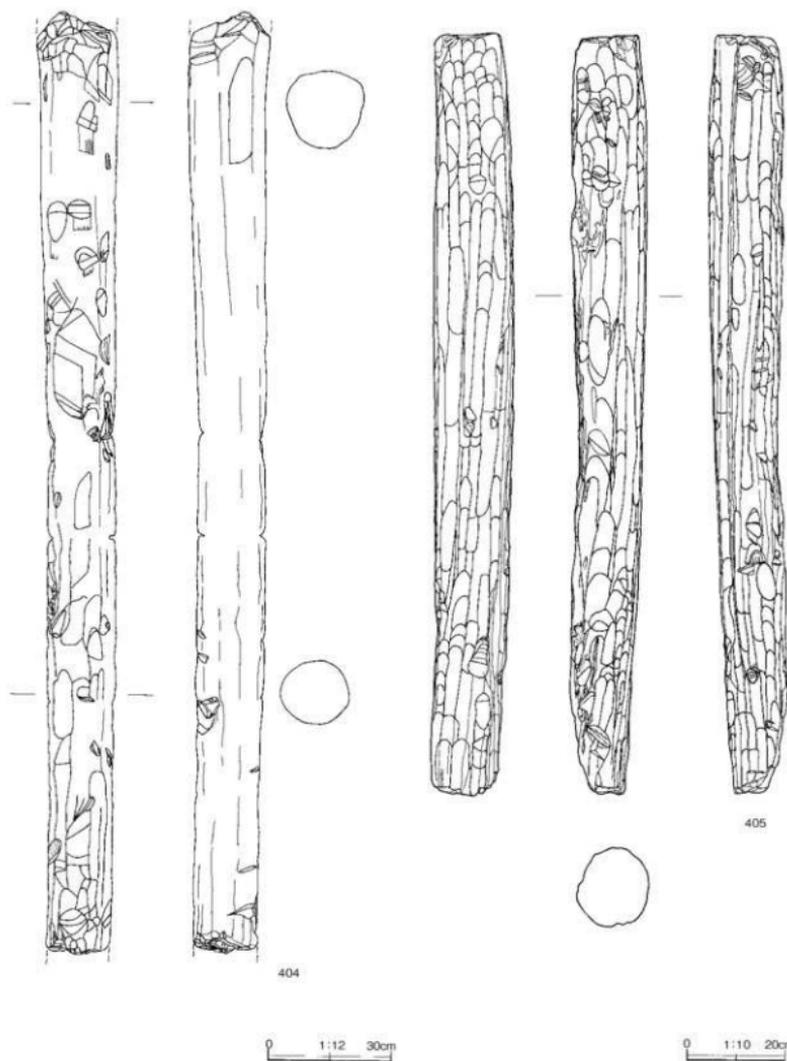


第109図 遺物実測図(52)

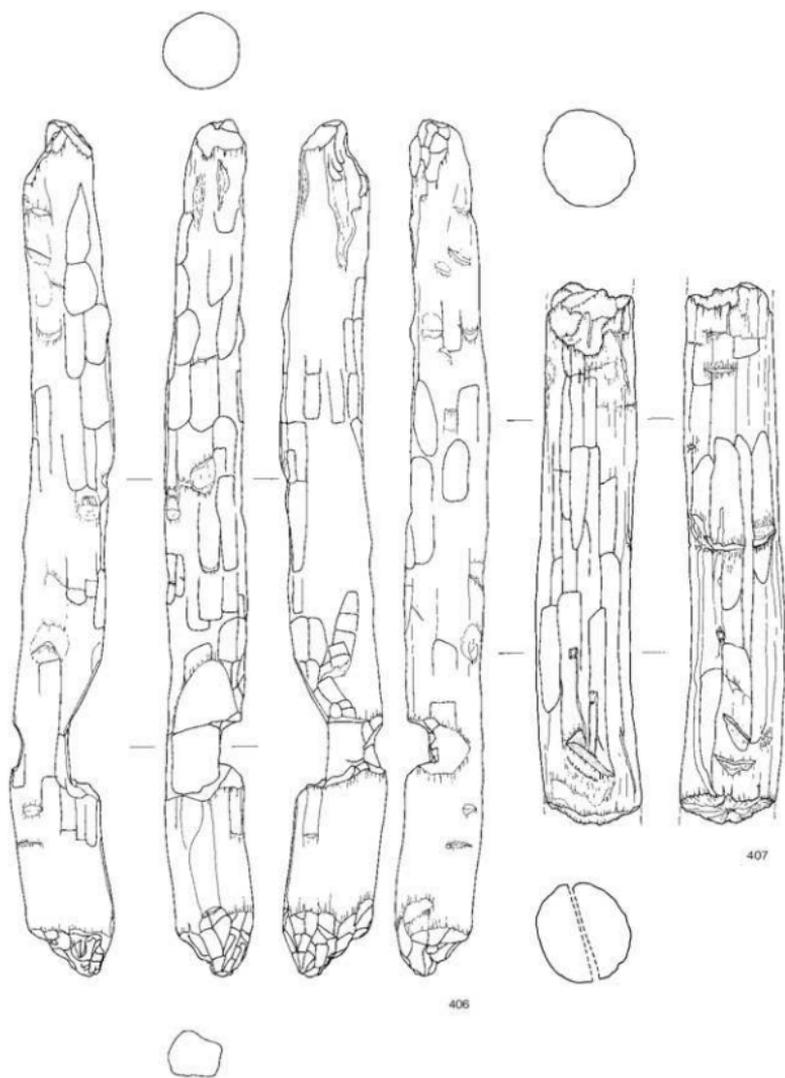


0 1:4 10cm

第110図 遺物実測図(53)



第111図 遺物実測図(54)



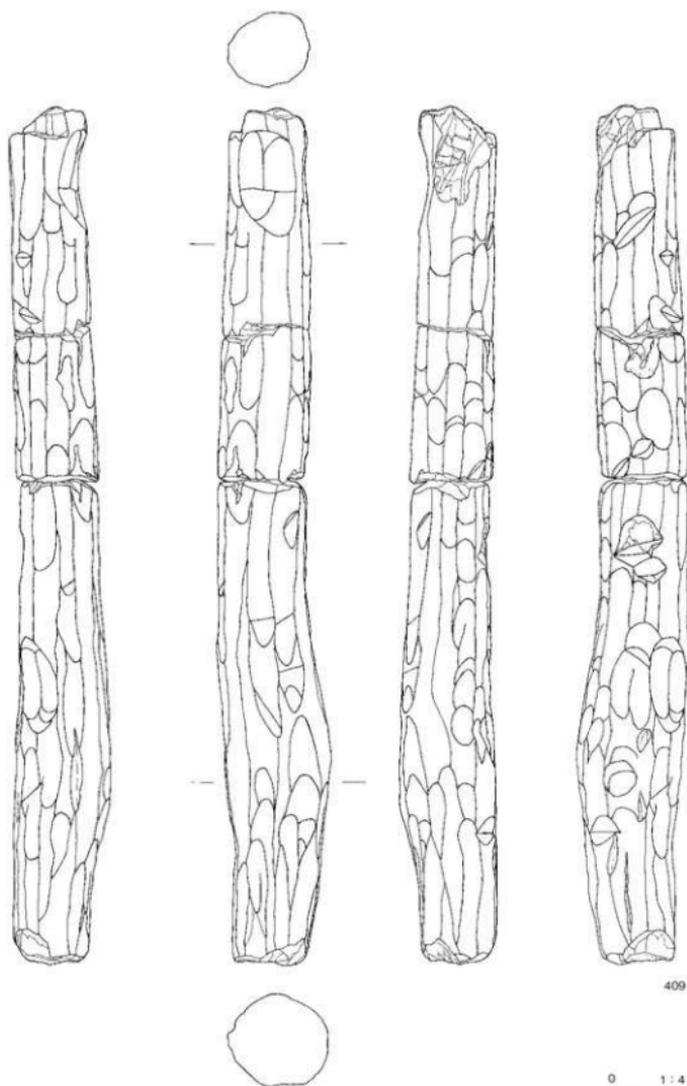
第112図 遺物実測図(55)



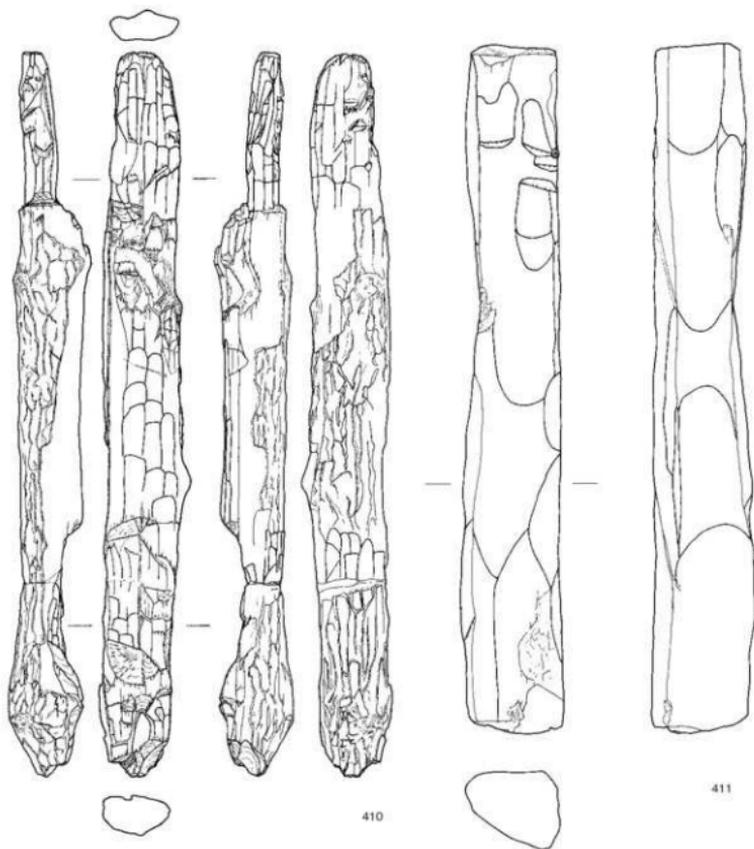
408

0 1:4 10cm

第113図 遺物実測図(56)



第114図 遺物実測図(57)



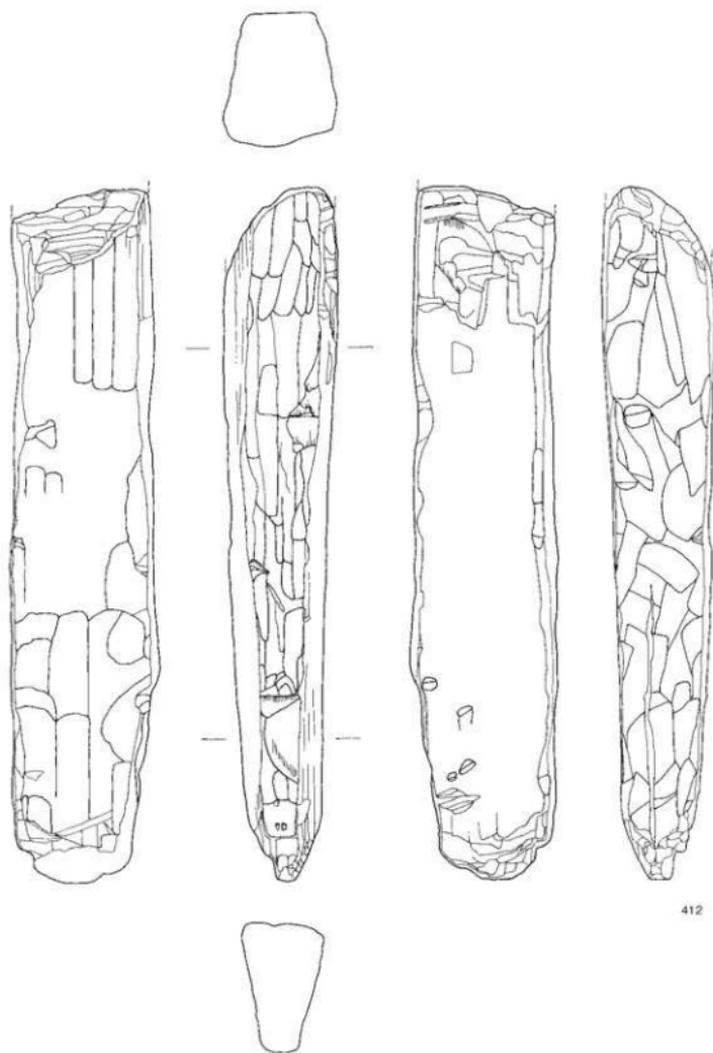
410

411

0 1:10 20cm

0 1:4 10cm

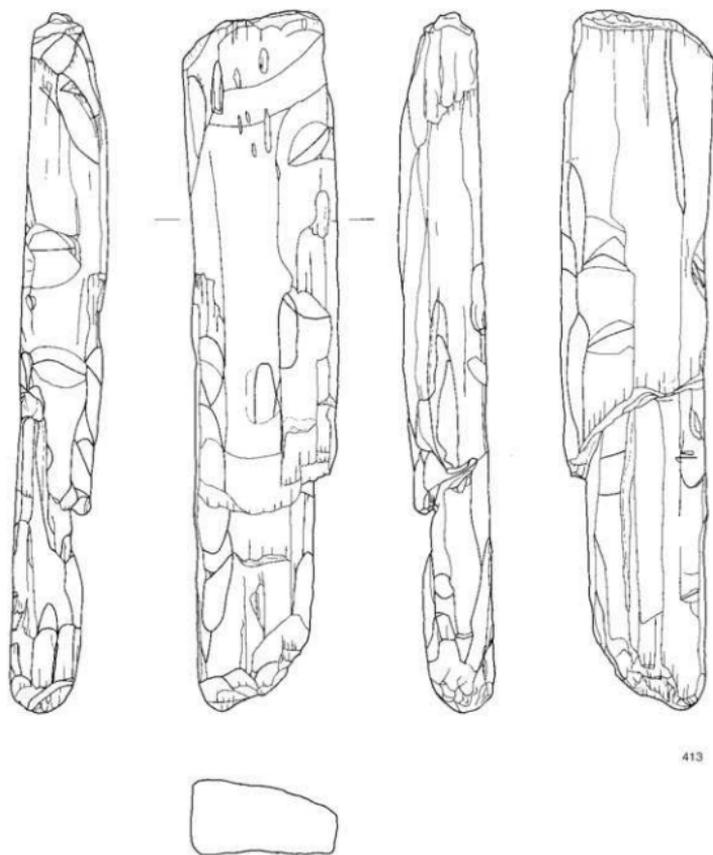
第115図 遺物実測図(58)



412

0 1:4 10cm

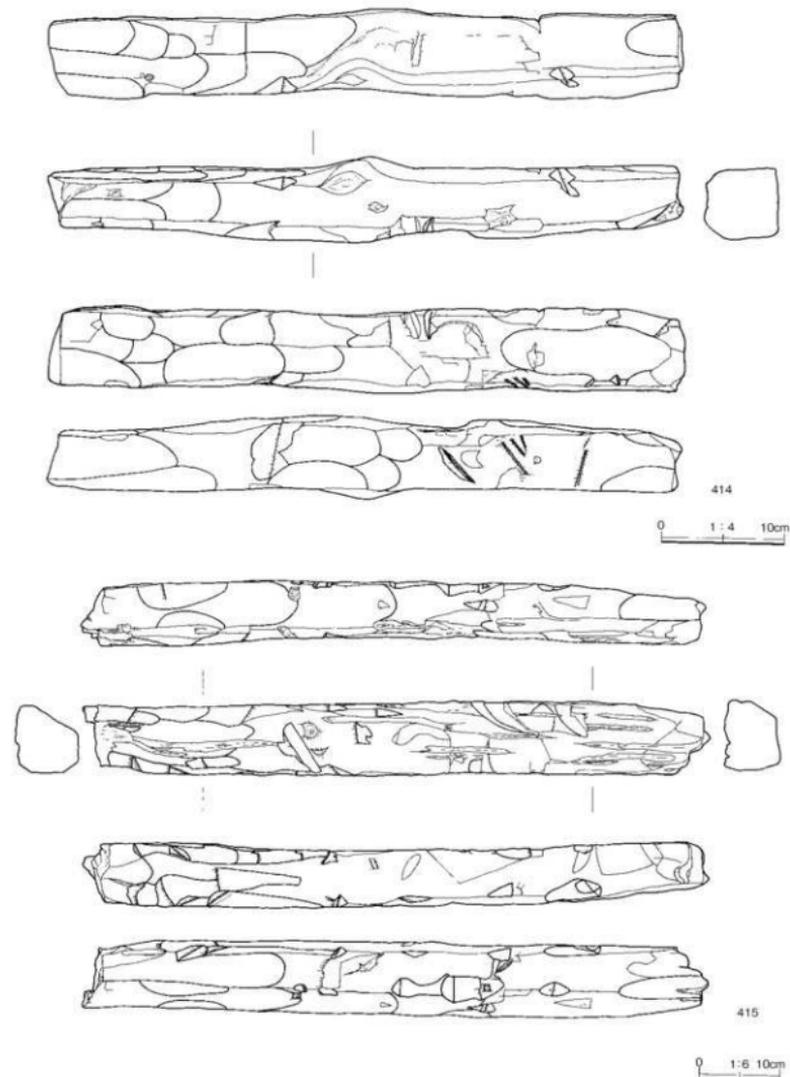
第116図 遺物実測図(59)



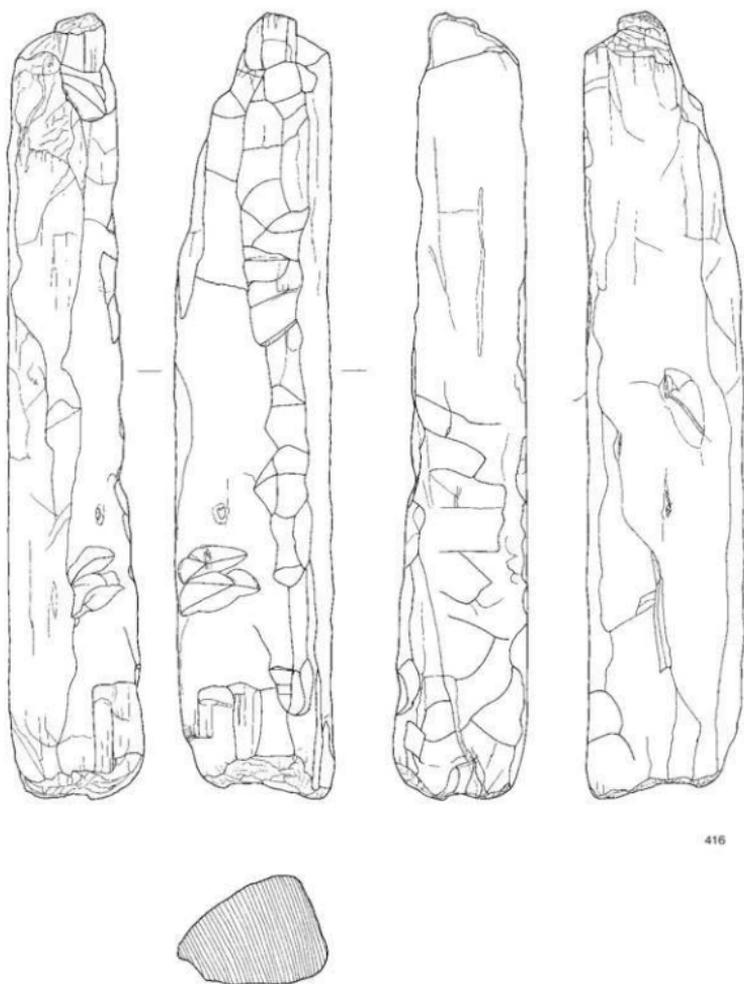
413

0 1:4 10cm

第117図 遺物実測図(60)



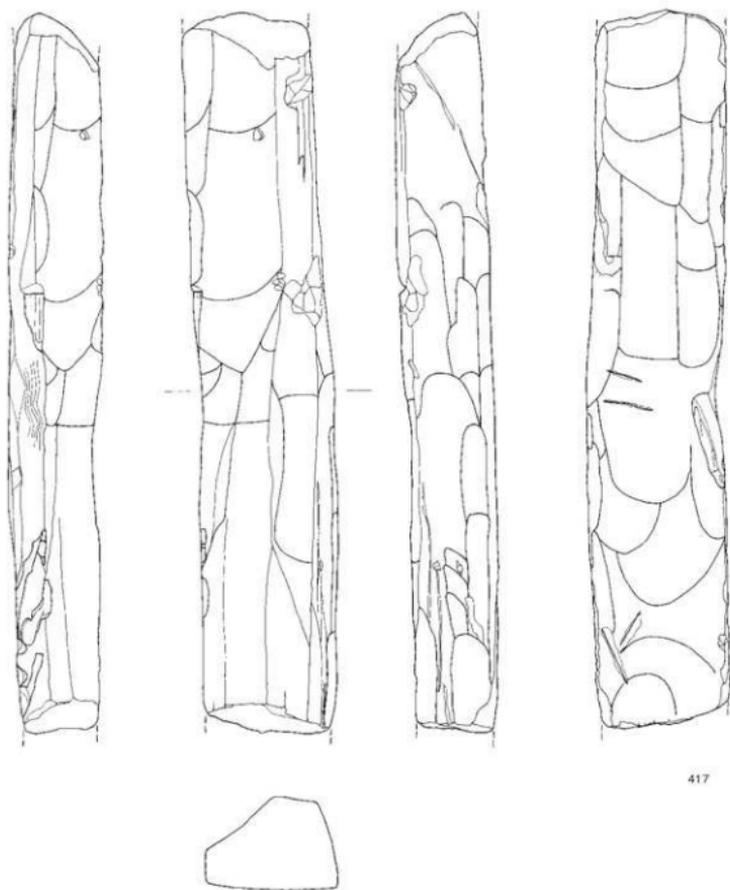
第118図 遺物実測図(61)



416

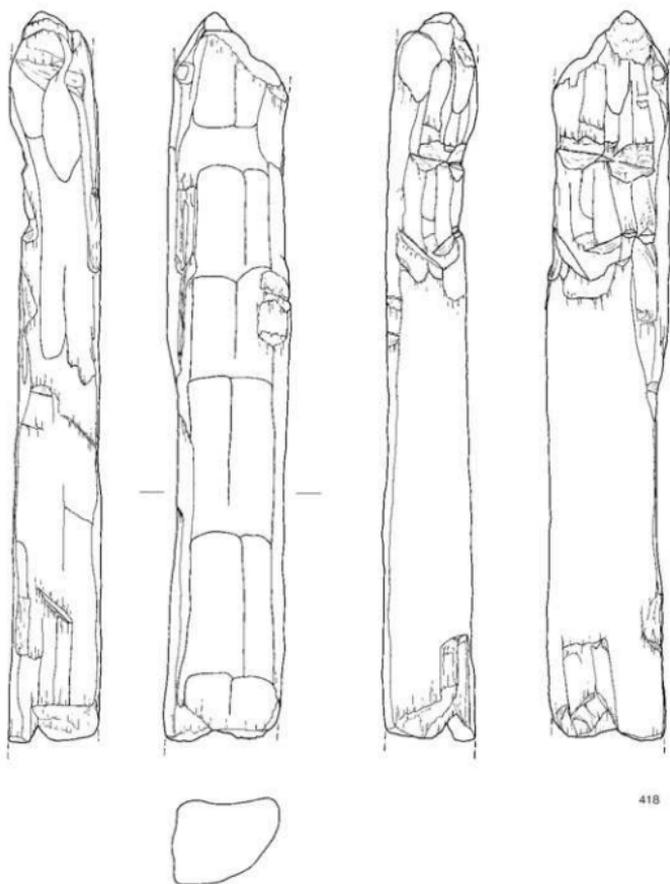


第119図 遺物実測図(62)



417

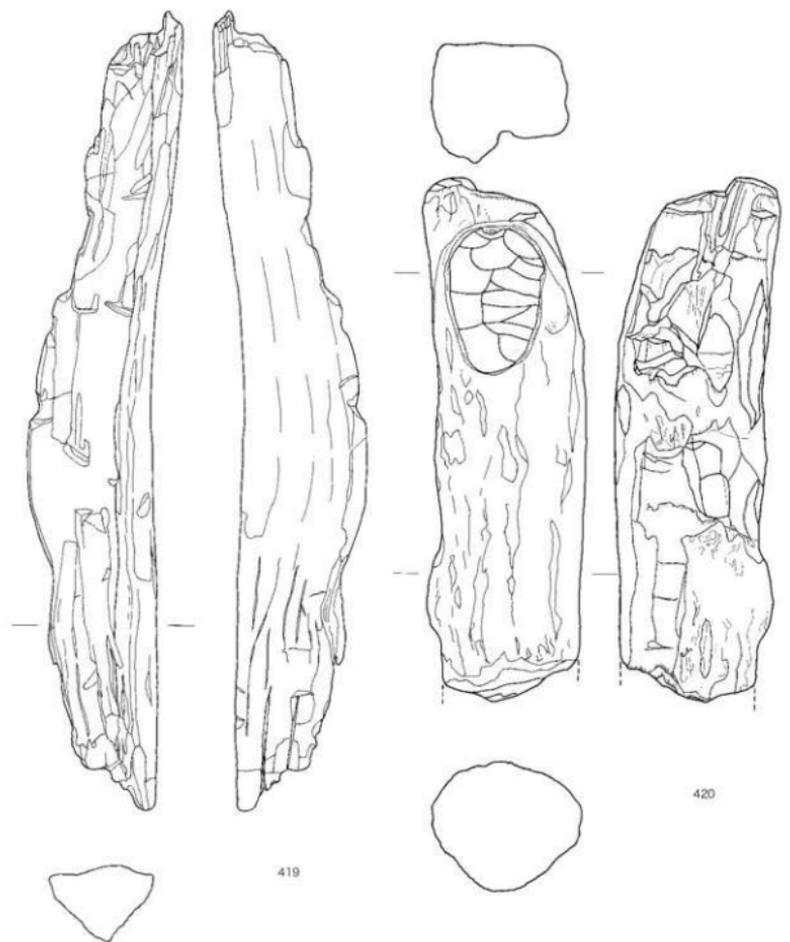
0 1:4 10cm
第120図 遺物実測図(63)



418

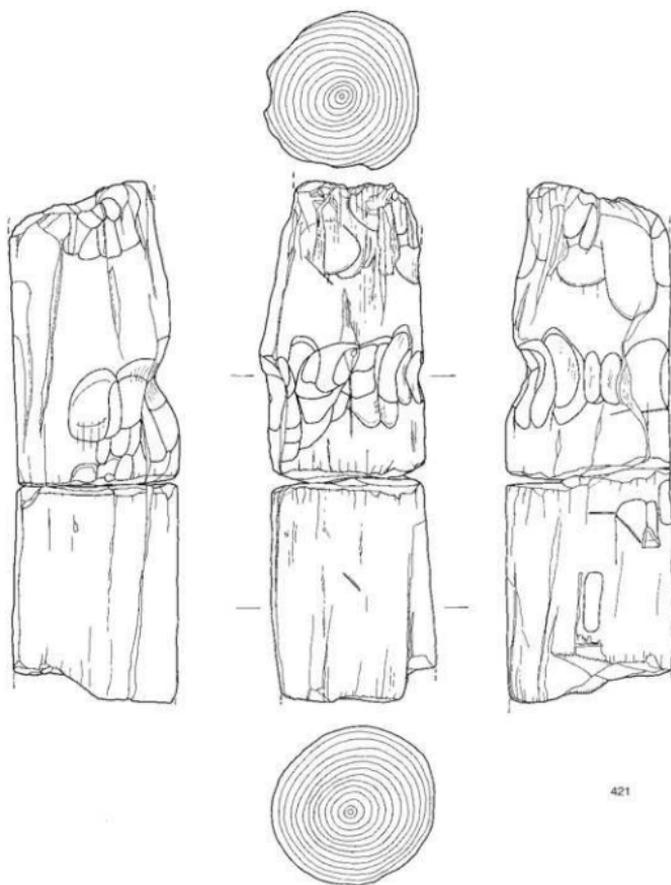
0 1:4 10cm

第121図 遺物実測図(64)



0 1:4 10cm

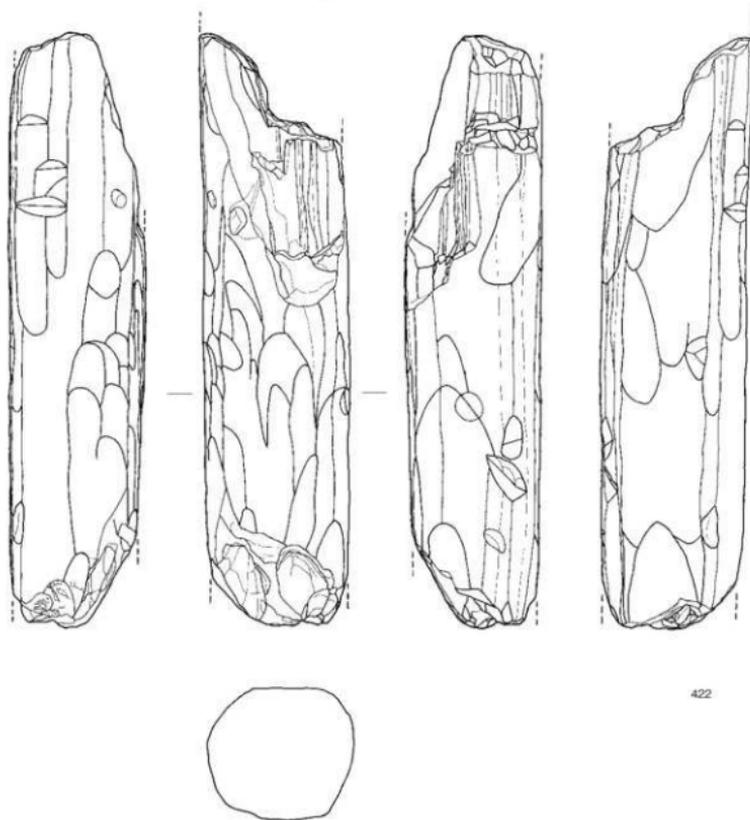
第122図 遺物実測図(65)



421

0 1:4 10cm

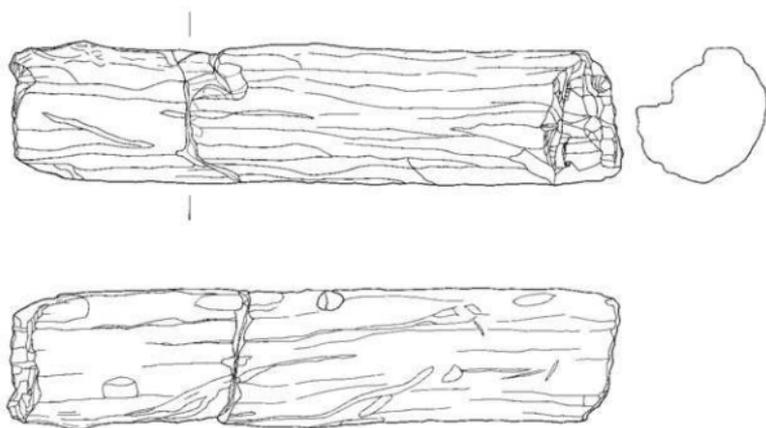
第123図 遺物実測図(66)



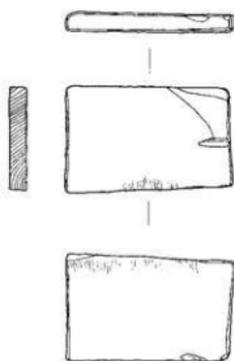
422

0 1:4 10cm

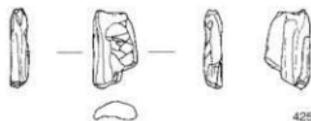
第124図 遺物実測図(67)



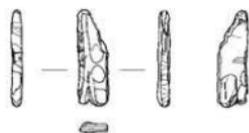
423



424



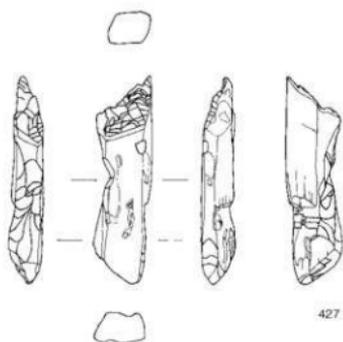
425



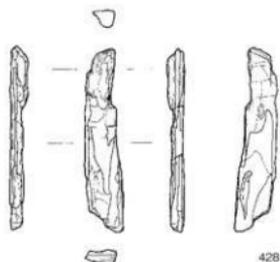
426

0 1:4 10cm

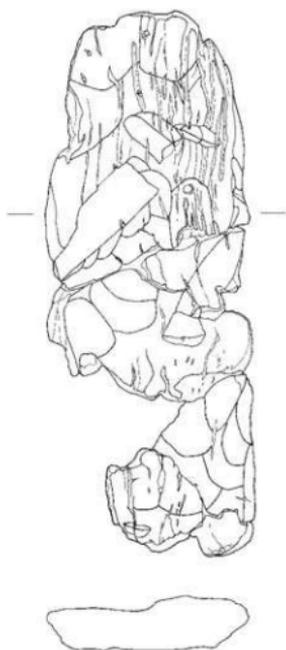
第125図 遺物実測図(68)



427



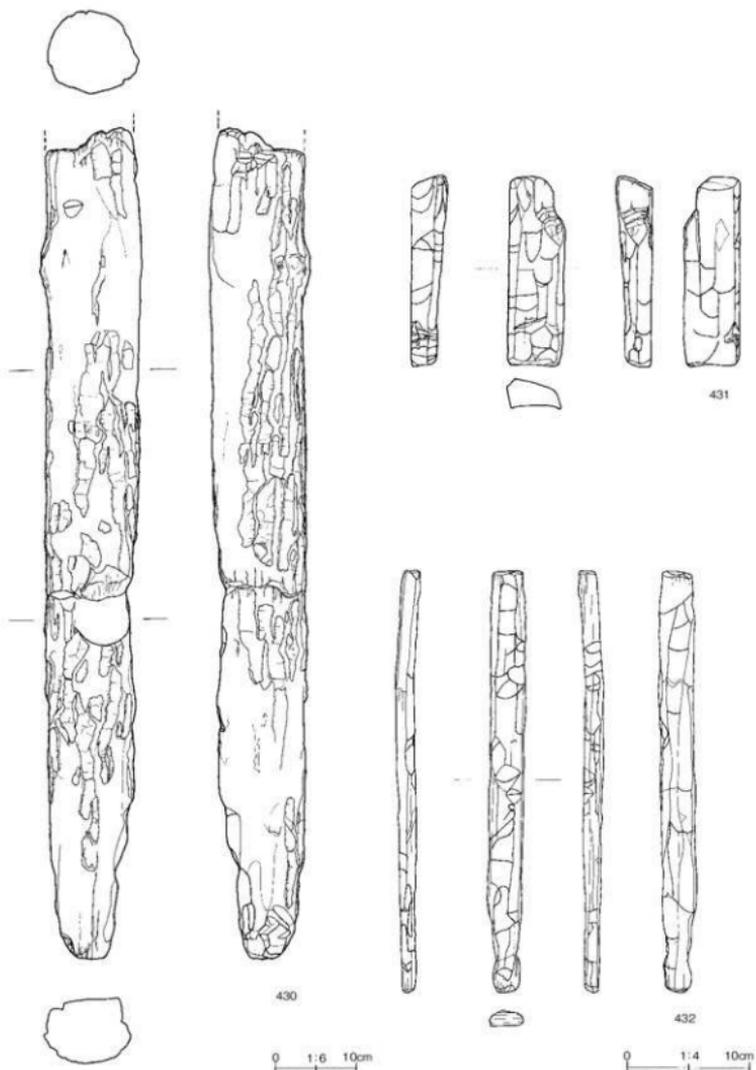
428



429



第126図 遺物実測図(69)



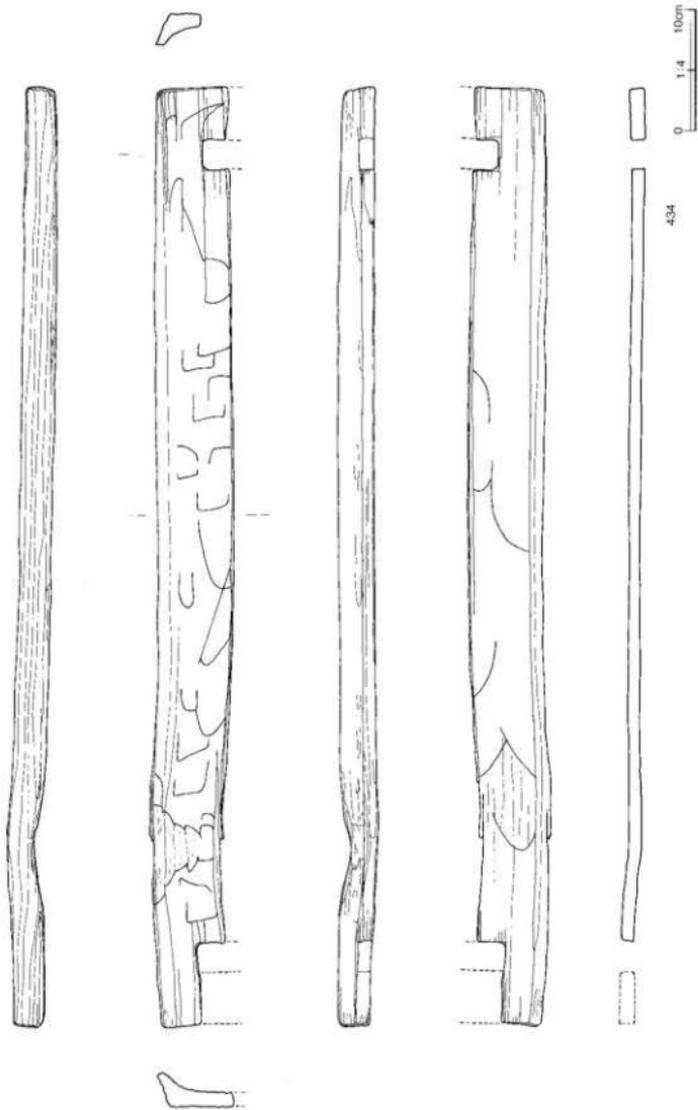
第127図 遺物実測図(70)



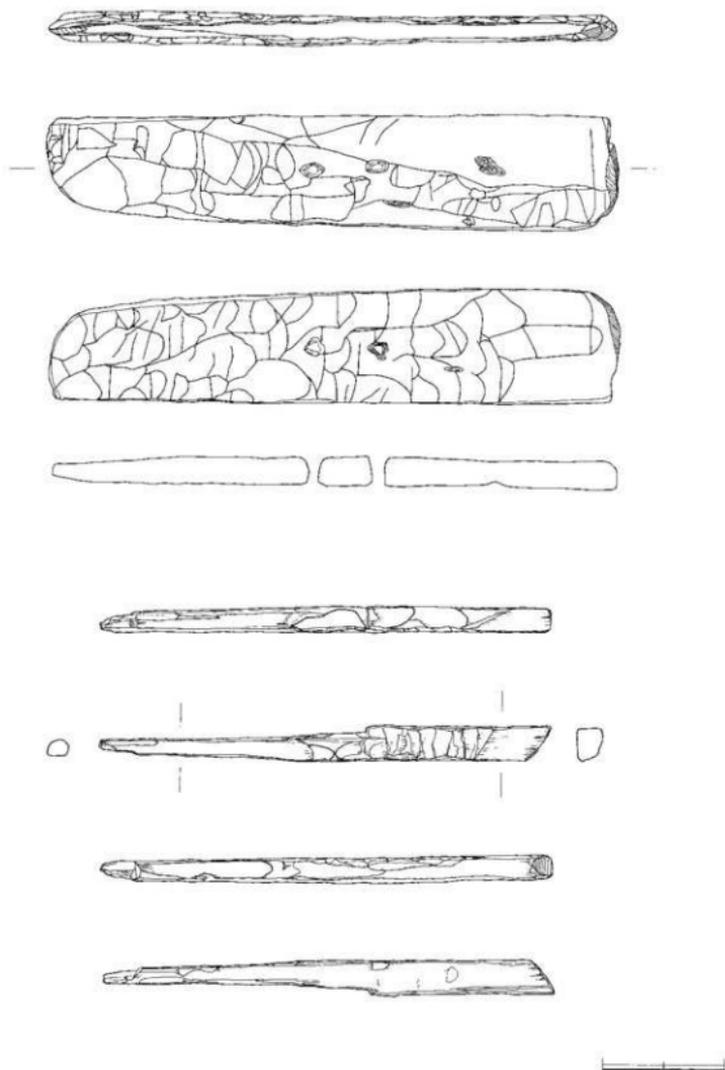
433

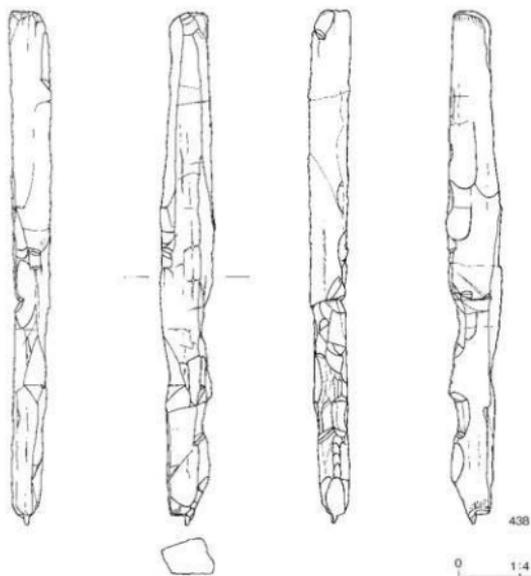
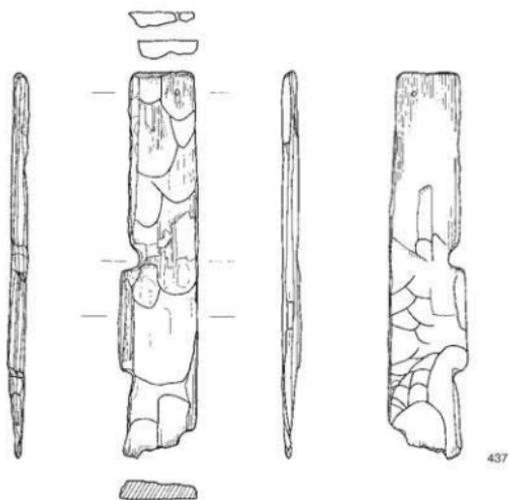


第128図 遺物実測図(71)



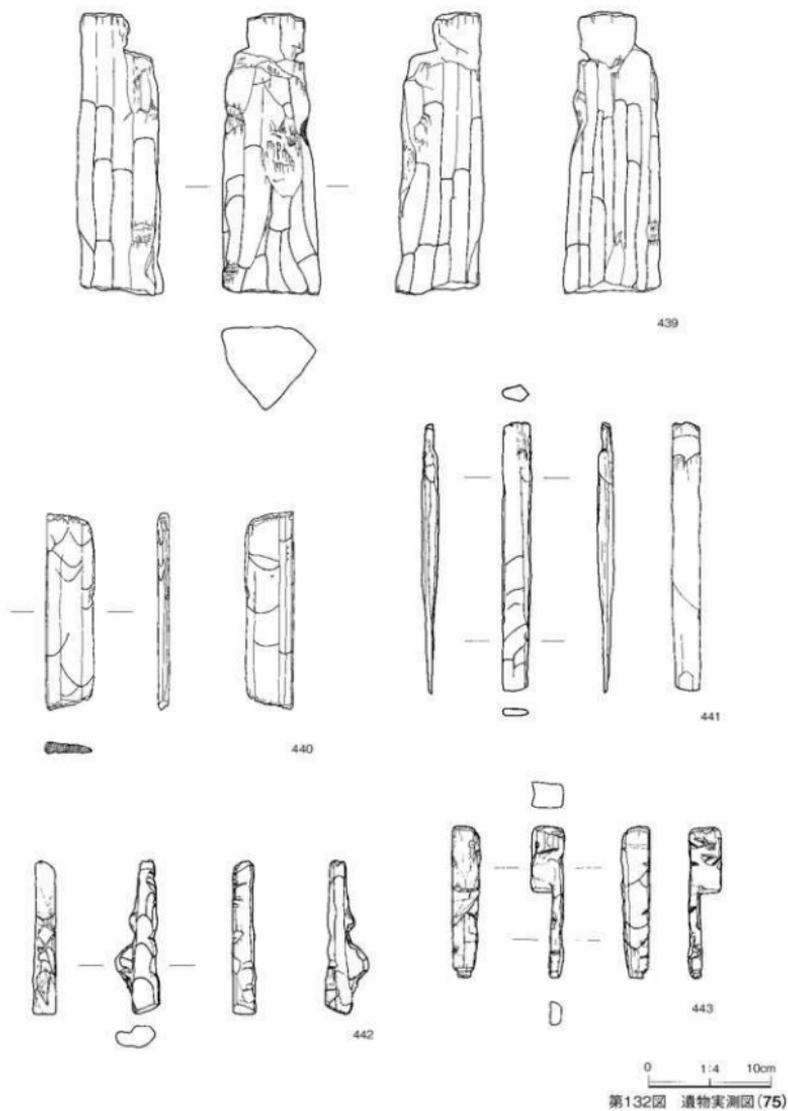
第129図 遺物実測図(72)

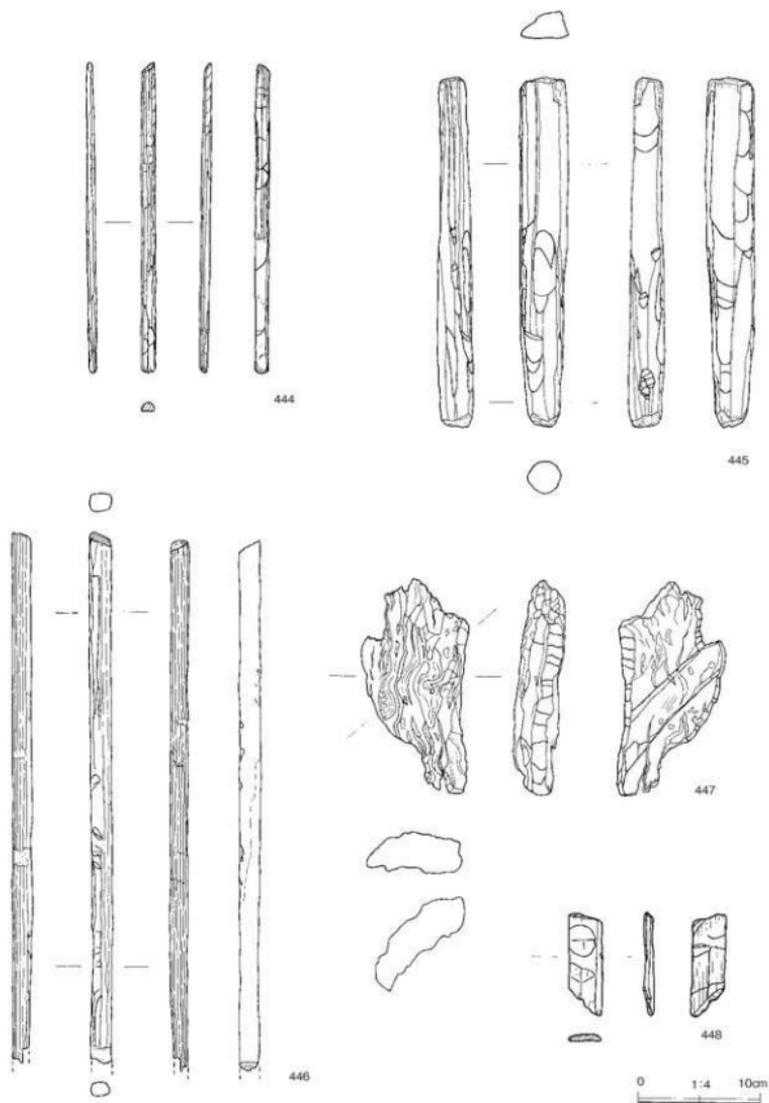




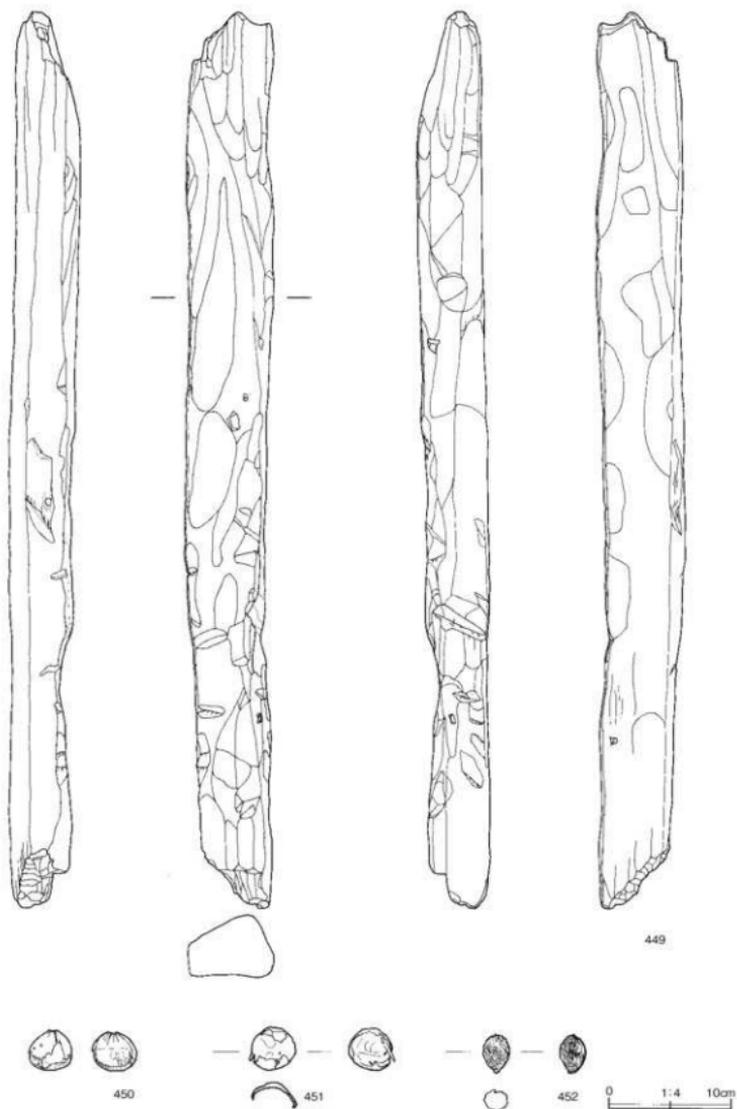
0 1:4 10cm

第131図 遺物実測図(74)

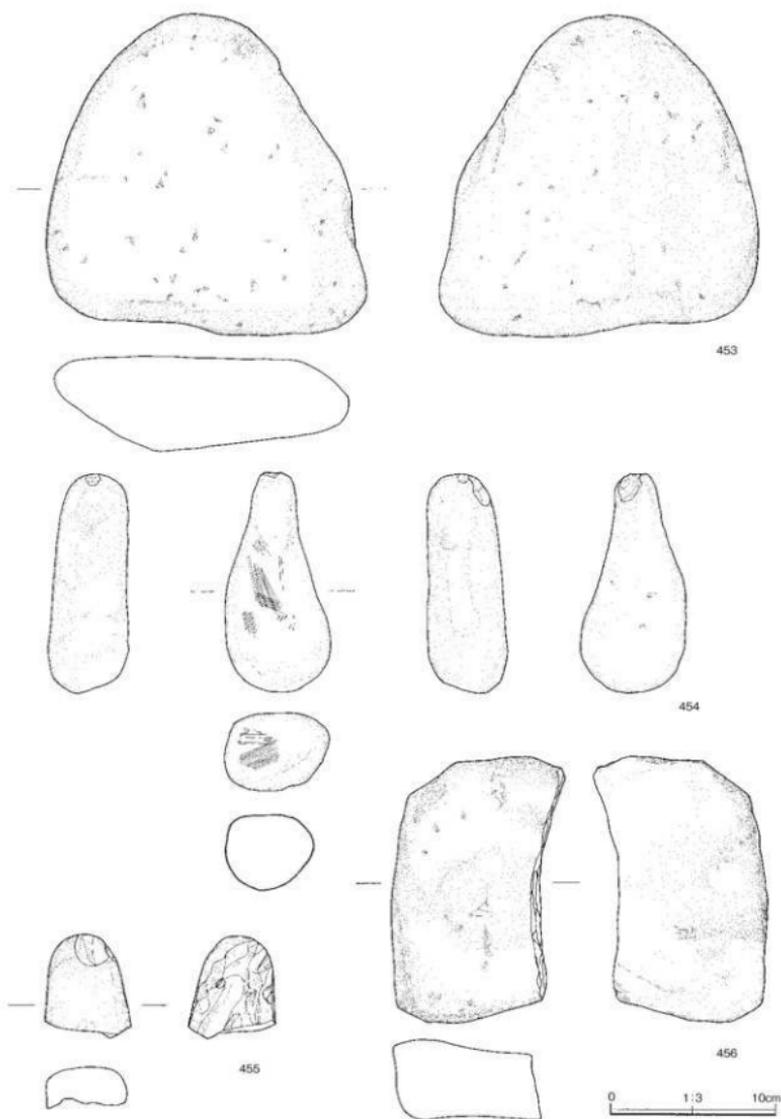




第133図 遺物実測図(76)



第134図 遺物実測図(77)



第135図 遺物実測図(78)

2) 奈良・平安時代以降の遺物

奈良・平安時代以降の遺物は、河川跡・溝跡・土坑から多く出土している。特に、SG 699・SG 754、SD 439、SK 691、SE 862 などからまとまって出土している。出土遺物は、須恵器・土師器・黒色土器など土器類が最も多い。供膳形態が卓越するが、貯蔵・煮沸形態の壺・甕類も一定量存在する。器種は坏・鉢・壺・甕が主体となるが、鉄鉢と考えられる遺物も存在する。中世以降では、青磁碗の他に肥前系の陶磁器などが出土している。また、古瀬戸の可能性が考えられる灰釉の小壺もある。金属製品では鉄滓の他に古銭やキセルなどがある。石製品では、砥石などがある。

以下、種別ごとに概要を述べる。

1 土師器・黒色土器

土師器は出土量の半数ほどを占めている。前述した河川跡や溝から多く出土している。なかでも、SG 754からは坏類が多く出土している。器種は坏・皿・壺・塀がある。その中でも坏類が卓越する。坏には無高台と高台付が存在する。これらは、いずれも轆轤整形によるものであり、比較的低温で酸化焙焼された土器で、従来山形県内で赤焼土器と呼称されてきたものである。

赤 焼 土 器

無高台の坏は、口径に比して底径が小さく、比較的器高が高く逆台形を呈するもの(467・477・480・521・581・624・625・730など)である。底部切り離しは回転糸切で、ほとんどが無調整である。切り離しが回転ヘラ切の坏は確認されない。体部が底部からシャープに立ち上がるもの(467・521)、体部が緩やかに立ち上がり直線的に伸びるもの(581)、体部が底部からシャープに立ち上がりやや内湾気味に伸びるもの(477・624)、器高がやや高く口径に比して底部が小さいもの(625・730)などに大別することができ、さらに、口唇部が横に積み出されるもの、やや外反するもの、直線的に伸びるものなどに細分化することが可能である。480は、

小

孔

口縁部上部に焼成後に小孔が穿たれている。1/3程の遺存で全容は不明であるが、3個の小孔があったものと考えられる。口縁部の内外面に油煙と考えられるものが付着していることから、灯明皿の可能性がある。内面がヘラミガキされるもの(532・533)も存在する。高台付(505・514・525・739・742・743など)は口径に比して底径が小さく、器高が高く逆台形を呈するものである。ほとんどが付高台であるが、739は削り出し高台と考えられる。また、底部調整が、回転糸切無調整のものとナデ調整のもの、菊花状指頭圧痕が観察されるものなどにより大別され、高台が「ハ」の字に張り出すものや内湾気味に踏ん張るもの、高台の形状などで細分化できる。さらに、体部が底部からシャープに立ち上がるもの、内湾気味に立ち上がるもの、口唇部が外反するものなどにさらに分けることも可能である。

小

灯

明

皿

皿は、高台付皿1点のみ図示している。637は底部切り離しが回転糸切りで、小さい積み出し高台が付く。口縁部が底部から直線的に伸びている。

甕は破片での出土が多く、全形を知りうるものは少ない。555・593の2点は、完形ではなかったものの全形を推定できたものである。555は口縁部が緩やかに屈曲し、口唇部に括れを有する。体部の中央に最大径を有し、内外面ハケメ調整の後、外面下半は縦位の手持ちヘラケズリが施される。593は口縁部が緩やかに屈曲し、口唇部は玉縁状を呈する。口縁部径と体部

径はほぼ同じである。いずれも平底である。他に、非轆轤成形で、外面縦位ハケメ・内面横位ハケメ調整が施され口縁部が最大径を有するもの、体部外面手持ちヘラケズリ・内面横位ハケメ調整が施されるもの、体部外面手持ちヘラケズリ・内面ヘラミガキが施されるものなどがある。轆轤成形は主体となる。体部内外面にナデ調整や内面横位ハケメ調整が施されるもの、外面上半ナデ調整・体部縦位ハケメ調整、内面横位ハケメ調整が施されるものがある。口縁部形態は多様で、強く外反するもの、外反の度合いが弱いもの、外反後口縁端部が上方に積み上げられるもの、面取りされるものなどがある。底部は網代痕、スノコ状圧痕、砂痕、回転糸切などがある。それぞれの組み合わせと法量から細分化が可能である。

黒色土器の出土量はさほど多くはない。内黒土器と両黒土器に大別され、器種は坏・甕・壺などがある。

主体となる内黒土器坏には無高台と高台坏があり、内面はヘラミガキされる。無高台の坏は体部が底部からシャープに立ち上がるもの(804)、体部が緩やかに立ち上がり直線的に伸びるもの(600)、体部が底部からシャープに立ち上がりやや内弯気味に伸びるもの(688)などに大別することができ、体部下半に手持ちヘラケズリ調整されるもの(600・688など)が含まれる。底部切り離しはほとんど回転糸切で、回転ヘラ切は600・691の2点である。691は底部回転ヘラ切の後、回転ヘラケズリされている。さらに、体部も回転ヘラケズリ調整される。高台付(473・575・577・605・606・608・695など)は口径に比して底径が小さく、器高が高く逆台形を呈するものである。ほとんどが付高台であるが、575・605は削り出し高台と考えられる。また、底部調整が、回転糸切無調整のものとなデ調整のもの、菊花状指頭圧痕が観察されるものなどにより大別され、高台がハの字に張り出すものや内弯気味に踏ん張るもの、高台の形状などで細分化できる。さらに、体部が底部からシャープに立ち上がるもの、内弯気味に立ち上がるもの、口唇部が外反するものなどにさらに分けることも可能である。甕(475・513・609・697)は出土量も少なく、口縁部から体部中位までの破片での出土のため全形を知りうるものはない。口縁部がくの字に屈曲し口縁部が最大径を有するものと、体部が最大形となるものに大別される。底部は不明である。甕としたが、鉢とすべきかもしれない。

578は両黒土器である。平底で底部切り離しは回転糸切である。付け高台と考えられる高台が、ほぼ垂直に付く。内外面とも丁寧なヘラミガキが施されている。肩部から上は欠損しているので器形は判然としないが、体部下半の形状などから広口の甕の可能性はある。

場の出土量は少ない。471・745の2点を図示した。745は外面縦位ハケメ、内面横位ハケメ調整が施され、丁寧な造りである。体部下半及び底部は欠損しているため、全容は不明である。器厚は厚手である。

その他の土師器には、蓋(811)がある。轆轤成形で内外面ナデ調整が施される。掴みなどは欠損しており、全容は不明である。

2 須恵器

須恵器は出土量のほぼ半数ほどを占めるが、土師器に比してやや少ない印象を受ける。溝跡や河川跡から土師器と併せて出土している。器種は坏・蓋・双耳坏・鉢・甕・壺・鉄鉢などがある。なかでも坏類が主体となる。坏には土師器坏と同様に無高台と高台付が存在する。いずれも轆轤成形である。

無高台の坏には、底部回転ヘラ切りで口径に比して底径がやや大きく器高が低いもの(653)、口径に比して底径がやや小さく器高が高いもの(657)、底部回転糸切で口径に比して底径が小さく器高が高く逆台形を呈するものがある。底部切り離しが回転糸切の一群が主体となり、底部回転ヘラ切りは極めて少ない。体部が底部からシャープに立ち上がるもの、体部が緩やかに立ち上がり直線的に伸びるもの、体部が底部からシャープに立ち上がりやや内弯気味に伸びるもの、器高がやや高く口径に比して底部が小さいものなどに大別することができ、さらに、口径部が横に積み出されるもの、やや外反するもの、直線的に伸びるものなどに細分化することが可能である。662・663は663に662が入れ子になって出土した。高台付には、底部切り離しが回転ヘラ切りのもの(665)と底部回転糸切がある。ほとんどが回転糸切である。口径に比して体部が小さく器高が高いものと、口径に比して底部がやや小さく器高が低いものに大別することは可能である。ほとんどが付高台である。また、底部調整が、回転糸切無調整のものとナデ調整のものなどにより大別され、高台がハの字に張り出すものや内弯気味に踏ん張るもの、高台の形状などで細分化できる。さらに、体部が底部からシャープに立ち上がるもの、内弯気味に高く立ち上がるもの、口径部が外反するもの、体部下端が腕状工具により回転ヘラケズリ調整が施されるもの(569)などにさらに分けることも可能である。

蓋の出土は少ない。571はS D 439から出土している小振りな蓋である。リング状の括みを有し、肩部は回転ヘラケズリ調整が施される。

双 耳 環

668は双耳環である。出土量は極めて少なく、全容を知りえたものは1点のみであった。口径に比して底部がやや大きく、底部から体部が緩やかに立ち上がり、直線的に伸びる。括み部分は欠損しているが、体部の上半に付くタイプである。高台はやや踏ん張る。双耳環は宗教施設や祭祀などと関連する可能性があると考えられている。

鉢は779・791・800・814の4点を図示したが、全形を知りうるものはない。779はS G 754から出土している。底部は欠損して不明であるが、口径は復元径35.2cmを測り大型である。体部が内弯気味に伸び、口縁端部が外反する。内外面ナデ調整の後、外面は手持ちヘラケズリ、内面は見込み部にハケメ調整が施される。791は鉢としたが、焼成の際に還元してしまった土師器甕の可能性もある。

甕は須恵器全体でも多い出土量である。河川跡や溝跡、土坑などを中心に、調査区のはほぼ全域から出土している。すべて破片での出土のため全形を知りうるものはない。底部形状は平底が主体となる。外面のタタキ、内面のアテ痕は多様であり、これらの組み合わせと分量などにより細分化が可能である。574は、器形及び器面調整が土師器甕と酷似している。焼成の際に還元したものの可能性がある。本遺跡では口縁部の出土がほとんど確認できず、時期特定について困難であった。

壺は甕などに比して出土量は多くはないが、印象としてはやや多い印象を受けた。長頸瓶・短頸瓶・環状突帯付長頸瓶・小壺などがある。頸部の接合は2段接合がほとんどである。体部調整技法はタタキの後ナデ・ヘラケズリ、タタキの後ナデ・平行カキメを施すものがある。底部は高台付が主体となるが、台形を呈する高台を底部端部に貼り付けたものである。底部径は比較的大きく、器高が高くなる長頸瓶乃至広口壺の可能性もある。682はS G 699出土の広口壺である。体部外面は回転ヘラケズリ調整が施される。683・852は環状突帯付長頸瓶である。

環状突帯付長頸瓶

852は頸部接合が3段接合で、体部外面はナデの後手持ちヘラケズリが施されている。やや古い傾向を持つと考えられる。秋田県教委利部氏は官衙関連遺跡での出土傾向を指摘している。小壺(798・816)は2点図示した。文具の水筒としての使用が考えられる遺物である。関連して、SG 699からは須恵器環の転用硯(599)が出土している。

官衙関連遺跡

転用硯

鉄鉢

鉄鉢は仏具である。托鉢の際、米やご飯などの寄進を受けるときに入れる容器として持ち歩かれる。尖底の場合が多いが、平底の場合もある。本来金属製であるが、奈良三彩や緑釉、須恵器、土師器、内黒土器などの種類がある。523は須恵器の鉄鉢で、SD 753から出土している。底部は欠損しており不明である。復元口径は18.2cmを測り、体部上半に最大径を有する。底部付近から直線的に伸びる体部が上半で大きく内湾し、窄まる。口唇部は上方に摘み出され、玉縁状を呈している。外面は丁寧なヘラミガキ調整が施され、内面はカキメ調整である。焼成も堅緻で歪みもない優品である。8世紀代に遡る可能性がある。

仏具

8世紀代に遡る

3 墨書土器・刻書土器

少数ではあるが出土している。墨書土器は528・666・776の3点確認された。いずれも須恵器で、666は高台付坏である。字種は判読できない。他に、何点か墨書らしいものが存在する。刻書土器は845の1点である。×印が底部に刻書されている。

4 陶磁器

陶磁器の多くは表土除去などの際に出土しているが、一部は遺構の覆土からも出土している。しかし、それらの多くは流れ込みの可能性が高い。855は14世紀の青磁碗である。外面に鎊連弁が刻まれている。SE 1148から出土した。865は15世紀龍泉窯の青磁碗である。871は古瀬戸後期に属する灰釉の小型水注である。867は16世紀末大室期の志野菊皿と考えられる。他は、肥前・唐津・肥前系などの近世陶磁器である。

龍泉窯
志野菊皿

5 石製品

砥石が5点出土している。882は良く使い込まれた砥石である。また、石皿と考えられる遺物がある。889・890は被熱のためか割れており、表面には厚さ1mm程の有機物のコゲが付着している。892は支脚と考えられる。899は第1次調査で出土した近世の墓石である。他には、フレークも出土している。

6 金属製品

金属製品の出土は極少数に留まる。煙管の吸い口2点と古銭2点である。古銭は永楽通宝(877)と寛永通宝(878)である。

7 木製品

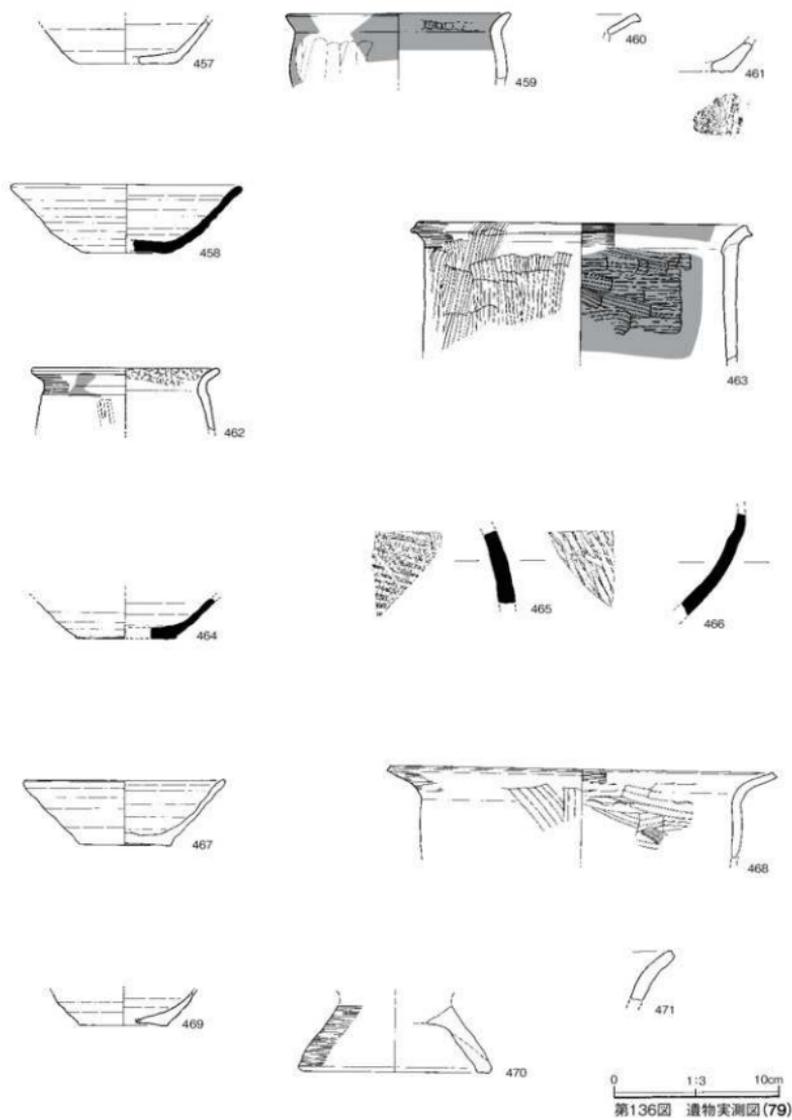
薄い板状木製品の断片(897)と曲物の桶(898)の2点を図示した。桶は、SE 568井戸跡の底部から出土している。底板と曲物の一部が残存しているが、曲物には罫引きが確認できる。

8 その他の遺物

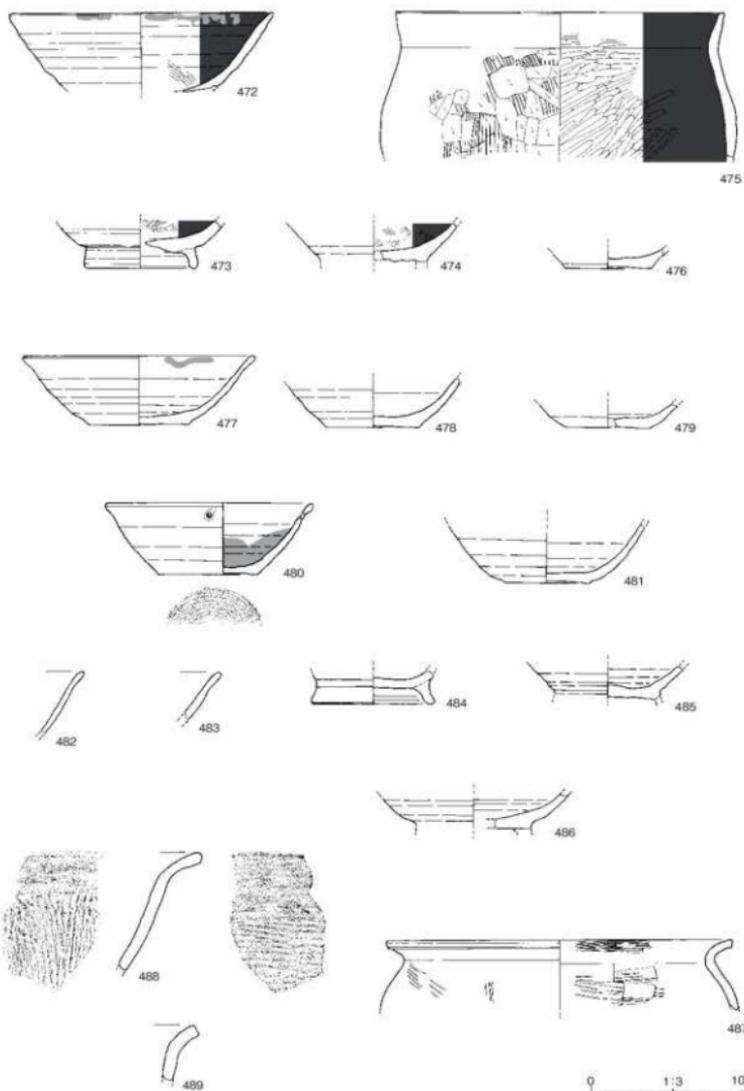
SK 556から馬歯が出土している。雨乞いの祭祀の際に、牛や馬の頭部を切断し神前に供えたということがいわれている。何らかの関連があると考えられる。共伴する遺物がなく時期は不明である。SK 556に切られるSD 560覆土には古墳時代土師期片が含まれている。

雨乞いの祭祀

V 出土した遺物

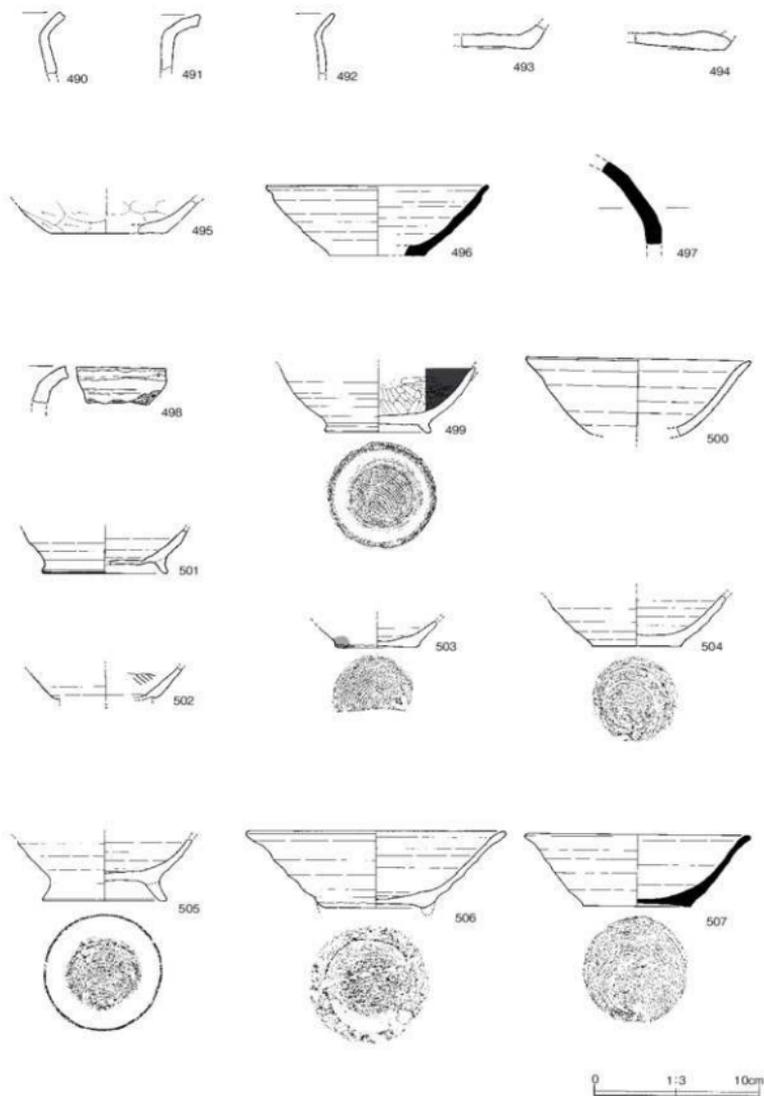


第136図 遺物実測図(79)

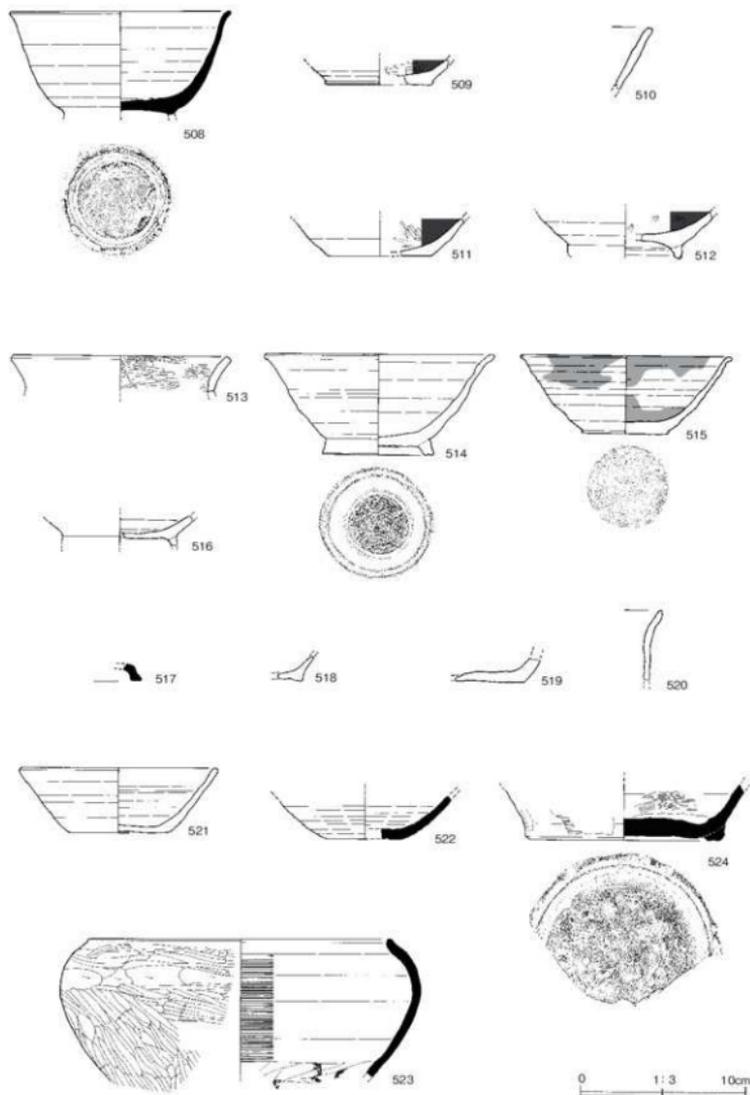


第137図 遺物実測図(80)

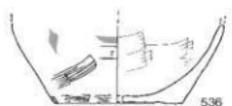
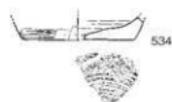
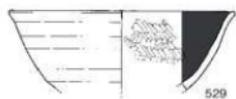
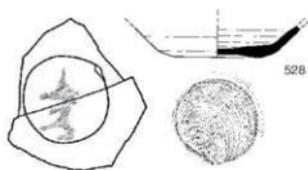
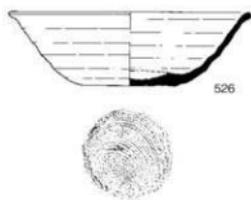
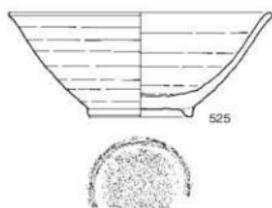
V 出土した遺物



第138図 遺物実測図(81)

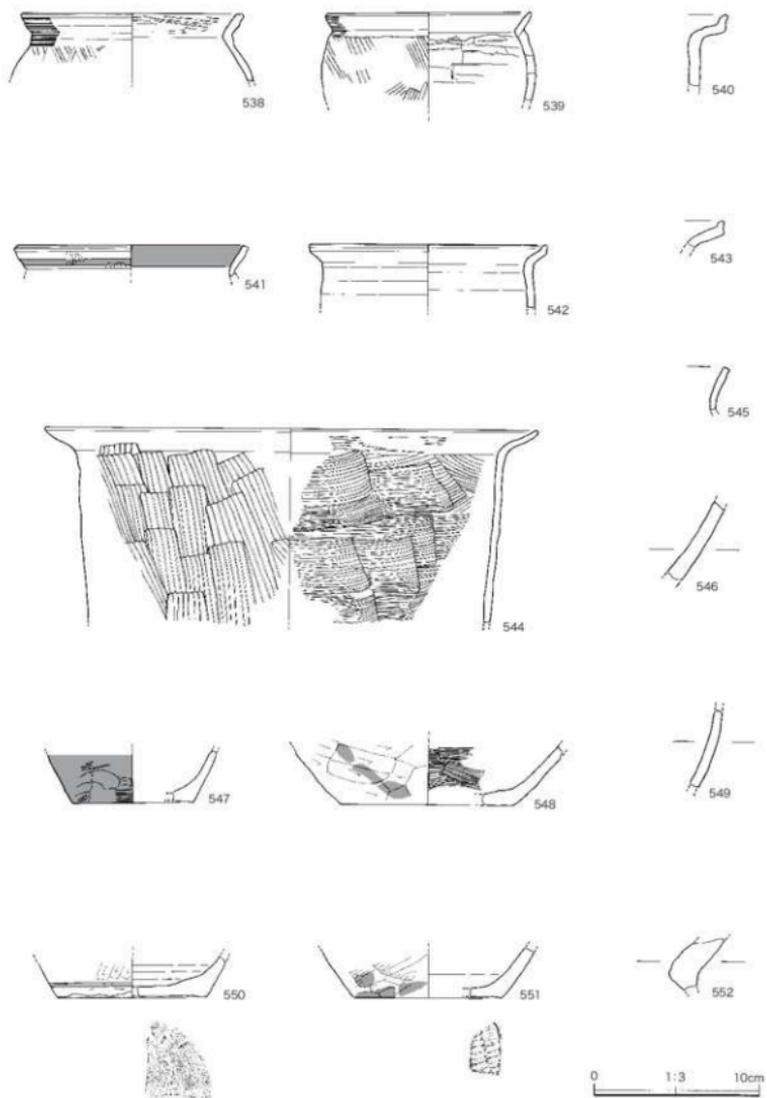


第139図 遺物実測図(82)



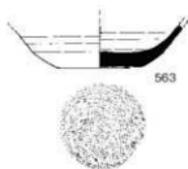
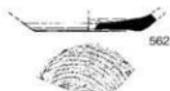
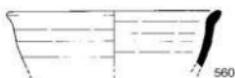
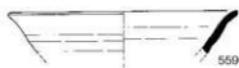
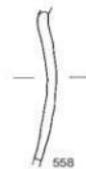
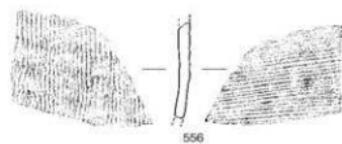
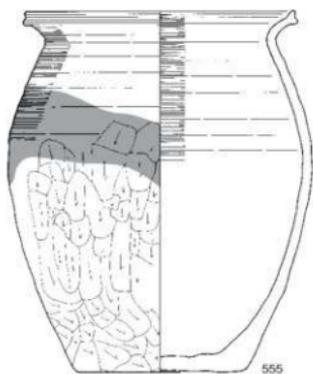
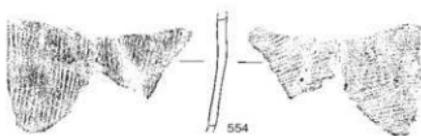
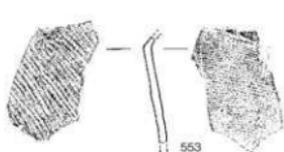
0 1:3 10cm

第140図 遺物実測図(83)



第141図 遺物実測図(84)

V 出土した遺物



0 1:3 10cm

第142図 遺物実測図(85)